

凧のあすから ～心は海のように～

亜睡める

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

好きになることは正しいことなのか。

それは誰にどのような効果を及ぼすのだろうか。

少年、島波遥は考える。

好きになることで大切なものを失った自分が

何かを好きになるのは正しいのか。

心は。人を好きになる心は動き出す。

変わりゆく時の中で。変わり続ける波のように。

もし、その波が凪ぐ時はきつと…

目次

第1部

第1話	始まりと、崩壊と	1
第2話	失ったものは	6
第3話	暗転する世界	11
第4話	暖かいもの	15
第5話	大切なものほど	22
第6話	微笑みと嘘と	27
第7話	好きになるって	31
第8話	始まりの色	35
第9話	きつと同じだから	39
第10話	海色の瞳	45
第11話	事件は突然に	50
第12話	似てるし、違う	54
第13話	再開	58
第14話	向き合うために	61
第15話	嫉妬とすれ違いと	65
第16話	一歩踏み出すって決めたから	70
第17話	暖かい一時	74
第18話	それぞれの過去	79
第19話	芽生えた決意	83
第20話	不確かな未来	88
第21話	忘れられるわけ…	92
第22話	トラブルメーカー	96
第23話	嘘と混乱と	101

第24話	ここで終わりに	105
第25話	近くて遠い	109
第26話	1歩	114
第27話	それから	117
第28話	届かぬ壁	121
第29話	異変	125
第30話	疑問	129
第31話	互いの思い	134
第32話	夏の下で	138
第33話	大人と子供	142
第34話	雨に打たれて	146
第35話	ひとりじゃない	150
第36話	瞳の奥に	155
第37話	見えない弱さ	160
第38話	似たもの同士	164
第39話	伝えたかった言葉	168
第40話	純白の想い	173
第41話	変わりだす空	179
第42話	それでもみんなで	183
第43話	来るべき時	188
第44話	決断	192
第45話	いつかの場所	196
第46話	それぞれの覚悟	200
第47話	未来への一歩	204
第48話	進むべき道	207

第49話 好きだから 212

第50話 希望と絶望 216

第51話 果たせなかったこと、果たすべきこと 221

第52話 運命の日 226

空白の5年間

第53話 残酷な真実 231

第54話 波打つ果てに 236

第55話 人の温もり 242

第2部

第56話 変わったもの変わらないもの 246

第57話 光 250

第58話 紺碧の空の下にて 254

第59話 再会、そして 259

第60話 光は褪せ、心はいつしか黒く 264

第61話 変化 269

第62話 新たな始まり 276

第63話 白から黒、その先 280

第64話 島波遥という男 284

第65話 燃える瞳 288

第66話 運命はまた人を結ぶ 292

第67話 過去と未来と 297

第68話 後悔の瞳に映るもの 301

第69話 決意の一步 305

第70話 太陽と陽の香り 309

第71話 Don't measure 313

第72話	陰	317
第73話	揺れる影ふたつ	321
第74話	結末へと	325
第75話	プロローグ	330
第76話	白い闇の中へ	335
第77話	白い絶望	340
第78話	夢を見させて	346
第79話	歪んだ愛の入口へ	351
第80話	これまでこれから	357
第81話	もう一度前へ	362
第82話	繋いだ手の向こう	367
第83話	オワリハジマリ	371
第84話	動き出す時、かの約束	375
第85話	それぞれの世界	380
第86話	欠落	385
第87話	片鱗	390
第88話	進むべき道	396
第89話	離脱	400
第90話	呼び名	405
第91話	後悔と希望とこれからの事	410
第92話	親心	415
第93話	君の在り方	419
第94話	真実と絶望	423
第95話	本音と唇は海の味	430
第96話	残された時間	438

第97話	光無き瞳	444
第98話	心	449
第99話	崩壊	453
第100話	全てが繋がる時	458
第101話	最後の答え	464
第102話	ライバルとして、親友として	469
第103話	気づかない恋の行方	474
第104話	嵐、再び	479
第105話	好きの気持ちは	485
第106話	凧のその先へ	490
第107話	ハッピーエンドのその後で	494
第108話	心は海のように	498
千夏√		
第109話α	二人で紡ぐ明日へ	503
第110話α	幸せを育む日々	509
美海√		
第109話β	共に進み出す一歩	515
第110話β	二人歩く道の果て	521

第1部

第1話 始まりと、崩壊と

感情はいつだって脆い。

揺れる水面のようにいつ崩れるか分からない。

でも、感情はいつだって美しい。

遙か遠くまで透き通っている海のように。

俺は、島波遙は知りたい。

感情とは何なのか。好きになるってどういう事なのか。

好きになることをやめた、あの日から…。

「おい遙ー！遊びに行こうぜー!!」

朝8:00、家のベルが鳴る。この甲高い声はよく聞き覚えのある声だ。

「だつてさ、父さん母さん。行つていいよね？」

「ああ、昼には戻ってこいよ。」

「気をつけてらっしゃい。」

反対の意見もなく俺は送り出された。やはり子供は遊んでなんぼだろう。

「じゃあ、行つてきます。父さん母さん。」

そう言つてドアを開ける。目の前にはちさき、まなか、要、光のいつもの4人が立っていた。

「つたく、遙が最後だからな！」

光はちよつと怒ってるのだろうか、語気が荒い。

「まあ、1番最後に誘いに行つてる以上はしょうがないよね…。」

要がちやつかりとフォローを入れる。

「でも、要とちさきはもう家から出てただろ。」

「そう毎日遊ぶ要領が変わらないと、光の考えが分かっちゃうしね。」

はあ…と少し息をつくちさき。

「じゃあ、まだ私はひーくんの考えがわかってないって事なのかな。。。」

弱々しい声でまなかが言う。

「別にいいんじゃないの、まなか。俺なんて分かつてもしてないしな。それに、そんなこと光は考えてもないだろうし。」

「うっせ！。。 まあ、別に考えてもないっちゃやないか。。。」

フオローになつてゐるのかわからないのかわからないことを俺は言つたが、光はなにか捉えたようだ。

「こほん、まあそれはいいんだ。んで光、今日は何するんだ？」

「んー、たまには違うことやりたいと思つてゐるんだよな。」

毎回遊ぶともなれば同じ内容には飽きてくる。それみんなも分かつてゐるみたいだ。

「そうだね。鬼ごっことかそういうのはもう随分とやったし。」

「範囲を広げると言つても、汐鹿生全体でやるには広いし大人には怒られるしな。」

「うーん。。。」

案に詰まつたのか光は頭を掻く。それと同時にみんなに沈黙が流れる。

「はい!!。。 あ、あのさ、ちよつといいかな。」

元気よくまなかが手を挙げる。が、急に場の雰囲気は崩れたのを気にしたのか声は小さくなつていった。

「何だよまなか。何か思いついたのか？」

さすがに光も余裕はない様子だったので怒つてゐるようには見えな

い。
「まだ汐鹿生で行つたことないところに行くつていうのは。。 どうかかな？」

多分。。 まだあるかもしれないし、いいかと思つただけど。。。

探検、である。

「ま、いいんじゃないの。サンキューまなか。」

光はモヤモヤが解消されたのか、声が少し上機嫌になっている。
「えへへ、そうでもないよひーくん。」

光に褒められているまなかはいつだつてご機嫌になる。こういうのは変えられないが悪いことでもない。

「うん、決まりだね。」

「たまには冒険したいしね。」

要、ちさきも不満は無い様子。

「じゃあ、それで行くか。」

「ちよ、隊長は俺だからな！」

それからあちこち汐鹿生を回ってみた。

とはいえ、探検といつても実はほとんど行った場所がほとんどだった。

ある場所を除いては……。

「……ん？ストップ、みんな。」

俺は何やら大きな穴蔵を見つけた。しかし、中は暗くてそこまではつきり見えない。

「どうした？遥。」

光が前にいる俺の様子を伺ってくる。

「いや、これ、見たことないよな？」

俺は少し右に避けて後ろにいるみんなに確認をとる。

「ねーな。」

「ないよ。」

「ないかも……。」

「はあつ……追いついた。えと、なにこれ？」

ついでに遅れていたまなかも合流したがそこは気にしない。

「さてと……。あれ、何なんだろうな。」

俺達は少し離れた場所で会議(?)を行っていた。

光が先陣切って入っていかうとしたがさすがに危険だろうと思いきやストップさせておいた。

「二「うーん…。」」

さすがに今の俺たちにあれを理解するだけの知識はなく、みんな頭に疑問符を浮かべていた。

その雰囲気の中で、時計を持っていた要が時間を確認した。その後、少し申し訳なさそうな顔をする。

「あー、そろそろ時間っぽいね。」

「えっ？今何時なの？」

いの一番にちさきが反応する。

「11:30。昼には帰らなきゃ行けない人、何人かいるよね。」

「あ、俺だ。」

「ごめん…私も…。」

「何だよみんな用事ありかよ。」

光は何もなさそうだった。いつものことだが。

昼に用事が入ってるのは俺とちさきだけのようだったが、みんな一旦帰ることにした。

「ったく、もう少し早く見つければなにか分かったかもしれないんだがな。」

光が少し残念そうに言うがこればかりは誰も悪くない。

「まあまあ、今度行けばいいだろ。まだ遊べる期間はたっぷりあるんだし。」

俺は厄介事にならないよにあらかじめ宥めておく。

「そうだよひーくん。今度行こう？」

「まあ、そうだな。つとここら辺か。」

どうやら汐鹿生の中心部に着いたようだ。

「みんなじゃあな… あ、ちよいストップ。」

「?どうかしたの? 遙。」

「あそこのこと、なるべく大人に言わないようにしよう。」

「いいけど…、なんで?」

「出禁くらったらまずいだろ。これから行くにしろ。」

もし何かまずいものであれば大人は絶対にストップをかける。それだけはゴメンである。

「ああ、そういうこと。了解。」

こういう時要のような要領がいいのは助かる。… 要という字は要領の要？ どうでもいいや。

「じゃ、そういうことだ。俺は帰らなきゃだから帰るぞ。」

「うん、じゃあね。」

「じゃあな。」

「またね、はーくん。」

「また今度ね。」

全員からじゃあねコールをもらい、俺は一旦家へ帰った。

家へ帰ったのはいいが、何やら様子がおかしい。

明るさがなく、まるで全て片付いたような雰囲気だった。

そんな中リビングへ向かうと両親がテーブルを挟んで座っていた。

「ああ、おかえりなさい遥。ちようどよかった。」

「ちよつとそこ座つてくれるか。」

母、父に促されて俺も席に着く。

「なあ遥。俺たち今日から海村を出ようと思うんだ。お前もついてきてくれるよな？」

俺の中で大波が動きだし、何かが崩壊した気がした。

第2話 失ったものは

「海村を出るって…まさかそういうこと…?」

呆氣に取られた俺はそう返すことしか出来なかった。

「多分お前の思うそういう事だ。」

「なんでそんな…。」

そうだ。理由が分からない。

「この村にはなあ…結構な数の掟があるんだ…例えば、『1度村を抜け出し陸で結ばれたものは追放される』とかな。」

「もしうちらが今から抜け出しても…。」

「まあ、間違いなく追放だな。」

父は表情ひとつ変えずに淡々と答えた。

「父さんたち、海が嫌いなの?」

「海は好きだ。確かに。だが、この村のルールは受け入れられなかった。だから、この村を出る。陸へ上がる。例え、その行為が世界が滅ぶのを進めることになってもな。」

それ以上は、もう何も言わなかった。言えなかった。

ただ一言、「俺はここに残る。まだ知らないことだらけだから。」

そう言い残して、親と別れた。

さて、残ると決めたのはいいが、身寄りがなかった。

何せお金もない。家に残っても自炊ができるわけでもなかった。人知れず汐鹿生の街を歩く。

考え事をしながら歩くと人はどうも下を向いてしまう。

だから、誰にぶつかったかもわからなかった。

「つつ、すいません。」

「ああ、島波のこのか。ちょうどよかった。色々話しておきたくてな。」

ぶつかったのは宮司さんで光の父親、先島灯さんだった。

「光の…、ああ、話って両親のことですか。」

「勘が鋭いんだな。まあ、一旦、一緒に家に来てくれないか？」
促されるまま、俺は光の家に向かった。

「はい、お茶入れといたよ。」

俺と灯さんと面と向かっていた時に、光の姉であるあかりさんが麦茶を入れてきてくれた。

因みに光はちょうど昼寝している。変に勘づかれそうになくて本当によかったと思ってる。

「ありがとうございます。…それで、何について話せばいいですか？」

「そうだな…。まず、提案なんだが…。とりあえず、うちで居候しな
いか？色々厳しいんだろ？」

「…はい？」

俺はそうして居候することになった。

とりあえずあの後はグダグダだったのは覚えている。

灯さんに聞かれたことはとりあえず一通り全部話した。

今後の両親のこと、俺に何を言ったかなど。

そこはまだいい。

問題だったのはやはり光が起きてからだだった。

「はあっ!?お、お前何でいるんだよー！」

「あらおはよう光。それなんだけど遙くん、今日からいつまでかは
知らないけど家に住むことになったからよろしくね」

「というわけでよろしく。」

「てか、誰がそんな話し持ち出したんだ！」

「俺だが。」

「親父かよ！…じゃあしようがねえな。」

「あれ嫌だった？」

「別に、遥なら問題ねーけど…。」

このやりとりを目にした瞬間俺は気づいた。

多分すごく賑やかになる、と。(特に光のせいで)

因みに俺は泣かなかった。小学3年生で、急に両親が出て行って、普通の子供ならショックが強すぎただろう。けど俺はもうそんなに気にする事はしなかった。まだ、親が生きてるうちはいつか会える、それだけが分かっていたので十分だったのかもしれない。

余談だが、次の日にもう一度穴蔵に行ったが、昨日とは違い、穴蔵は塞がれていたのだった。

「これは大人がやったわけじゃなさそうだな。となるとウロコ様…：か？」

「くっそ、やっぱり昨日のうちに行つとけば…：！」

「はい、それ以上は言わないよ光。」

因みにこの日は女子は別の用があり、男子だけで来ていた。

多分いなくて正解だったかもしれない。

理由は勿論、光が怒り溢れていたから。

結局、その穴の正体は後にまた知ることになるが、今は知るよしもなかった。

さておき、それからの日々は意外と早かった。いつものように学校に行つては、休みには光達と遊んで。これまでの生活と、ほぼ何ら変わることも無く毎日は過ぎていったのだった。ただ一つ、親がいないことを除いて。

でも、そんな毎日だつていつかは変わってしまう。

今回もまた、なんの前触れもなくそれは起こってしまった。

それは、ちょうど居候から1年くらいたった頃だった。

「灯さん、ちょっと陸へ上がってきます。」

時計の針は16:00を指していた。

「ああ、別に構わん。が、こんな時間だからそう遠くに行くなよ？」

「大丈夫です。さやマートで少し買い物してくるだけなので。」

「そうか。早めに帰ってこいよ。」

それから灯さんはまた新聞に顔を向けた。

「あっそうだ。行くならついでにお使い頼める？ちようど醤油が切れ
そうで。」

あかりさんから追加注文が入る。

「いいですよ。では、行ってきます。」

因みに今この部屋に光はいなかった。まあいろいろとあつて『お勉強中』なのだが触れないでおこう。

家を出て、直線距離で陸へ向かう。

時間はそんなにかからなかった。

さやマートで元々の予定だった少量の菓子と醤油を買う。

「ねえ。」

後ろから自分を呼ぶ声があった。

振り返ると、自分と同じくらいの背丈の少年がいた。

「ん、どした？てか誰。」

「えと、狭山旬。あの、そっちは？」

「ああ、俺は島波悠。まあ、適当に覚えてくれ。」

うん、と狭山は頷いてどこか走っていった。と同時に入れ替わりで店主らしき人が入ってきた。

「いらつしやい。さつき旬と話してたみたいだが、知り合いか？」

「いえ、初対面です。」

「そうか。あいつは少し人見知りな部分があるからなあ……。良かったら、また会った時仲良くしてやってくれ。」

「はあ、分かりました。」

そう言つて店から出る。まだ少し明るいと思ったので時計を確認し、少し遠回りをして帰ることにした。

何分くらい歩いただろうか。気がつけば港のほうへ歩いていた。

そこで足が止まった。遠目に人影が見えたのである。

そして息が止まった。目の前の光景を疑う。

1度深呼吸をする。そしてもう一度目の前の光景を確かめる。

今度ははつきりと見えた。そして俺は声にならない悲鳴をあげた。

見てしまったのである。

自分の母が、包丁のようなもので、心臓を刺されているその瞬間を。

第3話 暗転する世界

「…おい、何やってんだよ…！」

俺は声を絞り出した。が、シヨツクのあまりか声が掠れて出ない。それと同時にもう一つ信じ難い光景を見てしまった。

それは、母を刺していたのは、自分の父だということだった。

駆ける。駆ける。駆ける。

一刻も早く逃げ出したくて駆ける。

気がつけばその場から遠くへ走っていた。

もう何も信じたくなかった。

確かに、自分の両親の間には確かな愛があった。

ならば、

あの光景はなぜ生まれたのか。

何があつてあの愛が、好きという気持ち歪んでしまったのか。

しかし今は、それを考える余裕も無かった。

「ははっ、何だよあれ…。」

どれくらい走つただろうか。

気がつけば見たことの無い道に出ていた。

辺りを見回す。人の気配はない。

「うう… うああああああああ…。」

さっきの場面が頭に深く焼き付き、離れない。

ついには感情を抑えきれずに目からは大粒の涙が零れていた。

親が出て行った時は、泣かなかつた。

まだそこにまた会えるかもという希望があつたからだ。

でも今は、もう会えるはずもない。

その事実という絶望だけで、俺の心を壊すには十分だった。

やがて涙が乾いてくると、眠気が襲つてきた。

瞼が重たい…。何も考えたくない…。

俺の心は疲弊しきっていた。そのため、もはや動く気力すら失われ
ていた。

もういいや。今は寝てしまおう…。

その疲弊しきった心に余裕はなく、安直に重たい瞼を閉じろという
思考だけが俺を支配した。

そしてそのまま、俺は深い微睡みへと落ちていった。

「あら、こんな所に…。」

遥が眠ってしまった後、一人の女性が目の前に現れ、立ち止まった。
そして、眠ったままの遥の肌に特有の光を発見した。

そのことに、その女性は驚いた。

「エナ…！…！…！こんな所で眠ってるのはまずいよね。」

宜しくない状況だと判断したその女性は、とりあえず遥を背負うこ
とにした。

「んしよっ…と。美海よりはまだまだ重いけど、これくらいな
ら…。」

それから遥を背負ったその女性は、海村の方面へ向かって歩いた。

「遥くん…!!どこにいるの…!!」

数分歩いた頃だろうか。遠くから声が聞こえる。

その女性は少し早足に変え、その声の主の方へ向かっていった。

「遥くん…！…！あつ、みをりさん！と…！遥くん!?何でここに…。」

「あ、あかり…！ちよつと待って…！ふうっ。」

声の主、先島あかりと合流したその女性、潮留みをりはようやくベ
ンチにつき、一息つくことが出来た。

そしてそのまま背中に背負っていた遥をベンチに下ろした。

——みをり side——

私とあかり、互いに息を落ち着かせ、状況確認が始まった。

「みをりさん、どういう状況だったんですか？」

「うん、私も理由は知らないけどね。人気の無い道で一人寝ていたん
だよ。でもエナが乾くのはまずいと思ってとりあえず海村の近くま

で運んだん…だけど…。」

言いかけている途中で私は、遙くんの目元が赤くなってるのを見つけた。

「目元、赤いね。何か泣くことがあったのかな…？」

「海にいた時はそんなこと無かったはず…。あの時はいつも通り元気にしてたし、私がお使い頼んだのもなんなりと受けてくれたし…。きつと、陸に上がってから何かあったんだと…。」

あれ？おつかいって言うことは今一緒に住んでる…？

何故かへんてこりんな疑問が浮かんだ。

「ちよつと待って、あかり。あなたの家族って両親と弟さんだけよね？」

「はい…。つてああ、そういうことですか。ちよつと事情があつて、今居候中なんです。遙くん。」

なるほどね。

私は少し、遙くんが泣いていた理由を掴めた。

「あの、みをりさん…。？ひよつとして、何かわかつたんですか？」

あかりは私の考えが顔に出ていることを読み取り、即座に尋ねてきた。

「えっ!?ああ、うん。ちよつとね…。」

きつと遙くんが泣いていた理由は…。

「親に、親と、何かあつたのかもしれないね。」

それと同時に、遠くからパトカーの音が聞こえ出した。少しずつ嫌な予感が強くなっていく。

「あかりは一旦家に帰りなよ。遙くんはとりあえず今日はうちで面倒みるから。」

「え、でもいいんですか…？」

「パトカーの音、するでしょ。なにか厄介事絡みだと地上の方が対応しやすいと思うの。だから、お願いできる？」

おそらく私も話聞かれるだろうから、1人の方がいいかもしれない。

「…分かりました。とりあえず、お父さんには伝えておいてもいい

「んですかね？」

「そうした方がいいと思う。けど、弟さんには伝えない方がいい。」
「分かってます。」

あかりはここまでで一番真剣な顔をしていた。ここまでとなると、余程弟さんは行動が早いのだろう。

「では、また連絡をください。」

そう言っただけであかりは遥くんの荷物を持って海へと飛び込んで行った。

「さてと...。」

時間は18:30。そろそろ私も動かなければいけない時間だ。

一旦、家に帰ろうか。至さんも美海も待ってるわけだし。

そう思っただけで一度遥くんを背負って歩き出す。今度は住み慣れた自分の家に向かって。

特に思うところもなかったのが意外とあっという間に家に着いた。塞がってる両手でどうにかして玄関のドアを開ける。

まあ、間違いなく誰って言われるんだろうな。

「ただいまー、至さん、美海ー。」

「おかえり（なさい）！...誰？」

予想してた返答がきつちり綺麗に帰ってきた。

第4話 暖かいもの

——遥side——

午前9:00。

「見知らぬ天井」とはよく言われる表現だが、実際、今俺が目の当たり
にしているのはまさしくそれだった。

「…。」

そのまま沈黙のまま天井を見続ける。

「あ、起きた。」

「うわっ!？」

ひよこつと顔が出てきた。あまりのことに俺は驚くしかなかった。

「こーらー美海、つかないの!…。」と、おはよう遥くん、大丈夫…
?」

「大丈夫…じゃないですね…。」

そう言つて口を紡ぐ。話すのをやめた瞬間に昨日のことがフラツ
シュバツクされる。起きてからずっとこのループだ。吐き気が止ま
らない。

「さてと、話せたら、でいいけど色々聞いていいかな？」

みもりさんは俺の近くへ近づいてきて座った。

「…いいですけど…その前に…昨日は…ありがとうござい
ました…。」

自分でも思うくらい弱々しい声で感謝を綴る。

「うん、私は大丈夫だから。それに、君も私と同じ海の人間だったか
ら…。」

「あ、そうなんですね…。それより…名前…。」

「ああ、ごめん!私は潮留みもり。んでそこにいるのが美海ね。」

部屋の橋でちよこんとしている女の子を指さして言う。

「潮留美海…です。」

「えと、島波遥と言います。」

「…。」

場に再び沈黙が走る。

俺はとりあえず知りたくもない現状を知る必要があった。

「…それで、聞きたいことは何ですか。」

「うん。結構あるよ。」

始まって30分くらい経った頃だろうか、質問が止んだ。

どうやら一通り終わったようだ。

なんて返したかは覚えていないが、言葉に身が入って無かったのは覚えている。

「さて、これくらいかな…。あ、そうだ。」

「?どうしかした?」

「まだ遥くん朝ごはん食べてないよね。良かったらうちで食べていいかい?」

正直そこまでお世話になるつもりはなかった。しかし、昨晚から抜いてるせいか空腹は結構来ていた。なので…

「よろしく…。お願いします…。」

そう言っただけは机の方へ向かった。

「ねえ。」

つんつんと、座っていた俺を美海がつついて来る。

「ん、どうした?えと、美海、だっけか。」

「うん、美海。あのね遥。」

もう呼び捨てなのには驚いた。

「遥、今悲しいの?」

「…。」

何も返せなかった。悲しいのならすぐに悲しいと返せたかもしれない。けどなんで、すぐに何も言えなかったのだろうか。

「うん、悲しい、のかな…。」

曖昧な返答でどうにかごまかす。

「そうなんだ。美海は今悲しくないよ。だって、遥が来てくれたんだから。」

はっと息を飲んだ。何故だろうか、少し嬉しかった。

後ろではみをりさんが軽く美海を叱っていたがさっきの一言は別に嫌になるものでもなかった。

むしろ、少し心に余裕が出来たのかもしれない。それほどに、心が暖かかった。

「つと、おまたせ遙くん。質素だけどごめんね？」

出来上がった朝食が運ばれてくる。

目の前に並んでいるのはご飯と、磯汁と、焼き鮭だった。どこが質素なのだろうか。

「いえ、とんでもないです。では、いただきます。」

そう言って鮭に箸を入れご飯と一緒に食べる。

それをひと口食べた俺は、感想よりも先に頬を涙が伝っていた。

「え!?大丈夫!？」

「大丈夫です。本当にとっても美味しくて…。でも食べた時に…。母さんが最後に作ってくれた料理を思い出して…。それと同じくらいとても暖かくて。もう、こういうのはないかと思ってきましたから…。」

あかりさんの料理ももちろん美味かった訳だが、「母の料理」というようなものはもう随分と久しぶりだった。

「そう…。それならよかった。」

みをりさんが安堵の息をこぼす。

「遙は、悲しい?」

そんな中、泣いている俺を心配してか、今一度美海が聞いてくる。でも、これは悲しいから泣いているのではないのかもしれない。だとすれば…

「ううん、今は…。少し嬉しい、のかな。」

——みをりside——

午前9：00くらいだろうか。至さんが仕事行ったあとくらいにちやうど眠ってた遙くんが目を覚ました。

「うわっ!」

驚く声が聞こえる。どうやら美海が遙くんを覗き込んでたようだ。「こーらー美海、つかないの!」と、おはよう遙くん、大丈夫?」

とりあえず目が覚めているということで遙くんのいる部屋の方へ向かった。

「大丈夫... じゃないですね...」

それはそうだろう。

昨日、警察の話聞いたところによると、港の方で遙くんのお母さんが遺体となって発見されたらしい。因みに父親の方は行方不明になってるが、家に遺書が残されており、おそらく亡くなっているだろうとの見立てらしい。

ただ、遙くん自身がそれとどれだけ関わったのかまでは知らなかった。だからとりあえず経緯、それこそ昨日あかりが言ったように居候している理由まで聞く必要があった。

「さてと、話せたら、でいいけど色々聞いていいかな?」

許可もなしにグイグイ人に突っ込むのは良くない。陸でも海でもそれを習ってきたから、一応ちゃんと承認はとる。

「... いいですけど... その前に...。昨日は... ありがとうございました...」

とても弱い声で感謝された。けど、あれほどのことなら感謝されるほどでもないと思っただけ。

「うん、私は大丈夫だから。それに、君も私と同じ海の間人だったから...」

しれっと自分が海の間人だったことを言ったが、余程余裕がなかったのかあまり触れられなかった。

「あ、そうなんです...。それより... 名前...」
... 忘れてた。

「ああ、ごめん! 私は潮留みを。んでそこにいるのが美海ね。」

部屋の橋でちよこんとしてる美海の方も一応言っておく。

「潮留美海... です。」

「えと、島波遙と言います。」

ふむふむ島波くんか…。 ってそれは後でいいや。

「…」

場に再び沈黙が走る。 ええと、こういう時どうすればいいんだっけ？

とりあえず現状打破のため色々とあたふたする。

「…それで、聞きたいことは何ですか。」

そんな中いつの間にかそれ始めていた議題を遙くんが戻してくれた。

「うん。結構あるよ。」

それから、色々聞いた。

昨日何を見たのか。なんで陸に来たのか。

なんで居候することになったのか。親がなぜ陸に上がったのか。

結構鋭く聞いたが、遙くんはとりあえず一通り答えてくれた。

気づけばもう30分くらい経過していた。

「さて、これくらいかな…。 あ、そうだ。」

「?どうしかした?」

「まだ遙くん朝ごはん食べてないよね。良かったらうちで食べていかない?」

そう、おそらく昨日からご飯を食べていないはずなのである。

流石に調子は悪くても食べなきゃだめ、ということでご飯を誘う。

「よろしく…。 お願いします…。」

意外にも答えはyesだった。 反対されてたら強引に押しきるつもりだったがそうならそれでいい。

というわけで私はキッチンへと向かった。

キッチンで料理をしていると遠くで美海と遙くんの話し声が聞こえてきた。

「遙、今悲しいの?」

美海が聞いている。

あそこまでストリートに行くかどうか怒ればいいのか分からない。そのため私は機会を伺いつつ話の内容を料理片手に聞くことにした。

「うん、悲しい、のかな…。」

少しの沈黙の後に遙くんの声が出た。

「そうなんだ。美海は今悲しくないよ。だって、遙が来てくれたんだから。」

手を止めた。

そうだ。美海もずっと寂しそうにしていた。ずっと遊んでいた子が、体調を崩して休みがちになってしまったから。だから、遙くんが来てくれたことは美海にとって普通に嬉しかったのだろう。

いよいよ怒るに怒れなくなったので、美海を近くに呼んで、あまり悲しいことは言わないように、とだけ言っておいた。

さて、料理が一通り終わったので配膳を始める。

「つと、おまたせ遙くん。質素だけどごめんね?」

ご飯と磯汁と焼き鮭と。うーん、あと一品欲しかったかな。

「いえ、とんでもないです。では、いただきます。」

遙くんは気にしなかった。そしてそのまま鮭に箸を入れご飯と一緒に食べていった。

そして数秒後。

遙くんは泣いていたのだった。

ええ!? 不味かったかな… どうしよう…。

「え!? 大丈夫!?」

思わず本心が漏れてしまう。けど違っていた。

「大丈夫です。本当にとても美味しくて…。でも食べた時に…、母さんが最後に作ってくれた料理を思い出して…。それと同じくらいとても暖かくて。もう、こういうのはないかと思ってましたから…。」

また、遙くんは思い出していたのである。しかし今度は悲しい場面ではなく、暖かったであろう頃の記憶を。

「そう…。それならよかった。」

いろんな意味で安堵の息をこぼす。と同時にぐらいだろうか、

「遙は、今悲しい?」

また美海が遙くんと同じ質問をした。

「ううん、今は…。少し嬉しい、のかな。」

しかし今度の答えはさつきよりは強く、暖かい何かを感じた。

それからというもの、遙くんはあつという間にご飯を食べてしまった。その顔にはさつきよりは余裕を感じれた。

「ごちそうさまでした。」

「いえいえ、お粗末さまでした。」

さて。

ここまではいい。でも決めなければならなかった。これからどうするのか。お葬式のこと、家のこと。

でも私はそんなことを一切無視して自分の欲を言い放つ。

「ねえ遙くん。良かったらこれからもうちに遊びに来てくれるかしら。」

遙くんは少し驚いて

「はい。」

そう言いきってくれた。

第5話 大切なものほど

——遙side——

両親が死んだとわかったあの日からもう数週間が経った。葬式も、家についてのゴタゴタも意外とあっさり終わってしまった。

俺は結局一人で暮らすことに決めた。理由は… まあ、一つだろうか。

父が一通りのお金を残しておいたみたいだったからだ。

それに、陸との交友もあり、家事スキルは多少身についてきたからだ。

く過去く

あの日から2日経った。

少し精神状態に余裕が出来ているということで、俺は自分の両親が暮らした陸の家へと向かった。

家に入る。が、住んだ痕跡がほとんどないくらいまで綺麗になっていた。

衣服などは綺麗にしまっており、家電もまとめてある。

それはあたかも、これから居なくなることへのメッセージみたいなものだった。

「父さんは… 母さんは、何でああなったんだろう。」

1人虚空へつぶやく。返事は帰ってこない。

去り際、机の上に1枚の手紙が置いてあった。そこには遥宛と書いてある。

… 警察は一応昨日来てたみたいだが、なぜ持って行っていかなかったんだ？

気にしてもしようがないのでそこは放っておいた。

… あとからみをりさんの要求だということがわかったが。

『遥へ

迷惑ばかりですまなかった。

せめてもの償いをここに置いておく。

よければ使ってくれ。』

と書かれた手紙の裏には、俺の通帳の口座が書いてあった。

これは帰って確認したが、結構な額の金が入っていた。

普通ありがたいことであつた。

でも……。

違う。俺が知りたかつたのは、こんなことじゃなかつた。

何故あんなつたのか。結局それは、誰も知ることが出来なくなつてしまつた。

く現在く

というわけで今日に至る。ちなみに至さんにも一応挨拶はすませ
ておいた。(余談)

というか本当にみりさんにお世話になつてしまつた。もう頭は
上がりそうにない。

だからせめて、これまで通りみりさんのところと交友を続けるこ
とにした。

海で遊ぶことが少なくなつた分、光がだいぶトゲトゲしながら寂し
そうにしてたが、そこは事情を知っている灯さんとあかりさんにどう
にかしてもらつた。悪いな光。

そういえばもし、あの時みりさんがいなければどうなつていただ
ろうか？

別の誰かが通つていただろうか。警察に拾われたらどうか。

どちらにせよ、きつと俺は心を失つてたかもしれない。

実際、最初話してた頃は心無い受け答えがほとんどだった。

でもみりさんと話して、至さんとも話して、美海とも遊んで、そ
の

自分は消えていった。俺という人間を繋ぎ止めてくれていた。

だから今はこう言える。

やはりあの時、俺はみりさんに出会えてよかつた。

本当に楽しいと思える時間はあつという間に過ぎてしまう。
気がつけばまた、あの日から1年くらい経っていた。

今日も学校が終わると、真っ先に陸へ向かう。

「じゃあな光。先帰るわすまん。」

「はあ…もう突っ込まねえわ…。」

何だかんだ受け入れたのか光はもう怒りもしなかった。

そしてそのまま振り向いて、真っ先に自分の家へと向かって行った。

「最近ずつとはーくん帰っちゃうの早いよね。」

「なんか忙しいみたいだし、しょうがないね。」

「なにも負荷がないならいいけれど…。」

いつものように陸へ上がる。そこにはまた変わらない景色が広がっていた。

「あ、おーい！遙くーん！」

サヤマート辺りでちょうど買い物していたみりさんが俺に気づく。

「あ、どうもです。」

軽く会釈。するとみりさんは少し苦笑いを浮かべた。

「別に無理して毎日こつち来なくてもいいんだよ？それこそウロコ様に呪われるかもしれないし。」

あー…手遅れなんだよなあそれ…。

「あ、言ってませんでしたね。この前呪われ回数2桁超えました。」

「…まじか。」

というか俺に構ってないでできるだけ仕事はして欲しいのだがあのウロコ。

「悪いね持ってもらっちゃって。」

「いいですよ。それで、今晩は何作るんですか？」

買い物が終わったあと、その買い物袋を持った俺は一緒にみをりさん宅を目指した。

「んー、たまには新しいものに挑戦しようかなと思って。ちよつと今日は焼きそばでも作ろうかなって思ってます。」

「…どこが新しくなるんです？」

流石に焼きそば作ったことないってのはないだろ…？

「色々♪まあ、具材もたまにはがらつと変えてみたり、ソースも使わなないようにしてみたり…。」

指折りで変更点を数える。因みにどんなのになるのかは予想できたがここは言わない。

「まあ、もしまだ教えて貰ってないものだったら、後でレシピお願いします…。」

「おーけーおーけー。みをりさんに任せといて！」

そんなこんなで家に着いた。

が、みをりさんはその場に立ったまま動かない。

ちよつと額に汗が見えてるような気もするが…。

「?どうしましたみをりさん。」

「ん、んーん?何も無いよ。」

「そうですか。荷物もってるので先いきますね。」

そうして俺は先に家に入る。

「おかえり遙!」

「ただいま、美海。」

ぼんつと1回、出迎えに来た美海の頭に手を置く。

「あれ?ママは?」

「外にいるよ。もうちよつとで来るんじゃないかな。」

「分かった!」

元気よく返事をして美海は俺から離れていった。

しかし。

数分経った。まだみをりさんは入ってこない。

流石におかしすぎるので様子を見に行くことにした。

「遙どこいくの?」

「ちよつと外。お母さん呼んでくるから美海は待っててくれる？」

「うん！」

・・・ 本当に、元気のいい返事だ。

「みをりさーん、入らないんですかー！」

ドアを開けてまず呼びかける。が、返事がない。

「みをりさーん、います・・・か・・・？」

階段を降りようとして下を向いた。そして、そこにみをりさんはいた。

心臓を抑えるようにして倒れている状態で。

第6話 微笑みと嘘と

——遥side——

「みをりさん!?大丈夫ですか!!返事してください!」

周りなんて気にする余裕は無かった。とにかく、今は返事だけほしかった。

近づいて確認する。どうやら心臓も動いているし、一応息もある。

だがしかし、明らかに様子がおかしく、心臓の動きも不安定である。一定のリズムを刻んでいない。

「あつ…。遥くん…。ごめん…。」

「しゃべらないで大丈夫です!休んでてください!」

こういう場面に直面したことはなく、どう動けば良いのかほとんど分からないが、当事者を変に動かさないことが大事と言うことだけは分かっていた。

「すみません。ちよつと電話借ります!」

そう言つてダツシユで家へと戻る。

「どうしたの遥。そんなに急いで。」

息を切らしながら入ってきた俺に思うところあったのか美海が尋ねる。

「大丈夫、大丈夫だから。」

返しになっていただろうか。しかしそんな余裕はないので、すぐに電話に賭けつく。

「もしもし!…。はい、救急です!」

美海も救急車が何なのかは知ってるらしく、ことの大きさに感づいたみたいだ。

「…。ママ?」

「はい、お願いします。」

電話を一旦切った俺はすぐさま別の番号にかける。

「ねえ遥、まさか救急車って…。」

「大丈夫だから安心して!きつとなんとかなる!…。あ、もしも至さんですか!」

……

それから救急車がやって来、みりさんがは病院へ運ばれた。ただ、ずっと意識はあつたらしく、命に別状もなかった。

とはいえ数日、一週間程度の入院は必要らしく、みりさんは入院を余儀なくされた。

「でもよかったです。意外と元気そうで。」

入院が始まって三日ぐらい経ったごろ、俺はひとりで見舞いに来ている。

ほんとうはもう少し早く来たかったのだが、準備等のごたごたであり時間が取れなかった。

「お医者さんが言うにはよく分からないが直る可能性は高いって言う話らしいよ。」

「そうですか。」

よく分からないと言うワードに引つかかったが、それがエナを持つもののみ起こるものだとしたら、わからなくても当然な気がした。なににせよ、前向きに捕らえないことにはどうしようもない。

そう思つて少し下を向いた。

「ところで。一人で来るっていうことは何か話したいことでもあるんですか？」

顔を上げるとみりさんが得意げな顔をしてこっちを向いていた。

「凶星である。」

「ほら、当たった……いいよ、聞いてあげる。」

みりさんは母のような慈愛のこもった微笑みを向けた。

「俺が陸に上がったあのときのこと、覚えていますか？」

「うん、ちょうど一年位前だったね。」

「……あのときに美海が言ったんです、『今は遙が来てくれたから』って……たいした話じゃなくてすいませんけど、俺が来る前に美海がよく遊んでた子って誰かいたんですか？」

「なーんだ、そんなことか。えーっと、多分それは千夏ちゃんだと思

う。」

「千夏ちゃん…?」

「あ、ごめんごめん。水瀬千夏って言う子なんだけどね、よく美海を妹のように可愛がってくれてたんだよ…。ちよつと身体が弱くて、今は会えてないけど。」

「この病院にはいないんですか?」

同じ地区の子だったらここにいてもおかしくはない。

「ううん、いないよ。あの子は今は街のほうにいるから。」

街というのは、鷲大師から電車で移動したところにある町であるらしい。

「次は私から聞いて良いかな。」

一区切り着いた後で今度はみをりさんから質問が来る。

「いいですよ。」

聞いてもらえばなしは無しである。

「…ここから見える海って綺麗だよね。」

「そうですね。」

この病室からはちようど外が見える。夕方というのもありいつそう綺麗に見えていた。

みをりさんは少し寂しい目で海を見つめていた。

「…汐鹿生は今頃どうなってるのか知りたいなって。」

「みをりさんがいた頃の汐鹿生はどんな感じだったんですか?」

「今と同じだと思うけどねー。うーんと…。」

気がつけば会話は30分を過ぎていた。

みをりさんが入院している間はあかりさんが料理を作ることになってるのだが、今日はどうしても来れないらしく、俺に担当が回ってきた。そのため、そろそろ帰らなければならない。

「じゃあ、そろそろ俺は家の方戻るので。とりあえず無理はしないでくださいね。」

「大丈夫、分かってるって。」

実は俺は後悔していた。本当に聞きたかったことから直前で逃げ出してしまい、目を逸らしたからである。

しかし、体調にそこまで問題がないのならまたチャンスはあるだろう。

そんな曖昧なことを思いながら、病室のドアに手をかける。

「あ、ちよつとストップ遙くん。」

「はい、何です?」

ストップと言われ足を止める。

「もう一つ、最後の話、聞いてくれるかな?」

「... いいですよ。」

そう言つてもう一度近くの椅子に腰かける。

するとみりさんは似合わないほどにかしこまった。

「島波遙くん、ちよつと長いけど聞いてください。」

「え、あ、はい。」

...

「ごめん、長くなって。変なこと言いすぎて混乱しちゃった?」

「大丈夫です。... では、もう帰りますね。また来ます。」

それからもう振り返ることもなく病室を出た。

最後のみりさんの表情を見ることも無く。

翌朝、みりさんが亡くなったという連絡が俺に伝えられた。

第7話 好きになるって

——遙side——

俺は中学2年生になった。

もうあの日から3年ほど経つ。

光達など、海と疎遠になりかけてまで陸と関わったあの頃。

陸に居づらくなって戻ってきた海にも、もう暖かさは感じられなかった。それこそ、温水雪が降り出した汐鹿生のように。

思えば家ではずっと勉強しかなかった。そんな日々だった。

もともと、教科書なんかに書いてあるものではなく、心理、人の心についての勉強だったが。

理由は簡単である。

みもりさんが亡くなったあと、俺は1度も泣かなかった。

そのかわり、その日から『人を好きになる』ことが分からなくなった。

好きになってしまった人からいなくなる。

そうしていつの日か自分の居場所が無くなってしまいそうで。

だからわからない。怖い。そして、知りたいと思う。

『好きになる』というのは一体どういうことかを。

だから俺は『好きになる』ということについて自分なりに答えを持ち、そして向き合いたいと思ひ勉強している。

答えはまだ、掴めそうにもないが。

そんな中現在まで。

光達は疎遠になった俺を放っておくことも無く、ずっと呼んでは一緒に学校に行ったり遊びに連れ出したりしに来たてくれた。(半強制的)

ありがたい話である。こっち側としては半ば見捨てていた状態だったのに。

ただ、これも怖いのである。こいつらが好きだと思ってしまうえば

きつと何か起こってしまうことが。

恋愛的な好きであつてもなくても、やがてその気持ちのせいで周りが変わってしまう。それは肌を持って実感した。

だから、友人であれど一線を越えることができなかつた。まあ、超えなくてもいいのかもしれないが。

「行ってきます。」

誰もいない部屋に向かつて言い放つ。

いってらっしゃいの声はもう帰つてこないが、立ち止まる暇はない。

人数の関係で俺達の中1まで通つていた波中は廃校になつた。

つまり、陸の学校へ合流することになつたのだ。

というわけで、今日から新しい制服に腕を通す。

はずだつたんだが…。

「いいか！陸へ上がったっても波中魂は消えねえからな！明日は波中の制服来てこいよ！」

なんて光が強気で言い放つもんだから、制服は仕方なく着替ええないでおいた。

集合場所には要、ちさき、そして浜中の制服を着たまなかがいた。

… おいまなか。

「おはよう遙。」

「おはよう。」

ちさきと要が同時に挨拶する。

「ああ、おはよう。」

朝聞くとやはり爽やかなのは要である。(謎)

「おはよーはーくん！」

さて、自分の身の危険になんで気づかないのだろうかまなかは。

「おはよう。あのなまなか…。お前…光絶対に怒るぞ。悪いこと言わねえから着替えてこい。」

「うーん…。でも変な目で見られちゃうだろうし。やっぱり陸の人

とも仲良くしたいし…。」

「言いたいことは私達も分かるんだけどね…。」

ちさきがさりげなくフォローを入れる。

確かに人間は、一部分違うだけで人を異分子扱いする。ただ、ことの大概はあくまで最初のみ。内心が見えるからこそ人は仲良くなれるのである。であれば…。」

「まあ、スタートダッシュに失敗しても仲良くはなれるはずだと思うぞ俺は。それよりも今ある大事な関係もしっかり見た方がいいと思うぞ。あと光が怒鳴るの面倒臭いし…。(小声)」

最後の方に愚痴ってしまった。いけないいけない。

「遙、本音漏れてるよ…。」

要が残念そうに言う。まあ、許してくれ。

「そう、だよ。ちよつと着替えてくる！」

そういうなりまなかは家の方へ全力で走っていった。

その後入れ違いで光がやってくる。

「よし全員そろつ…。てねーな。まなかのやつどうしたんだ？」

要とちさきが一瞬だけこちらに目配せしてきた。

なるほど、上手く言えっところか。

実際、この中で光のことを一番わかっている自信はある。なら、それに応えよう。

「ああ、まなかさつきまで居たんだがなにか忘れ物したらしくてな。

なんなら俺が待つてるから3人は先行っててくれ。」

「ふーん、そっか。遙が待つてくれるならまあいいか。」

光は怒ることも無くすんなりと受け入れた。

そしてそのまま3人は登っていく。

「じゃあなー遙、先上がってるぞー！」

はいよ。

内心でそう呟いてまなかを待つ。さて、俺も忘れもののチェックでもしておくか。

確か今日は体育あったような。ってことは…。」

…あ。

忘れ物があつたのである。よりにもよってこんな時に。

「すまんまなか、忘れ物した。先行つててくれ。」

そう置き手紙を残してダッシュで自宅へ向かった。

「くっそ、結構遅れたな……。」

少し息を切らして戻ってきた場所には置き手紙も人もなかった。

さて、急ぐか。

時間はまだ少しあるが、ちんたらしていると遅刻になる可能性もある時間だ。

俺は両足にしっかりと力を入れ陸へ泳いでいく。

泳ぎ出して数分たった。陸まではまだ距離がある。

さて、自己紹介で光が暴れるのは厄介だからな……。手を打っておかねえと。

道中、そんな考え事をしてたせいで目の前から迫ってくる何かを避けられ無かった。

ゴンッ!!

「っ……!……なんに当たったんだ俺は……!?!」

は 2〜3秒痛みに支配された後に、目を開けて周りを見回す。そこには

俺と同じように頭を抑えている、俺がこれから向かう浜中の制服を着た一人の少女がいた。

第8話 始まりの色

——side——

え？

目を疑ったが間違いない。俺の目の前には確かに少女がいる。これから向かう浜中の制服を着た、波中の生徒でない少女が。

「あつーぶ、ごめんなさい!!」

少女はこつちに気づくなり、急いで方向転換して陸を目指していった。

「あ、おい待て！浜中ならあつちからが早いぞ！」

少女がテンパって別な方向を向いたのでそれとなく教えた。

その少女は返事こそしなかったが俺の指した方向へ向かっていった。

「さて… どういうことだったんだ？」

そのまま陸に上がった俺はさっきのことについて考えていた。海で泳ぐにはエナがいる。

しかしエナは純粹な海の人間しか持ち合わせてない。

そう教えられてきた。

さっきの少女はどうだろうか。

少なくとも、俺が生まれた時には海にいなかった。

ということは、陸で生まれているのは間違いない。

では、なぜ泳げたのだろうか。

導き出した答えは2つ。

1つは両親とも海の間人だったが陸で結婚し、陸で子供を産んだ。これなら1番納得が行く。

そして納得ができないもう1つの答え、それは

陸と海のハーフであるということだった。

それから学校につき、今は教室で、教卓の前に立っている。少しゴタゴタしたが、遅刻することも無く無事に着いた。教室には何人か見た顔ぶれがいたが、それは後に話すことにしよう。

因みに、1つ空席があつたが聞いてないという事だつた。

そして、明らかに優しそうな先生が説明を始める。

「はくい、みんな静かに……って、静かだね。まあ、今日から、波中が廃校になったため、浜中と合同になることになりました。じゃあ、自己紹介してくれるかな?」

先生がそう言うと、チサキが自己紹介を始める。

「えっと、私は比良平　チサキです。その……よろしく願います」

「僕は、伊佐木　要です。趣味は特にはないです」

そうして、自己紹介が光に回ってきたとき、周りがいつせいに挑発を始めた。つたく、なんで光のタイミングかなあ……。多分タイミン
グ関係なくても挑発には乗りそうだが。

「ああ、クセエくクセエく。すげえ、塩臭いなあ。もしかして、魚の糞とか被ってんじゃねえか?」

その言葉を聞いて、周りも笑い出す。

はあ……。頼むから殴りにかからんでくれよ……。

そう思つて光の方を見る。

が、動き出す様子はなかつた……。口先以外は。

「ああ、本当にくせえな!　まるで、クソだらけの豚小屋に入れられたみたいだぜ!　お前らもなんかいえよ!　こんな奴らに!」

いちばんダメなタイプだこりゃ。

「はあ……。ほんつとだめだなお前。『なっ!?』えーつと、うちのバカ光がすいませんね。俺は島波遙。趣味は……。まあ、勉強?　ああ、特に心理学な。あと料理辺りですかね。そっちがどうかは知らないけど、俺は一応何人かは知ってるつもりなんで、まあ仲良くお願いします。」

ついでに狭山の方をちらつと見る。明らかにこつちに気づいていたがふいつと顔を逸らした。

見事に挑発の流れをぶつた斬つた俺の一言でざわつきが収まる。そのままなかの紹介は何事もなく終わり、授業に入つていった。

それから流れるように時間が過ぎ、いつの間にか昼休憩になつた。

結局、空席にしていた子は休むという連絡が入ったが、まあさほど変わりはない。

流石に初日からそんなに陸と海の距離が近くなる訳が無い。とは思っていたんだが……。

俺の席のところを一人、少年がやってきた。

「なあ、少し話しないか？」

その少年は近くの空いてる椅子に腰掛けた。危害はなさそうなので素直に話す。

光達はちようど別なところで集まっていたので問題もなさそうだ。

「ああ、いいぞ。その前に自己紹介頼めるか？」

「OK。俺は木原紡。ずっと漁師のじいちゃんのおそばで海を見てきて、

海が好きで、海を知りたくて、海に憧れている、そんな人間だ。」

おう……こいつ結構海好きなんだな。

「俺の……は、いいか。さっきしたし。それよりお前、ああ、紡って呼んでいいか？紡はなんで俺のここに来たんだ？」

「紡でいいよ。そうだな……。お前だけ、雰囲気違った。反応が子供じゃない。それに、陸とも面識があるみたいだし、1番話したいってさっきから思ってた。」

なるほど。

こいつもなかなか冷静沈着なタイプだな。

「そうか。とりあえず、友達になってもらっていいか？お前とは気が合いそうだ。」

ただ、付き合いは深めるつもりは無い。

声には出さなかったがそう呟いた。

「ああ、こちらこそよろしく頼む。」

互いにそう言つて握手をした。

そうだ、ついでに今日休んでいる子について聞いておこうか。

「なあ、紡。今日休みになってるあそこの席の子ってなんて名前なんだ？」

「ん、ああ。あそこか。」

そして紡は、俺が聞いたことのある1人の人物の名を挙げた。
いつかみをりさんに聞いた名前。そう…

「千夏。ああ、フルネームか。あそこの席は水瀬千夏の席だよ。」

第9話 きつと同じだから

——遥side——

「水瀬千夏、さんね…。」

一瞬動揺した。と同時に、みりさんにあの日言われたことを思い出していた。

「…おい、遥？」

「…ん、ああ。悪い。」

どうやら少しぼうつとしていたようで、紡に声をかけられてしまった。

「次体育だから、そろそろ行こう。また今度、海についてもっと教えてくれ。」

「ああ、知ってること全部話してやるよ。」

そして俺達は体育へ向かった。遠く離れたところからの光の視線が少し痛かったが。

時は流れて今は体育。

今日の忘れ物はまさしくこれだったのだが… まあいい。

内容は持久走。男はただひたすら外を走らされている。

「さてと…。」

軽く体を動かして跳ねるような軽さで走る。

勉強しかなかった、とはいったものの身体を動かしてない訳でもないし、何より陸での活動はかなり慣れている。

そんな理由相まって、俺は先頭を走っていた。

ほぼ横を走ってる紡はどうやら少し驚きのようだった。

「お前、早いんだな。海の中でも走ったりできるのか？」

「ああ、海の中って言ってもずっと泳いでるわけじゃないしな。寧ろ汐鹿生だと泳ぐことの方が少ないかもな。」

「ふーん、そうなのか。」

「ついでに、陸には色々と思入れもあるからな…。」

少し思い出し、胸が痛くなる。忘れてしまいたい悲しみだが、きつと忘れてはいけない。

「どおおっせええええい!!」

気がつけば後ろから光がものすごい勢いでペースを上げていた。

バカ!ぶつかる!!

咄嗟に俺は外に進路を外したが紡と光が衝突してしまう。

「おいバカ光。内抜きは禁止っていくら言えばわかるんだ。危ないだろ。つたく、二人とも、大丈夫か?」

両手を差し出して紡と光の腕を引っ張り立ち上がらせる。

「すまない、遥。」

「つたく、悪かったよ。」

紡は相変わらず無表情で、光は終始不機嫌そうに礼を言った。まあ、終始紡を睨みっぱなしだった辺り反省はしてないのだろう。

光が行ったあとで紡に確認をとる。

「なあ紡。なんか光に、もしくは海村の人に対して何かやらかしたか?」

「直接はなんもしてない。けど、向井戸にはちよつとあったか…。」

「と言うと?」

「さつき、俺のじいちゃんは漁師って言ったよな。それで、今朝も船を出したわけなんだけど、網で向井戸を引き上げてしまっただな…。」

ははあ…そういうことか。

まなかのことになると光は止まらなくなる。

きつと陸からその様子が見えていたのかもしれない。

そういうえば自己紹介の時もまなかの顔は紡に向いてたな。

嫉妬ファイアー、そういうことか。

「なるほど、だいたい分かった。じゃあ大丈夫だな。」

「そうか、それならいいんだが。」

それ以降は特に何も無く、浜中での最初の一日が終わった。

帰り道、あれやこれやとあり、俺と光の2人で下校していた。

「つたく、やっぱ地上の奴らってダメだよな。」

「おい、具体性がないぞ。」

とりあえず1—1の時の光は愚痴が多い。このメンタルの複雑さこそが光の厄介な部分だと思う。

「おい、光と遙くん。学校お疲れ様。どうだった？」

サヤマート辺りで俺と光はあかりさんに遭遇した。まあ、勤務中なのでそうなるか。

「お疲れ様です、あかりさん。まあ、普通ですかね。」

「別になんともねえよ。」

・・・あれが何ともないのなら結構曲がつてるぞ光。

「ところで二人とも、友達できた？」

おいおいストレート過ぎますよあかりさん。いますけど。

「はあ？あんな連中と出来るわけ『出来ましたよ？』は!?!お前まじかよ！」

光は嫉妬と驚きが混ざって結構五月蠅いモードに入ってる。

「安い挑発なんかに乗るからああなるんだよお前は。もつと冷静に周りが見えないのかほんと。」

「ふーん、光また暴走しちゃったんだ？」

「して!・・・たかもしれないけど!なんで言うんだよ遙!」

「まあ、隠しておいてもなんだろうしな・・・ってちよい待った。」

俺はサヤマートの裏の方に2人の人影を見つけた。1人はよく見えないがもう1人は・・・

・・・美海、か？

「?どうしたんだよ遙。」

光が急に冷静になったことでこちらが意識してることに気づいたのか、その2人はそそつと逃げていった。

「?あつ、おい待てそこの!」

「光、あれはいいのよ・・・放っておきなさい。」

あかりさんが咄嗟にストツプをかける。

「放っておくって言っても・・・。」

光は少しうずうずしてるが、こればかりは放っておくべきだ。寧ろ放っておいて欲しかった。

見間違えるはずもない。あそこに居たのは美海だった。

そして俺と光はさっきの壁に近づく。

壁にはガムで「どっかい」と書いてあった。

「はあ？なんだよこれ。」

光は複雑な心境なのか、困惑していた。

「『どっかい』、ねえ。きつとどっかいかって私にメッセージを送ってるのかもしれないけど、理由は分からない。なんで完成しないんだろう。」

あかりさんは少し悲しそうに、少し不思議そうに言った。でも、何故完成しないのか、それは俺も気になった。

「はあ!? 凄い酷い奴らじゃねえか! あかりは何もしてねえのに、海の奴だからって、こういう事をすんのかよ! やっぱ俺が捕まえて...」

「落ち着け光! 理由の決め打ちはまだするな! それに...」

「それに... なんだよ。」

俺が久々に大きな声を出したことで、光は追いかけてやうとしてた足を止めてこちらを振り返る。

苛立ちを消しきれないのか光は突っかかってきそうな勢いだ。

「多分これは、俺とあかりさんが1番分かることかもしれない。だから俺に任せてくれ。」

「ったく、しゃーねえ。お前がそう言うならそういうことにしてやるよ。じゃあな遙、先帰ってるぜ。」

光がは不承不承ながら受け入れてくれ、そのまま海へ帰っていった。

「さて、あかりさん。ちよつとお話しましょうか。」

「まあ、そうなるよね...。」

一息ついてあかりさんは俺に向き合う。

「さっきの片方、美海ですよ。俺の知る美海はあんなことはしませんよ。ということ、何かあったんですよね?」

「うん、そうだね。ここから先は他言禁止にしてくれるかな?」

「まあ、俺もこの件の関知がバレるのは嫌なのでいいですよ。」
それから、あかりさんは自分の秘密を話した。

昔からみもりさんと面識があり、仲良くしてたこと。
そしてみもりさんが亡くなったあと、今は至さんと付き合ってるこ
と。

美海に仲良くなりたいと接しても、それが叶ってないこと。

俺はそれを聞いてひとつ確信した。

きつと美海は俺と同じなんだ、と。

「なるほど、そういうことですか。」

「うん、こういうこと。」

終始、あかりさんは悲しそうだった。

「何となく、ですが、分かりました。美海の今のこと。でもこれは、俺
が手を加えてはいけないことだと思います。なのであかりさん、あと
は自身で答えを導いてください。」

「あはは、厳しいね遙くんは…。」

すいません、とだけ謝って、俺は汐鹿生に向かって進み出した。

しかし、言っただけじゃない。言える立場ではない。

似ているということは、すなわちそういう事だったからだ。

さて、ここら辺か…。

汐鹿生へ帰り道のダイブポイントへ着いた。

しかし俺は潜らなかつた。遠目に人影が見えたからである。

よく見返す。

そこには、遠く海を眺めていた、朝ぶつかった少女と同じ容姿の少
女がいた。

話しかけるチャンスか。

そう思っただけで近づくと。

「?…何かしました?」

少女はこちらに気づいたのか声をかける。

朝のテンパリようからは思えないほど冷静だな…。

特にそこは気にしないことにした。

「ああ、いえ。たまたま通りすがっただけなので。あの、ちよつと名前を聞いてよろしいですか？」

そして、その名前は俺が何度も聞いてきた名前だった。

「はい。えっと、私は水瀬千夏って言います。」

第10話 海色の瞳

——千夏 side——

私は水瀬千夏。

陸で生まれた父と、海で生まれた母を持つハーフである。陸と海のハーフはエナを持たない。そう言われているが、実は私にはエナがある。

もちろん最初から持ち合わせていた訳じゃなかった。

まだ小さかった頃のある日、一人で港を歩いていた私は、誤って海に落ちてしまった。

落ちた瞬間は苦しい、助けをと思った。

でも周りに誰もいないことを知っていた。だから、もう上がることを生きることを諦めようとした。

そして目をつぶった。

その時に、どこか音が聞こえた気がした。

次に目を開けた時は、身体が軽く感じた。

そして地上でするように息を吸い込む。身体に入ってきたのは水ではなく、空気だった。

この時、私にはエナがあると初めて実感した。

ただ、それとは関係なしに、私は生まれつき身体が弱かった。しかも、その病気も原因不明なもので、いつ起こるか分からないものだった。

だから、動ける日は動こうと決めて、毎日散歩（海）に行くことに決めた。

そして、つい先日まで身体を苦しめていた病気が一旦収まったので、

学校に行く分のついでに、久しぶりに海を泳いでみた。
が、

泳ぎすぎてしまった。現在地の把握が出来ない。

色々と面倒だから海村には行くなと母に言われているので、普段は深くはもぐらないのだが、久しぶり過ぎた分、深くまで行き過ぎてしまったのである。

えーっと…どうしようかな。

とりあえずじっとしてられなかったのでその場をグルグル泳いでみた。すると、自分も前を見ていなかったせいか、一人の少年とぶつかってしまった。

「っ!!」

頭と頭がぶつかってしまったのでダメージは結構でかく、その場で数秒ほど悶絶した。

そして顔を上げた瞬間、その少年と目が合ってしまった。

「…／／／!!」

恥ずかしいのか、見られたのが不味かったのか分からなかったが、私はすぐさま上に向かって泳ぎ出した。

「あ、おい待て！浜中ならあっちからが早いぞ！」

ちやうど私は制服を着たままだだったので、自分が浜中生であることも知られてしまった。が、方向を言ってくれたのはありがたかった。

そしてそのまま私は陸に上がった。

がしかし、久しぶりの海で、かついつもより若干長く泳いでしまったせいで、体調が悪くなってしまった。

病み上がりというのもあり、今日は学校を休むことにし、一旦帰ることにした。

(帰ったあとは結構怒られたが休ませてもらった。)

午後4時、ちやうど学校が終わる頃くらいだっただろうか。母親が買い物とついでに外出の許可を出してくれた。ちやうど体調ほうも昼にはなんとかなっていたので、なんのためらいもなく外に出た。

サヤマートでとりあえず頼まれたものはぱつと買っておく。ちやうど下校中の生徒に会うくらいの時間だが、今日は運良く誰も遭遇しなかった。

そのまま私は海沿いを歩いていった。そして、ちよつとした堤防に座つて海を眺める。

ああ、海つて本当に綺麗だ。

こつやつて眺めるといつもそう感じる。

ずつとぼんやり眺めていたが、少し遠くから足音がするので意識が戻された。

足音のする方向をむく。そこには、今朝ぶつかった相手が歩いているのが見えた。

えつ？嘘つ!?

一瞬テンパつたが、今は私服。ひよつとしたらバレないだろうと思ふこんで冷静さを取り戻した。

「?どうかしました?」

相手方が遠目に少し驚いているのが見えたが気にしない気にしない。

「ああ、いえ。たまたま通りすがつただけなので。あの、ちよつと名前を聞いてよろしいですか?」

名前かー。

特に嘘偽る必要も無いので素直に答えた。

「はい。えつと、私は水瀬千夏つて言います。」

——遥side——

水瀬… 千夏…

その名前を聞いて俺は少しだけ感動を覚えた。

ずつと聞いてきた名前の人物と出会うことが出来たからである。

「どうしたんですか?ぼうつとして。」

「ああ、いえ。そうだ。自己紹介しときますね。俺は島波遥です。」

「そう、島波くんね。」

「…。」

さて、この流れであのことを切り出しているのだろうか。また逃げ

られたりするの嫌だし、このままないがしろにするの嫌だ。

「あの、浜中の生徒、ですよね。」

「ええ。」

「今日、海で俺とぶつかりましたよね？」

「／／／!!」

ああ、やっぱりか。

確認が出来たので少し満足、もう逃げられてもそんなに困りはしなかったのだが…

今度は逃げ出さず、顔を赤くして下を向いてた。

「すいません…忘れてください…事故なんです…。」

「いや…別に大丈夫なんですけど。問題はそこじゃなくて。」

十中八九エナの事である。

「あなたのエナについてちよつと教えて欲しかったので。」

「…誰にも言わない？」

「俺の場合言うメリツトがないので。」

どうやら腹を括ったのか水瀬さんは向き直した。

「…分かった。その前にお願ひひとついいかな。」

「なんなりと。」

「あの、同級生なんだから敬語使わないでほしいな。」

「そんなのか。ok、分かった。」

それから聞いた話によると、

陸と海のハーフで、何故かエナを持っている。という状況らしい。

それでもって海村に行かない理由も何となくわかった。

「なるほど。つとごめん。エナが少しかわいてきた。そろそろ帰る。」

そう、海村の人間にとつてエナは陸では活動限界のバッテリーみたいなものなのだ。

「そう。まあ、続きとかあるなら明日でもいいよ。」

「悪いな。じゃあ。」

そして俺は夕暮れの海に飛び込んだ。

水瀬千夏。

海村にとって俺にとって彼女は、1番今後を左右する存在だった。

第11話 事件は突然に

——遥side——

事件は翌日に起きた。… まあ、事件でもないか。いつもの集合場所にいつまでたってもまなかが来なかった。流石に遅いからと光が向かおうとしたので、俺、ちさき、要もついていった。

「おーいまなかー！早く出てこいよー！」

いやだから、出てこないから遅れてるんでしようが。

はあ、と少し溜息をつく。

「つたく、おっせーなあ…。」

光のイライラモードが少し見えてきた。

やれやれ、俺が先陣切るとしますか。

「おーい、まなか、失礼かもしれないがそっち行くぞー！」

そう言つて俺はまなか宅の2階へ上がり、窓から入っていく。あとの3人もついて来た。

「おい、何やってんだよまなか。おせえぞ。」

「あ、おはようひーくん、とはーくんも。えつとね、そのー…。」

そう言つて止まったまなかは膝にハンカチを当てていた。

なるほど、これは俺が1番知ってるやつだ。

「ウロコ様に呪われたんだな。お前。」

「なんで分かったの!？」

まなかが驚く。いやだつて… よくなつてたし？

「いやほんとに…。お前さては経験済みか？」

光は俺に少し呆れているようだった。

「まあ、かれこれ2桁はいつてるな。」

「ウロコ様に嫌われてるの？遥つて。」

ちさきが少し驚きげに言う。んー、どうだろ。そんなに話してないし。

「まあ、小さい頃から結構無駄に陸ばかり行つてたしな。そう言われたらそうかもしれない。」

そう言っただけはまた、ふと考えた。

無駄、なんだろう。みもりさんや、美海や、至さんと過ごした日々は。

失ってしまったものの価値は、よく分からない。

「それはおいといて、遥、今回のまなかの理由はなんだか分かる？」

脱線しかけた話を要が俺に振ることで元に戻した。

「んー？どうせ暇潰しだろう。そんなに毎日仕事詰めな毎日じゃないでしょあの人。」

まあ、こんなこと言っただけなら俺もまた呪われそうだが。

「暇つぶしでそんなことするんだウロコ様って…。」

ちさきが関心とも落胆ともつかない声を上げる。

「それより遥、どうやったら取れるんだこの魚はよ。引っこ抜くってわけでもないだろ。」

光が尋ねる。

「時間が経てば勝手に出ていくと思う。俺の場合はそうだったしな。

だからまあ、今日はそれ巻いて我慢だな。」

そうしてまなかは膝にタオルを巻き、そのまま俺達は揃って学校へ向かった。

そして学校。授業に問題はなかった。無かったんだが…。

問題はそれから、つまり、放課後に起こった。

因みに今日は水瀬も普通に来ていたが、男女間は学校ではそうそう馴れ馴れしく話せるものでもなく、そのまま時間が過ぎていった。

最後の授業を終え、移動教室から紡ぐと話しながら帰っていた俺は、教室で何やら揉め事が起こってるのが聞こえてきた。

「止めてよ、嫌がってるでしょー！」

少し怒り気味なちさきの声が聞こえる。

「ええ、私達、エナを見せてもらってるだけだよ」

「そうだよ」

入ってみると数名の女子に腕を掴まれているまなかと、それを止めに入っているちさきがいた。

はあ……。子供なんだな中学生って。せめて礼儀というものは学んで欲しかった。

……。少なくともそれよりも小さい美海は、こんなことはしないと分かっている。

そんなことを一人で考えていると、先に紡が口を開いた。

「やめろよ。嫌がつてるだろ。」

「あ……。紡くん。」

男子が割って入ったことによつてか、取り巻いていた女子達はいっせいに手を離れた。手が解放されたまなかは、ちさきの方へ近づいて行く。

その時に、慌てていたまなかは机にぶつかり、膝の魚が露出してしまった。

ピギヤツ!! プウウウー!!

魚が大きな声を出す……。あれ?俺が呪われた時ってこんな声出たっけ?

なんて考えながらまなかの方を見る。まなかは顔を真っ赤にして下を向いていた。

あ、逃げ出すなこれ。

ご名答。まなかはすごい勢いで教室を出ていった。

ちさきが真っ先に行こうとするが、意図的ではないのだが先程の女子に進路を阻まれ動けない。

「すまん紡、ちよつと行ってくる。」

「待て、俺も手伝う。」

「OK、じゃあよろしく頼む。」

そして俺と紡はまなかを探しに出た。

それから結構な時間が経ったが依然として見つからない。

時刻は5時前。そろそろエナが乾いてくる時間だ。

経験済みだから言えるのだが、実はエナが乾くのは結構危険なのである。

因みに昨日の反省を生かし、俺は海水の入ったペットボトルを帯同することにしていたので問題はなかった。

それからまた数分。ようやく俺と紡は草むらで寝ているまなかを見つけた。

「…よし、回収はした。けど、ここからどうしようか。」

時刻はちょうど5時。寝ている状態で海に帰るのもよくはない行動だし、ずっとこのままという訳にも行かなかった。

「俺ん家、行くか。ここからならそう遠くない。」

「まあ、そうするか…。よいしょっと。」

そして俺はまなかをおぶる。光に見られたら激怒もんだなこれ。

「よし、行くか。」

そしてそのまま俺達は紡の家へと向かって歩き出した。

第12話 似てるし、違う

——遙side——

それから数分。俺達は紡の家へ到着していた。

「ただいま、じいちゃん。ちよつと客連れてきた。」

見る限り紡は祖父と二人暮しみみたいだ。

…こいつも両親がいないのだろうか？

しかし、頼れる場所が身近にあるということは、少なくとも俺と似たような境遇ではないということだ。それは分かっている。

「ほう、海村のものか。」

紡の祖父は網の手入れの傍らこっちを見るなり、そう断言した。

「ああ、初めまして。島波遥です。」

相変わらずまなかをおぶったまま挨拶をする。

声こそなかったが、紡の祖父は小さく会釈を返してくれた。

「ふむ…。」

その後、紡の祖父は一旦手を止めてこちらを向き、また数秒後に作業に戻った。

「事情は何となくわかった。紡、風呂に塩を入れてその子を入れてあげるときなさい。出来るだけ海水に近い塩分濃度でな。」

急に話し出したのには少し驚いた。が、事の本質をバツチリ理解していたことにもまた驚いた。

「あ、ついでに電話も借りますね。」

「構わん。いくらでも使え。」

…この人紡よりも表情少ねえなあ…。

そんなことを思いながら風呂場へ向かう準備をする。

「ついてきて。風呂場、こっちだから。」

俺は言われるがままに紡について行く。この時、すっかり電話の位置も確認しておいた。

風呂場へつくと紡は水を貯め始めてその場から離れた。塩でも取りに行ったのだろう。

というわけで今は別行動。俺も電話へ向かうことにする。
まなかをそつと浴槽に下ろし、俺はさつき確認した電話へと向かった。

電話につくなり俺はダイヤルに手をかける。今日の場合、かけるべき相手は1番近いやつだ。

プルルル…ガチャ

「はいもしもし比良平ですが…。」

あの場面で1番近くにいたのはちさきだった。それにちさきの性格上いの一歩にまなかを探するのは間違いない。

「もしもし、俺だ俺。遥。」

「遥!?今どこにいるの!?!」

「紡… ああ、木原の家だ。まなかは見つけたからとりあえず探すのはストップ。親に連絡が届いてるならそっち優先で電話かけてくれ。」

「まなかは今そこにいるの?」

「ああ。ただエナが乾いている状態だからその対処中。責任もって送り届けるからとりあえずそう伝えといてくれ。」

「OK、遥に任せるわ。」

そう言つて互いに電話を切った。

とりあえずこつち方面はとりあえずクリアだな。

さて、風呂場へ戻って様子でも観るか…。

そう思つて振り向くと、紡の祖父がたっていた。

一体一の状況。とりあえず急ぎの用もないのでゆつくりと話をすることにした。

「あの、ちよつとお話していいですか?それと…名前どう呼べばいいですか?」

「好きなようになんなりと呼べ。それで、何が聞きたい?」

「では、おじいさんで。えつと、おじいさんは、海の方…ですか?」

「ああ、そうだ。と言つても陸に上がつてもう結構経つかの。」

やはり海の人だった。そりやそうだ。あの状況がすぐに分かる人

間は余程海の人間との距離が近い人以外ありえない。それでもって、実は何回か肌が光っているのが見えたのである。

「海から上がったって、やはり海が好きなんですか？」

「ああ……ところでお前さんは、陸をどう思ってるのかの？」

急に質問を返される。

「どう……ですか。そうですね。人間は海と変わりません。皆似たようなもので、一人一人違う。エナを持っているか持っていないか、そんなしよーもない違いが一つあるだけです……こんな似ているのに何故仲が良くならないのか、それが気になります……あつ、ともかく、俺は陸は好きです。」

答えに困ったのでとりあえず答えを言ってから考えた。

確かに陸では辛いことが沢山あった。というより辛いことしかなかったし、今も辛いままだ。

でも、だからといって嫌いにはなれないのである。

……何故かは知らないが。

「そうか。存外、お前さんはわしと似てるのかもしれないの。」

そう言うなりおじいさんは外へとまた出ていった。

それから風呂場へと向かった。中からは声が聞こえる。ということとはもうまなかは目が覚めたみたいだ。

「綺麗だと思ってる……。」

「えっ？」

「この魚……それに、お前も。」

……は？

俺の中で持っていた紡のイメージは一瞬で崩壊した。と同時に笑いがこみあげてくる。こいつ……クールな見た目して結構天然じゃねえか。

「はいよつと。目が覚めたみたいだなまなか。」

「あれっ!?はーくんいたんだ……。」

急に風呂場に入ってきた俺にまなかが驚く。

いやいましたよ。ずっとあなたおぶってましたよ。まあ、覚えてな

いだろうけど。

「まあ、お前ここまで運んだのも俺だけだな。しっかしありや災難だったな。」

「うう…。」

あの時のことを思い出したのかまなかはまた赤面し、下を向いた。

「とにかく、今日はありがとね。紡くんにはーくん。」

あれから数分し、まなかもかなり回復したので俺達は帰路へ着いた。

紡もとりあえず海まで是一緒に来てくれるみたいだ。

しかし、こういう時に限って神様は嫌なことをするもんだ。

俺、まなか、紡と3人で海まで歩いていたところを、バツチリと光に見られていたからだ。

お察しの通り、次の日の光はすこぶる不機嫌な状態から始まった。

第13話 再開

——遥side——

まなかの魚は昨日中に消え、今日は何事もない朝だった。最近の俺の学校生活は、やたら紡一緒にいることが多くなっていた。

現に今も机を挟んで話をしている。

「あの！はーくんと紡くん！」

急にまなかがやってきた。お、おう。どした？

「えっとその… 昨日はありがとう！」

「別に今言うことでもないだろ。昨日のことなわけだし。まあ、紡に助けて貰ったのもあるからな。そこは俺も感謝してる。」

「と言っても俺はただ、家を貸したただけだしな。力仕事は全部お前だったろ。」

紡は照れくさそうな素振りも見せない。これで昨日みたいな天然なセリフが出てくるもんだから、可愛いものだ。

そんな様子、まあここ数日の様子が気に食わなかったんだろう。遠くからこつちを見ていた光が精一杯に苛立ちを浮かした顔でこつちに向かってくる。そして、俺たちのいる机をバンと叩いた。

「おい、テメエ。まなかに… 海村にこれ以上関わるな。それと遥お前も少しは付き合い方考えろ。」

そうして言いたいことを言うだけ言って光はズンズンと音がたつような勢いで教室を出ていった。

「…」

場に沈黙が流れる。雰囲気壊しやがってあの野郎…。

因みにまなかはそのまま光を追って行ったようだ。

ふうっ… と俺は息を吐いた。そして会話を再開した。

「… あいつって結構素直じゃないからな。多分今回もそれだろう。大目に見てやってくれ。」

「お前も結構大変なんだな。」

「14年も付き合ってなきややってられねえよほんと。んじや、

ちよつと光の様子見てくる。ちよつと騒がしいしな。」

そう、まなか光のところに着いたのだろう。光の怒鳴る声はだんだんと聞こえてきたので多分そういうことだろう。

廊下に出る。が、光はもうどこかに行つたみたいで、涙目のまなかだけがそこに居た。

あーあ…遅かったか。

「どうしようはーくん… ひーくん怒らせちゃった。」

すごくしゅんとしながらまなかと言う。

「どう考えても悪いのお前じゃないんだけどなあ…。」

そう言つて俺はまなかを宥める。そこにやって来たのはちさきだった。

「あら、まなかに遙？ どうしたのこんな所で。」

「ちよいと光とトラブルがあつたみたいでな…。」

それから淡々と説明する。

「なるほどね。で、今から光のところ行くんでしょ？ 遙は。」

一通りの流れを聞いたちさきは俺の次の行動を読んでいた。やはり伊達に14年一緒だつたわけじゃねえなちさきは。

「分かつてるな、お前は… んじゃ、まなかのこと任せるぞ。」

そう言いきつて俺は再び光探しへと向かつた。

それから数分たつた頃、俺は外で声がするのを聞いた。紛れもなく聞き覚えがある、光の声。それと、少し甲高い女子の声だ。

近くのドアからそつと外に出て遠くから様子を伺う。そこには光と、ランドセルを背負つたこの前の2人——美海ともう1人、女の子がいた。

あれ？ まだ学校中だよな？

まあ、さぼりは俺も結構したのでここはノーコメントでいよう。

「お前、あの女の知り合い？」

「あの女って、あかりのことか？」

どうやら遠くにいる分俺に気づいていないらしい。好都合なので

このまま静観することにした。

「やっぱ、あの女の仲間だ！この!!」

美海の横にいた女の子が、光を殴ろうとグルグル手を回しながら近づくが、片手で防がれてしまった。光は楽しそうにしている。

そりゃ負けないとわかってている勝負ほど楽しいものは無いよな。

そんな中、何処からか要が現れる。

「光、女の子をいじめちゃいけないよ?」

「いじめてねえよ。ただ、なんであんな事をしたのか聞いてただけだ。」

あんな事、か。俺も何となくは分かっているつもりだが、本人の口から真意を聞きたいと言うのはあった。

もつとも、今はその時でもないような気がするが。

「まあ、女の子に手を出したなんて聞いたら、倍の勢いで遥から鉄拳が飛んできそうだしね。」

要がしれつとフォローする。おい、俺はそんな役回り貰った覚えはないぞ要。鉄拳の飛ぶ相手間違えてんのか?

「…待って、その遥ってのは…?」

美海が聞き覚えのある名前を聞いたことで動揺する。やれやれ、これはもう出るしかないか。

そして俺はもう一度、美海と再開する。

「そう、その遥。久しぶりだな、美海。」

第14話 向き合うために

—— side ——

そうして俺は4人の前に姿を現した。光と要はいつから?みたいな。美海の隣の子は誰だこいつ?みたいな。そして、美海はすごく驚いた表情をしていた。

そしてそのまま俺の方に突進してくる。

・・・暴力的な何かなら、されてもしようがないな。

そう思って俺は俺に向かってくるものを受け止めることにした。

案の定、美海に足を蹴られ、思い切り体当たりされた。

そしてそのまま美海は話し出した。

「何で急にいなくなったの!?!... 何で急に...。」

そう言つて少し泣きそうな目をして下を向く。

何故急にいなくなったか。これは簡単だ。逃げ出していたのである。

会えば会うほどみもりさんがいないことが身にしみてきて辛くて。

また失うんじゃないかって。

あれから数年たった今だつて向き合いきれしていない。だが、今美海と会つて分かった。こうやって痛みは少しずつ溶けていくこと。だから結局、逃げてはならないのだと。

少しよろけた俺は立て直し、美海の頭に手をポンッと置いた。

「ごめんな美海... それより、何で学校に行つてないんだ?こんなこと知られたら至さんは...。」

「それはあの女が...。」

「ああ、美海の言ってるあの女、つてのは光の姉さんだよ。」

そう言つて光の方を顎でくいつと指した。

あかりさんからは前回事情を聞いていたので間違いはない。

そう聞いた美海は連れの子と一緒に光の方へ向かい足を蹴り、腹に頭突きを入れた。そのまま光は足を抑えて悶絶する。

うわぁ... あれは痛いやつだ。

満足したのかふたりはくると振り返つて帰りだした。

と、角に差しかかる前に美海がこっちを振り向いて行った。

「また、会ってくれる？」

「ああ、いつでもな。」

ええ、会いますとも。

俺自身も、少しは大人になる時だろうから。あの日のことと向き合うために、また会いますとも。

因みにだが。

これから後は質問攻めだった。とりあえず理由は伏せて、昔からの知り合い、ということとで誤魔化しておいた。光は不服そうだったが要

が
抑えてくれて何とかなった。

そして帰りのHRを迎えた。どうやらお船引きについての話があるらしい。今年はお船引きは中止と、汐鹿生では連絡があったはずだが……。

「え〜では〜おじよしさまを作る勇士をつのりたいと思います。今年のお船引きは中止になったんだけどね。僕は、学校でやりたいと思っているんだよ」

なるほど、そう来たか。

「え〜、中止なら中止でいいじゃんか」

「そうよ〜」

「やる意味ねえだろ」

色々とブーイングが飛び交う。がそんな中で波中の生徒でない生徒の手が2人分上がっているのが見えた。

1人は紡、そしてもう1人は水瀬だった。

意外だな… 水瀬の方は。

もちろん俺としては参加する気はあるので手を挙げる。

「おおっ！有志が3人も！他にはいないかな〜、おや、マナカちゃんも

参加ですね。おや、それに光君も、おお！海っこは全員かい？」
見回すと光もちさきも要もまなかも手を挙げていた。

そして結局この7人で、やる事になった。

そのままHRが終わったあと俺達は外に向かい、おじよしさまを作るための木を集め始めた。因みに2班に別れており、ちさき、要、光は別作業をしている。ここにいるのはそれ以外だ。

「そう言えば、紡君はどうして参加したの？」

作業片手にまなかが紡に質問する。だが、返答したのはその紡の近くにいた水瀬だった。

「紡君のおじいちゃんやんは漁師なの。だからきつとそれだと思う。あ、初めましてだよね向井戸さん。こうやって面と向かって話すのは。」

初めまして、とまなかもがちになりながら返す。そして水瀬とまなかは互いに自己紹介を始めた。

そんな中、紡は表情変えずに話し出した。

「別にそれだけじゃないけどな、千夏。俺は海が好きなんだよ。普通に。船の上からだ、たまに光の屈折で白い屋根が見えてき、綺麗なんだ。あと、ぬくみ雪とか見てみたいし、他にも知りたいことはある。でも、実物は見たことないんだよね。」

「本当に紡君は海が好きだよね。」

「ずっと見てきたからな。」

「そういえば、紡君と千夏ちゃんは、どういう関係なの？」

二人の間を割ってまなかが再び質問する。

確かに俺も少しは気になってたが。

「普通に、昔からの知り合い。『友達でしょ？』まあ、そんなところ……。」

意外にも紡が押されていた。かなりレアな光景である。

そろそろ俺も会話に混ざりたかったのでそうすることにした。

「そういえば水瀬、お前は何で希望したんだ？」

そう言っつて水瀬に話を振る。

「え、私？私は……普通に海が好きだから、かな。親がどう、とかじゃ

なく、普通に紡と同じように海が好きだから。ただそれだけ。」

そうして4人での談笑（及び作業）は進んでいき、時間は5時を示した。

「うーん、海村の子はそろそろ帰らないとね。続きは明日だよ」

そう言つて先生がやつてくる。

とはいえいつもの戦法を取っているので俺個人は5時帰りじゃないけどもいいのだが、さすがに全員一緒に帰れる日に一人行動するのはよくない。

というわけで今日は大人しく帰ることにした。

帰り際、道を歩いていたら、要が何かに気づいて立ち止まる。

「あれ？あれつてアカリさんじゃない？」

「え？誰の車だ？」

俺も向こうを見る。あかりさんは車の助手席に乗っていた。運転者は……多分、至さんだ。

状況が悪い。なにせ全員揃っている状態だ。

光に認知されると特に危なっかしいことしないで下さいね至さん、あかりさん……。

そんな俺の願いは虚しく、あかりさんは至さんへと不意打ちのキスをかましたのだった。

第15話 嫉妬とすれ違いと

遥side——

あーあやっちゃったか……。もうこれは俺はどうすることも出来ねえな。

「なっ!？」

「わあ……。。」

「キスした」

「キス……。したね。」

皆各々の反応をする。その後あかりさんは不意打ちのキスをくらってかフラフラ運転する至さんを見送った後、海に潜って行った。

もちろん見てる光達もうぶなため赤面している。

「アカリさんの彼氏かな？」

「何だよあの男？俺は聞いた覚えねえぞ！」

いや、普通言わない。というか言えないケースだぞ今回は。

「何って、アカリさんも好きな人が出来てたんだね。」

「しかも、地上の男だあ？今まで、そんなそぶり見せたことねえぞ！」

光は怒りを表に出し、まなかは少し赤面しながらも嬉しそうな顔をしている。ただ、ちさきと要は神妙な顔をしていた。恐らく2人は俺と同様村の掟を知っているみたいだ。

「そういえば、アカリさん、そろそろだもんね。多分、村から出て行くつもり何じゃないのかな？」

「はあ〜!?そんなの絶対無理だ。地上の男なんて、絶対うまく行かないに決まってる！それに、うまく行かなくて絶対に戻ってくるだろ！」

光は怒り続ける。ここまで来ると何に怒ってるのかが少しあやふやになる。八つ当たりならすぐにも止めて欲しいものだ。

「それは無理なんじゃないかな。」

「そうだよひーくん！アカリさんはいい奥さんになるし、絶対にフられたりなんかしないよ！」

「いや、そうじゃなくて、地上の人と結ばれた海の方は、追放されちゃうんだ。」

しれつと要が言い切った。さて、ここまで来たら俺も説明に加わるか。掟について一番知ってるのは多分俺だから。

「追放って?」

「はあ?なんだよその物騒ワード!」

「そのままの意味だ。光。」

俺がすごく手短に答えたことに加わえ、ちさきと要が補足を入れる。

「えっと、例えば、駄菓子屋のお兄さんとか、果物屋さんの高原さんちのお姉さん。あの人達は地上にでたまま帰ってないでしょ?」

「多分、それは追放されたからだと思うよ?」

そして俺がトドメの一言を言い放つ。

「いや、確実に追放されてるな。実際、俺の両親がそうだからな。」

「二は? (えっ?)」

とりあえずここまで隠してきたが、こうなった以上もう隠す必要も無い。俺はとりあえず話すことを決めた。

「俺の両親はな、海の掟に嫌気がさして陸へ上がっていったんだ。…もう結構前の話だがな。そして二人とも1度も海へ帰ってくることも無く、いなくなった。」

「待って、遥の言う、いなくなったってことはまさか…。」

ちさきが何かに勘づいたみたいだ。

「まあ、ちさきに想像してる通りのことだと思う。だから俺は今一人暮らししてるけどな。」

「…じゃあお前が一時だけうちに居候してたのって、それが理由かよ?」

光がいつか俺が居候してた時のことを思い出す。

「そ。そしてそれが終わったのは、色々と環境が片付いたからってところかな。」

俺は質問に淡々と答えていった。

「何で…？何で遥はずっと平気でいられるの？自分が一番苦しいはずなのに、何で私達の前で生き生きとできるの？」

そう言ったちさきは泣いていた。が、嬉しくはなかった。

これは同情だろうか？もし同情なら、俺は少し許せないかもしれない。

実際、生活するには困らなかつたし、さほど苦しいことはなかった。それこそ、今はもう慣れていくつもりだ。

もつとも、人との距離が分からなくなつたが。

「…別に、生活するには困らなかつたからな。不便もないし、戸惑つたのは最初くらいだ。」

俺は苛立ちを隠すように返す。

「違う。ちさきの言いたいことはそうじゃないよ。遥。」

要が軽く説教を入れる。

うるさい、そんなこと自分が1番わかつてる。

苦しくない？辛くない？そんな訳ないだろ。でも1人で居ないときつとまたあれが繰り返される。

怖いんだよ、嫌なんだよ。何かを好きになつて大切なものを失うことは。あの日からずっと。

そんなことを思つてると、まなかが口を開いた。

「やっぱり、村の人達は意地悪だよ！好きな人が陸にいるからつて、帰つて来れないように掟を作つて。人の気持ちを縛つて…。海は牢屋じゃないんだよ？もつと自分の気持ちを大切にさせてあげてよ…。」

意外だつた。まなかがここまで自分の気持ちをはつきりと言つたのはこれが初めてかもしれない。

だが、この一言が光の気に障つたのだろう。光はまた怒り始めた。

「なあ、それってお前も地上の男とくつつきたいって思つてるのか？」

「な、ななな何言つてるの!? エッチなことを言うひーくんは嫌いだよ！」

「俺だって、エツチなことをいうマナカは嫌いだよ！」

「言つてないもん！」

「だいたい、最近のお前と遙はおかしいんだよ！地上の奴なんかとつるんで、気持ち悪いんだよ！それと遙、お前も付き合い方考えろよ！」

それを聞いたマナカは、目に涙を溜めて、海の中に消えていった。そして、追いかけてやうとするチサキが口を開く。

「光、ちよつと言い過ぎだよ。光の気持ちもわかるけど、キツすぎるよ。まなかの言つてること、少しは分かってあげなよ。」

「なんだよ、お前は毎回、上からものを言いやがって！お前も、大人ぶってるんじゃないやねえよ！だいたいお前なんか俺の何がわかるんだよ!!」

光がそういう返すと、チサキは泣きながら、海に消えていった。

ああ、こいつはもうダメだな。

今の光は自分の気持ちを全部他人にぶつけている。嫉妬、理不尽、それで生まれた怒りを全部。

正直、今のこいつとはいたくないな…。

そう思つて俺は海に背を向けた。

「おい光。俺の事はなんとでも文句言つとけ。ただちさきには謝つとけ。あれはただのお前の八つ当たりだ。」

そう言つて俺は汐鹿生とは別方向へ歩き出す。

「おい待てお前。どこに行くんだよ。」

後ろからまだ怒りの冷めない光の声が聞こえる。が、俺は振り返らない。

「用事を思い出した。先帰つとけ、時間かかるから。」

「ああそうかよ。エナが乾いても知らねえからな。」

そうして俺は光達と別れた。

さて、用事と言つたがこれといってなかった。

しょうがないので、とりあえず適当に買い物でもと思いサヤマートへ向かうことにした。この時間なら開いてるはずだ。

そう思つて歩いていたが、俺は足を止めた。と同時に、綺麗な夕景が目に入った。それは、それまで考えていたモヤモヤが消えてしまうくらいに鮮やかだった。

…綺麗な。

そうしていると、後ろから声をかけられた。それはもう聞き間違わない声だ。

「まだ、ここにいたんだね。」

そこには制服姿で買い物袋を持った水瀬がいた。

第16話 一歩踏み出すって決めたから

——千夏side——

一歩踏み出すって決めたから。

私は身体が生まれつき弱い。ついこの間だって入院してたくらいだ。

だから、学校に行く機会も人よりは少ないし、街に出ることだって人より少ない。そうして、私の周りには人がいなくなっていくた。

… まあ、言い方を変えると、友達がいらない、って事になるかな。もちろん関わってくれた人もいた。… 今でこそ疎遠になっちゃったけど、昔は美海ともよく遊んだし、みをりさんらにも良くしてもらった。それより前から付き合いのある紡に至ってもそうだ。

なんでこんな身体なのって、恨み時もあった。それこそ、エナがあるせいなのかって、ずっと思う時もあった。

… でも、

それでも私は海が好きだし、人と仲良くすることも諦めたくない。どんなに自分に帰ってくるものが最悪なものでも、受け入れて前に進みたい。

だから中2になって学校に行けるようになった今。海村の生徒がやってきた今、私は一歩踏み出すって決めた。

帰りのHRが終わったあと、私は学校に残っておじよしさまを作る作業をしていた。

今年のお船引きは中止になったらしいが、先生がやりたいと言ったので、私は迷わずに手を挙げた。

というわけでこの場にいる。

二手に別れての作業、7人で4:3に別れ、私の周りには紡と、この前醜態を晒してしまった(?) 島波君と、向井戸さんがいる。

… よし、思い切っという。

「そう言えば、紡君はどうして参加したの？」

作業片手に向井戸さんが紡に話しかける。

行くならここしかない、と思っってしまったのか口が開いた。

「紡君のおじいちゃんやんは漁師なの。だからきつとそれだと思う。あ、初めましてだよね向井戸さん。こうやって面と向かって話すのは。」

初めまして、と向井戸さんは固くなりながら返してくれた。

「ねえ、下の名前で呼んでいいかな？」

「えっと、うん、どうぞー！」

「じゃあ…よろしくねまなか。」

「こちらこそよろしくお願いします！…えっと、ちーちゃんだと被っっちゃうから…千夏ちゃん！」

よかった。対応が柔らかい人で。

そう思っつてほっと一息を着いた。とその時、さっきの表現がしよっぱかったのか紡が補足を入れる。

「別にそれだけじゃないけどな、千夏。俺は海が好きなんだよ。普通に。船の上からだど、たまに光の屈折で白い屋根が見えてさ、綺麗なんだ。あと、ぬくみ雪とか見てみたいし、他にも知りたいことはある。でも、実物は見たことないんだよな。」

表情は変わらないが、付き合いが人より長い分わかる。スイッチ入っちゃってるなこれ。

「本当に紡君は海が好きだよな。」

「ずっと見てきたからな。」

「そういえば、紡君と千夏ちゃんは、どういう関係なの？」

まなかが質問を入れてくる。そりゃ、ここまで距離が近いとそうなるよね。

「普通に、昔からの知り合い。『友達でしょ？』まあ、そんなところ…。」

少し強気に訂正を入れる。

どうしても友達と言っつて欲しかった。

別に幼馴染ほどでもない。けど、それなりに長く付き合っつてきて知り合いで済ませて欲しくはなかった。

そんな中、機を待っていたのか島波君が会話に入ってきた。

「そういえば水瀬、お前は何で希望したんだ？」

よかった。この前のこと、他言はしそうにない雰囲気だ。

「え、私？私は・・・普通に海が好きだから、かな。親がどう、とかじゃなく、普通に紡と同じように海が好きだから。ただそれだけ。」

そう、それだけ。それで十分。

そうして談笑しながら時間は過ぎていく。

やがて5時になり、汐鹿生の子が帰っていったが、今日は中々楽しかった、そう思えた。

今日の料理当番は私なので買い物をして帰ることにした。

因みに家族は私と両親との3人である。

ただ、母の仕事はある無しの差が激しいので、私にも料理の番が回る日があるのである。

さてと、今回はちやちやつと野菜炒めくらいしか作らなかつたら・・・今日は煮付けでもしようかな。

そう思つてサヤマート内を回る。

しかし、魚コーナーには1人用の魚はなく、2人、4人用の分け方となつていた。

どうしようかな・・・数が合わないとはいえほかは思いつかないし・・・。

迷つた結果、4人用で作ることにした。

精算を済ませ、帰路へつく。

がしかし、まっすぐ帰るわけでもなく、私はまた堤防に腰掛けて海を眺めた。今日はまた別段と海が綺麗だったからだ。

しばらくすると、遠くから足音が聞こえてきた。

しかし、その足音はこちらまで来ることは無く、少し遠くで止まつた。

誰だろう。

そう思つて堤防から降り、近づいていく。その人は立つたまま海を

眺めているので背後には気づいていない。

近づいてみると、その人は波中の制服を着ていた。

この時間にこの場所を通るのは、もう島波君しかいない。そう思っ
て声をかける。

「ねえ。」

私がそう言うとその人は振り返る。その顔はやはり、島波君だっ
た。

「まだ、ここにいたんだね。」

すると島波君は少しバツの悪そうな顔をして言った。

「ちよつとトラブってな…。まあ、これから買い物しに行くつもり
だったんだけど。」

「でも、もうそんなに食材残ってないよ?」

「あつ、まじか…。抜いてしまおうか。」

流石に食事を抜くのはまずいと思う。

家の事情は知らないけど、ここは大胆に行こう。

「だったらさ、うちに食べに来ない?」

第17話 暖かい一時

——遙side——

「だったらさ、うちに食べに来ない?」

水瀬はそう言つて俺を食事に誘つた。

俺は少し考えるように下を向く。

そして決心して顔を上げる。

「…いいのか?行つても。」

「丁度4人分買つちやつたしね。親は多分許してくれると思うし、問題は無いよ。と、それよりエナの方は大丈夫?」

「ああ、常に海水を入れたボトル持つてるから海に一旦帰る必要はない。…ちよつと待つてくれ。」

そう言つて俺はボトルをカバンから取り出し、海水を体にかける。

「そう言えば水瀬、お前もエナ持つてると思うんだが、家とかなにかしてるのか?」

「うーん、風呂には塩入れてるけど…。あとはまあ、乾きそうな時は追追やつてるかな、似たようなこと。」

そんな会話をしながら、作業をすませる。

「じゃあ、行こうか。」

エナを十分な状態にした俺は水瀬の家に向かう。

ここから5分くらいとのことだ。

「待たせて悪かったな。」

「ううん、誘つてる方なんだから当然だと思う…。…そうだ、せつかくだから色々聞かせて欲しいな。」

「それは紡みたいなものか?」

「それもあるし、それ以外もある、かな…。…」

水瀬は少し濁しながら返答する。

「…まあいいか。その代わりこつちもそれなりの質問はしてもいいよな?」

「等価交換、ね。」

など言ったが道中は他愛のない話をしながら向かった。

昔の陸の話、学校にどんな奴がいるかとか。

陸では辛い思い出がほとんどだが、陸が嫌いになった覚えはない。それこそ、俺は陸と共に生きたい、そう思ってる。

「さて、ついたよ。ちよつと話してくるから待ってて。」

水瀬は家に着くなり真つ先に入っていった。数分後、俺の見える位置の窓から腕を大きく使つてOKサインを作る。

「お邪魔します。」

返事はなかった。玄関にはいくつか靴があつたがどれが誰の、などは分からないので気にしないことにした。

リビングへ入つていくと、ソファアに新聞を読んでいる強面の男性が座っていた。親父さんだろうか。

「お邪魔してます。」

顔を伺うように挨拶をする。

「… ああ。」

親父さんは表情を変えないままそうとだけ返し、また新聞に戻つた。

「そこら辺適当に座っててー。」

キッチンの方から水瀬の声が聞こえる。今はそれに甘えることにし、カバンから自前の本を取り出す。内容はもちろん心理学的なものだ。

…

十数分の沈黙の後に、料理が出来上がった。

とその時に、玄関のドアが開く。

「ただいま。」

女性の声だった。恐らく水瀬のお袋さんだろう。

「おかえりーお母さん。」

出来た料理を配膳しながら水瀬が答える。

「ああ、おかえり。」

「はいはいいただきます…って、あら、お客さん？」

入ってきたお袋さんはこちらに気づいて言う。

「あ、お邪魔してます。水瀬さんとクラスメートの島波遥です。」

「あら、千夏がお客さんなんて珍しい。」

「うるさいよお母さん…。」

何か不服だったのか水瀬は少し拗ねて、お袋さんはニコニコしている。そこへ、新聞を読み終えたのか親父さんまでやってきた。

「島波君、だったかね。とりあえず、いただこうか。」

「あ、はい…。」

強面な親父さんに誘われてテーブルへ向かう。

威圧感が強すぎてどうやらこの人には歯向かわない方がいい感じがしてきた…。

「？ああ、そういうこと。」

水瀬のお袋さんは机に並べられた4人分の食事を見て理解したのか自己完結していた。

「…いただきます。」

4人が席に着き、食事が始まる。

はずだった。

「あ、ちよつとストップ。」

待ったをかけたのはお袋さんだった。

「せっかく自己紹介されたんだからこっちも返さないかね。」

「私はしたからいいでしょ？」

「んー、そうね。そういうことでいいわ。じゃあ私からかな？」

「は、はあ…。」

「水瀬千夏の母の、水瀬夏帆です。病院に勤務してるから何回かあったような気はするんだけど…まだ小さかったかな？」

そう言われて記憶を探る。

そもそも病院に行くことはそんなになかったが…。

… 思い出した。

みをりさんのお見舞いに行った時、何回かすれ違ったあの人だ。

「ああ、そういえばそんな気がします。多分今から3年前くらいの頃でしたっけ…?」

「多分そうじゃないかな?… 遥君でいいかな? 『いいですよ。』」

えっと、遥君がみをりの見舞いに来た時の頃の話だと思う。」

「多分そうですね。」

夏帆さんがみをりさんを下の名前で呼んでいたのを聞いて、もう少し話を掘り下げたいところだったが、さつきから無言で食事をしている親父さんの方を放っておく訳にも行かないので一旦打ち切る。

「次はあなたの番ですよ。」

「ん、ああ。俺か…。コホン、父の水瀬保だ。仕事は漁協の方にいるから、何度か会うことになるかもな。」

相変わらず無愛想だが、家族が揃っているからかさつきよりは表情も雰囲気も柔らかかった。

「お父さん、顔ほど怖くないから…。」

俺が少し呆気に取られてたのを察知したのか隣に座っている水瀬が耳打ちで教えてくれる。

「まあ、一通り紹介も終わったので、頂きましようか。もう先に頂いちゃってる人もいますけど。」

「… 悪かったな。ところで千夏、今日の分味付けがいいな。」

「そう? ならよかった。」

家族3人で話している感じになっていたので、とりあえずもう一度小さく心の中でいただきますを呟いて魚を一口食べる。

「… うまっ。」

気がつけばそう言った。あの日、みをりさんが出してくれたような美味しさがそこには何故かあった。

「そう、ならよかった。ところでさ…。」

それからは食事と会話が交互に進んで行った。

あまり知らない漁協の様子や、普段の生活での夏帆さんのほんこつぶりなど、なかなか面白い話も聞けた。

因みにこの時に聞けたが、海出身なのは夏帆さんの方らしい。

「ごちそうさまでした。」

「お粗末さまでした。」

そう言つて俺は立ち上がり、食べた食器を下げた。そして帰り支度を進める。

「あら、もう帰っちゃうの?」

「ええ。長居しちゃうと迷惑かもですし、またウロコ様がちよっかい出してきそうですし...。」

「別に迷惑なことはないけど... そう、分かったわ。気をつけてね?」

「はい、ありがとうございます。」

そう言つて俺は頭を下げようとする。しかし、ストップをかけられた。

「礼を言うのは私にじゃないですよ。私は何もしてないですし。」

そういつて夏帆さんはチラツツと水瀬の方を向いた。

「ありがとうな。水瀬。」

「え、わ、私? えーつと、どういたしまして。」

少し照れくさそうに水瀬は返す。

「... また来いよ。いつでも。」

「では、またいつか。」

保さんにそう返して俺は玄関のドアを開ける。

今日の夜の空気は心地よい感じだった。

そんな夜道を1歩踏み出そうとしたその瞬間、もう一度玄関のドアが開いた。

「ねえ、ついて行ってもいい?... まだ、ちゃんと聞きたいこと聞けなかったから。」

第18話 それぞれの過去

——遙side——

「… まあ、親の前で聞くようなことではないと思ってたけどな、いいよ。そういう約束だし。」

約束は裏切るつもりは無いし、自分も多少は打ち明ける覚悟で話を切り出して来たのだから、それを踏みにじる訳にはいかない。

「ありがと。…じゃあ、さっきの場所戻ろうか。」

そう言って先に水瀬が歩き出す。俺はただ無言でそれについて行った。

数分足らずでさっきの場所へと戻る。

俺は先に堤防に座った。

「ごめんね、今日は。変にお節介焼いちやって。」

隣に座った水瀬は少し苦笑しながら言った。

「いや、むしろ助かった。丁度切らしてたところだったし。それに…。」

そう言って俺は踏みとどまる。

そうだ、どこまで打ち明けれるか分からないのだ。

「それに？」

あーだめだ。

モヤモヤしてても仕方ない。

そう思って俺は胸中を打ち明けることにした。

「それに、帰ったらご飯が待ってる、なんて事はもう随分と久しぶりのことだからな。」

「えっと、失礼な事聞いていいかな。薄々感じてたけど、島波君の両親って…。」

「ああ、いないよ。もう4、5年前の話だけど。」

「そう、なんだ。…何があつたか教えて貰っていいかな？」

申し訳なさそうな顔をしながら水瀬が尋ねる。

しかし、話すと決めているので別に問題は無い。

「ああ。…さて、どこから話そうかな。そうだな。…俺の両親は、俺が小学生の低学年の頃まで俺の隣に居たんだ。海村に不満を感じながら、それを表に出すことなく。そんなある日、俺の両親は陸に上がるって決めた。」

「島波君は放っておかれた訳？」

「いや、ちゃんと打ち明けられた。俺達は上がる。お前も来るよな。そういう風に。」

「でも断った。」

「ああ、当時はまだ何も知らなかった。だから海に残るって決めた。…まあ、家にお金が残ってる訳じゃなかったから、少しの間光の家に居候させてもらったんだけど。」

「先島君？」

「そう。」

「そしてそれからは何事も無かった。でも、1年経ったある日、俺がたまたま陸へ上がった時に、俺は自分の両親が目の前でいなくなる瞬間を見てしまった。」

「亡くなったって事…？」

水瀬はだいぶ戸惑っている。まあ、無理もない話だと思うが。

「簡単に言うそうだな。そしてその時に、みもりさんに会った。」

「美海ちゃんにも？」

先ほどの夏帆さんの言動から、水瀬家と潮留家には繋がりが少しはあるのかと思ってたが、やはり面識はあったようだ。

「ああ。ってやっぱりお前美海と面識があるんだな。まあ、さつきからそんな気はしてたけど。後でそっちの話聞かせてくれ。」

「分かった。…続きお願いできる？」

「おっと、そうだな。…それで、みもりさんと会ってからまた1年経った。その間俺はちよくちよく遊びに行って、みもりさんにすごいお世話になってたんだが、そんなある日、みもりさんは具合を悪くして倒れた。…そこからは、分かるよな？」

「3日ぐらい経って、みりさんも亡くなった。」

「そう。．．． まあ、そうやって今の俺が出来上がったってわけ。聞いた
いことってこういうことだろ？」

「うん、まあ、そんなところかな。．．．」

水瀬は歯切れの悪そうに答える。もつと聞きたいことが、言いたい
ことがあったのかもしれないが、もう聞かれることは無かった。

このままだと埒の明かない状況になるので今度はこちらから聞く
ことにした。

「なあ、水瀬。そういうえびさっきの話で色々気になったことがあるん
だが、今度はこちらから聞いていいか？」

「いいよ。」

「まずだな。．． お前、美海と面識があるってさっき言ったよな。そ
れって今もなのか？」

「うーん、最近はちよつと会えてないかな。．．。 向こうもどう思ってる
のか分からない。」

「とうとうっ。」

「私さ、生まれつき身体が弱いんだ。よく調子を悪くするし、時には入
院だつてするくらい。」

「そういえばみりさんを見舞いに行ったあの日、そんなことを言っ
てた気がする。」

「それで、中2になるまではほぼ病院に居て、ずっと美海ちゃんに会えな
かった。．．． 1番酷かったのはちょうど島波君が美海ちゃん達と一緒
にいた頃かな。」

「だから会うことがなかったのか。お前と。」

「うん。それに、私にはエナがあるけど、海村には行けないから。」

「泳げない訳では無いよな？」

「泳げるよ。けど、今行ったら多分大人の人に止められるだけだから。
それこそ、協調の姿勢なんて取られてないでしょ？」

その通りである。

陸と海と、共に歩く未来は今は今全く見えない。大人の事情は知らな
いが、それが子供にまで伝わっていると、ますますすれ違う。

「私はさ、海が好きだよ。海村も見てみたい。」

「俺も陸は嫌いじゃない。」

「うん、分かってる。。。さて、これくらい?」

「ああ、こんなもんだな。。。じゃあ、そろそろ帰るか。」

そう言つて俺はカバンを手取る。

もうかなり時間も経つた。そろそろ帰らなければいけない時間だろう。

「うん、そうだね。」

「度々言うが今日はありがとうな。。。またお邪魔してもいいか?」

水瀬は少し驚いて、直ぐに答えた。

「うん、いいよ。」

「そうか。じゃあ、また明日。」

そう言つて俺は海に飛び込もうとする。

「待って!」

「うん?なんだ?」

大声で止められたので思わず止まる。

「私はさ、結構苦しいこと多いけど、全部諦めたくない。そう思ってるから。。。ごめんね、こんなこと聞かせるために止めちゃって。」

「。。。いや、いい。じゃあな。」

今度は迷わずに飛び込んだ。

泳ぎながら俺は考えた。

苦しみながら進む、か。

首をブンブン振つて無心に帰ろうとする。

そしてふっと息を吐いて思う。

。。。やっぱり人間っていうのは難しいな。

第19話 芽生えた決意

——遙side——

あれから数日たった。やはり幼馴染というのは分かりやすいものだ。

あれだけ派手に言い合っても、もう普通通りの関係に戻っていた。さてそんな中、理由は聞かされてないがどうしてもついてきて欲しいとまなかに言われたので、俺は今、まなかと一緒にウロコ様のところに来ている。

そして、まなかは急に土下座を始めた。

「ウロコ様、呪ってください!!」

「…はあ?」

呆けた顔をしたウロコ様と、真剣な顔をしたまなかと、理解が追いついていない俺がいた…。いやいや馬鹿か?・

この前の魚がそんなに好きなのかなんてどうでもいいことまで思ってみる。

「お前は何故、呪って欲しいのじゃ?そこの馬鹿は、何度呪っても逆らうんじゃないの?」

「うるさいよウロコ様。俺は自分のやってることが悪いなんて思っていない。かと言って呪われる趣味もねーよ…。まあ、まなかの理由なんて軽く予想できるんだけどな。」

そう言ってコソツとまなかに耳打ちする。

「どうせ紡だろ。」

「なんでわかるの!?!」

元々まなか釣り上げの1件は紡に聞いてるし、この前の件は当事者である。完全に好きという気持ちが芽生えたかは知らないが、意識にはあるのだろう。

もつとも、好きという気持ちが1番わかってないのは俺かもしれないが、

「色々聞いたり見たりしてたからな。それと、光じゃなく俺を呼んだ理由も分かったわ。」

「あう…でも、苦しいから、嘘つくのが…。」

まなかがそう言うのをウロコ様は酒の小瓶を揺らしながら聞いていた。やがて質問へと出る。

「はあ、なら聞くが、何故苦しいのじゃ？お前が嘘をつく必要が、何処にある？」

「えっと、わからないよ…。。でも、胸がチクチクするんです。」
分からない、か。

まなかは分からないと言わんばかりの顔でウロコ様を見ている。
迷ってるというか、自分の感情を分かってないというか。やはりまだ、幼いのだろう。

そんな中、まなかは立ち上がって外の方へ出ていった。と同時に、数人の大人の怒声が聞こえる。

「おい、ちゃんと説明しろ！うろこ様の前で、ちゃんと話せ！」

その様子が気になって俺も外へ出る。

そこには、あかりさんが数人の大人達に掴まって、顔を伏せているところだった。近くには、まなかと光がいる。とりあえず、その2人の元へと俺は寄って行った。

「はーくん、あかりさんが…。」

「おい、ガキは引っ込んでろ。これは大人の問題だ。」

「ちよつと待て、そろそろ、こいつらにも教えといた方がいいんじゃないのか？村から出て行こうとしたら、どうなるか、教えとかないとな。」

どうやら、村の人間に俺の内情は知られてないようだ。なら、ちよつとだけ、反論するでしょう。

「追放、だろ。まなかや光はともかく、俺は間近でそれを見てるから知ってる。というか、1度追放された人間のことは、追放したことで忘れてるのか？」

「…あつ、そーいや島波さんとこの…。」

男のひとりがそう言って思い出す。やれやれやっとか。

「何の騒ぎだ？」

そんな中、灯さんがやってくる。

大人連中は俺達が口を挟む前に事情説明を開始した。

「あ、宮司様……それが、あかりの奴、地上で男を作ってやがったんですよ。」

「地上で男とイチャついてるのを見た村の奴が居るんです」

灯さんは僅かに驚き、そして僅かに怒れる瞳をしていた。そしてそれをあかりさんに問いたです。

「あかり……本当か？」

「……。」

あかりさんは無言のまま下を向く。無理もない。

俺はどうにかしたかったがそうにもいかなかった。

なんなら俺は証人でもある。無闇矢鱈には口は出せなかった。

「宮司様……宮司様んところから追放者が出たら、示しがつかねえぞ。」

「……悪いが、今日は帰ってくれ。俺がうろこ様のところに連れて行く。」

そう言つて灯さんは俯いたままのあかりさんをウロコ様の元へ連れていく。その場にいた俺達は何も出来ず、ただ突っ立っているだけだった。

そして数十分後、その話を聞いたちさきと要が合流する。

とりあえず話したいということだったので、大人に聞かれないように俺達は波中へと移動した。

波中は廃校になつていいる。そのため、使われてない分ぬくみ雪がつもり、だいぶ埃っぽくなつていた。

「うわっ！なんだよこれ！埃っぽいじゃねえか！」

「本当だね。ぬくみ雪が教室の中まで溜まつてるよ。」

光は真つ先に教室に入つていく。俺達もそれについて行くように入り、椅子に腰掛けた。

「絶対、男のせいだ！アカリが苦しんでるのも、あの男のせいなんだよ！」

「ちよつと待て、光。相手の男が悪いって、なんで決めつけるの？」
「そんなの泣かしてるのは相手だろ！苦しめてるのも、相手の男だ！
絶対明日、ぶん殴ってやるからな！…ここからは男の作戦会議だ。
女子はどっか行ってる。」

はあ、やっぱりの馬鹿は…。

少しは理にかなってるところもある。が、大体は不完全燃焼の八つ当たりだ。少しは関係が回復したとはいえ、自分自身のせいで相手へのあたりの強さは変わってない。

ちさきもよくそれがわかつているようだった。

「もう、行こうまなか。光達はほつといてさ。」

「うん、わかった。ひーくん、酷いことしないよね？」

そう言つてちさきとまなかは部屋を出た。そして少しの時間差の後で俺も部屋を出ようとする。しかし、光に止められてしまった。

「おい遥、お前は男だろ。どこいくつもりだよ。」

「すまんが、この話には乗れない。あかりさん自身から聞いていることもあるし、俺はきつと手は出せない。笑いたきやいくらでも笑え…ただまあ、当日は行く…結論を見届ける必要があるからな。」

そう言つて俺は返信を待たずに外に出る。

しかし、真つ直ぐにまなからのいる部屋には向かわず、1人でフラフラ歩く。

あかりさんの件も確かに気になるが、さっきのウロコ様のところでのまなかが気になっていた。

まなかは自身の気持ちを不器用ながらにウロコ様に伝えようとした。

この前の水瀬だつてそうだ。水瀬は「諦めたくない。」と、そう言つた。

俺はあんなに気持ちに向き合えるだろうか。

それこそ、逃げてばかりだっただろう。今でも思える。

だから二人を見て俺は思った。

たった一つ、小さな、大切なこと。

俺も、一歩を踏み出したい。

第20話 不確かな未来

——遙side——

埃っぽい校内をぶらぶら歩く。

何人もの人が学び、遊んだであろうその光景は、やはりもう感じ取れることは出来なかった。

やがてここに刻まれた記憶も忘れられるのかもしれない。

悲しいことも、同じように消え去るのだろうか……。

校内を歩いていると、ポンポンと木琴か何かを叩く音が聞こえた。恐らく、先に出た女子二人は音楽室にいるのだろう。

とりあえず一通り見て回ったので向かうことにした。

「あつ、ウミウシ！」

マナカが地面をずるずると這っているウミウシを捕まえて、こっちに持ってきた。そのウミウシはお腹が赤くて、綺麗だ。

「あつ、赤いウミウシ！確か、願った人の思いがちゃんとしていないと、普通の石が出て来て。」

「願いが純粹で、長く続くものだったら、ウミウシが出した石は何時までも、綺麗に輝く……。」

マナカは優しい瞳で、赤いおなかのウミウシを撫でていた。それを見たチサキは、ちよつとびつくりしたような表情で、マナカを見る。

「マナカは…… 紡君のことが好きなの？」

「えっ!? す、好き!? そ、そんなのわからないよ……。」

「じゃあ例えばだな、まなか。もしも、お前の好きな人が、陸の人間だとしたら、結婚したいと思うか？」

俺はまなかに質問する。この質問は恐らく、この状況なあかりさんを見てきたから出た質問だと思う。

「もし、私が陸の人を好きになって、キスしたいとか…… って、私えっちなだよね!？」

「ううん、マナカはえっちなじゃないよ。」

「そうだぞ。誰かを好きになるってことはきつところ、エッチとか恥ずかしがる部分じゃ無いはずだ。絶対誰もが通る道だからな。そこ

に海と陸なんて無いはずなんだよ。少なくとも、な。」
「……。」

俺が珍しく長たらしく言ったせいで沈黙が流れる。

「こほん……。で、続き教えてくれないか？まなか。」

「あつ、そうだったね。私は……。それで付き合つて、結婚したいって思うのかな？好きになつてその人とずっと一緒にいたいと思つて、海に戻れないのかな……。」

ガラツ——！！

俺達が話していると、ドアを勢いよく光が開けて、中に入つてきた。

「オーツス、帰るぞ。遙、まなか、ちさき。」

「ああ、もういいのか。じゃあ帰るか。」

とりあえず話は広げずに部屋を出る。しかし、さっきのタイミングなら絶対に光は聞いているはずだ。逆に冷静なのが少し怖かった。

結局、作戦は結構することになった。

翌日、俺たち5人はとある山の上から驚大師漁協を見ていた。とはいえ、動きがあれば直ぐに降りれるポジションだが。

「光、本当にやるの？」

「当たり前だろ。ぜってー、ぶん殴つてやる。」

「もし、悪い人じゃなかったら？」

「軽くぶん殴る。」

答えにならないほど理不尽だった。

あかりさんを思つてのことなのだろうが、この調子だと100%仇だ。

そんなことを話していると、漁協から1台の車が出ていった。

中の人をまなかが視認する。

「あれ？あの人じゃない？」

ああ、見つかったか。

光を先頭に俺達は追い始めた。

とはいえ車、俺らは車より早く移動できる術を持ってない。このま

ま諦めてくれることを願いたい。

「くそっ！あのやろう逃げやがった！」

「おい、会う約束してないのに、それはねえだろ。」

「そうだよ光。あの人、私たちのことを知らないんだよ？」

そんな中、光は1台の自転車を見つけるなり、すぐに跨り、全力で漕ぎ始めた。

・・・おいおい本気かよ。

「待て！絶対逃がさねえぞ、コノヤロウー!!」

「あつ、ひーくん！」

「ちよっ!? 光!?!」

「あくあ、行っちゃったね。」

「いやいや、追いかけてねえと...。」

追いかけないとあのバカは絶対に止まらなくなるからなあ...。それこそ人一人殺してしまう勢いなんじゃないだろうか。まあ、今回はケースがケースだが。

とりあえず俺達は走って光に追いつくということから始めることになった。

数分がたった。俺の後ろにいるちさきや要も息が上がり、明らかにつらそうな顔をしている。さすがに体力的にもきつい。

ただ、俺は森の中に1台の自転車を見つけた。

「... 見つけた。」

「えっ、本当?」

「遙、本当なの?」

「はあつ、待ってよ...!」

「そこ、自転車あるだろ。」

とりあえず光が近辺に確認できたので、みんな一旦動くのをやめた。さすがにこれ以上は限界だったからな。

そして俺は、木から隠れて様子を伺っている光を見つけた。

とりあえず近づく。無力化できればいいのだが。

「... おいつ、光。」

「うおっ!?… 何だよ遙かよ。脅かさせるなよ。」

「だったらとりあえずストップしろよ。まだ何も分かってないんだぞ？」

光とも接触でき、ようやく状況が落ち着いたので自分のいるあたりを見回す。…あ。

紡の家だ、ここ。

「あっ…ここ、木原君の家だよ！」

俺と同じことに気づいたまなかが声を上げる。

そんな中、バッドタイミングで至さんが出てきた。

それを見た瞬間、光は一目散に至さんに殴りにかかった。

第21話 忘れられるわけ…

——遥side——

光は至さんを見かけけるなりなりふり構わず殴りに行った。

正直、至さん弱そうだから光に負ける可能性のほうが高そうだろう。

が、思い返して欲しい。

ここは木原邸、つまり、他人がいるという事だ。

その他人が、漁師だということも。

勢いよく突っ込んで行った光はそのまま投げられた網に吊り上げられていった。

投げたのはもちろん、紡の祖父である。

「ほう、嵐だな…。あの子は、まるで静かな波のような目だった…。」

紡のおじいさんが出て来て、光の顎を掴んで、目を見た。完全なまでにグッドタイミングだ。

「ひーくん、大丈夫!？」

「光!光がいきなりそんなことするから…。」

「えっ?光…。?もしかして、アカリの弟!？」

至さんが驚いたような声をあげて、光に近寄る。網から這い出した光は掴みかかろうとしたが、俺が腕をつかんで止めた。

「久しぶりですね至さん。陸には上がってましたがこうやって話すのはもうあの頃以来ですね。」

「え!遥君かい?大きくなったんだね…。ところで、美海には会ったのかい?」

「ええ。というより、厄介な状況になってますね。」

「遥!てめえそいつの知り合いかよ!なんでそうならそうって伝えなかつたんだよ!」

光は網の中で暴れるが、俺がとりあえず抑えている。

が、ふと一瞬の緩みを見逃さなかつた光はそこから網をくぐり抜けた。

「このやろう!!お前のせいで、アカリが責められてんだよ!お前がアカリに近づいたせいで、村の大人連中がアカリを責めてんだ!」
「えっ!?アカリが!?どうしてそんなことに……。」

光が至さんに詰め寄っていると、紡のおじいさんが質問してきた。
「子作りはしとるのか?」

「なっ!?!」

やはりうぶな光は赤面し、至さんから手を離れた。

「こ、子作り!?!」

「こ、子作りって……。／／／」

周りにいるマナカやチサキも赤面している。やはりそこら辺はまだまだ子供であるのだろう。

「やはり知らんのか……。おいその……遥か。お前は知つとるのか?」

「そうですね、一通りは知っていますよ。」

簡潔に言うと、陸と海のハーフはエナを持たないということである。

ずっと勉強していた分、それなりに知識もついて来ている。勉学の賜物なんだろうか?

それを聞いた光が赤面のまま聞いてくる。

「はあ?何を知ってるんだよ!だいたい、子作りがなんの関係があるんだよ!」

激昂する光。

その質問に答えたのは俺ではなく、どこからか出てきた紡だった。
「その子作りが問題なんだよ。」

一旦場は鎮静し、今は知るもの知らないものと別れてビルケースに座って説明をしている。俺と紡と紡の祖父はこっち、それ以外が向こうだ。

「陸と海の違いはわかるか?陸で生まれる人間と、海で生まれる人間の違い。」

「えっ？ それって、エナがあるかどうかじゃないの？」

チサキが紡の問いに答える。俺は紡の方を見て、話を聞き続ける。「そうだ。でも、問題はそこじゃない。問題なのは、産まれた子供なんだ。」

「えっ？子供って、なんで？」

「ああ、俺が話す。そうだな……。俺達は、海と海の人間の間に生まれてきたら？だからエナを持つてる。だが、それ以外の場合が今回だ。」

例を挙げるなら美海。美海は海の人間であるみをりさんと、陸の人間である至さんの子供だ。そして現在のところ、エナを持つてる気配はない。

「陸と海のハーフは、エナを持たないってこと？」

「まあ、そういう事だ。ただ……」

そう言いかけて俺は言葉を止めた。

水瀬の件だ。

あいつはハーフなのにも関わらずエナを持っていた。ただ、聞くところによると無条件で手に入れたというようでもないようだ。

とりあえず、今は決め打ちができるような根拠が何一つない。

だから、無闇矢鱈と公表する訳にも行かなかった。

「いや、何でもない。まあ、こんな所だな。」

その時、光がまた至さんに掴みかかった。

「おい、お前はあかりのことどう思ってたよ！結婚する気あるのか！？」

「えっ……。僕は真剣だよ……。結婚は……」

目を背ける至さん。もう光には限界のようだった。

「ダメエー！」

光は至さんを押し倒して、殴り始めた。

しかし今度は俺は止めに入ることは無かった。

至さんのあかりさんとの交際が遊びじゃないことは分かっている。

そしてさつき返答に困った理由。それは至って簡単。

きつと至さんはまだみをりさんのことを忘れられていない。

いや、忘れられるわけがない。だって、至さんより付き合いの短い俺でさえ、みもりさんを未だに忘れることが出来ないのだから。

…
きっと、美海も同じなんだろう。

第22話 トラブルメーカー

——side——

あれから数日たった。因みに今は調理実習の時間である。

それこそ、あの後は酷かった。光が至さんを殴り出して紡の祖父に投げ飛ばされて気を失ってe t c . . . 。それでむしゃくしゃが止むわけじゃないからなお厄介である。

あの日のことで俺はずっと考えてた。至さんはどこまで本気なのか。

美海もどう思うのか。一応、あかりさんはみをりさんと面識があり、

美海のことも知ってて、好きになつて欲しいと言った。

美海がなぜあかりさんと距離を置いているのか。

少しではあるが俺にもわかる。

失うことを知ってしまったているが為に、人を好きになることが怖いのだろう。

それに、あかりさんの立場も複雑だ。

現在の状況を傍から見れば、空いたみをりさんの席にあかりさんが入ろうとしている、そういう状況だ。

でも。

誰かの代わりになんて絶対になれない。

それも俺が1番分かっている。

「. . . おい遙、遙！」

「ん. . . ? あっ?」

時すでに遅し。振り下ろされた包丁がしっかりと俺の指を切っていた。

「つと。やつちまったか。」

「遥って料理得意って言ってなかったっけ?」

要が言ってくる。ちくしょうマウンツ取りやがって. . . .

「ああ、ちよつとぼうつとしてただけだ。そんなわけだ。先生、保健室行ってきます。」

返事を待たずに俺は家庭科室を出る。
さてと……。

保健室には先生はいなかった。とりあえず応急処置程度の勉強はしているのでさっさと済ませる。

しかし、どつちかと言うと料理は気兼ねなく1人でやりたいタイプなので、なかなか帰る気がわからない。

そういうわけには行かないので、とりあえず身体を起こし、ぶらぶらしながら実習室へ向かった。

時計を確認する。もう作り終わってるくらいの時間だろう。

にも関わらず俺は遠回りして帰った。その道中で、おじよしさま制作中の部屋の前を過ぎた。…いや、過ぎようとしたが過ぎれなかった。

中には、見るも無残な状況のおじよしさまが転がっていた。
…。

授業中だったので声は上げなかった。が、心の底が少しぎわついているのは分かった。

とりあえず状況の確認をする。すると、「さゆ、三じよう！」とマジックで書かれていたのが分かった。

昨日説教したはずなんだがなあ…。光が。

…昨日…

俺と光が歩くとやたら人に出会う。それで昨日は陸初登校の日と同じ場所で美海と相方に出会った。

美海は、今度は逃げ出さず、光を気絶させようとした（もちろん失敗だが）。そして悪いと思うこともないように「パパとあの女を別れさせるのに協力して」と言った。

光は、こういう時はやたら感情を表に出さない。今回も嵐のような瞳をすることも無く一言、「俺はそういうせこいやり方は嫌いだ」と言った。全く、いつもこうであって欲しいが…。

…現在…

とりあえず現在の問題は光達にこれがどう伝わるかである。

一旦実習室へ戻るのがベストだろう。
そう思つて真つ直ぐに実習室へ帰る。

そして俺が扉を開ける数歩前、ガシャンという音が廊下にまで聞こえた。そして

「謝れ!!」

と紡の珍しい大声が聞こえてきた。恐らく、誰かが別班の皿を割つたのだろう。

中をそつと覗く。最悪なことに、今回の事件に汐鹿生組と、クラス
の番長格の奴、まあ、江川だな。が関わっていた。

…うわあ、まずいなこれ。

とりあえず中に入るタイミングを失ってしまったので授業が終わった直後に今終わった感を装つて入る。陸の生徒は誰も気にはしてこなかった。

とりあえず1番落ち着いてそんな紡にさっきの確認をする。

「おい紡。」

「ん、ああ。もう大丈夫なのか?」

「ただの切り傷だ。それよりさっきのは…。」

「ああ、色々とトラブルだ…。」
と言つても、お前さっき見てただろ
?」

あ、紡にはバレてた。

「あのまんま、か?」

「そう。」

そんな中、遠くの方から100%怒気を含んだ光の音が聞こえてきた。

「ああ、もう!むしろくしゃする!俺、おじよしみてくる!」

光はそう言つて、ズンズンと歩いていった。

…まずい、多分今の光が見たら100%江川らに殴りにかかるだろう。

今以上に空気が悪くなると学級崩壊もぎらではない。

「?どした?」

「ちよいと急用を思い出した。先帰つてる。」

「そうか。」

紡はそれ以上聞くことなく俺を見送った。

廊下に出て数歩走ると、バアンと工作室の方から音が聞こえた。まずい。気づいたな。

とりあえず俺は急いで江川達を探す。

そんな中、一人の女性とすれ違った。

「どうしたの島波君そんなに急いで。」

すれ違ったのは水瀬だった。

「ああ、水瀬か：：！江川達どこいるか分かるか？」

「えっと、もう教室帰ったと思う。。。それってきつきの？」

「いや違う。まあ、ありがとな。」

それ以上の会話は今はいらぬ。光とのスピード勝負だ。

教室のドアを開ける。中に光はおらず、逆に江川達はいた。

そのまま止まることなく江川達の方へ走っていく。

「!?：：。なんだよお前急に。」

向こうもこちらに気づくなり驚きの声を上げる。

その時だった。

「チエストおおお!!」

後ろから光がものすごいスピードで走ってきた。どうやらこのままタツクルする流れだ。

まずい!

咄嗟に俺はその場にいた江川、狭山を押ししつけ、光のタツクルを真正面からくらった。

ドオンと音が鳴る。つつー。。。なんとか防いだか。

「なっ!?遥お前何してんだよ!」

「とりあえず落ち着け光!こいつらは違う!」

この会話を聞いていた江川達が首を傾げる。

「違うって、何のことだ?」

「うるせえ!お前らがおじよしの：：。」

喧嘩が広まりそんな雰囲気だったが、タイミングよく先生が入って

きた。とりあえずその場は一旦収まり、その合流したまなか達と俺達は、校長室へ連れていかれた。

校長室では、とりあえず早退しろと光に通達があった。光はものすごく不服そうのままですぐと帰り、それについて行くようにまなかも帰って行った。

「で、実際のところ真相はどうなんだい？ 遥。」

この先生は生徒の名前を下で呼び捨てにする。まあ、そこは気にしないとして……

「実際やったのはこの二人じゃないですね。中学生がやるにはいささかバカバカしい内容です。光が激昂してたのは恐らくさっきの件もあつたからでしょう……まあ、犯人の心当たりはあるんでこつちがどうにかします。」

「そうか…… って遥も早退かい？」

「そうしてくれると助かります。」

そう言つて俺はドア際まで向かう。

…… ひとつ言い忘れていたことがあつた。

「ああそうだ。江川、狭山、この度は光がすまなかつたな。」

すると2人は一瞬驚き、そして言った。

「いや、俺たちの方がそう思われることしたんだからお互い様だよな。」

「ああ。」

行動は多少横暴でも、根は素直、か。

「そうか。じゃあまた今度な。」

やるべき事をやったので、俺は今度こそ部屋から出て早退した。

行先はもう決まっている。

とりあえず今回、美海と一緒にいたのかを知りたい。ならばやることはひとつ。

俺は学校を抜け出すと、全速力で美海を探しに出た。

第23話 嘘と混乱と

——遥side——

人を探すのには労力と根気がいる。
が、その相手が知人であればあるほど、行動パターンが読めたりする。

そんなこんなで美海がいそうな場所は絞られていって結局…

俺は、サヤマートについた。

辺りを見回すといつものように裏の壁際でこそそそと作業をしている美海を見つけた。

後ろからこっそり近づいて美海に声をかける。

とはいえ、こちらも強引な早退なので説教は出来ないが。

「また、ここにいたか。」

美海は一瞬だけ肩をビクツとさせ、こっちに振り向いた。

「なんで遥が…?」

「まあ、こちらも色々ありましたですね…。ま、早退したんだよ。」

「… またサボってるの、怒ってる?」

開口一番サボりについての話だった。ということは、今回の件に関しては単体の仕業っぽいな。

「んー? いやまあ、現に俺も近いことやってるしな。怒れる奴でもないだろ。ところで相方は…」

その時にタイミングよく相方こと犯人が堂々と登場してきた。なにか自信気な顔をしているが、こっちは確認済みなので先手を打つことにした。

「おかえり。どうやらおじよしさま壊しに行って満足気なようだけど、光怒らせると怖いぞ。」

少しだけ湧いている怒りを抑えて、まずは相手の余裕を破壊する。

「なっ!? お前はタコスケの…」

「なんで! なんてそんな卑怯なことしたの! さゆの馬鹿!!」

そのまま動揺タイムに入ると思っていたが、聞くやいなや横から美海がものすごく怒り顔で入ってきた。

そしてそのままどこかへ走り出した。

追いに行こうとするが、その前に犯人に一応釘をさしておく。

「さて、今ここで君に怒るのもありだけど、どうせ戻りはしないしね。だから一言だけ……昨日言ったことの意味ぐらい、自分で考えろよ？」

最後の方は少し声音が低かったと思う。

その場で固まっている犯人ことさゆを放ったまま、俺は美海を追って走り出した。

小学3年ほどの女子と、成長期真っ盛りの中学2年の男子。

足の速さにはもちろん違いがある。

まあつまり……

追いかけて数十秒後、あっさりと追いついたのだった。

俺が腕を掴むと、必死で振りほどこうとした。

「離して！私は、私は——！！」

「怒りに来たんじゃないんだがなあ……。というか、やるつもりなんてなかったんだろ？あんなこと。」

「そう、だけど……。」

そう言つて美海は抵抗をやめた。うん、そうだよな。昨日光がああまで言ったんだから多少は聞いてもらわないと困るところもある。

「……さてと、美海が犯人関与してないことは分かったとして、これからどうするかな。とりあえず早退した理由それだけだし……。なあ、美海。」

「何？遥。」

「今から家……行つていいかな。みをりさんがいなくなつてから、1度も顔出せなかつたら。せめてその分は。」

「……分かった。」

とりあえず空気は気まずいまま、俺と美海は歩き出した。俺にとつてもうひとつの居場所だった、あの家へ。

太陽は少しずつ、西に進んでいつている。いつの間にか暗くなりそ

うな、そんな天気だった。

「……。」

沈黙が流れる。こうなると気まずいっただらありやしない。

「ねえ。」

先に口を開いたのは美海だった。

「千夏ちゃん、今学校に行ってる?」

「水瀬か? ああ、とりあえず今のところは元気にやってるっぽいぞ。というか、何回かこっち来た時に見なかったのか?」

「教室の方まで行くと、バレちゃうから……。」

ああ、そうか。

実のところ、水瀬は休憩時間などはあまりおしゃべりなどに花を咲かせるタイプではない。

「そっか。千夏ちゃん、ずっと調子悪そうだったから…… また会ってくれるのかな?」

「自分次第だろうな…… 結局全部な。おっと、家に着いたっぽいぞ。」

見慣れたアパート。美海の家は2階だ。

それ以降は互いに無言のまま、階段を上がる。

ドアを開けようとした瞬間、向こうからドアが開いた。

「えっ?」

「はっ?」

「はーくん?」

「なんで入ってるの……?」

部屋の中には先に行つたはずの光とまなかがいた。

その奥に寝ている至さんが見える。

「えーっと、光。とりあえず何があつたか教えてくれ?」

「ああ。あの後帰ろうとした時、こいつが飛び込んできたんだ。そのまま意識が飛んで…… ってどこか。というかお前も何してんだよ。」

「いやまあ、さぼりみたいなものか。」

俺と光が話していると美海がなにか言いたそうにしていた。

「おじよ……。」

「あん?」

「おじよしさま、私が壊したの！私が悪いの!!」

光は少し驚いていた。が、怒ることも無く自分が間違っていたことを理解したみたいだ。

「行くぞ、まなか…。お前はどうすんだ？」

「まだ帰らない。ここに来た用がまだ終わってないからな。」

「そうか、遅くなるなよ。」

それ以降は会話もなく、互いに別れて行った。

さてと、ドアを開ける前に確認することがある。

「美海、なんで嘘ついたんだ？どうせバレるはずなのに。」

「何でだろう、自分でもちよつと分からない。」

少し不機嫌そうに美海は答える。

分からないのに反射で庇った、って言うことだろうか。

やっぱり心って、なかなか分からないな。

第24話　ここで終わりに

——あかりside——

あたしって何なんだろう。

サヤマートで働いてて、一応大人になってて、先島灯の娘で、…海の人間で。

分かってたんだ。この関係が知られたら、もう元には戻れないって。

海を捨てて付き合いを続けるか、…いつその事全てを終わらせるか。

サヤマートには数日間の休みを頂いて、自分自身のこれからについて考えた。

そして今日、答えを出す。

「さてと、今日からサヤマートに行かないと」

私は食卓を囲んでいるお父さんと光に聞こえないように呟き、食器を片づける。光はもう既に食べ終わっていて、残っているのは私一人。

カバンを手にして、私はゆっくりと立ち上がる。

「行くのか…。」

「うん、そろそろ行かないと。」

割り切れてなんてないけど、もうさすがに休めないから。

「そうか…。」

それから先はもう何も言わなかった。

荷物をまとめて玄関に出ると光が外に出ようとしてた。

「あつ、ちよつと待ってよ光！久しぶりに一緒に行こうよ。」

「ああ？今さらそんな年じゃねえだろ。じゃあ、行って来ます。」

躊躇いもなく光は先に行ってしまった。

…少しは大きくなっただな。

「じゃあ、行ってきます。」

誰にも届かない声で、私は呟いた。

何日ぶりの外だろうか。

太陽がすこぶる目に刺さってきた。

とあるカフェの前を通り過ぎると遠くに至さんを見つけた。向こうはこつちに気づくなり、一瞬だけためらって、こちらに走ってきた。

その顔は少し笑顔が浮かんでいた。

「あかり、話があるんだ……。」

「私も、至さんに話があるんだ。じゃあ、そのカフェで話そっか。」
そうして2人で店に入っていた。

この場所には思い入れがある。みをりさんと至さんと、… 美海と、来たことがある店だ。

終わりと始まりが一緒の場所なんだね。

そう、私はここで終わりにする覚悟を決めた。

これまでの関係に、生活に。

「ご注文は何になさいますか？」

「コーヒーで。」

「えつと、僕もコーヒーをお願いします。」

この店のマスターが注文を取りに来たので、適当にコーヒーを頼む。至さんも慌てたように私と同じものを頼み、マスターはその場を去った。

しばらくすると、マスターが二つのコーヒーカップを運んできた。その中には黒いコーヒーが注がれており、コーヒーらしい匂いが立ちこめている。マスターは私と至さんの目の前にコーヒーを置くと、再び下がっていった。

コーヒーの水面は揺らいでいる。

多分、私の今の心も、案外こんなものかもしれない。

そんな中、私は唐突に別れを切り出した。

「私ね、もう至さんと別れようと思うんだ。」

「何で？僕は……。」

「最初から無理だったんだよ。海の間と陸の間が結ばれるなんて、最初から無理だったんだよ。」

美海ちゃんの為にも、私と至さんは別れるべきだと思うんだ。外か

ら新しく人がやってきて、仲良くするってどうなんだろうね？少なくとも

美海は…受け入れてくれないと思うし。」

至さんは驚いたような顔をして、何か言おうとするが、私を見て黙ってしまふ。至さんは落ち着くためにコーヒーを飲んで、一息する。

「確かに海と陸はそうかもしれないけど、僕達は…絶対に仲良くできるよ！」

「ううん、絶対に出来ない。私ね、美海ちゃん好きなの。だからその美海ちゃんが大きくなるために、その居場所に私はいらなはずだから…。だから私はもう至さんや美海ちゃんにも会わない。決めただ、光もいるしね…。じゃあ、さようなら。」

至さんはまだなにか言いたそうにしていたが、私は自分の料金だけその場に置いて、店から出ていった。

振り返ることはしなかった。出来なかった。やったら泣きそうだから…。

道路を歩き、サヤマートへと付いた。そこで何時も通りにあの壁を見てみると、美海ちゃんがまた壁に文字を書いていた。でも、もう完成を見る必要はない。その望み通り、「どっかい」くことを決意したのだから。

私は壁に文字を書く美海ちゃんに近付くと、美海ちゃんもこつちを気づいて見上げてきた。その目はなにを考えているのかわからないが、伝えなければいけない。

「美海ちゃん、私決めただ。もう、美海ちゃん達には関わらないから安心して…。私は、至さんの前から…。美海ちゃんの前からいなくなるから」

「……………」

美海ちゃんは何も言わなかった。そしてそのまま遠くへ駆けて

行った。いいんだ、これで。もう終わりなんだから。

それから私はひたすら働いた。どうにもならない感情を抑え込むために。忘れられない何かを無理にでも忘れるために。

・・・本当に、忘れられるわけないのに。

「あれ、もう復帰してたんですね。」

午後7時頃、店内に入ってきたのは遙くんだった。

「あれ、遙くん。今日も買い物？」

「そりゃ一人暮らしですからね・・・。(次に食べに行くのもまだ時間あるしな)・・・ところであかりさん、区切りをつけたんですね。」

あえて話題を逸らしたけど、やっぱり直ぐに気づかれちゃうか。

「あはは・・・やっぱりバレちゃうか。流石だね遙くんは。うん、そう。至さんに別れ話を切り出したんだよ。これで美海ちゃんも、どうにかなってくれるといいんだけどな・・・。」

遙くんは悲しそうな瞳でこちらを見ていた。

その瞳は何を見てるのだろうか。

私には到底分からないだろうな。

そんな中、すごい勢いで店内に至さんが入ってきた。

表情から緊張感が伝わる。

「た、大変だよあかり！つと遙君もか！この時間になっても美海が帰ってこないんだ!!」

第25話 近くて遠い

——遥side——

学校帰り、俺はいつものように買い物に来ていた。サヤマート店内にはあかりさんが見えた。どうやら、何か進展したみたいだ…。それがいい方向とは言っていないが。

「あれ、もう復帰してたんですね。」

素っ気なく店内に入り、自然な流れで会話を始める。

こうした方が話って結構聞きやすいもんだ。

「あ、遥くん。今日も買い物？」

「そりゃ一人暮らしですからね…。（次に食べに行くのもまだ時間あるしな）。…。ところであかりさん、区切りをつけたんですね。」

途中自分の内心が零れたことはまあ、なんとかなるだろう。

そして兼ねてからの考え通り、本題へ入っていった。

するとあかりさんはあはは…。と小さく笑った。この人がこういう態度を取るときは、大体裏に感情を溜め込んでいるときだ。

「あはは…。やっぱりバレちゃうか。流石だね遥くんは。うん、そう。至さんに別れ話を切り出したんだよ。これで美海ちゃんも、どうにかなってくれるといいんだけどな…。」

それは違う。

美海はきつとあかりさんのこと嫌いなはずはない。

なのにここまで拗れて、すれ違って、大切なものを諦めて失うのは…。

人を好きになったせいで失ってしまうことより、もつとだめだ。

そんなことを思っていると息を切らしながら至さんが店内に入ってきた。

「た、大変だよあかり！つと遥君もか！この時間になっても美海が帰ってこないんだ!!」

はあ…。やっぱり至らないか…。

おそらく今日、あかりさんは美海と会って、そして何かしら話して
るな。そうでないと、急にこんな行動に出るのはおかしい。

「あかりさん、今日、美海に会って何か言いましたか？」

「…そこまで分かっちゃうのか…。もう会わないから、とは言っ
た…。かな。」

ビンゴだった。

十分なんだよ、今の美海にはその一言で。

「分かりました…。とりあえず俺は探してきます。至さん、漁協の協
力もらって探して貰えますか？」

「分かった。連絡してくる。」

そう言っただけで至さんは行動に移行した。

さて、俺も行くか…。

とりあえず買い物を中途半端にするのは面倒くさかったので、もの
は買っていった。

そしてそのまま、袋を片手に店から走って出ていった。

一瞬だけ振り返った。目に映るあかりさんの瞳には涙がみえる。

やっぱり、未練だらけだろうな。

これ以上言うこともないので、再び前を向いた。

これは予想だが。

美海はおそらく人目のつかない、付きにくい場所にいると思う。

どうも行動がこそこそしてるし、こんなことになれば探されると分
かっているのだろう。

というわけで、

「今度はここにいたんだな、美海。」

俺はあっさりとかくれんぼを終わらせた。

俺が倒れた場所の近くで、遠くには海が見えるちよつとした小さな

山。実際、昔美海ともここに来たっけ？

まあ、たしかにここなら人目にはつかないな。

「遙…。どうしてここが分かったの？」

「俺は小さい時から美海を知ってたし、ここにも来たからな。美海が考えそうなことは、少なくとも分かる。」

そういうと、美海に軽く足を蹴られた。

「知られてもないし分かられてもない……！」

「まずいな……ちよつと火つけたか。」

「悪い悪い……。とりあえず、ここにいってもあれだから、海の近くまで行こうか。いいポイント知ってるし。」

美海は少し驚いていた。

「帰ろうって、言わないの？」

「言って帰るならこんな行動とらないだろ。それに、さっきも言ったけど、美海の思ってることは少しはわかってるから。」

「……そう。」

諦めたのかそれ以降の反論はなかった。

「……今日は、帰らないから。」

「はいはい、お付き合いますよ。」

俺達は港の方へ下った。港とは言うが下りた場所は廃倉庫周辺。到底人が来るはずもない。

……ただ一部を除いて。

遠くから足跡が聞こえた。おそらくここに来るとしたら光達だろう。

今この状況に光達を介入させると話が捻れる、そんな気がした。

というわけで、事前にそれを阻止する。

「美海、ちよつと待っていてくれ。」

「……うん。」

そして俺は音の鳴るほうへかけて行つた。

「おーい!!……って遙かよ。お前も探してたのか？」

声の主はやはり光だった。まあ、ここに至りそうなのは光達くらいしかないが。

「その事なだけだな……」

〜数分後〜

「じゃあ、俺達はとりあえずあかりとあいつに安否を連絡して、そのまま帰っていいんだな?」

「そういうこと。頼めるか?」

「しゃーねえ、行ってくる…。エナには気をつけろよ?」

「はいよ。じゃあな。」

これからの行動について光に話した後、俺は小さく手を振ってその場から離れた。

さてと…。

「美海、飯、食べるか?」

「そんなものあるの?」

「あるんだなこれが。ちよつと待ってる。」

戻ってきた俺はとりあえず食事の確認をする。どうやら昼は食べてない様子なので、ここを抜かせるのはよくない。幸い器具等は倉庫内にあつたので、拝借させてもらうことにした。

く数分後く

色々あつて出来上がった。

皿に盛つたのは野菜炒めだけ。これだけ?と思われても仕方がないが、不幸なことに買い物の途中だったため、これ以外の食材がなかったわけだ。

「いただきます。」

美海は小さい声でそういうとパクパクと食べていきだした。

俺はその表情、スピードを見た。その顔は言葉を聞かなくても良さそうな表情をしていた。

「遥つて、料理上手なんだね。」

「まあな。伊達に何年も1人で生きてない。」

そんな話も混ざりつつ、食事は進んで行った。

…俺?俺は…食べてないよ?」

「遥、帰らないの?ずっとここにいらなくてもいいのに…。」

食べ終わった美海は木箱の上に座って足をぶらつかせてる。本当
に今日は帰るつもりはなさそうだ。

「寄り添うって決めたからな。最低でも今日は。あれからまともに話
せなかつたんだ。もつと美海の本心を……考えを聞きたい。美海
は……あかりさんが嫌い……なわけ、ないんだよね？」

「!!」

美海は一瞬だけ驚き、そしてぶらつかせた足で思い切り木箱を蹴つ
た。

「私は好きな人なんていない！私を好きな人なんていない！いらな
い！」

そして、先程までなかった怒りのようなものをぶつけてくる。

でもそれは怒りではなく、悲しみが滲んでいた。

「私は、好きな人なんてもういらない！ 遥も私を好きじゃない！」

そのまま美海は感情任せに続ける。そして言い終わると俺から逃
げるように走り出した。

その時、美海は海ぎりぎりに転がっている石に躓いた。

まずい！

そして俺が思った通り、ふらついた体は海へと落ちていった。

第26話 1歩

——遙side——

これは過去の話。

まだ俺が小さくて、みをりさんがいた時の話。

みをりさんとの最後になったあの日の話。

↳過去↳

「島波遙くん、ちょっと長いけど聞いてください。」

「え、あ、はい。」

みをりさんは似合わないほどかしくまっていた。

「遙くんは、多分これからたくさん、辛いことに見舞われると思う。」

でもね…自分だけは見失わないで欲しい。大事なものから逃げないで欲しいの。」

「はあ…。」

「結局ね…もし私がいなくなったら、美海を守って欲しいってこと。遙くんにとって美海がどうかは知らないけど…もう、美海にとって遙くんは大事な存在だから…好きになることは、やめないで欲しいな。」

最後の方は小声でよく聞こえなかった。それに、今の俺に未来のことなんて考えれなかった。

それが今になって…

↳現在↳

そうだよ、何で忘れてたんだよ…。

俺は抜け殻の日々を送ってた分、いつの間にか欠落してた記憶の1部。

あの日みをりさんに言われた大事なこと。

俺は迷わずに後を追って飛び込んだ。そしてそのまま美海を抱き

しめる。美海は少しばかりの抵抗をしたが直ぐに諦め、俯いた。おそらく泣いているだろう。

「なあ…誰かを失うって、怖いよな。好きになったせいで、また失うのって怖いよな。」

「うん…うん…。」

美海は嗚咽を抑えながら返す。

「でも、思い出したんだ。あの日、みをりさんに言われたこと。好きになることはやめないで欲しいって…ほんとに、今更だけどな。」

自戒の意も籠った独り言をつぶやく。

「もう一度聞いていい？美海は、あかりさんのこと嫌い…なわけ、ないんだよね？」

今度は真つ直ぐな答えだった。

「アカちゃんも好き、パパも好き、…遥も好き。あの日、ママがいなくなつて、それからアカちゃんがお母さんみたいになつた。でも、私は怖かった。アカちゃんも死んで、大切な人が遠ざかつていくのが嫌だった。それに、ママが忘れられるのも嫌だった。」

やっぱりそうだ。美海は、俺と似ている。

好きになつたせいで失つたから、その繰り返しを恐れているんだ。

でもまだ美海は変わる。なぜなら俺より若く、俺より青い。

…俺も、変わりたい。

「…分かつてる。でも、俺は前を向きたいな。今からでも、つて話だけれど…水瀬がそう言つてた。」

「千夏ちゃんが？」

「ああ。「諦めたくない」って、そう言つてた…ほんと、強いと思うよ…変わるかな、俺も、美海も。」

いざ説得しようとするも、最後の一言に自信が出なかつた。しかし、それに感づいたかのように美海は俺の服を引っ張る。

「変わろうよ、遥…それより…」

あ。

抱きしめたままだったな…。

美海は少し照れくさそうに、「陸に上げて」と言った。因みに、今の体勢で沈むことは無い。

俺は美海を縁に捕まらせて、後ろから押し出す。その際に美海は半分登りかけたところで、こつちに振り向いて何時もより楽しそうな顔で、上がりながら聞いてきた。

「遥つて、ドリコンなの……？」

「はあ？何だ急に。」

ドリームコンプレックス……？いや、ねえな。

「さゆが言つてた。小さい子を好きな年上の人つて、ドリコンだつて。」

違うんだそれは。

「おい、それはロリコンつて言うんだぞ。さゆに伝えとけ。それに、ロリコンじゃねえから俺は。」

少し笑つて、元気よく話す。測りそこねた距離は、今測り直されるだろう。

美海はサヤマートの方へ向かった。用があるのはあの壁だ。

やることは何となくわかつてる。そして、それを止める必要もない。

小さかった頃のように、俺は差し出された美海の手を握つて歩き出した。

翌朝、俺は寝たフリをしながら、隣で寝ていた美海に説教をかまし、その後ろの壁に出来上がった文字を見て涙を流していたあかりさんを見ていた。

俺達で作った文字は簡単だ。

そして、今一番伝えたい想い。

『どっかいかないで』

第27話 それから

——美海side——

まず千夏ちゃんがいなくなった。

そしてママがいなくなった。

それが理由で遙もいなくなった。

好きになった人ばかりが、私の前からいなくなっていく。

パパはずっとそばにいてくれたけど、いつ居なくなるのか、そう考
えると怖くて、素直になれなかった。

ずっと、寂しかった。

そんな中、アカちゃんが来てくれた。

嬉しかった。寂しさが、少しずつ埋まっていくなを感じた。

… それと同時に、これまで抱いていた恐怖も一気に膨れ上がっ
た。

… アカちゃんも、いつかなくなっちゃうんだ。

だからもう、人を好きになるのはやめようって決めた。好きだった
人に、幸せになって欲しいから。

でも今、私は再び遙に出会って。

ママが残した最後の想いを聞いて。

千夏ちゃんの言った言葉を聞かされて。

「逃げたくない」って、私は心の底から思った。

だから私は最後まで遙の…

——遥side——

ふうっ…。

あの日から始まったゴタゴタは一応全て鎮まった。

結局あかりさんは至さんを諦めきれずに、交際を続けることを選ん
だ。美海の気持ちも知っている今、それ以外に最善はないだろう。

ただ、もうひとつ解決できてない問題があるとすれば…（問題と
呼べるほどでもないが）。

いつも通りの放課後作業。因みに別件のおじよしさま破壊事件の1件を気に江川や狭山その他数名の陸の生徒との距離が近くなり、制作を手伝ってもらっている状況になった。光らも、別段嫌がつてる様子もなく、どこか気の許せる雰囲気になっていた。

「ねえ島波君。」

作業片手に水瀬が話しかけてきた。

「今日、来れる?」

あえて内容を言わないのかどうかは知らないが、ここにいる人にとりあえず変な目で見られるのだけは勘弁である。

「ああ、いいぞ。…なんなら対決でもするか?」

「おつ、いいねえ。…」

因みにあれからもう数回と水瀬の家にお邪魔している。

実家が第1で、みをりさんにお世話になったあの家が第2なら、水瀬の家は第3、のような安心感が生まれていた。

「というか作業中だからこの話後でいいか?終わったら外で待ってるから。」

そう、ほかのことに集中してしまうとうっかり怪我するケースがあるから、これまた雑にはできないのである。

「ああ、うん。そうだね。」

というか外に美海見えたしな。こそこそしないでもいいのに。

学校での作業が終わると、俺は他には目もくれず外に出た。

校舎の目の付きにくいところ。そこが、だいたい美海がいるポジションである。

「何してんだ、こんなところで。」

美海は急に背後から声をかけられたことに一瞬だけビクツとし、こつちを振り向いた。

「待ってただけ。一緒に帰ってたかったから。」

なるほど、もつともな理由だろうな。

「あー、その事なんだけどな美海…、これから水瀬の家に行くんだけ

ど、一緒に来るか?」

「千夏ちゃん家?」

「そ。」

「…もう結構と話してないけど、千夏ちゃんは私の事変わらず接してくれるかな…そうじゃなくても、行きたい。」

「分かった。じゃあちよつと話つけてくるからちよつと待ってる。」

「うん、分かった。」

そして俺はその場に美海を残して、水瀬と話をつけに向かった。

「あ、いたいた。探したよ島波君。待ってるって言ったのに。」

「悪い。ちよつと呼び止められてた。」

半分嘘、半分本当である。

「じゃあ料理対決やるって方針でいいかな?えつと、お会計は…。」

「ああ、俺が作る分はちゃんと自分で持つからそこはほつといていいぞ。それよりこつちもーつ確認が取りたいんだが…。」

「うん、いいよ?」

「美海、連れてつてもいいか?」

水瀬は少しだけ言葉に詰まる。そして二つ返事でokを出した。

「うん、いいよ。」

その後の話し合いの結果、俺は美海を連れて遅れていくという事になった。買い物物のタイミングもずらせるので丁度いいだろう。

至さんへの連絡は道中のサヤマートでやればいいし…、うん、問題ねえな。

水瀬から少しだけ遅れて美海と一緒にサヤマートに入る。買い物中ずつとあかりさんにニヤニヤされっぱなしだったが、あいにくロリコンの疑惑が確定される程の距離の近さではなかった。

「お邪魔しまーす。」

「おじやま… します。」

水瀬が入ってから5分くらいの差で俺達は家に着いた。入りなれた俺ともう随分と久しぶりの美海と。心の余裕もだいぶ違うようだ。

リビングに入るといつも通り保さんがいた。今日は新聞は読んでなかったが。

「いらっしやい、遥君… と美海ちゃんか。大きくなったな。」

行動こそ起こさないがその言動に嘘偽りが無いのが保さんだ。

「久しぶり、美海ちゃん。」

そして、荷物をまとめて降りてきた水瀬が美海に話しかける。

「… 元気になったの？ 千夏ちゃん。」

「うん、… 今はね。とりあえず、適当にくつろいでいいよ。あ、島波君はダメだよ後で作るんだから。」

「分かっていますよ。」

水瀬の放った一言に少しだけ違和感を感じたが、気にするとさらに負の感じに引きずり込まれそうな気がした。

一瞬だけ感じた不安を抑え込むため、俺は自分の作る料理の確認を始めた。

第28話 届かぬ壁

——side——

さてと。

突拍子に始まったお料理対決、後攻が俺だ。

水瀬はその他の準備、美海はどこか遠くを見てて保さんは…ここからじやよく見えないか。

まあいい。見られてない方が全力は出せたりするもんだ。

水瀬には調理実習のあれ見られてるしな…。

悪印象を突破らわせるため、ちよつとここは全力を出すことにした。

〜数十分後〜

「いただきます。」

互いの料理が完成して4人で席に着く。因みに今日は夏帆さんはもう少し遅くなるそうだ。

審査員は保さんと、美海である。

机に並んだのは簡易的なパエリアと、ペスカトーレだった…。魚介類多いな。

水瀬曰く「お父さん魚介類好きだから」だそうである。

その言葉をヒントに、俺はペスカトーレの方を作ってみた訳なんだが…。

まず保さんがパエリアの方から一口、そしてペスカトーレを一口。

「…ふむ。」

腕を組んで考えているようだ。

やがて結果が出たのか、目を見開いた。

「…後者だな。」

あえて名前を呼ばないところが審査員っぽくて保さんっぽいのだが、どうやらこっちは俺の勝ちなようだ。

小さくガッツポーズ。

「というか千夏、俺が魚介類好きってこと伝えたのか？」

「うん、というか島波君来てる時大体魚料理だったりしたから何となく分かってたとは思ってたけど。」

そういえばそんな気がして俺は頭をかく。

そんな会話を聞いていた美海がこつちをジーツと見つめて来る。

「遥って何回くらい?」

主語がなかったが言いたいことはわかった。

「ん、まだ3―4回くらいだと思うがなあ...」

「そう。」

おい主語。

嫉妬フアイアーが来るのかと少し心配したが、そんなことは無く、今度は美海が食事に手をつけた。

「これは千夏ちゃんの方がおいしいかな。」

そう言われて水瀬の方を見やる。小さくガッツポーズを作っていたのが見えた。

くそっ、1―1かあ...。

「それと、遥。」

「ん?」

「これ、ママのレシピ参考にしたでしょ... まだまだ届いてない。」

美海審査員はすぐく厳しかった。(小並感)

俺は昔美海宅へ遊びに行った時に、いくらかみをりさんからレシピを受け取っていた。これもその1つで、家でも何度か作ったことはあったのだが。

その後、自分も一口食べてみる。言われた通り、たしかにあの味と壁を感じた。

... もう随分とたったのに、味は覚えてるんだな。

「ただいま。」

その後、4人で少しわいわいしながら食事をしてると夏帆さんが帰ってきた。仕事が遅くまでであった分か、少しぐったりしてるように見えたが、振る舞いは明るかった。

「あら美海ちゃん、久しぶり。元気してた?」

「久しぶりです。」

こちらは意外とすんなり話が進んだ。気が楽になったのか、水瀬ほど関わりが深くなかったからか、それは誰もわからないのだが。

「おっ、出来てるねえ。」

テーブルの上に並んだ料理を見て夏帆さんが声を上げる。

そして。片付けが一段落着いた夏帆さんも合流して食事が再開される。

「夏帆さん夏帆さん。」

ある程度食べるのが進んだ状態で俺は夏帆さんに質問した。

「どしたの遥君?」

「どっちが美味しいですか?この2つ。」

俺と水瀬が一斉に夏帆さんに目を向ける。多分両者とも目をギラつかせていた。おそらく、互いにかなりの負けず嫌い何だろう。

「うーん...。」

少々の間夏帆さんは考え、そして答えに至った。

「私の方が上かな?」

うーんこの...。

天然!!

「あれ、二人ともなんでそんな怖い顔してるの?ってそっか。遥くんはまだ私の料理食べに来たことないのか... ふふん、じゃあ今度は私が振舞っちゃおうかな?」

うーん、それはそれで興味あるかな。

「じゃあ、そうさせてもらいましょうかね?」

そう言つて美海の方を見る。美海はこくつと小さく頷いた。

因みにそのついでに水瀬のほうを見たんだが、何やらぶつくさと言っていた。母への文句だろうか。

「じゃあ、今日はこちら辺で失礼します。ありがとうございますございました... 行こっか、美海。」

「ありがとうございます。」

食事が終わって少し談笑した後、俺達は時間も時間なので帰ることにした。今回は美海もいるので責任をもって送り届けなければならぬ。

「じゃあね島波君、美海ちゃんちゃんと届けるんだよ?」

水瀬が玄関まで見送りに来た。今日は一緒には来ないみたいだ。「分かってますよ。じゃあ、また明日な。」

そしてドアがボタンと閉まった。

最後に見た水瀬の顔色は少し怪しかったが、今の俺には何も分からなかった。

そして俺は美海を送るために至さんらが住んでいるアパートへ向かった。道中美海に「手を繋ぐか?」と言ったが「もう小さくない」と怒られてしまった。

「ねえ遙。」

アパートが目の前に見えてき出したころ、美海が口を開いた。

「ん?どうした。」

「その...今日はありがとう。久しぶりに、千夏ちゃんと話せたから...。」

「気にすんな。それに、水瀬も美海のこと、ずっと気にしてたからな。これで良かったと思うぞ。」

「そっか...。ここら辺でいい。じゃあね、遙。また今度。」

美海は小さく笑って、自分の家へと駆けていった。もう心の曇はだいぶ無くなったんだろう。

これで美海は前に進めるのだろう。なら...。

あとは、俺自身の問題かな。

そして俺は空を見上げる。日はとうに落ち、星が夜空を埋めつくしていた。

第29話 異変

——遙side——

今日の体育の授業はプール、という事で、各自水着を用意してたわけなんだが……。

やっぱりまなかは準備できてなかったみたいだ。部屋から泣き言が聞こえる。

……また待ちパターンか。

そんなことを考えていると、昨日言われた約束を思い出した。

～昨日～

「今日は引き分けか。というか水瀬、俺の分どうだった？」

それぞれが食べ終わって今は片付け中だ。

「ん、普通に美味しかったと思うよ。まあ、私も負けた覚えはないけどね。あ、そうだ島波君。ちよつとお願いがあるんだけど……。」

「どうした？まあ、可能な限りなら答えるけど。」

「ありがと……あのね、汐鹿生の写真……今の姿が見たいなって。」

水瀬は耳打ちで願いを言った。多分大にして言えない事情があるのだろう。

「分かった。写真かなんか持ってくる。」

～現在～

急ぎのようじゃないのかもしれないが、こういうケースは時間が経つと忘れてしまうものだ。

「悪い、用事思い出した。一旦家に帰る。先行っててくれ。」

「え、遙？」

返事も聞かず俺は真っ直ぐに家に戻った。

それから数分後、俺は再び家を出た。

もちろん、周りには誰もいない。

おそらく、ここから最短で上がって、陸で走ったほうが早そうだ。

上がるポイントは丁度いつもの堤防付近。道中に水瀬に出会えれば万々歳だ。

さてと…。

陸へ上がった俺は真つ先にあたりを見回した。すると、遠くに1人の人影が見えた。

目を凝らしてもう一度確認する。よく見ると浜中の制服を着ているのが分かった。

おそらく水瀬だろう。

そう思っ、学校とは違う方向だが走っていった。

が、途中で足を止めた。明らかに歩き方がおかしい。右に左にフラフラしているようだった。

そしてもう一度確認しながら歩み寄る。やはりその人は、顔色を悪くした水瀬だった。

「おいお前、大丈夫か？」

「あつ… 島波君、おはよ…。」

返事を返した水瀬の息は途切れ途切れだ。恐らく体調はよくない。熱を確認するように手を水瀬の額に当てる。明らかに平熱より高かった。

「…いつからだ？」

「大丈夫だって、ほら… 行かなきゃ。」

そして水瀬は歩きだそうとする。が、真つ直ぐ歩くことは出来てなく、ついには力が入らなくなったのかその場に座り込んだ。

「…たく、今日は帰れ。てか連れて帰る。」

当たり前だ。こんな状態で学校に行かされるわけないだろう。

この状況が分かっているなら保さんや夏帆さんはG.Oサインを出すわけない。おそらく、無理をしても学校に行こうとしたんだろう。

「…じゃあおぶって。」

観念したのか水瀬は甘えだした。熱にでもうなされてるのだろうか。

とりあえずそれに従うことにした。

まあ、病人は丁寧に扱って言われているし。

そう思つて水瀬をおぶる。そして数秒後、疲れがたたつたのか水瀬はそのまま眠つてしまった。

あれから数時間がたった。俺は水瀬を連れて水瀬の家まで戻つたが、両方仕事に出ていて家を開けていた。

もちろん鍵はしまつていたが、運がいいのか悪いのか水瀬の家の鍵はカバンの見やすい位置に入つていた。

というわけで中に入り、一通り病人を受け入れる体制をとつた。

連絡の方は、まず学校に休みの連絡を入れて、その後漁協に電話を入れた。保さんに繋がれば嬉しいところだが、その望み通り保さんに繋がつた。

曰く、「まあ、お前ならなんとかするだろう。」だそうだ。

… えらく信頼されたもんだな。まあそれはいいとして…。

「…ん。」

水瀬が目を覚ました。

「よう、起きたか。」

おしぼりを絞りながら俺は返事を返す。すると水瀬は起き上がつてあたふたしだした。

「あ、あれ!?なんで私家いるの!?それになんで島波君が…。」

後半だんだんと勢いがなくなつてバフつとまた布団に転がり込む。

「熱あるんだ、大人しく横になつてろ。」

「…はいはい。」

水瀬は抵抗する元気もないのか大人しく返事をして横になった。

「ごめんね。付き合わせちゃつて。」

「まあ、あんな所で倒れられても困るし、責任問題になるだろ…。まあぶつちやけると、プールはサボりたかつたしな。」

「泳ぐのが嫌いな訳じゃないよね?。」

当たり前だ。そんなことなら極力家から出ない人間になつては

ずだ。

じゃあ何がダメか、組織的なあれがどうも苦手なんだ。
それこそ準備運動なんていらぬのにな。

——光 side ——

「つくし!!」

一瞬体が冷えたのか、はたまた誰かが噂したのか大きなくしゃみが
でた。

「大丈夫か？先島。」

「別に、ただのくしゃみだよ。」

——遥 side ——

「準備運動っているか？俺らからすれば呼吸することに準備運動する
ことになるんだが。」

「あー…。」

何かを察した水瀬が共感の声を上げる。

こいつもエナを持つてるから分かるんだろう。

「…はあ、疲れた。休憩休憩。」

そして水瀬は両腕を投げ出す。

「ところで水瀬。」

「何？」

「なんでここまで無理なんかしたんだ？あれくらいなら休む方が当然
なのに。」

「あー、まあ簡単な理由だけだね。ついでに今話しちやおつか。」

「何をだ？」

すると水瀬は少し悲しそうな目をして言った。

「私の病気の話。」

第30話 疑問

——千夏 side——

私の身体についてはもう何度か話したけど、もう少しだけ詳しく。普通他言はしないんだけど、島波君になら伝えてもいいと思った。だから今日は、打ち明けてみることにする。

「始めて異変が起きたのは、小学一年の頃だったかな。」

そう、これから学校生活が始まる、そんな矢先の話だった。

だからまあ、友人が少ないのもあるのだろうけど。

「そうか…。てかさうだ、そもそもどんな病気なんだ？」

「あ、ごめんそっちからか。」

あ、順番間違えちゃったか。

「うーんと、言っているのかわからないけど、症状はみをりさんが突発的になったあれにほど近いかな。私の場合、程度に波があるし、なるタイミングにも波がある。そして何よりこの病気、原因も完治の方法も分かってないんだ。」

「…ってことは、心臓か？」

島波君が怪訝な顔をする。まあ、現場を見ている以上どういふものは多少は把握してるみたいだ。

「…うん。発作、なのかな。程度によるけど1度なったら数日ほど動けなくなる時もあるし…。今日の分は多分それとは関係ないと思う。けど、あれを発症してから免疫も少し弱くなって、今日みたいに体調を崩すことがしばしばあるんだ。」

「なるほど。んで、初めてそれになったのが小一の頃と。」

「そう。だから出遅れて周りの人間関係が出来上がっちゃって、居場所もそんなになかった…。前向きに生きようと思ったけどちよつとキツかったかな？やっぱり。」

親の仕事の関係なんかで紡とは知り合った。もしそれさえもなかったら、どうなったのかは予想できない。

「そうか…。強いな水瀬は、やっぱり。」

その言葉には嘘偽りのない、ただただ尊敬の意が籠っていたような

気がする。

でも、それを言われるのは、ちよつと嬉しくない。

「ううん、そんなことない。…そんなこと、ないから。」

強い眼差しを向けて島波君に言う。島波君はそれを見て感知したのか、それ以上は続けなかった。

「うん、言いたかったのはこれくらい。…もう寝ちやつていいかな。

まだ熱も抜けてないみたいだし。」

「ん、ああ。長引かせて悪かったな。…晩飯、俺が作るか？」

まだ昼にもなつてないのだが、そこまで考えてくれているようだ。

「うーん…、ちよつと待つてね。」

今日は親は遅いつてほどでもないけど余裕があつてくれた方が助かる。でも二日連続でお世話になつていいものなのかは不明だ。

…まあ、お父さんお母さんなら許してくれるか。

「頼めますか？」

「分かった。…というかよく平常心でいられるな水瀬。一応俺これでも少し落ち着いてない方なんだが。」

「え…？ああ、うん…／＼／＼」

言われてみればそうだ。同じ部屋に男女二人で、完全に冷静でいられるかと言われたら、それは無理がある方だ。

「…一旦、出てくるぞ。」

「いつてらっしやい…。」

雰囲気気まずくなつたのを悟つたのか島波君は部屋から出ていった。まあ、今日は学校休むのも伝えていそうだからまた帰つては来るんだろうけど。

誰もいなくなつた部屋で天井を仰いだ。

今更ながらの羞恥で赤面しながら。

どこか清々しさを、少しは感じていた。

——遥side——

水瀬に強いなど言ったら、言葉こそなかったが怒られたような気がした。

同情とかそういうつもりなんてなかった。ただ、前を向くことを躊躇っていた自分にとっては水瀬は、憧れであり、目指したい人間だった。

俺も前を向きたい。

一通りの支度は終わって、今日はもう帰ることも出来るのだが、俺は終日水瀬に付き合うことにした。

今ここで歩み寄らなければきっと、理想には届かないのだから。

「悪いねー、ここまでしてもらって。」

時間が経って今は少し早めの晩飯時。軽めに作ったお粥等を丁度持ってきたところだ。水瀬は申し訳なさそうに笑う。

「まあ、そこはお互い様という所で。」

「お互い様って言ったって、私まだ何もしてないよ?」

「そうだな...。ま、色々あつてとんとん、と言うことで。」

「何それ。」

そのとき玄関のドアが開いた。先に帰ってきたのはどうやら保さんらしい。

「ちよつと顔出してくる。」

「うん、行ってらっしゃい。」

そうして俺は一旦部屋を出た。

部屋を出た先には荷物の片付けをしている保さんがいた。

「... お仕事お疲れ様です。」

目が合ったので話しかけた。この人の沈黙ほど怖いものは無い。「何、いつもの事だ...。それより、今日は助かった。ありがとな。」

「え、あ、はい。」

意外と真つ直ぐな感謝の言葉に少し驚く。

「ところで、ちよつといいいか?」

話だろうか。別に構わないのだが。

「え、いいですけど...。」

そうして俺は保さんに連れられてテラスの方へ向かった。

「何度も言うようだが今日はありがとな。」

2人して座った後すぐ保さんが言った。

「ええ、それはいいんです。それより……。」

「ああ、本題か……。特に考えてたわけじゃなかったんだがな。1度こうやってちゃんと話したかったんだよ、お前さんと。」

表情こそそんなになかったが、気持ちがあひひしと伝わってきた。「なるほど……。いいですよ。」

「そうだな……。お前さんは、地上が、陸が、この街が好きか？」

「好きです。ずっと、ずっと前から。」

即答だった。ほんの前まで少し躊躇っていたはずなのに。

「そうか。俺も好きだ。勿論、夏帆もな。」

…

一体どれぐらい話しただろうか。外の気温もすっかり下がっていた。

「さて、そろそろ中へ入ろうか。」

「あ、それはいいんですけど、俺はそろそろ帰りますよ。」

「そうか。気をつけてな。」

そうして俺はもう一度、一瞬だけ水瀬のいる部屋に帰った。

「おかえりー。もう帰るんだ？」

もう結構体調も回復してるようだ。言葉には余裕が感じれる。

「まあな。というかもうって、何時間居たと思ってるんだよ。」

一日のほとんど費やした訳だから数時間じゃすまされない。

「あはは、冗談冗談……。じゃあ、また今度。」

「ああ。学校でな。とりあえず無理してまで来るなよ?。」

「はいはい。」

そのまま俺は部屋を出て、玄関も抜けていった。

水瀬宅から出た俺は海へ潜った。

少し冷えた海は頭を冴えさせるのに十分だった。

さてと……。

冴えた頭で考える。

俺のやりたかった1歩前へ進むと言うのは、こういうことなんだろうか？

ただ誰かとの距離を縮めるだけが答えなのか。

やっぱり答えは、まだまだ出そうにはなかった。

第31話 互いの思い

——遙side——

「二二で、出来たああー！！！！」

歡喜の声が工作室に響く。あれから右折左折しながら、ようやくおじよしまが完成したのだった。

壁にぶつかって人は強くなる。

なんてかつこつけた言い方はあまり好きではないが、今回できたおじよしまは過去でもなかなかの出来だろう。俺が知ってる中ではトップではないだろうか？

「こ、これは——良い出来だよ、よく頑張ったね！」

先生は目を輝かせて言う。

何度も思うがこの人は、生徒を引っ張るほどの力はないのだと思うが、きつと、生徒と足を揃えるのが上手いのだろう。

「これも美海と私が来たお陰だな！」

「うるせえ！お前の言える事じゃねえだろ！」

さゆが自分が頑張ったからと言うように自慢する。犯人だということがバレてはないが、変わりに光が頭をぐりぐりとしているのでよししよう。

「しっかしこれはなかなかの出来だよな…。」

自分で作っておいてなんだが思わず声が出てしまった。

その独り言を拾ったのは体調不良から一応復帰した水瀬だった。

「今までの分で、ここまでののはなかったよね。」

ついでにサヤマートの狭山も乗っかる。

「ああ、クオリティが段違いだな！」

そんな空気を引き裂くように先生が提案する。

「そうだ、みんなアイスをおごって上げるよ！ホームランバーかガリレオ君、どっちが良い？」

「うわっ、先生両方とも安いじゃん！」

「仕方ないだろう。人数が多いんだから。」

そうだな、この人ラーメン奢ろうとしていたからな。

「先生、プールも無くなるほど寒いのにそれはないと思います。」

あ、これはぐう正論だな。

というわけで脳内自己完結をしているうちにその提案は却下されたのだった。

相変わらず燃えてんなくこの人。

そんなコントはさておき、俺はもう一度おじよしさまに目を向けた。

その俺の近くで、これまたおじよしさまを見てるまなかと紡がいた。

そして2人は

「お船引き、やりたいな。」

同時にそう呟いた。

周りの空気が一瞬止まる。そして追追と茶化しが始まった。

「……被った。」

「おうおう、仲良いねお二人さん。」

「何処までいったのかな？」

女子は「凄い……」といったような、男子のバカの連中はただニヤニヤとしながら茶化している。

まなかこの手のに弱いからなあ……。そろそろストップさせるか。

「ふえええ!? 違うよ、何も無いよ!」

「またまた、ご冗談を。」

うん、ここら辺だな。

「はいはい、茶化しはもういいから。それでまなか、お前はどうしたいんだ?」

「えっと、だからお船引をやりたくなって……。」

うん、大体わかった。恐らくまあ、そういうことだろう。

今年は大掛かりなお船引をやらないと話がついている。だが、ここまで来たらやりたいという意味だろう。

それも、海、もしくは陸片方の意見ではなく、その両方の人間がやりたいと言ったのだ。

正直、俺もどうにかしたい気持ちはある。

「OK、分かった。… 要するに、今まで通りの、街全体でのお船引がやりたい。そういうことだろ？まなか。それに、紡も。」

その言葉にまなかも紡も頷く。

「俺も、昔のようなお船引きがしたい。昔は汐鹿生と鷺大師で、凄いお船引きをしたって聞いた。それが俺らで、もう一度みんなでやりたい。」

しかし、現実がそう甘くないのは、俺達が一番知っている。

「でもね、生徒だけの簡易なら出来るんだけど、それはね。みんなも知ってると思うけど、今回のお船引きが無くなったのは海と陸の喧嘩だからね。」

そうだ。大人になるにつれて純粹さなんてものは固まっていき、頑固な意思というものだけが残ってしまう。今回だって、きつとその積み重なりだ。

そこをたかが、されど子供の意見で、意思で、どうにか出来ないだろうか？

そんな俺の考えに共鳴するかのように、光が叫んだ。

「やろう！お船引き!!」

「でもねえ、光君。お船引きは、陸と海の協力がないと出来ないんだよ。」

「——俺らだけで出来ないなら、説得すればいいんだ！汐鹿生の奴らは俺が説得する！だから紡は、漁協の奴らを説得してくれよ。紡が陸のリーダーとなつて、俺らでお船引きをやろうぜ！」

先生の困つたような言葉に、光は堂々と言い放つた。相変わらずの無茶苦茶ぶりだが、ちゃんと考えられた事だ。

しかし、それでも説得力が足りない。

やれやれ、やっぱりサポートが必要だな。

「… そうだな、やろう。俺たちの手で、お船引きを。まずは交渉、署名、そこからか。具体的な道筋を立てて、ひとつずつ丁寧に行こう。みんな、協力してくれるか？」

その場にいた全員から反論はなかった。

先生も困ったような顔をしながらも、うんうんと頷いた。

帰り道、今日は真つ直ぐ家に帰ることにしたため、光と二人で歩いている。

「なあ遙、なんでお前俺の意見をすんなり認めてくれたんだ？」

光は疑問そうにこつちを見る。

「ん、ああ。普通に俺もやりたかったからな、お船引を。」

「ふーん。なんか理由があったりするの？」

「そうだな……。強いて言うなら、俺は陸が好きだからな。今までも、これからも。だから、お船引で海と、陸を、繋ぎ止めたんだよ。」

「そっか。頑張ろうぜ、これから。やらなきゃいけねえこと、いっぱいあるからな。」

そう言つて先に光が海へと飛び込んで行つた。

そのまま後を追うように飛び込む。

足掻いても足掻いても溺れそうなほど、無理難題なイバラの道を。

第32話 夏の下で

——遙side——

あれから各場所で、何がどう起こったかは知らない。けれど、今日は全員揃って署名活動を行うことにした。

この街において人通りが一番多いであろう部分はサヤマート付近だ。

だから、今日の集合場所はサヤマートすぐそばとなっている。

「さて、一通り揃ったし、始めますか。」

とりあえず署名の用紙と、案内の紙とをまとめて俺が言う。

「進行大体お願いできるか？ 遙。」

紡が任せるとなると余程頼りにされてるのだろう。

「ああ、そこはまかせろ。…さて、海勢。分かっているとと思うけど夏だ。暑いぞ。というわけで、エナはちゃんと保つように。適度に交代で休憩入れたりなんなり…ま、適当にやってくれ。それと、再度今日やる事の確認だけど…」

…

そんなこんなで昼下がりに。あれから色々配ってみてるんだが捌け方がいいのか悪いのか微妙なラインだ。

ただ、意外にも署名だったり、受け取りだったりが多いのは若者なようだ。となると、問題があるのは長の方だろうか？

「お船引き、やりまーす！」

「お、お船引きしますー！」

エナのこともあり当番制にして行っている。今表に出てるのは光とまなかだ。とはいえ…。

まなかがここまで声を張れるのは意外だった。いつも内気な部分がどこか残って、誰かの背中に隠れているようなやつだった分、こういうケースは珍しく思える。

「結構頑張ってるまなか。始めてみたかもな、ここまでのは。」

俺は本人に聞こえないように小さく呟く。が、隣に座っていた美海

にはバツチリ聞こえてたようだ。

「そんな感じなの？」

「ああ、光は大人連中が口を揃えてやんちゃ坊主と言われてるけど、まなかは… そうだな、カクレクマノミってところじゃないのか？」

うん、間違いねえな。

「タコ助ー！やるー！」

十分に休憩をとったのだろう、美海の隣に座っていたさゆが立ち上がって光のところへ行く。仕事をしに行くというのは間違いないようだ。

俺はそんな様子をずっと見ていた。因みにさゆが座っていた場所には入れ替わるように水瀬が座った。

病み上がりな上に事情も事情。水瀬にもかなり定期的に休みを与えないとまずいことになりうる。

そんな中、さゆは「私も…」と小さく呟いて大きく息を吸った。

そして大きな声で…

「——ぎょ・きよ・うりよ・くくく・だ・さ——痛っ!!!」

…うるせえ！

！
最初の一言聞いた瞬間思わず目と耳を塞いでしまったじゃねえか

それこそ光が抑制してくれたお陰で途中で止まったのだが。

因みに光は手でさゆの頭をグリグリしていた。痛いやつだこれ。

「お前は、人を脅してどうすんだよっ!!」

「い、痛っ痛いー!!」

うーん、本人も悪気はなさそうなのでここはあえてノーコメントで。

本気で取り組もうとしてる分には文句は言わない。

「おい光、そこまでにしとけ。悪気なんてないみたいだし。それと光、ちよっと配る範囲広げてもらえるか？まとまっても効率が悪そうだ。」

そう言っつて俺は少し離れた位置を指さした。遠くになるが日陰で

出来るという点を考えれば悪くは無いはずだが…。

「ok。おーいまなかー！動くぞー！」

ついでに近くにいたまなかも呼んで光は俺が刺した場所へと動いた。

さて、俺も動きますかね。

因みにあの後のさゆは小学生らしく元気よく大きな声で作業していた。さつきのは単に力みすぎだろう。

それに釣られるように美海も小さい声ながら少しずつ作業を開始していった。

そして、ちよつと遠くで作業していた要が目に入ってきた。

「奥さん、その綺麗な奥さん。僕に、力を貸してくれないでしょうか？」

「ま、まあ、仕方ないわね……！」

うーんこの…。

要は表情の扱い方が上手いと言っただらそうだ。

現にこうやって口説き落とし… 違う、協力要請がスムーズにいつてるわけだし。

まあ、これも個性というか取り柄だったりするのだろう。

一方休憩組の方には、水瀬とちさきがいる。お互い今までそんなに話している雰囲気は無かったが、意外と会話が弾んでいるようだ。

まあ、2人の性格上ぶつかることはないと思っていたが。

とりあえず盗み聞きする趣味はないので自分の作業に集中することにした。一瞬、お互いに顔を赤くしてる瞬間を見たが気にしない気にしない。

そんな作業の途中、サヤマートからあかりさんと至さんが出てきた。

その距離の近さを見る限りもう問題はなさそうだ。

「へえ、結構やってるんだね。」

「これくらいしないと話になりませんかからね。」

そう、何事もまずは熱意からである。

「光が言った時はどうするんだと思ってたけど、この様子なら任せても大丈夫そうかな。」

あかりさんはそう言っただけで一息つく。たしかに無謀なことである分心配はあったのだろう。ましてや光の場合真つ直ぐに言えない部分が多いのはあるし。

「おいあかりー！署名してくれよ！」

出てきたあかりさんに気づいたのか光は一旦向こうでの作業を止めてこっちに走ってきた。

「はいはい焦らない。分かっているから。」

「そうだ、何か手伝えることはあるかな？」

至さんの問いかけに俺は一瞬考えた。

漁協の人間とはいえ、さすがに確定してない段階で漁協内で行動を起こされるとトラブルになりかねない。手助けを貰うとしたらその後になると思う。

「そうですね、今はちよつとないですけど漁協側からサポートできるように説得して貰えますか？」

「分かった。」

こうして少しずつ、少しずつお船引きをやるという計画は進んでいった。小さいが着々と1歩ずつ進んでいる。

もがいてもどうしようもならないはずのイバラの道を。

第33話 大人と子供

——遥 side ——

あれから数日、集まった署名を元になんとか会議を開かせるまでに至った。まあ、その間に汐鹿生の宮司である灯さんと光の間に一悶着あったそうだが、そこはあかりさんの尽力もあり、なんとかなった。陸の方はと言うと漁協の若い人達が主体となり訴えかけてくれたらしい。そのおかげでこちらは多少は楽だった。

至さんにも保さんにも多少は協力してもらった訳だし、そこは感謝しなければ。

さて、会議の方が案の定空気が重い。

陸の重役が3人、海の重役が3人、そして俺と紡と光と先生と、端の方に水瀬がいる。

ついでに言うとう海の方には灯さんがいる。まあ、宮司だし。

結構ガタイのいい大人ばかりなぶん殴り合い発展は怖いのだが、まあ、どうにかするしかない。

窓の外には制作に係わったメンバーのほとんどが待機しているが、相手が大人なぶん期待はできない。

ましてや美海だけは絶対に入れない。危険すぎる。

本人は不服そうだが仕方がない。

「で、ではく始めましょうかねえ？」

「先生、ビビりすぎ。もうちよつと堂々としてよ。」

まあ無理もない。先生の性格なら間違はなく気圧されるはずだ。

そんな若干震えてる声で、先生は司会を始める。

「ええ、中止になったお船引きについてです——」

「此処に署名がある。俺と遥、波中の奴ら、それに陸の奴らみんなで集めたんだ。それに、そこのおじよしさまだって陸の生徒と俺らで協力して作ったんだ！」

光は先生の言葉を遮って強気で言い放った。こういうとき、気の強いやつは役に立ったりする。気圧されてばかりでは優位に進めれないからな。

「これが子供が頑張つて生み出した協力の結果です。大人の事情がどうかは子供にはわかりません。ですが、子供にできることが大人にできない、つてのは、示しがないんじゃないでしょうか？」

遠回しに言おうと思つたが、ここは意地の一発ということと率直に意見をぶつめた。憎まれても仕方がないがそうなたらその時だ。

そんな俺の意見を聞いて漁協の人はおじよしさまを見上げ、おお・・・と小さく声を上げた。海の間人の方は相変わらずな態度だつたが。

「これは、すげえ。誰が彫つたんだ？」

「それに、供物もちゃんとしてらあ。子供が作つたとは思えん。」

「俺らの昔も、困難だつたよなあ？」

「これを本当にお前らが・・・？」

海陸関係なく口々に感嘆の声が上がる。どうやら評価は高いようだ。

「そのオジヨシサマ、遥が作つたんだぜ。顔を彫るのに、結構な時間をかけてな。」

光が説明する。まあ、ここで褒められても嬉しいかと言われたら微妙なところだが。

「ふむ、お前がか遥。」

「ええ。ここにあるものの全部が、協力のカタチです。これを見て、なんにも感じないんですか？」

「ふむ・・・」

灯さんはそう言つて腕を組んで黙る。

「えつとく・・・まあ、生徒達も頑張つていることですし、どうですか皆さん？ 此処は陸と海でのお船引きをやるつて言うのは、どうでしょうね？」

先生の言葉に、少しの沈黙が流れた。

そして、陸の大人がお互いに顔を見合わせると、先に口を開いたのは陸の頑固者共。

「しゃあねえな、こつちとしても、お船引きはやりたかつたんだ。」

「おうよ、こつちとしても神様を疎かにするのもいけねえしな！」

それに対して、海の灯さん率いるオジサン達も……。

「坊主どもがこんな立派なもんを作り上げたんだ。灯さん。」

「こつちも、過去のことは水に流そうや。」

海の大人2人組は灯さんを見て、そう口に出した。

だが、やっぱりそう上手くは行かないものだ。

ここに来て陸の大人はまた余計なことを口にした。

「じゃあ、早ようせんか。」

「何や?」

陸の連中一人の言葉に、海の連中の一人はそう聞いた。そう言った陸の連中皆がそれぞれにニヤニヤとし、謝罪の言葉を促す。

「そんなの決まつとるやろ。謝罪や謝罪。」

「はあ!?何でそんなもんこつちが——大体、やらないと言い出したのはそつちだろっ!!」

「うるせえ!大体は数年前に海村が言い出したんだろ『金がないから小さなものにしてくれ』とか言ったのは、何処の何奴だツ!!!」

突如として始まった喧嘩に先生はあたふたし、ここまで口を開かなかった水瀬も立ち上がってどうにかしようとしていた。

が、どうこうできるわけでもなく、大人は机を乗り越えて今にも殴ろうとしていた。

「やれやれ……。」最終手段”を使うしかないのか。

そう思つて俺は大人と大人の間割って入った。

「なんや!ガキはすつこんでろ!」

海の大人一人が俺をつまみ出そうと腕を出してきた。その腕を精一杯潰す勢いで握り返す。

「まだ分からないのかよ……。おい、大人がこんなのでどうするんだよ!おい!!」

自分でも驚くくらい大きな声だった。

そう、俺の考えていた”最終手段”、それは、自分自身が全体の敵

になることで、焦点をずらすことだった。

「お前らは… お前らは子供に何を伝えたいんだよ!? さっきも言ったがな! 子供にできて大人にできないことがあつてどうすんだよ! 何のために早く生まれたんだよ! ああ!!」

「黙れこのガキ!! 黙ってりやいい気になりやがって!」

腕を抑えた、といつても大人はひとりじゃない。俺は後ろから抑えられ、思い切り殴り飛ばされた。

そのまま2撃3撃、何度も何度も殴られ、徐々に身体感覚も鈍くなり、意識も少しずつだが朦朧としてきた。

遠くから光の怒声と、水瀬の悲鳴とが聞こえてくる。光は何度かこっちに来ようとしたが、目が合う度に光を睨みつけ、こっちに来ないようにと言うのを伝えた。

そして最悪なことに、吹き飛ばされた俺の身体がおじよしさまにあたり、しつかりと折れてしまった。

「やめんか! 寄って集って大の大人が見苦しい。」

状況の重さに気づいたのか灯さんが抑止の声を出した。それを聞いて大人達は一旦手を止めた。

静かになったおかげか、ここに来る足音を俺は感じ取った。ここで至さんが来るのだけはまずい。どうにかしなければ。

身体は腫れに腫れ、部分的にはもう感覚が麻痺しててくらいだが、アドレナリンのおかげか脳は冷静だった。

声に出せば大人に気づかれる。アイコンタクトで伝えれるとすれば…。

そう考えた結果、俺は水瀬にアイコンタクトを送った。水瀬はこっちを見るなり感じ取ってくれたのか外の様子を見に行った。

が、水瀬はその人を止めることは無かった。

なぜなら、入ってきたのは至さんやあかりさんではなく、保さんだったから。

第34話 雨に打たれて

——千夏 side——

世界ってなんでこうも上手くいかないんだろう。

私達が努力して、協力して作り上げた1つのカタチは、なんでこうも簡単に受け入れて貰えないのだろう。

大人は言う。大人には大人の事情がある、と。

でも、公表されないそのことで、このカタチを壊していいものだろうか。

いいはずがない。

なのに、それを分かっているながら。

私は何も言い出せなかった。ついには島波君が目の前で大人に殴られるまで至ってしまった。

なんとかして止めさせたいと、隣で先島君がうずうずしている。けれど、先島君を止めているのは紛れもない島波君だった。

「やめんか！寄って集って大の大人が見苦しい。」

海側の1人の静止の声でようやく一旦喧騒が収まった。

大人に紛れてチラチラ視界に移る島波君はかなりボロボロになっていた。おそらく所によつては折れてるかもしれないくらいに。

そんな島波君は、平気そうな顔をしながらこちらを見る。そして、目が合った瞬間、ドアの方を向いた。

その時、私は遠くで足音がしてるのを聞いた。恐らくこの部屋に入ってくるのだろう。

外に待機している他の生徒達だろうか？

なんにせよ、この場に入れるのは良くないはずだ。多分、島波君はそれを思っでこつちにサインを出したのだろう。

私は、今自分に来ることをした。

そう思っで、ドアの外の人物を確認しに向かった。

「千夏、ちよつとどいてくれ。」

え？

私はその場で立ち止まった。

お父さん!?

——遥 s i d e ——

ドアが開く。そこにいたのは保さんだった。

「… おい、これはどういう状況なんだ?」

部屋へ入るなり、保さんはそう口にした。

普段は口数は少ないが性格は温厚。そう思っていた。

その性格相まってか、手を出すような素振りは見えないが明らかに怒気を隠せていないのが分かる。

「えっと、その…」

「…」

漁協の大人は返答に困り、海側の大人はもう黙っている。

因みに俺が殴られた相手は海側の大人だったのだが、ごちゃごちゃになってる以上漁協側の大人は自分たちがどこまでやったのか把握していないみたいだ。

「… もういい。とりあえず遥君、一旦外に出てもらいたいんだが、立てるか?」

「ええ、大丈夫ですよっと…」

明らかに大丈夫では無い身体を起こそうと机に縋りながら立つ。いくらか身体の軋む音が聞こえたが、今はそれどころではないくらいな状況なので痛みは感じなかった。

そうしてフラフラしながら俺はドアの外に出た。

そのドアの外は暗く重たい雲が覆い、長く止みそうにない雨が降っていた。

俺はそのまま保さんの車に乗せられて、どこかに向かった。まあ、恐らく病院だろうが。

因みに、その後会議がどうなったかは知らないが、成功はしていないだろう。

あれが壊れてしまった今、もう知る必要は無いのだから。

車内では状況確認だけが行われた。

それ以外には話す内容も無し、話せる雰囲気でもなし、そんな状況だった。

隣には水瀬が座っている。とりあえずあの喧騒に巻き込まれたのは俺だけだったので、そこに関してはよくやった方だと思う。

力の差なんて、知れてるからな。

そして着いたのは案の定病院だった。

それこそ今回は救急車で運ばれるほどの怪我ではなかった。が、十分大怪我だったということで、しっかりと診察、検査された。

この先生がまた癖が強かった訳だが、まあ今はどうでもいいか。

診察の結果は数箇所打撲（強めの）、及び足にヒビが入ってる、との事だった。

さて、この診断結果には困った。

何せ足をしっかり固定され、数日間は杖での行動のため、海に帰ることができないのである。

入院ならまだなんとかなるが、丁度中途半端なラインらしい。

… まあ、あの喧騒があつて堂々と海に帰る方も馬鹿な気がするが。

処置が終わり、外へ出ると、保さんと水瀬が待っていた。

二人とも神妙な顔つきをしているが、仕方の無いことだろう。

「… 確認するが、診察結果はどうだった？」

「全身打撲、及び足にヒビ、だそうですね。まあ、ポツキリと折れてるよかマシですね。顔もそんなに殴られた訳でもないですし。」

「そうか…。」

保さんはそれつきり黙る。水瀬の方はずっと下を向いたままだった。

そして数秒後水瀬は顔を上げた。その目には少し涙が浮かんでい

る。「バカなんじゃないの!? あんな無謀なことして、自分だけ傷ついて終

わらせて！それで何かを守ったつもりにならないで！… 私が、私たちが望んだのはそんなものじゃない!!」

それは明らかな怒りだった。
強く強く握りしめられた拳はその全てが伝わってくる。

「… なら他に、どうしろってんだよ。ただの話し合いで通じる連中でも無く、互いに因縁がある相手。どうやって協力させればいいんだよ。… 最悪、あそこにいた全員を巻き込んでしまう可能性もあった。ならあれ以外、どうすればいいんだよ。」

俺は力なく返す。

ああ、拗れてしまったんだな。善としてやった、1つの行動で。

「何のために私達があそこにいたか、考えてよ…。ただ見てるだけなんて、そんなの…。」

それ以上言葉は出なかった。

「…。」

場に沈黙が流れる。次に口を開いたのは保さんだった。

「遥君、これからどうするんだ?… 少なくとも、海には帰れる状況ではないだろう?」

「… そうですね。流石に水に浸かるのはドクターストップが出てます。」

「ふむ… そうか…。」

そう言うなり保さんは1人で頷き、何かを考えついたようにこつちを見た。

「当分の間、うちに泊まらないか?」

第35話 ひとりじゃない

——千夏side——

ただ見てるだけだった。

目の前で傷ついているのを見ていながら、私は何一つできなかった。

ずっとずっと、後悔だけがグルグルと回っている。まるで、車の夕イヤのように。

そんな私を乗せて、ただひたすら走り続ける車の窓には、重く暗い雲と、止みそうにない雨だけが映っていた。

それから数分後、車は病院へと着いた。

とはいえ、私に関係することは何も無く、また、私に出来ることも何も無かった。

だからその場においても意味が無いため、私は一人、雨の止まない外で待つていた。

それからまた数十分後、診察が終わり、処置が施されて出てきた島波君は涼し気な顔をしていた。

出てくる数分前に外に出てきたお父さんが確認をとる。

「…確認するが、診察結果はどうだった？」

それに島波君は表情一つ変えずに淡々と伝えた。

「全身打撲、及び足にヒビ、だそうですよ。まあ、ポツキリと折れてるよかマシですね。顔もそんなに殴られた訳でもないですし。」

なんで…？

私は一人何かに苛立ちを覚えていた。

苦しくて、痛くて、辛いはずなのに表情一つ変えない島波君にだらうか。

それとも、何も出来なかった自分にだらうか。

ただ、心は単純で。

気がつけば私は大声で叫んでいた。

「バカなんじゃないの!? あんな無謀なことして、自分だけ傷ついて終わらせて! それで何かを守ったつもりにならないで! … 私が、私たちが望んだのはそんなものじゃない!!」

そして気づく。

違う。

私が望んだのはこれじゃない。

私が言いたかったことは…

そんな中、島波君は1人力なく呟いた。

これは、素の弱さだろうか。でも、今はそれを見れるだけであリがたかった。

「何のために私達があそこにいたか、考えてよ…。ただ見てるだけなんて、そんなの…。」

そう言つて私は黙る。

けれど結局その最後の言葉でさえ、ただの自分の欲でしかなかった。

そこから先は、あまり考えないようにしたため、ほとんど覚えていない。

ただ一つ、お父さんが島波君をうちに泊めることを提案した事を除いて。

——遥 side ——

特に断る理由もなく。というかむしろ断れる状況でもなく。

俺はとりあえず通い慣れた水瀬家へと辿り着いた。

「とりあえず客間でいいだろうか?」

家へつくと保さんが色々と仕事の荷物を搬入しながら問う。この家は2階建てだが、客間は1階。一応杖を使わなければ行けない状況なぶん、この配慮は有難かった。

「ええ、そうしてくれると助かるんですけど…。色々荷物の方、どうしましょうかね。光らに頼むのは色々面倒なので最低限現状を

理解してくれてる人だと有難いんですが。」

「ああ、そこに関しては問題ない。」

曰く、至さんらに、もしものことがあったら頼む、と連絡をしていたそうだと。

保さんは漁協に着いた際、そこで至さんらに会ったそうだと。

2人は部屋の中に入ろうとしていたそうだが、やめておいた方がいい、と止めたそうだと。

理由は俺が懸念した通りのことだったが、その場でストップをかけるあたり、保さんは判断力が素晴らしい人間だと思う。

とのこと、どうやら今日中にあかりさんが取ってきてくれるそうだと。

…まあ、光から話を聞いたらいよいよ海から出そうな気がするが。

ついでに言うと、今日に限って家の鍵を持ってでるのを忘れていた。

吉と呼んでいいのか凶と呼ぶべきなのか、それはさておき、荷物のほうもこれで一件落着。

しばらく話した後、保さんは部屋から出ていき、俺一人となった。いよいよ準備が整ったので、一旦休憩する事にした。

それこそ今になって身体中が痛む。

動けないことは無いのだが、変に動かして悪化させるのも良くないので、とりあえず横になった。ちようど部屋が畳なのが助かる。

俺は1人、虚空の天井に手を伸ばした。

俺は、前に進めてるだろうか。

失うことに慣れてしまったあの日から。変わるって決めたあの日から。

考える。ただただ考える。

…

…はっ！

どうやら眠ってしまったっていたようだ。

時計に目をやる。

時刻はすっかりと夜になっていることを告げていた。

ふーむ、まあ、いいか。

寝てしまった分、考えていた事を忘れてしまったが、そこまで大事なことではなかったはずだ。

俺のいる部屋の外からは保さんと夏帆さんの話し声が聞こえてくる。

さて、夕食のことについて全く聞いてなかった訳だが、これは外に出るべきだろうか？

そんな懸念を他所に、1つの足音がこちらに向かってきた。

向こうでの会話が終わってるみたいなので、来てるのは保さんか夏帆さんのどっちかだな。

そんなことを思っていると、確認なしにドアが開けられた。

そこにいたのはやはり保さんだった。

「どうしたんですか？」

「ああ、潮留から電話がかかってきたんだが、曰く彼女さんがまだ帰ってきてないそうだ。…こういうとき、大体何が起こってるかとか分かるか？」

なるほど、さっきの夏帆さんとの会話はおそろくこれだな。

そこで答えが出なかったからこちらに来た。

まあ、《あれ》は普通に過ごしてたら体験することはまずないからな。

「とりあえず、至さんらがアパートにいるはずなのでそちらに向かいましようか。…よいしょっと。」

俺は杖を立て、それを支えにして起き上がる。

こういうケースの時は直に言った方が早い。とはいえ、電話越しでは厳しいだろう。オマケに、何かあったあとでどうにかして陸に上がってきてこっちの家まで来てもらうのは手間だろう。

「そうは言ってもお前は怪我してる状態だしな『大丈夫です。』…：そ
うか。」

そうだけ言うと保さんは黙って外に向かった。俺もそれについて行く。

「あら？お出かけ？行ってらっしゃい。」

後ろから呑気な見送りがあったが気にしなかった。

そしてまた車は走る。終わりのない夜の中で、何なを目指すように。

第36話 瞳の奥に

——遙side——

数分後、至さんらのいるアパート付近に着いた。

至さんと美海はアパートの外に出て、至さんの方は少し狼狽えている。まあ、らしいっちゃあそうだな。

「ああ、遙くん！来てくれたのか！」

「ええ。というか真っ先に俺に聞けばわかるっていう発想、俺は悲しいですよ？」

「うーん…。でも問題児だったってあかりから聞いてたし…。」

うーんこの…。

「ところで、揃ってるようだし状況説明してくれないか？」

「あかちゃん、どうなってるのか分かる？」

美海と保さん両方から催促されてるので言った方がいいだろう。

「ま、そんなに大層な事じゃないと思うんですが、まあ、ウロコ様に足止めかなんかされてるんだと思いますよ？」

「ふむ…。そうまでする理由が、ウロコ様にあると言うのか？」
ある。

大体の大人は子供に黙ってるが、いらぬことまで勉強すると意外と大事なもので知ってしまう。

そうして俺が知ったこと、それは…。

だんだんと世界の崩壊が近いということである。

それに、海の人間の人口も徐々に減ってきている。いずれはいなくなることも考えれる。

基本、海とirikで生まれた人間はえなを持たないとされ、さすれば衰退は間違いないはずだ。

だから、おそらく1人でも外に出したくないのだろう。

であれば、足止めの一つや二つあって当然だろう。

「あります。詳しい話は確定してませんが。海側にはきつと、あかりさんには出ていかないで欲しい立場なんですよ。」

「あかちゃん、こっちにもう来ないの…？」

不安げに美海が尋ねる。

そこはあかりさん次第だが、きつとそんなことは無い。

何よりあかりさんは、美海の母親になると覚悟を決めている。

こんなことで投げ出すはずがない。

「いいや、それはない。あかりさんも覚悟をちゃんと決めてる。これで終わりなんてことはきつとししない。」

「そう… そうだよね。」

それでも少し不安そうな美海だったが、今はこうとしか言えない。

「ところで、足止めって、どんなことなの？」

至さんが尋ねる。

「そうですね…。場合によりますけど下手すれば凍らされたりとかありますよ。あれは流石にちよつときつかったかな…。？」

思わずポロツと零れてしまう体験談。

かなりチキンの至さんのメンタルを揺らすには十分だった。

「え、ええ!?それってあかり、大丈夫なのかい!？」

「大丈夫だって、心配しない。」

急に後ろから声がする。

そこにいたのはあかりさん、…と、光だった。

えーつと、とりあえずどういう状況だ？

とりあえず混乱しているので、アパートの中に入ることにした。

「…先に帰っておく。終わったら呼んでくれ。」

そうとだけ言い残して、保さんは帰っていつてしまったが。

「なるほど、それで心配していたと。」

それからアパートの中に入り、今は机を囲んで食事に入っている。とはいえ、俺は保さんに帰って食べることを伝えておいたので食べていないが。

「実際、色んなパターンがあるんですけどなんだかんだでこれが一番

嫌なんですよね。寒いとかどうこうじゃなくて、動けなくなるし。」
小さい頃何回これをされたことか。

因みに、会議の場所にあかりさんはいなかったが、状況、事情は光に伝えられたみたいだ。光の口から、となると問題がありそうだが、今回ばかりは多分まつすぐ伝わっているはずだ。

「俺とあかりは何も悪くねえからな!... たく、ウロコの野郎!...」
少し苛立たしげに光が言う。

...
というか。

「おい、なんで光まで出てきたんだ?」

すると光はいっそう腹立たしげな雰囲気を出した。

「あんな大人連中と一緒にいられるかってんだ! 会議もおじよしめちやくちやにされて...。そうだ遙、怪我、大丈夫か?」

「ああ、まあ打撲と足にヒビが入ってるらしいけど、そこまで大事ではなかったと思う。」

「そのどっこが大事じゃないんだよ...。」

光は呆れて呟く。

でも、こんな様子を見る限り、光もだいぶ変わったなと思う。

あの当時からすれば、今こうして陸の人間とワイワイしてる時点で奇跡みたいなもんだ。

「まあともかく、怪我の方はそんなに心配しなくていい。ところであかりさん、例の分持ってきてくれました?」

「...。」

あかりさんからの返事はなく、その顔は、どこか遠い場所を悲しげな瞳で見ている。

「あかりさん...?」

「... あっ、どうしたの遙くん。」

こちらの呼びかけに今度は気づいたようで、少し驚きこつちを見る。

「いえ、頼んでたあれなんですけど...。」

「ああ、うん。一通り持ってきたよ。遙くん、普段から荷物を結構綺麗にまとめてたんだね。光とは大違い。」

「うるせえよ、片付けなんて最低限でいいだろ！」

「結構大事なんだけどな……。まあ、そこは置いといて、荷物のほう後で受け取りますね。」

「うん、そうして。」

…

「どころでき、あかり。これでよかったのかい？」

一瞬の間を置いて至さんが話題転換をする。

「…何が？」

あかりさんはキョトンとする。が、お構いなしに至さんは続ける。

「いや…。昔ね、みりもそんな目をしてたんだ。」

「目…？」

はあ…。なんでこの人こんなに口下手なんだろう。

でも、言いたいことはわかっている。

俺がさつき呼びかけた時に遠くに向けてた目は、まさしくそれだ。

「つまりですね、至さんはこういうことを言いたいんですよ。『みりりは海を抜け出す形で僕の妻になった。でも時折海の方を悲しげな瞳で見つめていた。きつと、海の人にも賛成されて結婚したかったんだと思う。今のあかりの目も、そんな目だ。』って事ですね。」

「な!?!…。でも、大体あつてるかもしれない…。でも、みりもそんな目をしてたって、気づいていたの？」

勝手に気持ちを代弁されて普通なら怒るところだが、この人にはそれが無い。その優しさもまた魅力なのかもしれないが。

「まあ、昔ずつと通ってましたからね、ここに。ずつといれば、それだけ相手のことも分かるんですよ。」

そう、その後に起こる悲しいことだつて分かる、知らされる。

でも、そこまで進まなければいけないこともあるのかもしれない。

「至さん…。それって、プロポーズ？」

「えっ? あっ…。そ、それは…。」

慈愛と喜びが詰まった微笑みをあかりさんは至さんに向ける。至さんはあたふたしてるが顔は赤い。もう、そこまで考えているのだから

う。

そのまま談笑は進んでいった。

時折赤面したり、時折大声が上がったり。

その雰囲気は明るいついという文字そのものだった。

ただ1人、美海を除いて。

第37話 見えない弱さ

——side——

アパートでの一悶着も終わり、荷物を受け取りそろそろ帰ろうとしたその時、ずっと無言だった美海がちよいちよいと手を招いてきた。

とりあえず近づいて耳を寄せる。そして美海は

「ねえ遙。ちよつと話があるんだけど…。ごまかせる？」

と言ってきた。

まあ、さっきの雰囲気についての何かしらだと思っただが、とりあえず聞かない理由はないので素直に従う。

「すいません、美海とちよつと外へ出てきます。」

「そいつはいいけど、あまり遠くへ行かないようにね。あ、電話かけておいた方がいいかな？」

至さんはすんなりとokを出してくれただけでなく、俺の用事のほうも

気にかけてくれた。

「そうして貰えると助かります…。じゃあ、行こうか。」

そうして俺は美海と共に一旦外へ出た。

アパートの外は夜ということもあって先程よりだいぶ涼しくなっていた。降り続いていた雨はいつの間にか止み、その面影は少し濡れたアスファルト以外からは感じれない。

突然、遠くの方を見ていた美海が呟いた。

「…私、どうすればいいんだろう。あかちゃんと仲良くしたいって、もっと距離を縮めたいって決めたのに。全然何も出来ないままだ。

ほんと、どうすればいいんだろう…。」

その言葉からは少しの焦りと寂しさを感じた。

確かに、今日の様子を見る限り上手く話せてない様子だった。

一度拗れてしまった関係を綺麗に元に修復することには結構時間がかかる。それは俺が、何度も何度もやってきたことだ。

なら、俺もやったことの無い方法で、どうにかしてみるのはどうだ

ろうか？

言葉にするのが難しいなら、言葉にしなればいい。そういう事だ。

つまり…

「ならば、贈り物を送ってみるのはどうだ？ 想いを口にするのって結構難しいんだ。なら、言葉にしなくても伝わる方法を考えればいい。想いを何かに込めてそれを相手に渡したら、きっと伝わるだろう？」

「なるほど… そっか。」

美海は何か納得したようだ。そしてそのまま、そのついでに計画を立てる。

聞くところによると、どうやら明日になるようだ… うん、この足でいいのか？

まあ、街までは歩いていく訳でもないし、何とかはなるか。

ちょうど話が終わる頃に保さんが到着した。

「ありがとね遥。話聞いてくれて。じゃあ明日、お願いね。」

美海は手を振ってアパートに入っていく。その顔は少し満足気だった。

俺はそれを見送り、入れ替わりで出てきたあかりさんから荷物を受け取り、水瀬宅へ帰るのだった。

家へ戻って俺は夕食を取った。さすがに時間も長かったので作り置きになっていたが、まず出してもらえただけでありがたいので感謝して頂いた。

少し奥の方から夏帆さんの視線が飛んできていた。まあおそらく、今日の担当は夏帆さんだったのだろう。

思えば今日が初めて夏帆さんの料理を食べた訳だが…。

悔しいくらいに美味かった、これが。

料理のクオリティに満足と敗北感を抱きながら俺は食事を終えた。

「どうだった？ 美味しかったでしょ？」

片付けてるとニヤニヤしながら夏帆さんが聞いてくる。

「すっごく美味かったですよちくしょう…。」

「ふふん、今度はもつとすごいの作ってあげるから♪」

俺から聞いたかった言葉が聞けたのか、満足して夏帆さんはどこかに行ってしまった。今度あの人に料理教わろうかな。

そんな中、入れ替わりで保さんが近づいてきた。

この時間に、ということは、恐らくいつものやつだろう。

「行きますか？庭。」

「お、おう……。分かったのか。」

先を読まれて少し驚いている保さん。まあ、無理もないね。

「そりゃ、結構ここにいますからね。」

「まあ、話が早くていい。じゃあ行こうか。」

この人と2人で話すのは、結構楽しい。

話の話題が楽しいという訳では無い。この人と話してて楽しいことは、自分の世界が広がる事だ。

真摯に、真正面から話し合うことで、自分になかった想いが生まれたりする。

そうしてまた1歩大人になれるのだろう。

「なあ、陸と海はどうやったたら繋がれると思う？俺はあと何を頑張ればいい？」

今日は珍しく、保さんの口から弱音を聞いた。

「今日の会議のことですか？」

「ああ……。本来だったら俺があの場合にいるべきだったのかもしれない。もっと早く防ぐには、きつとそれしか無かったのかもしれない。」

「無理言わないでください。今日は今日で別の用があったんですよ？なら、流石に無理にもほどがあります。」

「そう言われればそうだが……。」

保さんは表情を険しくする。きつと、俺の怪我のことでかなり責任を感じているのだろう。

ただの自業自得に等しいのに。

「それに、海の間人だつてそう思ってる人はいますよ。どうにかして

陸と協力したい、繋がりたいって。事情が事情で表立って言えませんがね、そんなこと。」

「ふむ… そうか。」

「何かしたいと思うのもいいですけど、自分一人じゃ変えられない事だつて、あるんですよきつと。」

こんな立場で言えることではないのかもしれないが、それでも俺の意見はこうだ。

ひとしきり話し終えたところで話題を転換する。

「ところで、明日街の方へ行つていいですか？」

「本来なら止めるべきなんだろうが、そうだな…。」

どうやら保さんは判断を渋っている様子なので、究極の一手を耳打ちする。

…

「そうか… 怪我してることは忘れるなよ。」

そうしてなんだかんだで承諾を取れた。これで明日は気兼ねがなくして済む。

そんな訳で、足に怪我を持っていながら俺は、美海についていくことにした。

第38話 似たもの同士

——遥 side ——

今日は街に行く、とのこと、俺は集合場所である駅近くの公園に来ていた。まあ、徒歩できた訳では無いが。

「お、もう来てたのかよ。」

「おはよう遥。」

次に来たのは光と美海だった。まあ、同じところに居るわけだから一緒に来るとは思ってたけど。

「お前、本当に大丈夫なのかよ?」

「これが松葉杖2本の方だったら、ちよつと考えてたけどな。」

幸い、固定の幅は広くないので、今後のことを考えて、片方しかないタイプの杖にもらった。

「おはよー! ひーくん、はーくん、美海ちゃん!」

「おはよう、皆。」

「おはよう、皆早かったね。」

ちよつと海村勢も合流する。

時間に余裕はあるが、あまり街に行つたことがない分、切符等で戸惑う可能性も十分高い。

ちよつと時間に余裕のある方がいいだろう。

それにしても…。

「なあ光、お前おしやれとか絶対興味ないだろ。」

「はあ?なんでそんなこと!」

そう、こいつだけ明らかに服がテキトーだ。何故かっていつもの普段着、よく見なれた服装だからだ。

「ひーくんひーくん!お洒落は大事だよ!」

拳句の果てにまなかにまで言われる。そういうまなかの方はと言うと女の子というだけあってそこはちゃんとしっかりしていた。

では男ならテキトーかと言われればそうでもない。俺にしろ要にしろ、それなりにそこは意識しているというのは服装から分かる。

「うるせーよ!いらねえだろそんなこだわり!」

「光、それじゃモテないよ?」

「まあ、なんだ。今度俺と要でお前に合う服だのなんだの見てやるよ。」

「だからいらねえって!」

そんな不毛な言い争い(?)をしながら、俺達は駅舎内へと向かっていった。

それからして、例の問題点である、切符売り場についた。

混乱を避けるため、あえて俺は先へと進んで行った。

一応、小さい頃から何度も街には行ってるので、値段は変わらないはずだ。

「さてと... お、これだな。」

620円。時代は変われど値段は変わらずだ。

とりあえずあたふたされる前に買っておこうか。いつそ全員分でもいいな...。

切符を買おうと料金の入れ口に手を伸ばした時、別の誰かの手に触れた。

「っと、すみません... って」

「ああ、島波か。お前も街に行くのか?」

ぶつかったのは紡だった。

どうやら怪我のことについては何も言わないようだ。個人的にはそっちの方がありがたかったりはするが。

「ちよつと用があつてな。」

「なるほど。せつかくだしそっちについて行ってもいいか?」

一応事の責任者は美海だが、まあ許してくれるだろう。

「人数がいてくれた方が助かる用事だから、そうしてくれたらありがたい。」

「分かった。」

と同時に、光達が駅舎内に入ってきた。

俺はあえて全員分の切符を買っておき、一人一人に配る。

「ほれ。」

「え、いいの？遙。」

ちさきが困惑しているが気にしない。まあ、ご好意ということ。

「一応こうした方が勝手がいいしな。あ、お金入らないから。」

「あ、ありがとう……。」

他一同も似たような反応だったが変に気にされる方が苦手だ。

そして俺は着いた電車へと乗り込んで行つた。

電車の席の配置は2人座れるシートが向かい合う感じの部分と、横に並ぶタイプの部分と別れていた。

結局座り方は俺と美海が隣、向かいに紡が座り、通路を挟んで向こうに光と要、まなかとちさきが隣り合わせ、という座り方になった。

電車が動き出して数分。それぞれが談笑したり、菓子を食べたり、寝たりなど様々なことをしていた。

「ねえ、遙。本当に喜んで貰えるかな……。」

突然、隣に座っていた美海が弱気で呟く。

「大丈夫だつて。贈り物されて嬉しくない人間なんてそうそういない。それに、あかりさんなら美海に送つて貰えるだけで嬉しいはずだぞ？」

「そうだといいんだけど……。あと、何がいいんだろう？」

うーん、これには返答に困る。

やはり長く残るものだろう。形あるものに想いを込めるのなら、その形はいつまでも残つてなければいけないはずだ。

となると何があるだろう。リングだろうか、ピアスだろうか、ネックレスだろうか。

「そうだな……。それは見てから決める、でいいと思う。けど、長く残るものの方がいいはず。」

「そつか。」

実際、選ぶのは美海だ。ならば、美海自身が見て決める。それが一番いいだろう。

「なあ、ちよつといいか？」

話が終わると同時に今度は紡が話しかけてきた。

「ん、いいけど。…待った、そっち行く。」

幸い席が向かい側なのですつと場所を移った。若干美海が不機嫌そうだが、すぐ戻るわけだしということを目で伝え、納得してもらった。

「で、なんだ？」

移動し終わった俺はもう一度聞き直す。

「ああ、…ちよつとお前のことについてもう少し知りたくなった。」

「え、何？こつち？」

俺は右手を左の頬の方に添えた。

「すまん、言い方が悪かった。その、お前の家族の話とか、まだ聞いたこと無かったから。」

なんだ、そんなことか。

それこそ、紡と最初に話した時は、深く関わるつもりなんてないと考えてたっけな。

最も、久しぶりに陸にあがってから経験した色んな事で、そんな気持ちなんて消え去った気もするけどな。

「面白い話じゃないぞ？」

「問題ない。」

…

それから俺は、紡に洗いざらい話した。

紡は表情を変えることなく頷き、また相槌を返した。

そして聞き終わって一言。

「そっか。案外俺と似たようなもんなんだな、お前も。」

との事だった。

そこで話は終わり、俺は元の位置へ戻った。

そのまま電車は進んでいく。まだまだ、街までは時間がかかりそう
だ。

第39話 伝えたかった言葉

——ちさきside——

私は遥が好き。

ずっと前から好きだった。そして今も変わらない。

でも、その思いは届くかどうかわからない。

きつと私は自分でも分かるくらい性格が悪い。

いつか光に言われた。「大人ぶりやがって！」って。

多分、光は当時すごくイライラして言ってたんだと思う。私もその時はすごく腹が立った。でも、言い返せなかった。

だってその通りだったから。

自分自身で変わりたいと思っても、周りの環境、みんなには変わって欲しくない。

理不尽だよな。

でも、無謀な願いでも。

私は遥が好きだってことを、遥自信に伝えたい。

だから私は……

——遥side——

電車で揺られ約1時間、ようやく街へ着いた。

降りてみて分かったが、ここもやはりそんなに変わらないみたいだ。

1人になっても何度かは来ていたので、それなりに景色には慣れる。

「んんっ！」

「ふわあく……。」

寝ていたメンツも背伸びやあくびをしながら降りてくる。

そのまま駅舎を抜け、街の広場の方へと抜けていった。

「ところで紡、用事があるって言ってたよな？」

「ああ、といっても10分くらいで終わるくらいの用だし、ちよつと途中で抜けるくらいだと思う。」

「そっか。それ以上は聞かないでおこう。」

知らぬが仏、触らぬ神に祟りなし、人の内情には一定以上踏み込まないのが基本だ。

一方その頃美海は、街のビル群らを見上げていた。多分初めてなんだろう。そしてそのままを見すぎて・・・転んだ。

「あいたつ。」

「おいおい・・・大丈夫か？」

「うん、結構久しぶりに来たから少し驚いただけ。前来た時は、まだ小さかったし・・・。」

最後の方につれ、少し声は小さくなっていく。目には少しばかりの哀愁を感じた。

そんな美海に手を差し出し、立たせる。そしてそのまま前を向き、それ以上は何も言わなかった。

「潮の香りしないね。」

「そりゃ1時間かけてくるようなところだからな。さすがに海からは離れてる。あの電車は、海から山側にかけて走ってるしな。」

「エナ乾いちゃったらどうしよう・・・？」

なるほど、まなが海との距離を気にしていたのはその為か。

「・・・おいまなか、あの看板見えるか？」

「えっと・・・『塩水あります』・・・あるんだね！」

そう、町側もしっかり配慮してくれているのである。

こういう細かいところでも、陸と海が繋がれるという気持ちが見れるのには間違いない。

「まあ、という訳だ。とりあえず色々見て回るとしようか。」

さて、あれから数軒回って見たが、これといったヒットはなかった。

一応方向はペンダントという形で決まったが。

足的にも少しではあるが披露を感じてきた頃だ。個人的には一回くらい休憩を挟みたい。

しかし、当の本人が熱中してやっているところだ。そうそう足は引つ張れないだろう。

ふと、美海の足が止まった。そのままその視線はポスターの中のペンドラントに注がれる。

俺もそれに目をやる。が、ひと目でわかった。

高いのである。

それこそ、ものがものなだけあるが、この手のものは子供の手の届きにくいものだったりする。

そんな難しげな顔をしている美海に光が追い打ちをかける。

「なんだよこれ!? たつか!!」

うーんこのバカはほんつと…。

俺はすぐく残念そうな目で光を見つめる。

「なんだよ遥…。」

光はこつちに気づいたようで尋ねてくる。が、自分で気づけないのが光だ。

「お前… 空気って読んだことあるか？」

「はあ? なんだよ急に。」

ここから先は耳打ちにすることにした。さすがにこれ以上美海を傷つける訳にもいかない。

「いや… あれ高いのつて見りやわかるだろ? もちろん美海本人も知ってて悩んでんだ。そこに追い打ちかけるように大声出して言う必要ないだろ? ほんつと女心分かってねえなあ。」

「そりゃ… 悪かったよ。」

「あ、俺に謝っても意味ないし、美海に謝っても傷を抉るだけだから次回から気をつけるのがいいと思うぞ。」

これも心理学の賜物だろうか。どのような対処が正しいのかが意外とすんなり分かった。

「で、美海、どうする? 次の店そろそろ行くか?」

「うん…。」

その返事はすぐく元気がなかった。うん、光は今度シメておこう

か。

次の店に入ろうとしたが、紡が一旦抜けると言っただけで行った。本人曰く「時間はかからない」らしいので、この店を探ってる間に戻れるとの事だった。

さて、店はビルの上層階なのだが、エレベーターの周りには結構人がいた。

次の便は間違いなくいっぱいになるだろう。

俺の場合、満員になった状態は足に良くない。そういうわけで、あえてもう一つ次の便を待つことにした。

「あれ？ 遥行かねーの？」

「ああ。満員だと怪我に悪そうだからあとの便に乗って。先に行つてくれ。」

そうして俺以外の人はエレベーターに乗って行った。

そう思っていた。

「遥。」

そこにいたにはちさきだった。

——ちさきside——

それは偶然だった。

遥は自分の怪我のことを考慮してエレベーターに乗らなかった。

それに比べ私は、乗ることは出来たけれどもあえて自分から降りた。

理由は色々ある。けど一番は

” 遥と二人きりになりたかったから ”

「なんだよちさき。乗らなかつたのか？」

「うん、私が乗って重量オーバーになるの、やだし。」

「そうか。」

そして場に沈黙が流れる。

どうしよう？

今しかないのに踏み出せない？

怖い？この告白で、今までの関係が壊れちゃうのが。

変わることを躊躇って・・・躊躇って・・・

それでも、私は・・・

私は・・・伝えたい。

私はずっと遥に抱いてきた一途な想いを。

「ねえ、遥。ちよつと聞いてもらっていい？」

「うん、なんだ？まあいいけど。」

「ありがとう・・・そう、遥は優しいよね。いつつもそう。今日だって美海ちゃんのために怪我をした足をどうとも思わずここに来て。それだけじゃない。私も、皆も、ずっと遥に助けてもらった。だから私ね・・・。」

そう言つて1度深呼吸。暴走してる心臓は止まらないがそれと同じぐらい気持ちも高鳴ってる。

「私ね・・・遥のことが、ずっと大好きなの。」

第40話 純白の想い

——side——

「私ね…：遙のことが、ずっと大好きなの。」

それは告白だった。

回り道も、遠い言い回しもなく、ただただストレートな。

その一言には、ちさきの全てがこもっていた。

「…。」

俺は何も言うことが出来ず、少し下を向いた。

どうやって断ろうか、どうやって受けようか。

そんなことを考えていた訳では無いが。

「遙？」

ずっと黙ったままの俺を心配したのかちさきが様子を伺う。

なんとかそれに応えるようにと俺は声を出した。

「なあ、ちさき…：1つ謝ってもいいか？…：受ける、振る以前の事
で。」

「う、うん。」

「俺はさ…：好きになるって、分からないんだ。光のように、素直にな
れずな分からない、とかじゃなく、もつと別なことなんだろうけど。

…：分からない、ではなく、怖い、のかもしれないな。ああ、きつ
とそうだ。」

何を言ってるのだろうか？

ごちゃ混ぜになった感情の、伝えたい部分だけを言葉にするが、ま
るで文になってなかった。

「それで…：ごめん。今の俺には、ちさきの告白に答えることができ
ない。だから…：考えさせて欲しい。好きになることについて、もつ
と悩んで、分かりたい。」

それを聞いてちさきは小さく微笑んで呟いた。

「やっぱり遙は優しいんだね。」

その一言の意味は考えなかった。

何故ならその声は美しく、悲しいものだったから。

「お、ここに居たのか。」

ちやうどタイミングがいいのか悪いのか、用事抜けしていた紡が戻ってきた。

「ああ、ちやうど次のエレベーター待ってたところだ。つと、そろそろ着くな。」

さつきまでの話を紛れさすために俺はあえて口数多く喋った。

そしてこの時、紡が気にしてくれなかったのは助かった。

そしてエレベーターが着く。

上へと上がっていくエレベーターの中では、それ以降会話が生まれることは無かった。

きつとそれぞれが、何かを思っていたのだろう。

その後は、町中のいたる店をしらみ潰しに探し回った。

ついでに、【ある用】が俺にもあったのだが、一旦手分けして探すことになった際、しれっと抜け出して行った。

ほんの一瞬だけだったので怪しまれることも無く、そっちの方は達成した。

そう、そっちの方【は】。つまり…

結局、夕方になるまで町中回ってみたが、結局美海がこれと言って、かつ値段の合うものは見つからなかった。

く帰りの電車く

席の配置は行きと変わらずのまま俺達は電車に乗った。

が、雰囲気は色々とあって暗い。単に疲れでうとうとしたり、何かを思い詰めたような顔で窓の外に顔を向けたり…泣きそうなくらいおちこんでいたり。

「結局、見つからなかった…。」

美海は今にも泣きそうに下を向いていた。

こういう時は、ただ単に慰めの言葉をぶつけるのは間違いだ。

そんな価値の無い慰めは、きつとただの同情なのだから。
解決策、答え、導いてくれる何かが無ければ…。

そんな中、ふと窓の外に顔を向けていた紡が口を開いた。

「なあ、お金で買うもの、じゃ無ければダメなのか？」

「どういうこと…？」

「俺が小さい時、じいちゃんに綺麗な貝殻を集めたものを送ったことがあった。じいちゃん、その時の貝殻、今でも大切に持っていてくれるよ。」

なるほど、そういう事か。

贈り物に金銭の価値の有無はあまり関係ない。

気持ちを込めるのに金が絶対に必要か？恐らくNOだ。

なら、作ってみるのはどうだろうか？

手作りだからいい、商品だから悪い。そんなものは関係なく、ようは美海の気持ち伝われればそれでいいのだ。

「なら美海、これから作りに行こうか？」

そして俺達は驚大師駅で電車を降りるなり、すぐに海岸へと向かった。もう夕暮れ、そんなにしないうちに夜になってしまっただろう。

入る人は海に足を入れてまで探した。俺は海に入れない状態なのでできる範囲でしかできなかつたが。

そうして出来上がった1つのネックレスは、夜空の下であかりさんに手渡された。手渡されたあかりさんの表情には涙がある。きつと、想いは伝わった。そう考えて間違いはなさそうだ。

つられて美海も少し泣き笑い、その様子を見届けた俺と光の顔には達成感の籠もった笑顔があった。

ああ、暖かいな。

想えばこの時、久しぶりに好きになることよさを思い出した気がした。そしてこの時だけ、今まで感じていた好意への恐怖を、忘れて

いた気がした。

そうだ、もうひとつ、やっておきたかった事があった。
そうして俺は居候中の水瀬宅へと踵を返した。

時刻は9時前。特に門限とかは決められてなかったが、流石に遅くなりすぎた気がする。

ふう…、よし。

特に意味は無いがひとつ深呼吸をおき玄関のドアを開けた。

玄関には特に誰もいなく、いつものようにリビングに保さん夫婦がいた。

…やはり水瀬はいなかったが。

昨日の1件で水瀬との間に溝ができてしまった。

そんな中、俺はただ何をいえばいいかわからず、気づけばここまで来ていた。

だから昨日、美海と話して決めた。

俺も水瀬に贈り物をする。想いを伝えるために。

俺は保さんらとの会話を簡潔に済まし、水瀬の部屋へ向かった。

電気はついている。流石にまだ起きてるみたいだ。

俺は覚悟を決めて、その扉に向かってノックを3回した。

「…なあ水瀬、ちよつと外、出してもらえるか？」

「…いいよ。」

その顔色は何えなかったが、小さく返事が帰ってきた。

そしてそのドアが開く。水瀬の顔は、部屋着のパーカーのフードで少し隠れ、良く見えなかった。

「…。」

両者とも言葉に詰まり沈黙を作る。

そんな中、口を開いたのは水瀬のほうだった。

「…ごめん。あの時何も言えなくて、何も出来なくて。結局私は自分に何かを求められるのを待ってただけだったんだ。そっちの方が辛いと思うのに、自分の意見だけおしつけて…。」

その口からは後悔の念が溢れていた。

ただ、これだけは言える。

今回、水瀬に悪いところなんてない。

結局自分で馬鹿やって自分で傷ついただけなのだから。

ただ確かに、自分を大切にする、ということについては、どこか欠けていたかもしれない。

自意識過剰な話かもしれないが、自分が傷ついてそのせいで周りも傷つくのなら本末転倒、何も意味が無い。

そう、どれだけ目を逸らしても自分を好きでいてくれる人間はいる。

ちさきに告白されたこともその1つだろう。

だから誓う。

誰かのために自分を大切にすると。

「いや、あそこで言われたことはごもつともだ。だから水瀬、ひとつだけ約束させてくれ…。」

そうして俺は袋から箱を取り出し、水瀬に手渡した。

「これって？」

「ああ。約束の形。これを渡した以上、俺は自分も大切にすることを誓う。何も失いたくないからな。」

「…開けてもいい？」

「どうぞ。」

そう言って水瀬は箱を開く。その中に入っていたのはネックレスだった。

「…いいの？」

「ああ、お前が持っていてくれ。」

「ごめんね、ありがとう。」

さつきまで曇っていた表情はもう随分と晴れ、昨日覆いかぶさった

雨雲は、綺麗に吹き飛んだ。

2人の溝も埋まり、きつとこれまでどおりの生活に戻るだろう。

そう。この日たしかに俺は、1歩前へ進んだ。

第41話 変わりだす空

——side——

水瀬との1件も収まり、美海の方も綺麗に片付いた。そして足の方も杖が取れるくらいまで回復したある日のこと。...

どうも様子がおかしい。

朝、目覚めた俺はその寝起きの冷たさに違和感を感じた。

起き上がってカーテンを開ける。ここでは雪が降っていた。

そして今は、夏なのである。

俺はとりあえず外に出てみた。

肌で感じたが、どうやらこれはぬくみ雪とみて間違いないようだ。

「え、続いては陸の天気です——」

それから時間が経ち、今は俺と水瀬と保さんの3人で朝食をとっている。

「夏帆さんは昨夜遅番だったのでまだ寝ており、居候の身というものもあり、今日の朝食は俺作だ。」

まあ、そんなどうでもいい情報は誰も気にすることは無く、テレビの天気予報同様、こっちの会話もぬくみ雪についての話だった。

「なあ、水瀬。陸でぬくみ雪って普通降るもんなのか？」

「いや、今回が初めてだと思うけど...。父さん、昔こんなことあった？」

「... 確か、ない。いつしか夏帆がいつかは異変がどう、とか言ってたんだが、それが近いのかもしれないな。」

異変。

海でぬくみ雪が降り出した頃から度々言われてきた分だろう。海の気温などが少しずつおかしくなっていくのと同様に、陸にも少しずつ影響が出てきているようだ。

流石に、そろそろウロコ様も何か動きそうな気がするが...

「…ん？ああ、そうだ遙君。ちよつと頼まれてもらつていいか？」
「なんです？」

保さんからの呼びかけに俺は手を止めた。

「潮留さんのところに渡す書類まだ出てないの思い出してな…悪
いが、道中に届けてくれるか？」

「分かりました。」

「あ、私も行くね…いいよね？」

「全然。」

幸いこの家の朝は早いので、向こうで少しゆつくりする分だけの時
間もありそうだ。

そんなわけで、俺は朝食を済まし、水瀬と一緒に少し早めに家を出
た。

潮留家近くへ着くと、美海が何かせつせか働いていた。

見る限り、雪でなにか作つてみるみたいだが…。

こう一生懸命せつせか作つてると、邪魔するのが辛くなる。

「どうする？行く？」

「どうするつたつて…邪魔しないように行くか。」

と言つた頃ぐらいだろうか。

美海作品はどうやら完成したらしく、家の中へと入つていった。

それを見て俺達は家の方へ向かった。

ピンポン、とインターホンを一回ならす。

数秒後、ドアを開けたのは手に何かを持った美海だった。

その近くには光とあかりさんもいる。

「あ、遙、千夏ちゃん、おはよう…これ、何を作つたか分かる？さつ
きから光、雪だるまとしか言わないから…。」

美海がガツカリした目で光を見る。

「どう考えても雪だるまだろ？ところでお前ら、朝から何の用だよ。」

「ああ。保さん…水瀬のお父さんから潮留さんのところへ渡しておい
て欲しいって言われたものがあつてな。届けに来た。それと、美海の
これつてどう見たつて…。」

「ウミウシ… だよね？」

一旦区切つて堂々と言い切つてやろうとしたが横にいた水瀬に先を越されてしまった。

「… だろうな。お前ほんとに海の人間か？」

「うるっせえな！」

因みに正解はウミウシだったらしく、美海はひとりでにウンウン頷いていた。

「遙くん、それ受け取つておこうか。」

ちようど会話が終わつたあたりであかりさんが本題に入つてくれた。

「あ、お願いします。」

そう言つて俺はあかりさんに荷物を手渡す。

「ああ、そうだ美海。そのウミウシだけど…。」

受け取つた荷物をわかりやすい場所に置いた後に、あかりさんは雪ウミウシにカイワレを2本刺した。

「こうした方が、もつとウミウシっぽいかな。」

どうやらその一手はだいぶ好評だったらしく、美海はずっと嬉しそうにニコニコしていた。

しかし、ちよつとだけ表情をくもらせる。

「パパが帰るまで、残つてるかな…。」

… 冷蔵庫じゃいかなのか？

立ち寄つた潮留家で予定通り少しゆっくりした後光と合流し、いつもと変わらない時間ぐらいで学校に向かった。

が、今日は珍しいことにちさき、要、まなかの3人が先に学校に来ていた。着いた時間はいつもと同じなので、明らかに向こうが早い。

「どうしたんだお前ら？…えらい早いな。」

「あ、おはよう…。えっと、大人達が大事な話し合いがあるから先に行きなさいって言つて…。」

ふむ、だいたい予想通りだ。

この異変が起こつたことが関係するかは知らないが、いずれこうな

りそんな気はしていた。色々と知ったからな。だが、今日起こった話し合いで何が決められるのかまでは、俺もまだ知らない。

「…遥?」

ずっと下を向いて考えてたせいか、気にかけてられたようだ。

「ん? ああ。気にすんな。それより行くぞ。」

とりあえずこの場で立ち止まっても仕方が無い。

今は何も考えないように教室へ向かった。

何かとても嫌な予感から逃れるために。

第42話 それでもみんな

——遙side——

放課後。

俺の周りには陸の生徒、海の生徒多数がいた。

それこそあの時破壊されたおじよしさまだが、陸の生徒、海の生徒ともに諦める気は毛頭なく、もう一度作り直していた。

場所は紡の家を貸してもらっている。船まで貸して貰えるのと。本当に頭が上がらない。

今は、作業を分担して行っている。大体の男はおじよし様の修復作業を、女子は小物作りを、そして俺は… 厨房を借りて料理をしていた。

時間もあまりないということで、出来るだけ長く作業するために、夜までやるそう。であれば、料理も必要だろうということで、こういう状況になっている。

… 暇だなあ。

1人料理をしながら心無しかそう思っていた。

そりや何人かは来たよ？ 光が味見して文句言ったり、江川らが茶化しに来たり、後は…。

なんて思っていると厨房のこの戸が開いた。

しかも珍しいことに、訪れて来たのは要だった。

「どう？ いい感じ？」

こいつは相変わらず爽やかだ。

「んーぼちぼちか…。磯汁作ってるんだけど何か足りない気がしてなあ…。」

「ちよつともらつてもいいかな。」

「ああ… ほれ。光が味見しても文句しか言わないからなあ。真面目に答えられる人は欲しかったりする。」

そう言つて要は1口分の汁をぐいっと飲む。

「…なるほど。美味しいねこれ。けど、確かに何か足りないって気

もする。… 具材？」

「調味料ではないか…。ん？ちよつと考えついたんだけど。」
「聞くよ。」

「肉入れて見るか？たまには料理に冒険も必要な気もするし。」

それに、後で思い出した話なんだが、あの日みをりさんに食べさせてもらった磯汁には豚肉が入っていた。ということは、俺が足りないと思ってたのは、それに届きたいが為なんだろうか。

「分かった。でも…。ないよね。買ってこようか？」

要の、こういうとこで気が利くのはありがたい。

「ああ、頼む…。そうだよ、後で話があるんだけど、聞いてくれるか？」

「後ね。分かった。ちよつと行ってくる。」

そう言つて要は厨房から出ていった。

…
こいつもこいつで結構疲れるんだよなあ。

それから作業は順調に進んでいき、俺の料理もすごいスピードで召し上がられて行つた。作る側としては嬉しいことである。

「遙、遙。」

後ろからとんとんと要が肩を叩く。

「ん、ああ。さっきの話だな…。ちよつと離れたところですか。」

「聞かれちゃいけないこと？」

「聞かれたく…。は、ないかな。それこそ、多分お前が1番安心して言えそうな話だからな。」

事の重さを感じたのか要は了承して頷く。

そして俺達は家の影の方へ隠れていった。

「で、どういう話なのかな。」

「ああ…。今日、大人は会議がある、とか言つてたな。」

「そうだね。」

「恐らく、内容は異常気象…。まあ、海にせよ陸にせよの異変についてだと思う…。俺って勉強しかしてなかった時期あったろ？あの時にな、こんな言い伝えを知ったんだ。」

——海神様が力を失った時

——ぬくみ雪が陸と海に降り積もり

——やがて人間が暮らせないくらいの寒さになる

「!!」

このことについてはさすがに要も動揺していた。

「実際にうるろこ様に聞いたわけじゃない…。が、おそらく言い伝えは本当だ。だから大人達は今こんなに焦ってるわけだ。」

要がバツの悪そうに返す。

「…。それで、僕にどうしろというわけかな？」

「そうだな…。もし海の中で、会議で決定されたことについてああしろ、こうしろなんて言われたら、お前に率先して動いてもらいたいだ。光もまなかもちさきも、みんな非常時に難ありだからな。」

「買いかぶりすぎだよ…。僕だってそんなに強くない。」

その顔に笑顔はなかった。きつと要は本気でこう思ってるはずだ。

「それでもお前に言った理由は分かって欲しい…。俺が行けたら一番いいけど、恐らく例の件で大人からの目は白いし、足の方だって完全に治ったわけじゃない…。一度、ウロコ様に会って話したいけどな…。」

「分かったよ。引き受ける。僕も何か頑張らないといけないしね。」

要は再び笑顔をうかべる。それが100%作り物だということに気づいたが、俺は何も言わなかった。

——要 side ——

食材のお使いの前に後で話したいことがある、そう遥に言われた。正直、遥には苦手な部分がある。

それにこれは勝手な嫉妬だが、きつとちさきは遥が好きで、それがすごく羨ましい。

僕だってちさきが好きなのに。なんて嫉妬を。

さてそれから、さっきの件について遙に問うと、人から離れた場所を指定された。曰く、聞かれたくない話らしい。

「で、どういう話なのかな。」

僕はいつも通りの雰囲気でも話を始める。

「ああ…。今日、大人は会議がある、とか言ってたな。」

「そうだね。」

「恐らく、内容は異常気象…。まあ、海にせよ陸にせよの異変についてだと思う…。俺って勉強しかしてなかった時期あったろ？あの時にな、こんな言い伝えを知ったんだ。」

異常気象…。ぬくみ雪の事だろうか。

そんなことを思ってた僕に、それを遥かに超える答えが返ってきた。

——海神様が力を失った時

——ぬくみ雪が陸と海に降り積もり

——やがて人間が暮らせないくらいの寒さになる

「!!」

一瞬で理解してしまったのがいけなかった。

理解出来てしまったぶん、その先のことを考えてしまうからだ。

とりあえず今は、考えるのをやめて遥の話聞くことに集中した。

「実際にうろこ様に聞いたわけじゃない…。が、おそらく言い伝えは本当だ。だから大人達は今こんなに焦ってるわけだ。」

分かっている。これが偽物なんかじゃないってことを。

でも。

知ったところで僕には何ができるんだ？

「…。それで、僕にどうしろというわけかな？」

「そうだな…。もし海の中で、会議で決定されたことについてああしろ、こうしろなんて言われたら、お前に率先して動いてもらいたいんだ。光もまなかもちさきも、みんな非常時に難ありだからな。」

つまりリーダーをやれと？

ずっと遠くから見てきただけの僕が、この一瞬だけどうにか出来る

と思ってるのだろうか。

こういう時、いつも遙に頼ってばかりだったから、今こうなってるってことを、遙が1番わかっているはずなのに。

「買いかぶりすぎだよ。…僕だってそんなに強くない。」

「それでもお前に言った理由は分かかって欲しい。…俺が行けたら1番いいけど、恐らく例の件で大人からの目は白いし、足の方だって完全に治ったわけじゃない。…1度、ウロコ様に会って話したいけどな…。」

遙は自分に出来る限りあることを模索していた。それに、多分遙も僕に苦手意識を持つてるはずなのに、僕に期待をしている。これは自惚れなんかじゃなくそう思った。なら、最低その期待にだけは答えたい。

「分かったよ。引き受ける。僕も何か頑張らないといけないしね。」

いつも通り笑顔で答える。

本当は余裕なんてない。きつとこの笑顔が偽物だってこともバレるだろう。

けど今は僕は僕らしく、出来ることをやろうと思う。

どんなに色んなことがあっても、ずっとみんなでいたいから。

第43話 来るべき時

——遙side——

いつも通りの朝。

今日は夏帆さんを含めた4人で、朝食を食べ、そして水瀬と共に家を出て、学校に行く。

はずだったんだが……。

「あ、ちよつと待て。」

「どうしたの島波君。」

道すがら、俺はとつても最悪なことを思い出した。

そう、久しぶりの忘れ物と言うやつである。それも、借りれないもので。

「すまん水瀬、忘れ物したから一旦帰る。先行つててくれ。」

「別にいいけど……そんなに大切なやつ?」

「ほら……昨日配られたあれ。机の上置きっぱだったんだよ。」

「あ……分かった。鍵は今日母さん休みだから開いてると思う。あと、無理に走っちゃだめだからね?まだ治ってなんでしょ?」

「まあな。分かってる。」

それに、走つても痛いのは自分なので、ここは遅刻覚悟でも無理しないで行くことにした。

さて、案の定取りに帰ると遅刻の時間になってしまった……。遅刻つて結構だるいんだよなあ……。

朝早かったから一瞬期待してみたが、やはり時間は無情だった。

学校付近まで来た頃、よく見覚えのある制服の少年を見つけた。

まあ、十中八九光の事だが。

遅刻仲間が増えたことを内心ちらつと喜びつつ、光のほうへ向かっていった。

「よっ、遅いじゃねえか。」

「うおっ!?……なんだお前かよ……。」

後ろから脅かすように近寄っておはようと一言。こういう何気な

いいじりが意外と楽しいものだ。

そんなこんなで教室の前。授業はとうに始まっており、普通に入るのほすごく馬鹿馬鹿しい状態である。

が、倦怠感に包まれまくったせいも、悪びれた様子もなく俺達は教室に入った。

「すいませんおくれましたー。」

「…。」

教室の空気はすごいシーンとしていた。が、これはいつもと様子が違う。何か驚いているような…。

俺はすかさずあたりを見渡す。

すると、ちようどぽつかり、海村勢の席が空いていたのを見た。

同じくらいのタイミングで先生が喋り出す。

「あれ、海村の子は全員休みかと思っただけど、光君と遥君は来たんだね。」

休み？

ああ、やっぱり、やっぱりそういう事なんだな。

大人達の会議の結果は、もう既に現れていたようだ。

俺はひとりでに納得していた。勿論、許容した訳でもないが。

さて、一方の光はと言うと、俺よりワントンポ遅く事に気づいたらしく「村の連中…！」といらだちを噛み潰して荷物を放り投げて教室から走って出ていった。

さつき以上に教室の生徒が驚いている。

いやもう…こうなると動きにくいんだよ。

「ちよ、光くん!」

先生があたふたする。申し訳ないが、俺も抜けようと思う。

「先生、すいません俺もちよつと抜けます。」

「遥君もかい!?ちよ、事情だけ…。」

「すいません。でも時間が無いので。」

それ以降の返事は聞かず、俺は学校を出た。

しかし俺は、光を追った訳では無い。

光は海に迷わず飛び込んでいくだろうが、今の俺には少々きつい。無理すれば帰れないこともあるが。

なら、一体俺はどうしているか。

前に要に言った。色々分かったこと。

そのひとつの話だが、この鷲大師には、海神様と結び付きの強い神社がある。

そして現状、俺が今もつとも話したい相手はウロコ様である。

だからこれから俺はそこへ向かうことにした。

普通、そんなどこに来るはずはないのだが、だからこそ、昨日要に頼んでおいたのだ。

誰もよりそうな気配のない、木に囲まれた場所。

そこにぼつんと、一つの神社があった。

辺りを見回す。どうやら姿は見えないが……。

「やっぱりお前なら、ここに辿り着くと思っておったぞ。」

その声は、すぐ近くから聞こえた。

屋根の上の方を見やると、そこにはウロコ様が座っていた。

「要から、聞きましたか？」

「おー、聞いたぞ。あやつにしては珍しいと思ったがの。」

何かに関心するようにウロコ様は言う。

「で、昨日の会議で何が決まったか、ですが。聞かせてくれますよね？」

「なんじゃ、お主、海には帰ってこんのか？… まあ、あらかた把握しておるがの。」

帰れない理由。まあ、怪我が理由の大半ではあるが、普通にこの前の騒動で、大分絶許のような状況になっているらしい。

まあ、そんな中でおめおめ帰ろうとする方が馬鹿だろう。

「帰ってこれたらそりゃここには呼びませんよ。」

とはいえ、実際調子の方がよければ俺も海に飛び込んでいたんではないだろうか。反射的に。

少しおちやらけたウロコ様だったが、急に声音を変えた。

「お主、言い伝えのことは知っておるんじゃないやろ？」

「ええ、ざつと、ですがね。」

そして俺は現段階でわかっている言い伝えについて述べた。

——海神様が力を失った時

——ぬくみ雪が陸と海に降り積もり

——やがて人間が暮らせないくらいに寒さになる

「分かつとるなら話は早い……そうじゃな。あまりこういうのは言いたくないんじゃないやが……。」

珍しくウロコ様は躊躇った。

そして一時ためらって続けた。

「いつか来る世界の崩壊で、海村の文明が途絶えんように、冬眠するごとに決まったんじゃないよ。」

第44話 決断

——遥side——

「冬眠…ですか。」

さすがに予想してなかった俺は少し固まる。実際調べても調べても出てくるのは結果ばかり、未来なんて少なくとも中2の俺には分かんなかった。

「そうじゃの…、1度眠ってしまったら、人によるが何年かは過ぎると思うぞ。」

淡々と、ウロコ様は続ける。

「…それは強制なんですか？」

「わしとして…海神様の意思としては強制的であつてほしいのじゃがの。しかし、そう言うたところでお前は聞かんじやろ？それに、先島のとこの娘も。」

どうやら対象は、『エナを持つもの』のようだ。

とはいえ、水瀬に至つては例外なので、基本汐鹿生と関係のあるところだが。

「そうですね…。多分俺は、死んでも陸に残るんじゃないでしょうか。」

「ほう、えらく他人事のようにやのう。」

「自分でもどうすればいいか、分かりませんからね…。でもひとつだけ言えることは、海に大切な人もいる、陸に大切な人もいる。そう考えた時、海で眠つて未来を過ごすより、陸で過ごして確かな今を生きたい。きつとそう思ってるんです。」

ウロコ様はいい顔こそしなかったがうんうんと頷いた。

「お前の言いたいことはよう分かった…。じゃが遥、それだとお前は追放されてもいた仕方がないぞ？」

そうだ。陸を選ぶ時点でそれは仕方の無いことだ。

けど、今の俺はもう決心している。

「構いません。」

「そうか…。まあ、大人には伝えて置かないでおこう。光達には…」

自分の口で話すんじゃないぞ？」

「それなんです、ウロコ様。もう2つほど、お願いをしていいですか？」

「ほう？言ってみるといい。」

「少なくとも、光達が眠るまで学校に行かせてやってください。義務教育は学生の本分です。いつ起きるかわからないとしても、そこだけは。」

「これが1つ目かの？…そうじゃな、それは考えておく。」

さて、ここからが本題だ。

俺は今一度決心して話し出す。

「もう1つ。お船引きを、やらせてください。自分たちの手で、今まで以上に最高の。」

ピクリとウロコ様の肩が動いた。

「最近のお船引きは形だけだった。陸のある漁師にそう聞きました。

やっと1つになれそうなんです。海と陸が。だから、せめて繋がりがけた陸との絆を立たないために、昔あった大きなお船引きを、海と、陸とでやりたいんです。」

ウロコ様は珍しく軽く頭を抱えた。

「本来なら「ならん！」…と一喝すべきことなんじゃろうがな…。」

お主に言われるとどうもそれがしにくいようじゃ…じゃが、やろうにも厳しいかもしれないぞ？最悪陸だけの一方的な形になることも構いません。」はあ…お主は。」

決意は変わらない。

「…一応、灯に伝えてはみる。後は自分達でどうにかしろ。」

「分かりました。」

「それとな、金曜に冬眠前の宴会を開く。来れる雰囲気かどうかは知らんが、1度くらいは海に帰ってこい…決別の時間も必要じゃろ。」

そう言っつてウロコ様はどこかに姿を消したが、俺は一通り言いたいことを言い終わったので追いかけなかった。

さて、今頃光らの方はどうしてるかな。

俺が言ったように要が動いてくれたらありがたいが、そういう状況でもないだろう。

心配しても意味が無い。

とりあえず今日は市内をぶらぶら歩くことにした。

金曜は明日。宴会に参加するつもりは無いが、明日光たちに話そうと思う。

もつとも、お船引きをしたい理由はさつき伝えなかった部分にあるのだが。まあ、ウロコ様なら俺がそれに勘づいてる事を勘づいてそう
だ。

何も考えずに歩いては休憩し、そんな繰り返しをして気づけば5時
になっていた。

現在地、丁度さやマート付近。

「おっよっ。」

どこか見覚えのある…見覚えしかない姿が2人。水瀬と美海だ。
どうやら買い物から出てきたようだ。

そうだな…2人にも話さないといけない日が来るんだ。

それが今でも、いや、今の方がいいか…。

「よっ。」

真正面から2人に声をかける。

「あ、島波君何してたの!!」

「遙、学校から抜け出したって…。」

あ…。。忘れてた。

今日学校抜けてたんだったなそういえば。

「まあ、色々あったんだよ…。ただ、そのおかげで色々話さなきゃ
いけないことが出てきたんだが…聞いてくれるか?」

適当にあしらうが後半は本当。これは2人も気づいたようだ。

「うん、分かった。」

「聞いてあげる。」

そうやって俺は近場を指し示してそこに移動した。

「二人とも、この前ぬくみ雪が降ったのは知ってるよな。あれ、結構ま

「ずいんだ。」

単刀直入に俺は話を切り出した。

「まずいつて…： どういう風に？」

「確かに夏に雪が降るなんておかしいけど…：。」

二人が疑問に思ってるのでとりあえず大雑把に言い伝えの話を伝える。

——海神様が力を失った時

——ぬくみ雪が陸と海に降り積もり

——やがて人間が暮らせなくらいの寒さになる

「つまり…： 今その状況が近づいているってこと？」

話を聞いた水瀬がすぐさま反応する。

「そう。んで、ここからが重要な話なんだが…：。」

二人に誤解を招く言い順になりそうだがここはそのまま行く。

「そうして海の文明を絶やさないために、汐鹿生は冬眠に入ることを決めたんだ。」

第45話 いつかの場所

——遥side——

それから2人に怒られながら質問攻めだったが、なんとか理解してもらった。

「…で、結局島波君は陸に残るのね。」

「よかった…。」

「残る…けど、それ以上にもう1つ考えがあるんだけど。」

「まさか、両方をとる方法でもあるっていうこと？」

「そういうこと。まあ、あくまで可能性だけだな。」

「…お船引き？」

美海がぼそつと呟く。

Exactly. その通りだ。

「そう。これはあくまで言い伝えを含めた考察だけど、海が、世界が海神様と繋がってるなら、昔みたいに大きなお船引きで、海神様に力を与えれば、世界は安定するんじゃないのか？」

そもそも、海神様が何故力を失ってきたのか、そこは未だに掴めていないが。

「いやでも…確か昔のお船引きは生贄がいるって、お父さんが言っていた。事故とかはなかったって聞いてるけど。」

「…そうだな。確かに危険がないとは言えない。それこそ、これはあくまで話だよ。実際にできるとは限らない…ま、忘れてくれ。」
とりあえず俺が陸に残るという意味だけは2人に伝えて、俺は水瀬の家に帰った。

明日、一旦海に戻ることを伝えたら、保さんは少し渋い顔をしたが夏帆さんの方が快く送り出してくれた。

そして翌日。

宴会は夜ということで、俺は陸を18時くらいに出た。

久しぶりの海は思ったよりも冷え

あたかもそれは今後の暗示のような気がして
… やめた。考えてもいい気がしない。

まず、一旦家に帰った。

勿論誰もいない訳だったので、至る所に少しホコリが溜まっ
ている。

俺はそれらを掃除しながら、光達にどう伝えるかを考えていた。

家の外からは大人の賑やかそうな声が聞こえる。

それはそうと、うちの家は汐鹿生の外れの方にある。

それが幸いしたのか、あの喧騒の後嫌がらせが来るようなことは無
かった。大人をほとんど敵に回したわけなので、そうなくても多少は
しょうがないとは思っていたが。

ふと手を止める。肌は、どこか冷たい空気を感じた。

… 昔はこの家に、温もりがあったはずだったんだけどな。

もうこの家に温もりはない。

ずっと昔からそう思っているし、今も変わらない。

ただ、昔から変わるとすれば、

ここじゃない場所に温もりを見つけた。

という事だろう。

そんなことを思っていると、コンコンと窓叩く音がする。 要だ。

俺は窓を開ける。

「みんないつものところに集まるってさ。 遙も来るよね？」

「ああ、そのために降りてきたからな。 それと要、昨日はありがとう
な。 ウロコ様に伝えてくれたの、助かった。」

要は少し驚いていた。

「いいよ。言われてたことだしね… じゃ、行こうか。」

「ああ。」

俺は窓を閉め、ドアから外に出る。

つくづくこいつは気が回るヤツだ。

理由は… まあ、どうでもいいかな。

久しぶりの学校。 相変わらず埃っぽかった。

「あ、はーくん来たんだ。」

「うす。待たせたな。」

「というかお前、足はいいのかよ?」

半方がいい。半分悪い。ってどこか。

「まあ、帰れないことは無い(無茶をすればな)。それに、今回ばかりは重要な話だしな。」

「それはそうと、本題があるんでしょ?遥。」

ちさきが一旦話を戻す。勿論、冬眠の話だ。

「ああ。といつてももう腹の中は決まってる…。お前らが納得いく結果では、ないだろうけどな。」

「陸に残る。そうだよな、遥。」

俺が言う前に要が口を開く。なんでこいつこんな時だけ…。

まなかは驚き、ちさきは口に手を当て、光はこちらをきつく睨みつけた。

「…否定はしない。」

「お前… どういうつもりだよ!平気でいられるのか!それで!」

光が胸ぐらを掴んでくる。

そんな俺は光を軽く睨み返し、その後、要をもっと強く睨んだ。

やっぱこいつは嫌いだ。

「うるせえなあ…。俺の口からちゃんと喋らせろよ。」

威圧感で光は手を離す。要は外を向き、女子達は少し怯えていた。

「確かに陸に残る、それは否定しねえよ。けどな、海と陸、両方助かる方法だつてあるかもしれねえんだよ。」

「はあ?そんな都合よく事が収まったら、大人達だつて今更苦労してねえよ。」

「その大人達が遠ざけてること、それが答えだつたらどうする?」

「それは…。」

光が黙る。というかここまでヒント与えてまだ分からないのか。

「…はあ。とりあえず言い伝えの話から始めるか。」

俺は何度目かのセリフを告げる。

——海神様が力を失った時

——ぬくみ雪が陸と海に降り積もり

——やがて人間が暮らせなくらいの寒さになる

「それに、海は海神様の意思と繋がってる。俺はそう考えてる。」

「つまり…どういうこと？」

「昔あった大きなお船引き、あれをすれば海神様が力を取り戻せるんじゃないかって、そういう話だよ。」

その後俺は自分の持論を話す。

それぞれ納得したような表情はしてなかったが、言いたいことは伝わったらしく、何かを考えているようだった。

さて、俺の話は終わり。

とりあえず用はこれ以上ないので、俺は学校を出て、一通り汐鹿生を回って陸へ帰ることにした。

そんな中で、俺はある場所で足を止めた。

確か昔訪れた場所。一回だけしか見れなかった場所。

そう、あの穴蔵だ。

昔閉じられていたはずの穴は空いていて、中に入ることが出来た。

(…なんだこれらは?)

見た目的にどうやらおじよしさまっぽいが…。

ん? ああ、なんだ。そういう事か。

思わずにやつく。

俺はある事に納得した。それも、説を立証させるのに十分なことを。

満足して俺は踵を返す。

だが、そこには1人の男性が立っていた。

「やっぱりお主は気づくと思っていたぞ。遙よ。」

第46話 それぞれの覚悟

——遥side——

「…今度はこっちから会いに来ましたよ、ウロコ様。」

俺は冗談半分にそう言う。

「さて、お前はなにか気づいたようじゃの。お船引きについて。この場所について。」

「そんなの全然ですよ。最低わかってるのは、まだ幼かったあの日、ここを1度閉じたのがあなたたっていうことくらいじゃないんですかね。」

これは半分嘘で、半分本当だ。

本当のことを全て口にしてしまつては、下手をすればウロコ様自体に眠らされるかもしれない。悔しいが、この人は海神様の能力を1部ではあるが引き継いでいる。それくらいのこととは容易いだろう。

だから俺は、少なくとも真意を悟られないように努力することにした。もつとも、そんなものでどうにかなるか分からないが。

「まあ、なんじゃ。わしはお主がどうしようが止めはせん。じゃがな、たぶん、お主がやろうとしている事は簡単ではないし、きっと失敗する可能性の方が高いじゃろうと思う。それでもお主は…行くんじゃの?」

ウロコ様がここまで親切に語ってくれるのは珍しいと思った。

それはそうか。汐鹿生の状況が危うくて、それをどうにかしようとしているのは、ウロコ様も同じなのだから。

ただ、俺とは真反対に考えが違う。それだけのことだ。

「少なくとも、俺は俺の最善を尽くします。」

「そうか…。最後に遥。お主に言わにやならんことがある。これから生きる上で、1番本質の部分になるものじゃ。」

「聞きます。」

「ちやんと自分が何を背負っておるのか、誰に思われてるのか、決して忘れてはならんぞ。もうお前は、1人ではないのじゃからな。」

「…分かってます。」

俺はそう返事を返す。そこに覚悟を込めて。
今一度振り返る。俺が守りたいものは。俺が背負ってるものは。
光達がいて、紡がいて、途中から仲良くなった鷲大師の連中がいて、
あかりさんと至さんと…みもりさんがいて、
保さんと夏帆さんとそして、美海が、水瀬がいる。
一方的に思ってるのではないだろう。きつと、お互いに背負い背負
われる関係なはずだ。

だから俺は…

それでも俺は、お船引きを成功させたい。そして海と陸とで1つに
なつて未来を生きたい。

やつと人を好きになることを分かってきたんだ。

もう、奪われたくない。

「…そうか。じゃあ、俺はこれで失礼させてもらおうぞ。」

そう言つてウロコ様は引き返して行つた。

… 終わりかな。今のところは。

そう思つて俺も兼ねてからの考え通り、陸へ帰ることにした。

—— 美海 side ——

夜、私は1人布団の中に籠もつて考えていた。

遥が言つた。

「海村は冬眠に入る。」つて。

その上で言つた。

「俺は陸に残る。」つて。

そしてもう1つ、

「両方とも捨てたくない。」つて。

遥は強い。誰もがそう思えるくらいに。

私は… そんな遥のために何が出来るのだろう。

年齢も違う。学校も違う。家事とかだつて遥の方が断然上だ。

私は… 遥のことが好きだ。

勿論、お兄さんとかじゃなく、1人の男として。

私が1人でパンクして周りにあたって海に落ちたあの日、遥は思いの丈を伝えてくれた。

その時に、遥が私と同じような悩みを抱えてるんだって、知った。安心したんだ。

でも、私が気持ちを伝えたら、遥はどう思うだろう。

遥はどう返してくれるだろう。

分からない。分からないし……とても怖い。

好きだった人はいなくなってしまった。

遥を好きだって言ってしまうと、陸に残るって言ってるのに、それでも遥もどこか行っちゃいそう。

だから今はせめて、遥の邪魔にだけはならないようにと……

私はそう決めた。

——千夏 side ——

今日、島波君は1度海に帰った。

島波君は、今日中に戻るとは言い残したけど、流石に何かがあるかなんて予想できない。

そんな訳で、私はまたいつもの場所——あの堤防に座って海を眺めていた。

島波君は、やっぱり強い。

人間は、自分を守ることと精一杯なのに、彼は全部を欲しがって、全部を守ろうとしている。

私は、そんな島波君が、好き。

苦しかったこれまでの人生を乗り越えてやっと、光が見えた。

彼に会ってそう思えた。

でも、この思いは届く？

偶然から始まったけど、一緒にいる時間も増えた。でも、向こうが何と思ってるかなんてわからない。

それに、島波君の過去を、私は知っている。

島波君は、私と同じように、形は違えど、辛い人生を送っていた。その中でいつか、好きになるってことに対しての感覚が無くなつていったと言った。

そんな彼に、私はこの想いを伝えるべきなんだろうか。

それで傷つけることになつても、私は言うべきだろうか。

…私は。

私は…それでも伝えたい。

辛いことの先に光があるって、教えてくれたのは島波君だから。だからいつか、この想いを伝えよう。

遠くでバシヤツと海が音を立てる。

そこで出てきた、見覚えのある少年はこちらの方へ泳いできた。

私の足元で止まり、少年はそこから上を見上げる。

「よっ、ただいま。」

私は微笑んで、呟いた。

「おかえり、島波君。」

第47話 未来への一歩

——遙side——

あれから光らが学校に復帰した。冬眠までの間は学校へ行くことをウロコ様はどうやら許してくれたらしい。

とはいえ、挙行する姿勢は変えないそうだが。

陸の生徒も冬眠の話聞いて驚いてはいたが、だからこそお船引きを成功させたいという気持ちが強くなったのを俺は感じた。

そんなムードの中、ただ1つ気がかりな点があるとすれば、昔みたいに美海がガムで文字を作っていたことだった。

それも今度は、「どっかいけ」と最後まで文字を作って。

…その壁には、どこか哀愁が漂っていた。

「うーん、まあ、理由は分かってるんだけどね。」

あかりさんは片付けながらそう呟く。

「冬眠の話、美海としたんですか？」

その現場を目撃した俺はあかりさんとさやマートで話をしていた。

「うん、したよ？そしてこれ…言いたいこと、痛いくらいわかるんだけどな。」

今度はあかりさんも美海の気持ちがあわっているらしい。

とはいえ、あかりさんも笑って見過ごせる状況じゃないことを俺は知っている。

一応、至さんと陸で暮らすとは言ったが、それ以前にあかりさんは光の姉だ。

弟が1人海で眠った状態で、あかりさんは正気でいられるだろうか？

それに、冬眠することのショックは少なからず美海にもあるはずだ。

俺は眠らないことを決めているが、何が起こるかは予想はできない。

勿論、最悪の状態を回避するために、今俺は動いているのだけど。

「結局、迷っているんでしょね…。でも、やっぱり美海は、優しい子だと思います。」

俺は片付けを手伝いながらそう言った。
動機は分かっている。

きつとこれは消えて欲しくないと願う美海の思いだろう。

俺も遠ざけてきたものだ。気持ちが変わらんでもない。

やっぱり美海は、不器用だけど優しい、そう感じた。

さて、それから数日。

俺は光と再び、漁協に来ていた。

こちら側の大人…。勿論陸だが、呼んでもよかった気はするんだが、結局中にいるのは俺と光だけだ。

向こうには、今度は保さんがいるのだが。

「…。」

中には、数人の若い男性が、何やら複雑そうな顔でいた。

その中の一人が口を開く。

「その…。先日は会議ぶち壊してしまって、本当にすまんかった！」
「すまん！」

とそれにくよくよに残りの人も頭を下げる。

…。やれやれ、そんな気になってないんだけどなあ。

結局、怪我させたのは海側の人間だが、陸側としても少しは責任を感じているのだろう。

「…はあ。顔上げてくださいよ。本題そこじゃないでしょう。それに、そんなに気にしてないから今は今の話をしましょう。それでいいよな光。」

俺は光に確認を促す。光は自分が傷つくより他人のことを気にするタイプだから…。こういうことは聞いておかないと。

「俺としては、おじよし壊されたくらいだし…。怒ってないわけじゃないけど、今の話はそこじゃないだろ。」

意外にも光は冷静だった。おそらく、少なからずとも事の重大さに

気づいているのだろう。

そんなことに怒る余裕はないと。

「そ、そうか。それじゃあ改めて…。」

顔を上げると青年のひとりが話し出した。

「実は、俺らはお船引きをしたいと考えてるんだ。この前のぬくみ雪がおかしい事は俺らでも気づいた。きつとこのままじゃまずいことになるって感じた。でも俺らじゃ、何も出来ない。ただ海に頼るか。だから、俺らはあんた達を手伝いたい、共にお船引きをしたいと思ってるんだ…。急に提案を蹴った俺らが口を叩ける立場じゃないのは百も承知だ。だが、許されるなら、手伝わせてくれ！頼む！」

…はあ。

頭を深々と下げて謝罪とか、そういうのはあまり好きじゃないんだけど…。それがやり方ならしょうがないか。

「…どうするよ光。俺は全然構わないけど。」

「ああ。お船引きをやりたいのは俺らとしても勿論のことだしな。」

ここで意見を述べたのは俺ら2人だが、きつと学校の連中で、お船引きをやりたいと思ってる奴で意思が変わったヤツはいないだろう。

だからここは迷いなくokサインを出す。

「こちらからも、お願いします。こちらとしても、何とかしたいという気持ちは変わりません。なら、その理由はいらないでしょう。これから協力して、お船引きを作っていきましょう。」

こうして俺達は、お船引き完遂への一歩、未来への可能性の一歩を踏み出した。

第48話 進むべき道

——遙side——

やると決まれば後は早かった。

陸の大人達も協力してくれて、作業は順調に進んでいっている。そろそろお船引き当日を迎える体制だ。

ただ、海側がどれだけ協力してくれるかは知らない。

それに、聞いたところ冬眠の日程とお船引きの日程が一緒のようだ。

最悪のケースになるが、もしそうなら光達はどうするのだろうか。

…いや、今は目の前にだけ集中しよう。

そんな中、ある雨降る日の話。

学校が、街が、お船引きムードに包まれている中、やたらとちさきと要の様子がおかしいのを感じた。その中で一番感じるのが、要から俺に注がれる視線だ。

何かを訴えているんだろうか？

今の俺はまだ、そうとしか考えてなかった。

放課後。

今日の作業は、雨でろくに外でできることがないため、学校内でおじよし様に添える小物を作る…というか仕上げをしていた。

そう、仕上げと言うだけあってほとんどやることがない。

それくらいに現在の進捗は良好であり、一日仕事が出来なくてもさほど支障がないくらいだ。

なら、自然とおしやべりムードができるのは当然だろう。

そんなおしやべりに湧く教室を遠目で見てみると、要が教室を出て手招きしてきた。

来いということだろうか。

まあ、考えても仕方の無いことなので、俺はそれについていった。

歩くこと数分、先程まで作業していた教室とはだいぶ離れた場所だ。

なるほど、こいつがここまで離れたかったということは、知られたいくない内面的な部分の話だろう。

と俺は覚悟を決めた。

「悪いね、こんなところまで呼んじやって。」

「気にすんな。それより、言いたいことあるんだろ?」

こう面と向かって話すことが少なく、距離感が掴めない。

せめて悪態はつかないようと、抑えながら話す。

「… 僕ね、ちさきのが好きなんだ。それこそ、ずっと前からね。」
まあ、そうだろうな。

要の視線はみんなにあるようで、でも実はちさきをずっと追っていた。そこが見抜けない俺ではない。

「それで、この前、ちさきに告白した。まあ、返事は帰ってこなかったけどね。」

「へえ。なるほど。」

途端、要の目から一瞬感情が消えうせ、気がついた時には怒りを移していた。

「なるほどって… 遥、君は一体なんなのさ!?!… 僕は知ってるんだよ、君がちさきに好かれていることも、告白されてることも!!」

「… それは嫉妬か?」

思ったように言葉が出ない。何故だろう?

きつと、今の自分は自分を嫌いになるくらい、嫌味つたらしく、最低な人間だ。

要は先程のような勢いもなく力なく返す。

「ううん、嫉妬なんてやっても意味が無い… 確かに羨ましいよ。憎いくらいに。けど、分かってるんだ。届かないことぐらい。だからさ遥… お願いだから… せめてちさきに、答えくらいは返してあげてよ。」

気がつけば要は泣いていた。

ただ俺には、その涙に答えることが出来ないかもしれない。

何度も言うが、分からないのだ。

こうやって告白されてまた初めて気づいた。

今までとは違う感覚で同じ問いかけ。

好きになるってなんだ？

恋としての好き、大切な人としての好き、どちらも大切でどちらも

美しい。そして、脆い。

そうやって今まで何度も失ってきた。

俺は迷っている。確実に迷っている。

進むべきか、やめるべきか。

力もついた。自立もしてる。

もし守ることが出来ないのなら、あとはどこが足りないのだろうか？

… ないはずだ。

完璧とは言わない。けど俺には守るだけの力がある。

なら、1歩踏み出してもいいんじゃないか？

しかし、その相手が誰か、俺には全くわからない。

だから俺は、これから要の願いでさえ裏切るはずだ。

許して欲しいとは言わない。ただ今は、考えさせて欲しい。

現状、これがちさきへの答えだ。

「… ああ、じゃあこうしよう。お船引きを終わらせて、ちさきに答えを返そうと思う。… とりあえず今は、考える時間が欲しいんだ。好きになることについて… な。」

要は溜息をつき、何かを諦め、何かからふっ切れた声をして言う。

「… 約束。守ってもらうよ。」

「ああ。ちゃんと答えは出す。」

それから先に要は教室へと帰った。

残されたのは俺一人。場は静寂で満たされ、ただ雨の音だけが耳に入ってくる。

… 今日の雨は、いつもより何倍も強かった。

放課後。

今日は雨が強く、作業なんてほとんど出来ない状況だ。

何人かは教室で小物の手入れをしてるが、ホント何人かだけ。

私は教室へは行かず、ぶらぶらと歩き回っていた。

と、屋上出口の手前の階段に、1人の人影を見つけた。

「あら？千夏ちゃん。」

「ちさきちゃん？なんでこんなところに。」

「ほんとは外に出たかったけどね。」

私も階段を上がり、ちさきさんの隣に座った。

「それにしても、なんでこんな人のいなさそうなところに？」

「うん… ちょっと1人になりたくてね。」

少し元気なくちさきさんは話す。

「… 何か嫌なことでもあったの？」

「ううん？違う違う… ちょっと悩んでるだけ。」

そのままちさきちゃんが続ける。

「私ね、この前告白したの。相手は… 言わなくていつか。それで、答えをもらってない上で別の人に告白されたの。」

「なるほど…。それで迷っているって？」

「うん。私さ、恋するって分らないし、それに、告白した後で思ったの。変わってしまうのはやだなって。ずっとこの楽しい時間であって…。だから、お船引きで冬眠を回避できるなら、私は信じたいなって…。そんな中で人を好きになっちゃっていいのかなって。」

そうだ。

冬眠が起これば、次会うことになるのがいつになるか分からない。

そして気づいた。多分ちさきちゃんが告白してるのは島波君だ。

私は聞こえないように溜息をつく。

私も… 島波君が好き。

そして想いを伝えようとしてる。これは変わりのない私の気持ちだ。

でも私は、島波君に告白してもいいのだろうか？

そもそも、なんで気楽に告白なんてしようとしてるんだろう。
私には冬眠がなくて、島波君もしないって言ってる、その安心感か
ら？

違う。絶対に違う。

そんな生半端な気持ちじゃない。

私が島波君を好きなのは、そんなに軽いものじゃない。
いなくならないなんて嘘だ。

島波君には純正のエナがある。限界だつてあるんじゃないだろう
か。

そんな中でまた会えるなんて言えない。

だから私は告白するんだ。大切を失いたくないから。

第49話 好きだから

——千夏 side——

「あのねちさきちゃん。私、告白しようと思う。」
気がつけばそう言っていた。

これを聞いてちさきちゃんは一瞬だけ驚いて、すぐに微笑み直した。

「うん…頑張ってるね。」

多分、気づかれてる。

私が誰が好きなのか、誰に告白しようとしているのか。

もし気づいたなら、複雑な気持ちになるだろう。

だって、今隣にいる人は、自分が告白した相手に告白しようとしているのだから。私だって、もしそうなら困る。

ただ、ちさきちゃんはただ一言の応援で気持ちを片付けてくれた。

ここまでされたのだ。もう後には引けない。

「ありがとう…私、行くね。」

そう言っただけその場を早足で離れる。

告白すると決めたからか、少しだけ鼓動が早くなるのを察した。

教室へ戻る途中、外に傘を持った人影を見た。

美海ちゃん…かな？

よく見えないので目を凝らすのが、予想通り美海ちゃんだった。

「何してるの？こんな所で。」

ドアを開けて美海ちゃんに声をかける。

「いや、今日はやってないんだって。外から見ただけ。」

「そっか。とりあえず…中、入ろっか。」

ずっと雨の降っている外にいるのはまずいと思う。

これまでも何度も来てるわけだし、許されるはずだ。

美海ちゃんは私に導かれるがまま学校へ入った。

「どうする？一応行ってみる？」

「いや、いい。それより、千夏ちゃんと話したいことがあるの。」
「私ごっ?」

疑問を持つても仕方ないので、とりあえず美海ちゃんについて行くことにした。

そして着いたのは人気のない場所。

… さつきと似たようなケースなんだけど。

「ねえ、千夏ちゃん。好きになるっていい事だと思う?」

開口一番美海ちゃんはそう言った。

「いい事って言っても… ちよつと基準が分からないな。急にどうして?」

すると美海ちゃんは恥ずかしそうに、悲しそうに答えた。

「私ね… 今年になって遥と一緒にいる時間が増えて、好きだった人多分思ってるの… でも、好きだった人はみんななくなっちゃった。だから遥にしても、あかちゃんにしても、いなくならないうって言うのが信じられなくて、怖くて… どうすればいいかわかんないの。」

美海ちゃんの前のお母さん、みりさんはまだ美海ちゃんが小さいうちに亡くなった。私も良くしてもらった方だからあの時は悲しかったな… お葬式には行けなかったけど。

多分、美海ちゃんの心境は私に似てる部分がある。

私達は、お互い島波君に好意を寄せてる。

でも、だからこそどうするかという点は違うみたい。

「私もね、島波君のことが好き。そして美海ちゃんみたいに、島波君がもし眠っちゃったらどうしようって思ってる… でもね… 私は諦めたくないって決めたの。だから私は告白しようと思う… それと美海ちゃん。1つ、約束して欲しいことがあるの。」

お互いに島波君のことが好きなら、理由はともあれライバルだ。

だから私達は、平等に戦いたい。恋仲間として。

「もしお互いに島波君が好きなら、平等に争いたいの。どちらかだけが、の状況じゃなく、あくまでフェアに。」

「… うん、分かった。」

向こうも何かを決意したのかうんと返事をする。

重苦しい雰囲気になりそうだったので話題転換。

「さっ、それよりも話したいことがあったんだけど。」
…

そんなこんなで話していると、作業している方の部屋から呼び出しがあったので私と美海ちゃんとはそっちに行った。

中には先生がいた。何やら連絡事項があるらしい。

「うーん、みんな作業中でごめんけど、今日は雨が強くなるから帰れって言われたんだよね。明日にはきつと止むから、とりあえず今日だけ。あとそう、帰り道は色々と気をつけるんだよー。」

少しの反論はあったが当然上からの令を消せるわけでもなく、私達は帰らなければいけないことになった。

みんなぞろぞろと玄関へ向かい、履き替えては雨の降る外へと出ていく。私の周りにはいつも通り海村の生徒がまとまっている。

私は今日告白するつもりでいる。

タイミングは最悪かもしれないが、先延ばしにしてしまっっては、精神の方がどうにかなくなってしまいそうだ。

だから勇気を持って1歩踏み出す。

「あの、島波君。ちょっと話があるんだけど…残ってくれないかな…。」

「…分かった。すまん光ら。先行っててくれ。」

私が自信なげに話したのを察したのかすぐに乗ってくれた。美海ちゃんも近くにいたが私が言ったことを聞いて先島君らの方へついて行った。ごめんね美海ちゃん。

そう言っただけ履き替えてない私達はすぐ近くの空き教室へ向かった。今日何度目だろう。

今この部屋には二人きりだ。さすがに心臓が高鳴る。

「んで、話ってなんだ。さすがに長居すると先生に怒られるぞ。」

「うん、分かっている。すぐ終わる。伝えたかった事があるだけだか

ら。」

ええと、どう言おう。なんて伝えよう。

かしまるべきか、そうでないか。心臓の鼓動の早さのあまりその判断が出来なくなっていた私は、気がつけばこう口にしていた。

「島波遥君、私はあなたのことが好きです。」

第50話 希望と絶望

——千夏side——

ついに言ってしまった。

でも、意外と後悔はないし、何より胸のつつかえがひとつ外れた気がした。

でも結局、これはただの自己満足だ。

私は好きと言うだけ言って、その先の答えを怖がってるんだ。

それに、「自己満足」と言うだけあって、島波君のことを何一つ考慮してない気がする。

であれば、島波君がどう思ってるのか、もちろん知る由もない。

私は自分の気持ちを押し付けて且つその答えを貰おうとしなかった。

つまりそういう事だ。

島波君は頭を掻きながら、どこか残念そうに話し出した。

「えっと…俺はなんて言えばいいんだ？ 答えを返すべきなのか？ 今思ってることを言えばいいのか？…水瀬はどうしてほしいんだ？」

幸い、直ぐに答えは返って来なかった。

…でも、本当に幸いなんだろうか。

ただ、そんなこと私が考えれるはずもなく、その返答しか頭になかった。

「…何も、言わなくていいよ。」

私は小声でぼそつと呟く。

「何？」

小声だったぶん声が届いてるはずもなく、聞き直されてしまう。だから私は一切の雑念を払い捨てて言い直す。

「いいよ、何も言わなくて。単にこれは私の自己満足。気持ちを伝えただけだから。」

そう言って私は笑う。

「じゃあ、帰ろっか。みんな待ってるし。」

そう言つて私は教室を早足ででて、玄関を通り抜け、外へと駆け出す。その際後ろは振り向かなかつた。

ああ、結局逃げてしまった。
怖くても受け入れなきやいけないのに。

そんなことを思いながら1人、左にある小さな山に沿っている帰り道を歩く。

相変わらず雨は強く、雨粒は木々の葉をひたすら鳴らし続けているた。

はあ…何してるんだろ私。

これでよかつたのかな。こんなのでよかつたのかな。

私以外にも島波君の事が好きな人もいる。

そんな中で正直、ずっと島波君の1番でありたいとも思っている。

これが、唯一のチャンスだったのかもしれない。

なのに、こんな棒に振るような自己満足でよかつたんだろうか。

私は下を向きながら考える。

その時、左の山肌から、ガラガラツ、と音が聞こえたかと思えば、ドーンと何かが流れてくる音も聞こえた。嫌な予感が瞬間脳裏をよぎる。

「えっ…?」

私の思考回路はショートした。

その時分かつていたことといえば、左から土砂だの岩石だのが流れてきてる事だった。

私は咄嗟に目をつぶる。

そして最後に、後ろから「ドンツ」という音が聞こえてきた。

——遥side——

帰り際、俺は水瀬に呼ばれて少しだけ学校に残った。

そしてついていった部屋の中で水瀬に唐突に告げられた。

「島波遥君、私はあなたのことが好きです。」

告白だった。

ただひとつ感じたのはちさきの時とどこか、情動的な点で何か微妙な違いを感じていた。

正直、予感してなかったといえれば嘘だ。

水瀬と過ごした時間は短いものの濃く、その中で好意も動いていたはずだろう。

俺も少しは好意を寄せていたはずだ。

でも。

まだ俺は好きになることを怖がっているようだ。

そしてそれは相手に対して、水瀬に対してとても失礼なことだ。

この前のちさきの時にしてもそう。

勇気を振り絞って想いを伝えた相手に、なんて返せばいいのかわからない。相手の心を踏みにじっているようなものだ。失礼で当然だろう。

とても臆病な俺の心はいつの間にか口に出ていた。

「えっと…俺はなんて言えばいいんだ？ 答えを返すべきなのか？ 今思ってることを言えばいいのか？…水瀬はどうしてほしいんだ？」

最悪の返答だ。

答えを出せない上で且つ相手にどうして欲しいか聞くなんて、流石に最低この上ないだろう。

「…何も、言わなくていいよ。」

「何？」

小さく呟かれたその声は俺の耳にちゃんと入ってこなかった。

「いいよ、何も言わなくて。単にこれは私の自己満足。気持ちを伝えただけだから。」

そう言って水瀬は笑う。

そしてそのまま水瀬は踵を返し、足早にその場から去っていった。

ああくそ。

なんて最低なんだ俺は。

全てが終わったあとでもう一度考える。

ちさき言われた時はここまで深くに刺さる何かを感じなかった。

予想していたからだろうか。

その理由は正直どうでもいい。

それより、今は今の話だ。

俺は間違いなく、好きというものに向き合うことから逃げている。

前に進む、そう誓ったはずなのに。

こんなのでいいのだろうか。

いいはずがない。

それに、さつきから感じている胸の苦しみ。

これは、水瀬が好きということだろうか。

…もし、それがあつてるなら、逃げたくないと思ってるなら。

俺はこの気持ちは今すぐ、水瀬に伝えなくてはいけない。

気がつけば走っていた。

水瀬が出ていって2〜3分、俺はようやく足をその場から動かしていた。

後はもう、何も考えなかった。

走る。走る。走る。

かなりの雨の中、傘を差すことすら忘れて、水瀬の元へ走る。

遠くに人影を見た。水瀬だ。

…見つけた！

しかし。

瞬間、俺は音を聞いた。この強い雨によって山肌が崩れ、土砂だの岩石だのが流れてきてる音を。

瞬間、俺は目撃した。それが、ちょうど水瀬が歩いている場所の近くだということを。

そして何より、それに対しての水瀬の反応が遅く、もう逃げられないかもしれないタイミングだということを。

まずいどうにかしなければもう失いたくない目の前で失いたくない助けないとこのままでは死んでしまう早くしないと動かないと急がないと取り返しのつかないことになる。

俺は走った。その場に荷物を、全てを置き去りにして。

そして俺は声もなく、その場で塞ぎ込んでいた水瀬を突き飛ばした。

俺はそのまま土砂に飲まれ、岩石に身体を砕かれる。

当たったのは足だろうか。膝から下に完全に力が入らないのを感じた。

だが、今の俺にはもう、そんなことはどうでもよかった。

最後に大切なものを守り切った。それだけで俺は報われた気がした。

ああ……間に合ったか……よかった……。

遠くから聞こえてくる絶叫も、もう耳に痛くなかった。

次第に薄れていく意識。俺は最後に掠れた声で心から呟いた。

「ごめん……水瀬。俺は……お前の事がす……き……」

無情にも、俺の意識はそこで途絶えた。

第51話 果たせなかつたこと、果たすべきこと

——千夏side——

私は病院にいた。

…いや、言い方が悪かつたかな。

放心状態の私の心が帰ってきたのは、ちょうど病院だった。

外は昨日からの雨が降り続けている。昨日よりも強くなってるだろうか。

私が今病院にいるのは、私自身のことじゃない。

目の前で眠っている、一人の男性のことだ。

その男性… 島波遥君はピクリとも動かないまま、そこに眠っていた。

心肺停止。

医者の方々の尽力により、なんとか暫定的に死亡とまではいかなかった。

しかし、心臓も肺も止まっており、容態がどちらに転ぶかは分からないようだ。

もつとも、起きてしまっても当分苦しい思いをするだろう、先生は仰つたが。

私はそんな島波君の姿を見て、声もなく泣き崩れた。それこそ、立ち上がることさえできないくらいに。

私の周りには汐鹿生の生徒達もいる。私自身泣き崩れ、下を見ていてその様子は伺えないが、少しすすり泣く声と、歯ぎしりの音が聞こえる。

私を心配してかちさきちゃんが背中をさすってくれる。

そんな中で私はしゃくりあげながら一つ一つ言葉を紡ぐ。

「私の… せいだ…！」

言葉にしてまた辛くなる。苦しくなる。

今回のこの原因は全て私だ。誰に責められても仕方ないだろう。「おい水瀬。」

ふいに、先島君に名前を呼ばれる。

その言葉には明らかかな怒気が含まれている。殴られでもするんだろうか。

「遥のやつは命張つてまでお前を助けたんだ。… そのお前が塞ぎ込んでどうするんだよ。」

どこか悔しそうに吐き捨てる先島君。

でも、言われてることはそうかもしれない。

私はあの時突き飛ばされ、助けられた。でも私は助けられた意味と、何をやるべきかなんて考えず、ただ泣いていただけだった。

… そうだ。

ここで足を引つ張つちやったら、みんなに迷惑をかけるし、何より私を助けてくれた島波君に合わせる顔がない。

泣いてばかりじゃ、いられないんだ。

そう言つて私は立ち上がり、涙を拭く。

この事を忘れてはいけない。ずっと罪を、罪悪感を背負つて生きていかなきゃいけない。

けど今は、今だけは。

島波君が成し遂げたくて、成し遂げられなくなったお船引きを私がやり遂げなきゃいけない。

そのためには前を向かなきゃいけないんだ。

「みんな… ごめん。私… やるよ。島波君の分まで。恨むなら、そのあといくら恨んでもらつてもいいから。せめて今だけは、みんなで成し遂げさせてほしい。」

それを聞いた先島君はさつきまでとは打つて変わつて少し笑顔を作った。

「そうだな。ダウンしちまつてる遥の分まで、俺達がやり遂げなきゃいけないんだ。だったらくよくよなんてしてらんねえ。おら、まなかもいつまでも泣いてんじゃねえよ。」

「う、うん…。」

そうして部屋の空気が少しずつ明るくなる。気がつけば雨も少しづつ止み始め、雲の間には少しずつ光が見えてきていた。

そしてその後は1人ずつで部屋に残り、返事の帰ってくるはずのない島波君にメッセージを囁いた。

私の番。

今、部屋には私と寝たきりの島波君の二人きりだ。

つまり、言いたいことはいくらでも言えるシチュエーション。

言いたいことは、山ほどある。

文句、思いの丈、そして、懺悔。

でも、考えてみると意外と一言でまとまるものだ。

だから私は、簡潔に一言で済ますことにした。

「島波君、私のせいで、本当にごめんなさい。…この言葉が届くかも分からないし、許して貰えるとも分からない。だから今は、これからの行動で、せめてあなたへの罪滅ぼしをさせてください。…お船引き、絶対に成功させます。私も、みんなでいたいから。」

ではこれで、と付け加え、私は部屋から出る。
お船引きまであと5日とない。

私のやるべき事はひとつ。お船引きの成功だ。

「おっ、来たか。」

部屋から出てきた私に気づき先島君が声をかける。

その他みんな、どこか吹っ切れた顔をしている。

そう、今はここにいるみんなと、進むだけだ。

——美海 side——

遥はまだ、目を覚まさない。

お船引きまであと三日。私は千夏ちゃんと話せずにはいた。

最初、遥が心肺停止になったことを聞いた時は、1人部屋にこもり泣き続けた。

そして次に、そういうことに陥った原因、千夏ちゃんを恨んだ。でも結局私が恨んだのは、気持ちから逃げ続けて遥のそばにいなかった私自身だった。

あれから私は迷っている。悩んでいる。考えている。

私は……失ったんだろうか？また、大切なもの、好きだったものを。それともまだ諦めてはいけないんだろうか。

そんな中で、私は千夏ちゃんと二人きりになった。

勿論、空気は気まずい。

でも、今は話さなくちやいけない。こんな気持ちでお船引きなんて出来るわけないから。

それに、お船引きの生贄はあかちゃんがやると言っていた（あくまでお船引きと結婚式を同時にやるという事だけ）。だから、こころのモヤは今最大限に達している。

だから最低、気持ちの整理くらいつけとかなきゃ。

「美海ちゃん、私の事恨んでるよね。」

千夏ちゃんは唐突にそう言う。

確かに恨んでないと言ったら嘘だ。どうして遥をって思っている。けど、今すべきはそういう話じゃない。

「恨んでない……って言ったら嘘だと思う。でも今日は、そういう話をしに来たわけじゃ、ないんだよね。だからこれ以上恨みっこは無しにしようよ。少なくとも、今は。」

「そう、だね。うん。そうしてくれるとありがたいな……お船引き、絶対に成功させなきゃいけないね。」

分かっているんだろう。わかっているんだろうけど、そう言った千夏ちゃんはどこか寂しそうだった。

そういうの、やめてほしい。

そんな反骨心のおかげか、私の決心は少しずつ強まる。

「当たり前でしょ。遥の事もそう、あかちゃんのこともそう。まだ何も始まってないし、終わってもない。あかちゃん、生贄になるって

言ってたけど私、やっぱり不安。だからその不安が消えるくらい、私もがんばる。… 遥の事も、諦めないから。」

そうして私達はお互いの気持ちをぶつけあった。

今はこれでいいんだ。気持ちを前に進めるなら、全力でぶつかっていくのが1番。

それで今は分かり合えなくても、いつかはきっと分かり合えるから。

みんないなくならない。いなくさせない。

私も頑張るんだ。

そして両手で頬を叩く。

もうすぐ、お船引きだ。

第52話 運命の日

——美海side——

お船引き。

ついにこの日が来たんだ。

私の目の前には綺麗に化粧をし、姿を整えたあかちゃんがいる。

後ろの方で「僕は見ないぞ！」なんてパパが言ってるけど、こんな見ない方が馬鹿だ。

あまりにも、綺麗すぎる。

そんな光景に私は、ふと遥を見た気がした。

もちろんそんなのあるはずもなく、私は哀しみを感じる。

こんなとき、遥はなんて言うんだろうな。

そんな考えを胸の奥に仕舞いこんで、ただあかちゃんを見つめる。

そうして、分かっているのにどうしても思ってしまう。

本当に、大丈夫なんだろうか。

頼ってばつかだった遥はここにはいなく、

当日だと言うのに私に出来ることは無く。

そんな状況で、もしもの時に私は何が出来るだろうか。

…できないのだ。なにも。

だから私はずっと見つめる。あかちゃんを、みんなを見守るだけだ。

——千夏side——

夜。

私はお船引きに使用されている船のひとつに乗り込み、手に松明を持ち、サポートしている。

あかりさんの乗る船は斜め前。船の前方にたってるあかりさんの姿は美しく、そして、ほんの少しだけ違和感を感じた。

すると遠くから、青色の揺れる炎のようなものが海の中に見れた。

「…きれい。」

私は汐鹿生の人間ではないのでその名前こそ知らなかったが、そこに美しさは感じていた。

… そういえば、汐鹿生の冬眠も今日なんだっけ。

その火を見てふとそんなことを思い出す。この火と冬眠に、何か関係があるのだろうか。

こうやって汐鹿生を見るのは初めてだ。

そして分かった。やっぱり私は海が、汐鹿生が好きだ。

揺れる水面に私は独り言をつぶやく。

私も、もしここの皆といれたならな…。

刹那、船体が大きく揺れ動いた。

一瞬バランスを崩し、海から飛び散ってきた飛沫を防ぐために右腕で目の前を覆う。

そして、その腕を除けた先に見えた景色に私は目を疑った。

「何…これ…？」

私の目の前には、多くの水の竜巻が発生し、私の乗っている船をはじめ、お船引きに参加している全ての船が取り囲まれる形になっていた。

「おいおいどうなってんだこりゃ!？」

「まさか海神様が怒ってんのか!？」

周りの大人が次々驚きの声を上げる。

その声、その視線には余裕が無い。当然だろう。

これを… 島波君は読んでいたのだろうか？

もしそうなら…。

ううん、違う。そんなことを考えても意味が無い。

島波君はここにいない。ここにいないのは私だ。

島波君ならどうするか、さっきまでそう考えてた。けど今は違う。

私は答えを出す。島波君の代わりとかじゃなく、私という存在として。

「船を引いてください!!!このまま進めるのは危険です!被害が出る前に早く!!」

私の声を聞いて狼狽えてた大人は次々と船を下げた。竜巻は前方に多いたため、少なくとも前に行くよりは後ろに下がる方が安全だ。

そんな時、ひとつの大きい竜巻のようなものがあかりさんの乗っている船に直撃する。

まずい!それは...それだけは...!

私の想い虚しく、先頭にたっていたあかりさんは海へ放り出されてしまう。

不運なことに、放り出されたあかりさんは意識を失ってしまった。

「あかり!!」

そう言っただけで同じ船に乗っていた先島君が海の飛び込む。

こんな渦の中、まともに泳げるのだろうか?

泳げない人はそう考える。

けど私は違う。エナを持っていて、海も泳げる。

... さんさんバレないようにしろと両親に言われてきたけど、流石に今はそんなこと気にできない。

気がつけば私は迷わず海に飛び込んだ。

理由はひとつ。あかりさんを助け出さないと。

冷たい。

慣れたはずの海、けれど、どこか私を嘲笑うかのよな冷たさを感じていた。

「おい!なんで水瀬がいるんだよ!!」

遠くから声が聞こえる。先島君の声だ。

その必死の中叫ばれた声に、私は最低限だけ答えた。

「その話は後!今はあかりさんを助けに行つて!早く!」

「あ、ああ!分かった!」

そして先島君は一目散にあかりさんを探しに深く深く潜る。

一方の私は、他にエナを持ってない人が落ちていないか探しながら、荒れ狂う海を泳いでいた。

…見る限りはいない、か。
とりあえず一息をつく。

刹那、私の体を異変が支配した。
…!?

身体がだんだんと重くなる。まるで、眠りにつく海に誘われるかのように。

少しずつ息も苦しくなる。エナが薄れてきてるのだろうか。

まずい、一旦上がらないと…。

そう思つて足をかき、手を動かすが、どんどん吸い込まれていく。
だめ…そろそろ息が…

そして私の体はそこで限界を迎えた。が、意識の方はまだ辛うじて残っている。

だが、意識だけ残り、身体が動かないというのは1番辛い状況だった。

身体がだんだんと沈んでいく中、何も出来ずにただ陸を見ているだけなのだから。

私のいた場所。陸。

何故か今はそこがとても遠い場所のように感じた。

少しずつ、意識も無くなっていく。

私には…帰らなきゃいけない場所が…。
会わなきゃいけない人が…。

お父さん…お母さん…美海ちゃん…。

遥君…。

私は…

そこで、私の意識は途切れた。

——美海 s i d e ——

流れる。

また流れる。

海の流れ、人の流れ、時の流れ。

あの日、海は凪いでしまったが、時間はただひたすら流れていく。

あの日から、5年。

私はずっと、ある人を待っている。

鷺大師駅、電車の到着アナウンスが流れる。

私は奥を覗く。改札の向こうには、私の待つてる人がいた。

その人はこちらに気づき、手を振る。

そして改札を通り、その人は口開く。

「ただいま、美海。」

私に向けられた言葉。その言葉に私は笑顔で返す。

「うん、おかえり。遥。」

空白の5年間 第53話 残酷な真実

——遙side——

暗く寂しい世界の中。

誰かが俺の名を何度も呼んだ気がした。

そっちに向かって歩こうとするが、力が入らない。

もどかしくて手を伸ばしてみたが、全く届かない。

それでも、と、諦めようとしなかった俺は

今、目を覚ました。

「おっ、目を覚ましたか。… どうだ、身体に何か問題がないか？」

そこには一人の白衣の男性がいた。

… まあ、俺の担当医だけど。

「おはようございます。…？先生。臓器系、とかですか？は特に苦し
くはないです。けど…。」

俺は、自分の体にあるものが無いと感じていた。そこは今隠れてい
て見えないが。

「ああ、君の言いたいことは分かっている。やけに身体が軽いと感じて
るだろ？その… 残念なことだが…。」

先生は少し悔しそうに俯き、結論を述べる。

「君の左足、膝から下は切断せざるを得なかった。」

聞いた俺は、驚きも、泣きも、悲しみもせずただ考えてた。

なるほど、やっぱりそうか。

その後も先生は続ける。

曰く、あの日の土砂により左足が大きな岩石に押しつぶされ、回復
不可能なレベルに潰れていたらしい。

俺も感覚がなくなったことまでは感じていたが、結局こうなった。
しかし今は、それすらそんなに興味がなかった。

俺は意識を失い、眠っていた。

眠るといえども家のような睡眠とは違う。

あの日から、何日たった？

「ところで先生、今日は何日ですか？俺が搬送されて、どれくらい経ちました？」

すると先生はさつきより気まずい顔をしていた。

まさか……。

「5日だ。君が眠っていた時間は。」

不安が募る。

当たり前だ。もうとつくにお船引きは終わってしまったている。

その結果が分からない限りは、不安しかない。

この目で、確かめないと。

そして俺はベッドの柵に力を入れて上半身を起こす。布団が動き、改めて左足がないのを確認した。

「おいおい、まだ起き上がれるような身体じゃ……」

「先生、杖、貸して貰えますか？」

もう意思が曲がるはずもなかった。本来ならリハビリなどをしなければ立てる、歩けるはずもないのだが、今の俺はその意思だけで動ける気がした。

「……お船引きについてだな？」

「はい。」

そう聞くと先生はこめかみに手を当て数十秒考えた。

そして閃いたのか再び話しかける。

「バカヤロー、片足欠損してるやつに杖貸して、のこのこ歩かせる馬鹿な医者がいるかよ……。そいつに乗りな。連れてってやるよ。自分の目で確かめたいんだろ。お船引きがどうなったか。」

そう言っ先生は俺のベッドの隣の車椅子を指し示す。

俺は言われるがままにそれに座った。

「ちよつと待ってる、話つけてくるから。」

そう言うと先生は一旦病室の外に出る。

数分後戻ってくると、グッドマークを指で作った。

「許可がでた。じゃ、行くぞ。」

先生は俺の乗った車椅子を押しながら、駐車場へと向かう。その後、そのまま俺は車椅子ごと車に乗せられた。

車内。

まだ海は見えないが、どこか冷たい風を感じる。

まだ夏だというのに、温かさの微塵も感じないのは何故だろうか。そう思うとまた不安になるので、今は考えないことにした。

「ところで先生、よく許可が降りましたね。」

「ん、ああ。うちの病院そういう所にはキツくないんだ。そうだな…例えば、もう長く続かない命と分かっている、ずっと入院してる人に、最後に家に戻って貰えるように、なんて事もやってるな。今回もそんなもんだろ。」

先生は少し窓の外を眺めながら言う。

「それはそうと、お前足どうするんだ？そのままってのもありや、義足にするのもある…まあ、エナに対応する義足ってのは、ちと厳しいかもしれないが…つと、そろそろだな。」

トンネルを抜ければ見慣れた街、鷺大師だ。

俺は覚悟を決めてトンネルに入る。

数十秒後。

トンネルの外に見えた景色は。

「なんだよ…これ…。」

俺はさすがに何も言えなかった。

連なった鳥居は倒れ

海上にはいくらかの残骸が浮かび

どこか海は、何も近づけさせない様子をしていた。

成功、なんて言えるはずはない。

何があったかは予想できない。でも一つだけ言えること。

お船引きは、確実に失敗した。

「…そうか、そうきたか。」

だめだ。おかしくなってしまうそうだ。

感情の整理が出来てない俺は不気味な笑みを浮かべる。が、本当は笑える要素なんてどこにもない。

「おい、大丈夫か？気をしつかりもてよ。」

先生はその異変に素早く気づき声をかける。俺は我に返り、とりあえずの冷静さを取り戻した。

「…どうなったか、知らない。知る人に、聞かない。」

お船引きが失敗なのは分かってる。あとは、冬眠の方だ。

誰もいなくなってるのは…流石にゴメンだ。

「先生、とりあえず車を進めてもらっていいですか？」

一旦止まっていた車を進めてもらう。とりあえず今は、早く誰かに会いたい。

会って不安を無くさなければ。

数分後、海沿いのバス停から、遠く海を見つめている人を見つけた。

長めの髪に、波中の制服。

間違いない、ちさきだ。

「先生、止めてください。」

「ん？ああ。分かった。」

車が止まる。

話に行きたいのだが、聞かれた状態で話したくはなかった。

「先生、この車椅子、自分で押せますか？」

「なんで…ああ、そういうことか。できるぞ。」

先生はその一言で察したのか、了承してくれた。

とりあえず下ろしてもらっただけ下ろしてもらい、俺はちさきのいる方へ向かった。

「ちさき！」

俺は声を上げる。

こちらに気づいて振り返るちさき。その瞳は潤んでおり、目は真っ赤に腫れていた。

「遙… 起きたの…？」

ちさきはそう言つてへたつと力なく座り込む。

「なあちさき、あれからどうなった？お船引きで、何があつたんだ？」
するとちさきは涙を流しながら、残酷な真実を告げた。

「ごめん… ごめん…！みんな、いなくなつちやつた…！私だけ
残つちやつたの…！」

第54話 波打つ果てに

——遥side——

これが、真実。

これが、現実。

俺は唇をかみ締めた。

何も出来ないまま、ただ見てることすら出来ないまま全て終わってしまった。

目の前でちさきが泣いている。

けど俺はそれを、責める気はしなかった。

「…そうか。」

ちさきは目元を拭って無理に立とうとする。

「ごめん… 1番辛いのは遥って分かってるのに… 泣くの… やめない…。」

「いや、いいんだ。堪えて欲しくない。今は泣きたいだけ泣けよ。」

それを聞いて安心したのか、ちさきはさらに声を上げて泣いた。

俺は… どうしてるのだろう。

少なくとも、涙は流れていなかった。

数分後。

両者ともに落ち着いた状態になったので、改めて話を聞く。

とはいえ、聞けば聞くほど苦しくなるだけなので、本当は聞きたくないが。

「… えっと。どこから話そうか…。」

落ち着いたとは言えども、元気の無いちさき。

聞いているだけでこっちも辛い。

多分、想定できる最悪のケースだろう。

「俺が代わりに話そうか？」

突然、ちさきの後ろから声がした。

「紡か。」

「ああ、久しぶり… だな、遥。」

ちさきの後ろには、手に缶コーヒーを持っている紡がいた。

「紡君、なんでここに……。」

「おじいちゃんに、探してこいって言われたんだよ。それに、ちさきにとつて、今が一番辛いだろ。自分だけ残ったことを悔やみながら話すつて、俺でもしんどい。」

「そう……、じゃあ、代わって貰えるかな……。」

「分かった。」

そう言つて紡が前に出てくる。

「遥、今からあの日何が起こったか伝える…… 救いのない話だが、大丈夫か？」

「ああ、覚悟はしてる……。」

それから告げられる真実。

海上に無数の竜巻が発生し、海を囲んだこと。

最悪なことにその竜巻があかりさんの乗ってる船にあたり、あかりさんは海に放り出されたこと。

そして、あかりさんが救出されたかわりに、光、まなかが海に飲み込まれたこと。

紡自身も海に転落し、その時ちさきと要に救出されたが、落ちてきた柱を交わすため船を急旋回した際、要が振り落とされたこと。

そして一番は。

水瀬が行方不明になつてるということだった。

「……そっか。流石にここまでとはな……。」

俺は頭に手を当て首を垂らす。

「……大丈夫か？」

「分からねえ……。とりあえず、今日のところはこれで失礼させてもらつていいか……。情報、ありがとな。」

紡は何かを察し、それ以上無駄な言葉を発さなかった。

「ああ、無理はするなよ。」

「分かつてるよ……。じゃあな。」

そう言つて俺は車へ戻る。

後ろにいた紡とちさきの様子は、それ以降は知らない。

「いいのか?」

車で待機していた先生が心配する。

けど、いまはこれでいい。これがいい。

「いいんです。それより、あと1箇所だけ、よつて欲しいところがあるんです。」

「…分かった。」

再び車は走る。

あたりは暗くなりだし、あと1時間もすれば夜になる。

そんな中で、俺が指し示した場所は。

「こんな所になんのようなんだ。」

場所に着いた先生はため息をつく。けど、ここは俺にとって重要で、かけがえのない場所だ。

海に見える堤防。あの日水瀬に会つて、全てが始まった場所。

それ以上に大切な場所は、数が知れてる。

「ここでもいいんです。…あと…1人にしてください。」

俺は車から出ると、海のすぐ側まで近づいた。

「…クソっ。」

涙がこぼれる。とてもとても大粒の。

そして、俺の中の何かがこと切れた。

「畜生…何でだよ…!何で俺はまた…!!」

好きになつたから、無くした。

あのころと同じだ。また、無くした。守れなかった。

あの日から5年経つて忘れかけていた痛み。

今の俺には、それだけで十分だった。

海を眺める。

穏やかだ。ああ、気持ち悪いくらい穏やかだ。

でも、分かつてる。

もう、帰れない。

水瀬もきつとこの海の中に居るのに。

帰ってこないんだ。

そこから先は覚えてない。

泣いた。ただひたすらに泣いた。何が悲しくて、何に対して泣いたかももう分からない。

寧ろ自己満足かもしれない。

しかし今の俺には。それ以外頭になかった。

数十分たった。

遠くから近づいてくる足音が聞こえる。

1度車の方を振り返ったが先生は動いていない。別の方向を振り向く。

そこには水色のパーカーが良く似合う少女がいた。

「久しぶり……遥。」

その少女、美海は、俺の近くまで寄ってきた。

しかし、今の俺には明るく振る舞えるほどの元気はなかった。

空虚。もはや何も無く、ただそこにいるだけのようなものかもしれない。

「……珍しいな、こんなとこまで来るなんて……。」

「何となくね、誰かがいる気がしたから。」

美海は少し悲しそうな目をする。

それを見るだけで、自分が失ったものがまたこみ上げてきた。

「なあ美海……結局、好きになるってなんだろうな……。また大切な人が遠ざかって……。やってきたこと全部無駄になって……。……もういっせ、一人で生きたほうが「それはだめ!!」」

気がつけば、美海が叫んでいた。

「そんなこと、絶対にしちやいけなさい!させない!失ったって無駄になんてならない!残るものだってある!!それに……。」

1粒の涙が美海の頬を伝う。

「大切なもの全て失ったって……。ここに残ってる私は大切なんかじゃ

なかったってこと……？みんなが自分を犠牲にしてまで助けたあかちゃんも、大切なんかじゃないって言いたいのか……？」

確かにその通りだった。いつの間にか俺は、全部を失った気になって、残ってる大切なもの、人がいることから目をそらそうとしてた。

ここにいる美海だけじゃない。あかりさんもいるし、至さん、水瀬の両親もいる。他にも大切な人が……いる。

「……ごめん、美海。俺は……残ってる大切な人さえ忘れそうに……。」
「うん。分かっている。辛かったんだよね。遥は優しいから。でも、忘れないで欲しいな。例えどんな結末になろうと、遥が大切に思ってる人はみんな、遥の事大切に思ってるから。」

美海は車椅子の後ろに回って俺の頭に手を置く。

優しさに包まれて俺は、いつの間にか涙が止まっていた。

「……参ったな。俺もまだまだ子供なんだな……。って、まるでお姉ちゃんみたいだな、美海。」

ポンポンと頭を叩かれていることについて言及する。

「だって、お姉ちゃんだもん。」

「ん、どういう事だ？」

「あかちゃんにね、子供が出来たの。だからお姉ちゃんになるの。」

至さんが……至ってた……？

「なるほどな……でも、あかりさん大丈夫なのか？」

あかりさんは、俺よりも精神的にもやられてもおおかしくない場所にいた。光も……海にいる訳だし、自分の故郷もあの状態だ。

「うん。最初はちよつと……。でも、今は大丈夫そう……。ね、遥。こうやってまた新しい大切が産まれるの。大切なものは、無駄になんてならないよ。」

「ああ、そうかもな。」

確証はできない。完全に割りきれたかといえば微妙だ。

でも、俺は美海のおかげで、少しは前を向けそうだ。

「……そう、みんな終わったわけじゃない。冬眠してたっていつかは会える。だから今はここで待とう。」

「そうだな。…終わったわけじゃ、ないんだ。」
力強く答える。

そんな中で、ようやくもうひとつの話題の方へ振られた。

「それより遙、その…足…。」

「ああ、運が悪くてな。…ごめんな？」

そう、俺には左足がない。さっきのちさきらはそこまで言わなかったが、まあ気になるのはしょうがないだろう。

「…大丈夫？」

「どうにかするよ。…心配すんなって。大丈夫だ。」

会話のさなか、車の方から手招きが見えた。

そろそろ時間か…。

「悪い、美海。そろそろ時間だから一旦帰るな。」

「あ、うん。頑張ってたね。」

そして俺は再三車に乗る。

もう向かう場所はないとの事で、大人しく病院へ戻ることにした。

「お前… あんだけイチャコラしやがって… 羨ましいぞコノヤロウ。」

運転席の方から何やら愚痴が聞こえるが気にしない気にしない。

そういえば先生は独身だったっけな…。

なんてことを思いながら窓の外を見る。

変わってしまった海。

凧いでしまった海。

少し打ち寄せている波を移した目は揺れている。
けれど。

俺の心は、もう揺れてなどいなかった。

第55話 人の温もり

——side——

それから、もう一つだけ。

俺の今後はまだ決まっていなかった。

脳に以上はなし、記憶も普通通り。

授業を受けるには十分な状態である。

問題は、やはり失った足。

それに、住処の問題だ。

水瀬がいなくなつて、保さん、夏帆さんとまだ会っていない。

正直、すごく心配だ。

自分の娘の消息が分かってないのだ。平常心でいられる気がしない。

そして、仮退院の日。

杖をつきながら玄関を出ると、見慣れた1台の車が止まっていた。

「久しぶりだな、遥君。」

「ええ、久しぶりですね。保さん。」

その表情は何えない。でも、声でわかる。

寂しい。

なにか抜けている声だ。その声のトーンは変わらないのに、そこに重さがない。

「とりあえず、一旦、うちに帰らないか？」

「…そうですね、行きましょう。」

ではまた、と見送りに来た先生に会釈をし、車に乗り込む。

車内での会話は一切なく、すぐに水瀬宅へと着いた。

「…ここも随分と久しぶりだ。」

「結構空いたからな…。とりあえず、おかえり、だな。」

「はい、ただいまです。」

そう言うが、相変わらず元気がない。

そう考えるとまたひしひしと責任感が湧いてくる。

俺のせいだ。

俺が生んだ、痛みだ。

くそっ……

唇を噛み締める。

そんな俺の顔は保さんにどう映っていただろうか。

せめて、無様な顔はしていなきやいいが。

家に入ると、改めてリビングに通された。

その机には夏帆さんが先に座っており、何やら話がある雰囲気だ。

「あー、そこに座ってくれるか？」

指し示された席は2人の向かい側だった。

特に何も言うことなく俺は席に着く。

「……」

一瞬の沈黙。

切り裂いたのは保さんの言葉だった。

「島波遥君、改めてお願いがある。」

「はい。」

その言葉には、重さがあった。

俺は覚悟を決める。

「これからもうちに住み続けてくれないか？」

「……その前に、色々と言わせてください。」

俺は直ぐに答えを出さなかった。

確認したいのだ。俺はここにいていい存在かどうかを。

「まず、先日のお船引きは、本当にすいませんでした。千夏ちゃんを無理な企画に巻き込んだ挙句、このような事態になったのは俺にも責任があります。」

「そこは誰のせい、とかないんじゃないかな？」

優しく慈しむ声。夏帆さんだ。

「ありがとうございます。……それで一つ、非常に失礼な事を言わせてください。俺は、……千夏ちゃんの代わりにはなれません。姿を重ねられているのなら、俺は多分、ここに住む価値はないと思います。」

全く、最低な話だ。

でも、俺は水瀬の代わりにはなれない。

淡い幻影を重ねられて育てられるなら、その愛は受け取れない。

「…確かに、姿は重ねているかもしれない。」

「ちよつと、あなた！」

「でも、君が怪我してここに住み始めてからの日々は本当に楽しかった。私はもう、君のことを家族のように思ってる。できればこれからも、家族であつて欲しいんだ…。いけないだろうか？」

ああ…。この人は、やっぱり素敵な人だ。

自分の心に真っ直ぐで、曲がったことは言わず、誰よりも優しい。

俺も、水瀬のこういう所が好きなんだろうか。

ここまで言われて今更NOの答えなんていらなかった。

「…これからも、ここに住まさせて頂いてもいいでしょうか？」

言い終わる頃に涙が頬を伝う。

あれから涙脆くなつたんだろうか。

でも今は、これでいいと思う。

涙さえ失ってしまったらもう、俺は人間じゃなくなるかもしれない。
い。

「ああ。これからもよろしく頼む。」

「また美味しいもの食べさせてあげるんだからね。」

二人とも、笑顔で迎えてくれる。

俺の居場所は、ここにあった。

それからまた、人生は右往左往したが

俺は真っ直ぐ歩いていった。

失った先に

本当の大切に気づいた。

自分は1人だと思ひ込んで

結局近くに誰かがいて
そうやってまた、1歩進む。

1年

2年

3年

ひとつずつ年が過ぎていく。

温かさに包まれて俺は育って行った。

それでも。

それは海を除いての話。

海には眠っている。大切な人が。俺の大事な何かが。

心の底から冷えてくるような気候とともに

海は少しずつ、世界を嘲笑うかのように冷たく、冷たくなっていったのだった。

第2部

第56話 変わったもの変わらないもの

——遙side——

朝、始発。

かすかに鼻腔をつく潮の匂いを感じては思わされる。

帰ってきた。鷺大師へ。

なんてカッコつけてみたが言ってそんなに経ってない。せいぜい半年弱だ。

大学生になった俺は、一応単位に余裕があるということで一旦鷺大師に帰ることにした。

とはいえ、特には意味は無い。

意味もなく、ふらっと帰ってきたようなところだ。

「おかえり、遙。」

電車から降りると、大きくなって綺麗になった美海が待っていた。

あれから5年。今は中学2年生だったろうか。

可愛い妹のような存在だなんて思ってた頃は、もう結構前だ。

「あれから鷺大師は、何か変化があったか？」

数分後、駅舎から出た俺は近くの公園で美海と話をしていた。

「…ううん、いつものまま。」

少し残念そうに首を振る美海。

大人しめになったのは見た目だけではなくなっていた。

「そうか…。まあ、そう簡単に変わるわけ無いよな。たかが数ヶ月くらい開けてただけで。」

実際、高校も鷺大師だったわけだから、離れたのは大学に行ってか

らだ。そんなに時間は経ってない。

そんな暗い話題を転換しようと美海が奮闘する。

「…ところで遙、今日は巴日なんだって。その…見に行く？」

「巴日か…。そうだな、見に行こうとは思うんだが…。」

そう言っつていつか小さい頃、ちさきが言っつた言葉を思い出す。

巴日は皆で見なきゃいけない、か…。

それこそあの頃は、巴日は海でしか見れなかつたからな。

こう、地上でも見れるようになったというのは、ちよつと心苦しい。

「そう。多分私は学校の方で見なきゃいけないようになると思うから、見かけたら声とかかけてくれると嬉しいかな。」

「分かつた。まあ、他の生徒には邪魔にならない程度に行こうかな。」

「うん…。先生は大歓迎しそうだけどね。」

「あの人は変わらず接してくれるからな。」

そう言っつて互いに微笑み合う。

「そう言えば、その足…。」

「ああ、言っつてなかつたな。やつと変えれたんだよ。」

切断した左足だが、高校に入る頃に義足にすることを決意した。

金銭的なことは、訳あつて何とかがなつたが、不明な点が残つてしまつた。まあ、気にしない。

ついでに変えたというのは、エナに合うタイプの義足に、という事だ。

幸いなことに、街の方にはそつちの方に優れた技師さんがおり、その人にやつて貰つたという訳だ。

…リハビリはキツかつたなあ…（遠い目）

その後は、美海が学校ということで、そのまま学校へと向かつていくのを見送つた。

1人になつたので改めて周りを見回す。

所々に積もつた雪、冷たい風。

ああ、いつも通りだ。
いつも通り、あの日から変わってしまった驚大師。
道端のぬくみ雪をすくい上げては落としてみる。
そうして今日やることを考えてみる。

さて、とりあえず今日は、色々回るとしますかね。

くそれから数時間後く
義足を変えたぶんを馴染ませるといふ思惑混じりで街中を歩く。
時刻は4時。

俺はさやマート付近まで来ていた。
そんな中、遠目に見ていたさやマートに1台の軽トラが止まり、中
から人が出てくる。

一人は狭山で、あとは……。
助手席側は若干遠いので目を細める。
そして、もう一人がちさきであることを確認した。

あれから5年。
ちさきは同じ高校を経て、看護系の学校へ行ってるらしい。
なんでも、あの日以来身を寄せている木原家のおじいさんが倒れた
ことがきっかけだそうだ。
俺も通院中なんか見舞いに行ったのでその様子は聞いている。
狭山のほうは……まあ、店を継いだと聞いている……ですよね。
そしてそんな二人を店の入口前で子供を連れて出迎えてる人がい
る。

あかりさんだ。

あかりさんの方はあの後至さんと結婚し、美海の弟に当たる晁を産

んだ。そして現在ののように子育てと仕事の両立。最近になって晃に光のようなやんちゃ坊主っぷりが見られるようになって、密かに、大丈夫だろうかなんて思ってるけど幸せそうなので問題ないかな。時折、悲しい目をしてるのだけが気になるが。

まあ、特に用があつた訳でもないのでさやマート付近からは離れていった。

とりあえず一旦家に帰って、病院に行つて…。余裕があつたら巴日でも見に行くか。あれ、結構用事ある…。？まあ、いっか。そして俺は家を目指して帰る。

といつても、家は陸。あの日からずっと住まわせてもらつてる水瀬宅である。

「ただいま帰りましたー。」

家に着くと迷わずドアに手をかける。保さんの方は仕事なので、家の中にいるのは夏帆さんだろう。

まあ、俺も合鍵は持つてるけど、あまり使うことがない。

「あ、おかえり。」

リビングの方から声がする。

女性、やっぱり夏帆さんの方であつた。

「どう？足の調子の方は。」

「まだちよつと違和感がありますね。技師さんが言うには身体の方にも少しは影響が出るらしいので、後でまた病院に行くつもりですが。」

俺はソファーに座り、夏帆さんは洗濯物を畳みながら話している。互いの顔は見えないが、声で感情が分かるような関係にはなつた。ジリリリリリリリリリリ…！

そんな中、ある一通の電話が音を立てて俺を呼んだ。

第57話 光

——遥side——

やたらとタイミングのいい電話の音に少し戸惑ったが、まあざっと予想できる相手なので受話器を取る。

「はいもしもし。」

「ああ、やっぱりお前が出たか。」

「なんだよ紡か…。」

ビンゴ、やっぱり知人だった。

紡は、俺と同じ高校を卒業した後に街の大学へ入学した。その大学は俺も通つてるところで、そのせいか、学部は違うが時々海洋学の学部である、紡のゼミの先生に協力することがある。

実際、今回の電話もそれ関連だと思うが…。

「んで、何の用だ?」

「ああ、今日確か巴日だったろ?先生が観測に行く時、ちよつと遥に手伝って欲しいって言ってるんだが、来てくれるか?」

やっぱり巴日か…。

美海の件もあるし、これは行くしかねえな。

「りよーかい。用事片付けていくから20:00くらいになるって伝えといてくれるか?」

「先生にか。分かった。じゃあ切るぞ。」

そして俺は相手が電話を切った後に受話器を置いた。そんな電話聞いていた夏帆さんが電話終了を見計らって話しかける。

「今日もお出かけ?」

「すいません。毎度毎度。」

怪我の有無にもかかわらず、俺は結構色々なところへ呼ばれたりしているので、出かけることは多い。なんでも、鷲大師では俺はもうほんどの人に認知されているそうだ。

… 有名人になるって複雑な気分だな。

「いいのいいの。そういう意味で言ったんじゃないから。ただ、何度も言うけど、怪我だけには気をつけてね。自分の体が1番だから。」
「流石に無茶なことはしませんよ。痛い思いをするのは自分ですし。」
足のこともそうだけど、高校時代もいくらかトラブルがあったし、どうなってるんだろうな俺の体質って。

夏帆さんは納得して作業を止めて、手を振る。

「じゃあ、行ってらっしゃい。」

「外出今すぐじゃ無いですけどね!？」

くまた数時間後く

現在地、病院。

日はだいぶ暮れ始め、巴日が見えるまであと1時間ないくらいだろうか。

俺は担当医の大悟先生の話を耳にしながら窓の外を眺めていた。

「……い。おい、聞いてんのかお前。」

「え、あ、はい。何でしたっけ。」

どうやら大分ぼーっとしていたみたいで内容が全く頭になかった。

「はあ……。お前、医師の忠告聞かなかつたら絶対早死するからな。」

先生は手を頭を当て、はあ……。とため息をこぼす。

「早死するならそれが運命なんでしょうよ……。それより、もう一度言っただけですか?」

「……もう次はないからな。」

話されていたのは義足を変えたことによる身体への影響。

慣れない金属が皮膚にあたって、そこから体調のバランスに影響が出る可能性が高いという話らしい。

対策としては、薬の服薬が第1みたいだ。とはいえ、慣れるまででいいらしく、2週間ぐらい飲んでおけば大丈夫らしい。

あともう一つ。冷たい海水に当たるということらしい。

「分かったな？今言ったこと。」

「はい、今度は大丈夫です。」

「しっかしあいつも可愛くなつたもんだなあ。昔は人のお願いなんて聞くようなやつじゃなかったぞ。」

先生は本題を話し終わると遠くを眺めて懐かしげに語りだした。

「幼なじみなんですよね。えっと、日野鈴夏さんでしたっけ。技師さんって。」

「そう。もうガキの頃からの知り合いで、昔っから大ちゃんすーちやんって呼びあつてた位の仲だ。小中高も全部驚大師で一緒。幼なじみって言うのが1番あつてるだろうよ。」

そう、俺がああの技師さんに会つたのも、先生のもつてである。

この人にはさすがに頭が上がらない。

「まあもつとも、あいつは街でビッグになつてやるー！なんて言つて止まらなくて今の仕事してるけどな。あの仕事で今日までやってるって、やっぱりすげえよ、あいつは。」

「…先生も、十分すごいですよ。」

俺は消え入る声でそう呟いた。

「ん？なんつてつた？もう一回言つてくれ。」

「嫌ですよ恥ずかしい…。じゃあ、俺はこの辺で失礼しますね。あとがつつかえていてもいけないし。」

「ああ、分かった。ちゃんと言つたこと守れよ？」

「了解です。」

「いい返事だ…。じゃあな。」

先生のかつとした顔を後に俺は診察室から出て、そのまま外へ、海へ向かう。

数十分後。

天気はよく、陸からでも綺麗に巴日が見える。

中学生がワイワイしながらそれを眺めてるのを横目に、俺は美海を見つけに行く。

その後は美海と少し談笑した後、紡らが観測をしている場所へ向かった。

ふと、足を止めた。

特に理由はなかった。

ただ、不思議なものだと思ってることがある。

俺が今立っているのは、まさしく海の上だ。

海上には分厚い氷がはっており、崩れることは無いだろう。

南極、北極なんかと近いはずだ。

そして、思わされる。

俺の大切は、この下に埋まってる。

だからこそ、どうにかしたい。

「…!?!」

俺はふいに眩しさを感じた。

巴日が一瞬強く光ったような感覚の後に、海がゴゴゴと動いた感覚。

遠くから走ってくる音が聞こえる。

「遥!!」

紡と美海が俺の元へ走ってくる。

そして、2人が着いたと同時に辺りが強い光に包まれる。

「っ!?!」

一瞬怯んだ後に恐る恐る目を開く。

見えたのは遠くで倒れてる一人の男子。

つんつんした髪に小柄な体。

「あれは…。」

気がつけば走り出していた。

遠くに見えたその姿には、見覚え以外の何も感じなかった。

第58話 紺碧の空の下にて

——side——

「光!!」

倒れてる光のそばへ駆け寄った俺は、すかさず上着を光の身体にかぶせる。全裸の状態だからこれは絶対必要だろう。

「先島、大丈夫か?」

後で着いた紡が声をかける。

が、意識はないみたいで、返事も当然ない。

どうしようかと一瞬悩んだが、俺はすかさず人工呼吸に入ろうとした。男どうしのキスになるがそんなことどうでもいい。そう思った。

もつとも、やろうとした直前に身体が動いたため、手前で止めたが。

「動いた... よな?」

一瞬の反応を見逃さなかった俺だが、念の為、紡に確認をとる。

「ああ、意識はあるみたいだ。だから、少しこのままにしてやった方がいいかと思う。」

ということだったので、光が目を覚ますまで合流した美海含めて俺らは待つことにした。

そして数分後。

その目が開いたと思えば、ガバツと起き上がった。

「まなか!!」

光は勢いよく起き上がりながらまなかの名を叫ぶ。

しかし、その瞳に映っていたのは巴日の白い光と、目の前に広がる凍りついた海だった。

光はただ、そんな光景を見つめたまま、何も言わなかった。

ただ、瞳に涙を浮かべてるだけである。

何を思っただの涙だろうか。

大体の予想はつく。だからこそ、考えたくなかった。

結局、俺も同じく辛いだけなのだから。

「光、起きたk『ドサツ』」

俺が声をかけようとした瞬間光が再び倒れる。呼吸はあるままなので、身体、精神両方のストレス、ショックで意識を失ったんだろう。「…まいったな。とりあえず、俺が連れて帰ろうか？」

どのみち、このまま光を放っておく訳にもいかないが、紡は観測の続きが、美海も団体で来てるのでそちらに帰る必要があるだろう。

ならば、俺しかいない。

「ああ、そうしてくれ。」

「ごめん、遥。すぐに追いつくから。」

幸い承諾が取れたので、俺はすぐさま光を背負い、潮留家を目指して歩いていった。

数分後、家まであと2〜3分の所で美海が合流する。

「ごめん。足大丈夫？」

「問題ない。…さてと、もうちよいだったよな、美海の家まで。」

「うん。あ、この先右ね。」

「あいよ。」

余談だが、この5年の間で至さんはマイホームを購入した。

つまりのところ住所も変わってるが、何度かは訪れてるので問題はなく辿り着ける。

「それより、さっきの光の話だけど…。」

「5年前の話に関係してるかってこと？」

「ああ。」

光は5年間眠っていた。俺が気になってるのは、その間分の記憶だ。

とはいえ、起きてそうそうまなかの名を叫んだあたり、記憶は5年間止まったままで、あれは渦に飲まれる前の最後の記憶に関係してるのだろうか。

「うーん、はっきりは分からないかな。誰も光やまなかさんを見てなかったらしいし。ただ、誰も見てないってことは、2人は近くにいたかもしれないけど。」

「なるほどな…。ただ。」

俺はそう言っ言葉を詰まらせる。その態度で俺が誰の話をして
いるのか美海は分かったようだ。

「千夏ちゃんは、本当に誰も知らないと思う…。光が起きてどこか
知ってることがあるか、なんてところだと思う。」

「まあ、急かさしても悪いし、光にはとりあえず十分休んでもらう
か。っと、ついたな。」

俺の手は両方ふさがってたので美海に開けてもらおう。俺個人であ
ればインターホンあたりはやるべきだったのだろうが、幸い今は美海
がいるので問題は無い。

「ただいまー。」

「おかえり美海。って遥君…と、光!?!」

玄関で出迎えてくれたあかりさんは俺の背中を見て驚く。

そりやそうだ。自分の弟が5年を超えてそこにいるのだから。

「ちよ、とりあえず美海、布団出して！客間！光寝かさないと！」

あたふたしながらあかりさん言う。落ち着いてないのは行動、精
神、おそらくどつちもだ。

数分後。

落ち着いた様子なので改めて机の前に座りあかりさん、至さんと向
き合う。晁は先に眠っているので乱入はなさそうだ。

あかりさんは光の無事を喜んで涙を流しているので、そこはそつと
しておくことにした。という訳で話相手は…

「とりあえず、今回はありがとね遥君。光君をここまで運んでくれた
こと。」

「いや、いいんですよそれは。それより、光は当面ここで住むってこと
になりますけど、問題ないですよね。」

「うん、そこはね。前のアパートも断然広いから、今回は問題ないと思
うよ…。ところで、光君が海から上がってきた時に、海はどういう感
じだったんだい?」

本題である。

信じ難い光景ではあるが、今この世の中どういふことが起こるか予測できない。であれば、こんなこともありえるだろう。

「それがですね…。」

それから俺は先程の様子を間違えることなく伝えた。

至さんは首をかしげていたが信じないには至らなかつた。

「なるほど。その光が起点だったってことかな？」

「ええ、恐らく。ただ、あくまで細かいことは紡らに頼りましょう。

今回の件、絶対観測にも影響が出るはずなので。」

「そうだね…。そうだ、今日うちに泊まつてつたらどうだい？.. だいぶ疲れてるでしょ？」

んー、疲れたっちゃそうだけど、流星に条件が悪いな…。

「すいません、流星に泊まるには条件が悪そうです。なんで、もう少しだけここにいていいですか？」

「そうかい…。あと、うちにはいくらでもいていいからね。」

「ありがとうございます。」

そう言つて俺は一旦その場を離れる。

ただ、帰る前にもう一度美海と話をしておきたかつた。

さつきはそんなにゆっくりできた状況じゃなかつたしな。

コンコンとドアを2回ノックする。

部屋から出てきた美海は、どうやら風呂上がりのようらしく、シャンプーの匂いがした。

「どうしたの、遙。」

「ん、ちよつと話したくてな。外、来てくれるか？」

美海はこくりと頷き、俺と共に縁側に向かつた。

「で、話つて？」

「ああ…。光が帰ってきたってことは、少なくとも冬眠が、少しずつ終わつてきてんのかなつて…。それで、水瀬も帰つてくんのかなつて思つてき。」

「…。」

美海は下を向き黙つてる。

「…なんて、期待し過ぎだよな。まだ未来がどうなるかもわからな

いのに。」

「そんなこと、ないと思うよ。」

「そっか……。はあ。また何か、この世界は変わるんだろうな。」

俺は空を見上げる。

頭上を流れた流れ星にお願いすることは、何も無かった。

第59話 再会、そして

——遙side——

光が帰ってきて1日が過ぎた。

あの後は言ったように潮留家に泊まることなく水瀬家へと戻った。とりあえず、今日も何うと言葉を残して帰ったので、俺は朝食を取った後に真っ直ぐ潮留家に向かった。

「あら、おはよう遙君。」

家に着いたら、庭で洗濯物を干してるあかりさんがいた。

この様子を見る限り多少は落ち着いたんだろうと思う。

「おはようございますあかりさん。それで、光の方は目覚めたんですか?」

「ああ、うん。普段朝起きるように、あっさりと起きたよ…。流石に色々変わりすぎてるから、混乱してると思うけど。」

俺が懸念していること。

光の記憶が、どこで止まっているか、という事だ。

ましてや、それを知らない人が光を引っ張りだこにしてしまったら。

嫌な予感がする。

が、そんな予感ほど当たりやすいのを俺は知っていた。

玄関の前に1台の車が止まる。

「おはようございますあかりさん。って遙もいたのか。」

「ああ。ところで何の用だよ狭山。」

「光が目覚めたんだろ?んで会いに来たわけよ。まあ、漁協の大人連中も光に会いたがってるから、ちよっとお話がたらドライブに行こうって話。」

「大丈夫なのか?それって。」

その答えが帰る前にドアが開く。

「なんだよお前ら、朝から騒がしいな。」

いつもの朝と何の代わりもないように、光が出てくる。

「おお!光!元気になったか!」

狭山が好かさず抱きつきに行き…。かわされて顔から突っ込む。

「何だ狭山かよ…。なんだこんな朝っぱらから？」

「ああ、漁協のおっさんらが光に会いたがってたから、ちよいとひとつ走りして来たんだが、ついてきてくれるか？」

「…？ああ、分かった。」

光は納得したのかしてないような表情をしながら車に乗り込む。

因みに、この間、俺と光は目が合っていない。

そんな中で美海も登場し、いよいよ光と一体一で話せる状況じゃなくなってしまうた。

しょうがない、今は諦めるか。

俺はとりあえず現状打破を諦め、車に乗り込んだ光と、ついでに乗った美海を俺は見送るのだった。

「さてと、色々和最悪なことになりそうですね…。。」

俺はここから考えれる未来を予想し、苦い顔で呟く。

「どういうこと？最悪なことって。」

そんな俺に洗濯片手にあかりさんが反応する。

「そうですね…。今、光が漁協に行ったとしましょう。そうしたら漁協の人達は間違いなくこう言うでしょう。「久しぶり」と。でももし、光の中の時間は止まったままで、お船引きが最後の記憶で、5年経つたと感じてなければ…。光はただでさえ落ち着きのない精神の持ち主です。こんな混乱、耐えられると思えますか？」

「…確かに、そうかも。」

あかりさんは手を止め、思い詰めたような顔をする。

とはいえ、ここからでは漁協まで距離があるし、話途中の漁協の中で、無理にその輪の中には入れない。

1番まずいのは現状動けないこと、だった。

「まあ、何とかします。どうせまだ鷲大師にいる時間は長いので。」

「…ごめん、頼めるかな？」

「任せといてください。」

そして俺は光と、光と話すタイミングを探しに出かけた。

1時間。

2時間。

刻一刻と時間は過ぎて行くが、光とは出会えない。

こう… 目撃証言とかはあるのだが、どれも少し前だったりして当てにならない。

やつとの思いで見つけた場所は、丁度紡の船の船上だった。なにか叫び声が聞こえる。

一言一言ははつきり聞こえてないが声でわかる。

これは光の声だ。

そんな様子を静観していると、光が船から走って遠ざかって行った。

今しかない。

俺は少し軋む足を全力で走らせ、光に追いつく。

「光!!」

俺よりぎつと数十メートル先の光を呼び止める。

振り返った光は涙目だった。

「なんだよ…。」

「ちよつと話、しないか?」

場所をうつし、俺達は海沿いのベンチに座った。

「… なんだよ話つて。」

「色々聞きたくつてな。まず、お前、5年経ったって感覚はあるのか?」

「… ない。俺にとつちや、お船引きは昨日のことなんだよ。それなのに、それなのに周りの連中は久しぶり、とか変わんねえな、とか…。そんなの、変わるわけねえだろ…。」

光は瞳をうるわせ怒りを静かにぶつける。

やっぱり、俺の思ってたとおりでった。

俺が大切なものを失ったお船引きは5年前。

けど、光にとつてまなかを失ったお船引きはつい昨日なのだ。

後悔の念が、無いはずがない。

そんな中、光は続ける。

「変わるとか変わらねえとか、分かんねえよ……！ 一体俺は、どうしりやいいって言うんだ……！」

俺は、ずっと変わってない気でいた。

けれど、今光にあつて、大きくなつてしまったことを改めて感じさせられる。

光から見れば俺は変わってしまったのだろうか？

「……そうだな。俺もお前を見て思ったよ。変わる、変わらないうって、ほんとわかんねえな。俺からすれば変わってないつもりでいたけど、お前とあつて、改めて時間が流れたのを自覚させられたと思う……。なあ、光。こんなことを聞くのもなんだけど、お前から5年経った俺はどう見える？」

「どうつて…… そうだな……。背丈は変わった。足も変わった。けど……、なんだろう、やっぱ分かんねえよ……。ちよつと1人にしてくれ。」

そう言つて光は立ち上がり、ふらつとまた離れていく。

俺は追わなかった。

やりたいことはやった。出来るだけやった。

最後の光の目には何が写つてたかは知らないが、最初より輝きがあつたような気もしないような……。自信はない。

もうすぐ、5時か……。

あの日から5時になるとお船引きの歌が流れる。

曰く、帰る時迷わないようにらしい。

俺は……。ちよつと苦手だ。この歌は。

思い出は苦く、いつまでも消化されない。

消えてしまつてもいけないのかもしれないが。

と、5時の音が鳴り、また数分が経つ。

「うおおおおおおお!!」

遠くから元気いっぱいの叫び声が聞こえる。

このやんちゃでわんぱくな叫び声は、俺の知るところ一人しかない。
い。

光は全力でこっちに向かって走ってくる。その姿は先程までの弱
気な光ではなく、5年前に見たいつもの光だった。

その後ろからはちさきが追ってきている。さつき会ったんだろう
か。

二人とも、見覚えのある顔だ。それぞれの、5年前のような。
そして光は俺の前で立ち止まると元気よく言った。

「お前、やっぱり全然変わってねえや!!」

第60話 光は褪せ、心はいつしか黒く

——美海 side——

く過去く

今日は巴日が見れるとのことで、学校で行くことになっている。

…はあ、退屈だ。憂鬱だ。面倒だ。

正直、今のクラスは好きじゃない。

誰かが嫌い、とか言うのではない。ただ、何も満足できるものが、面白くもないものがないのだ。

それに、中学生だ。

ある程度のことを分かり始めて、だからこそ調子に乗る時期。そういう連中は、見ていてつまらない。

そういう人間に向いてる私の目は冷たい。

影で大人ぶっているとかわかれても知ったこっちゃないけどね。

「美海、美海。」

海上。

少しクラスの和から離れた位置で、さゆが私に耳打ちをする。

「峯岸のやつ、多分今日美海に告白するよ。」

「…そう。」

私には全く興味のない話だった。

どうせ受けるつもりもないし、好きになるつもりが微塵もない相手だ。適当にあしらってもいいけど、それでさえ面倒くさく感じる。

「男子たちってさ、ほんと馬鹿ばかり！こういうイベントで盛り上がって、浮かれて告白なんてさ。ロマンティックなら絶対に成功するとか思ってるよ。」

さゆは明らかに見下したような発言をするが、それはあながち間違いでもないと思う。場面なんて飾りで、結局は心が何を思ってるかなんだと思う。

最も、私自身そんな告白を口にしたことは無いけど。

「そういえばさ、さゆは告白されたらどうするの?」

「私?… 私は一人で生きてくって決めてるからそういうのはいらないから。誰よりも稼いで、誰よりも強く生きる。男なんていなくても、生きれる、生きてやる。」

私は少し驚いた。

私がこれまでさゆに何度も相談したように、さゆも私に恋愛相談をしてきた。

だから、誰のことを思ってるかを知っていた私は、この答えに戸惑う。

「… 要さんのことは、いいの?」

「嫌いになったわけじゃないよ… けど、あいつはいつ帰ってくるかも分からないし、それに好きな人だっている。諦めたって、しょうがないじゃん。」

そう言ったさゆの目は悲しい瞳をしていた。

「逆にさ、美海はなんで告白しないの? ずっとそばに居るじゃん。」

ふいに振られた質問。

確かに、あれから遥とはずっと一緒にいた。最近こそ、その時間は減ったが、距離が近くなったことには変わらない。

それでも私が告白しないのは約束があるから。

待つべき人が、海にまだいるから。

「約束があるからかな。私は卑怯なことはしたくない。」

あの時遥と約束した、卑怯なことをしないということ。

5年経った今でもその思いは変わらない。

「ふーん…。まあ、そこは美海の自由だけだし、もし帰ってきてちやっかり奪われてもしょうがないよ?」

「… その時は、その時かな。」

なんて呟いたが、ホントの気持ちはわからなかった。

結局、大きくなっても、遥のそばにいても、私の時間は止まったまままだ。

それから数十分後。

告白に來た峯岸を軽くあしらひ
謎の光に誘われて向かつてみれば目覚めた光に会い
そこからまた新しい日々が始まった。
またいつかのような、懐かしい日々が。

ただ、全てが同じ様に過ごせるなんて、そんなことは起こるはずは
無かった。

く現在く

それから数日後。

週末は憂鬱だ。特にやることがない。

という訳で私は特にあてもなく街中を歩いていた。

本当に理由なんてない。散歩みたいなものだった。

金曜日、先生から不審者が近くをうろついてるからと注意を呼びか
けていたが、特にそんなことは気にしない。

ふと、人目のつかないところを歩いている時に、私はいくつかの影
に囲まれた。

「…え？」

見るからに強そうな男の連中。

暴漢と呼んでいいような、そういう見た目だ。

それが、3人。

…最悪だ。まさか、不審者にこうもばったり会うなんて。

「なんだ、結構可愛いじゃねえかよお？あのガキにしては良い奴知っ
てんじゃねえか？なあ？」

「ああ。ちやうど食べ頃ぐらいってか？リーダー、やつちやっていい
やつつすかあ？」

「誰にも見られてねえならな…まあ、そういう訳だ嬢ちゃん。
ちよつと遊んでもらおうか…何、すぐ終わるさ、すぐにな。」

そう言つて連中は悪意しかないニヤケ顔を向ける。

その下卑た視線からは厭らしい以外の何も感じなかった。

私は瞬時に何をされるか察して、冷静ではないもののひとつの答えにはたどり着いた。

…逃げなきゃ、だめだ。

しかし、運悪く程よい間隔で迫られてるため、逃げ道がない。

やがて、一人の男に腕を掴まれる。

「いやーやめて離して!!」

そう言っ腕を振り回すが、握っている腕の握力は強く、到底抜け出せない。

「へっへ、そんな固いこと言わずによおー?」

「じゃあ、いただきましようかな?」

さらにもう一人の男が服を剥ぎに来た。

その男は私のパーカーに手をかけた。

ただ、それが抜け出す絶好の機会だった。

私はパーカーしか掴まれてないことを確認し、掴まれてないもう片方の腕からパーカーを脱ぎ、そのまま腕を掴んでいる方の男の腕に噛み付く。

「なっ!」

「つてえなあ!!」

2人が私から離れた瞬間、私は一目散に逃げだした。

どこに行くか、なんて考える暇なんてなかった。ただ、後ろから怒号と共に追いかけてられる気配だけは確かだった。

走りながらずっと思い続ける。

誰か助けて…!

——遥side——

それは偶然だった。

こちらに帰ってきてから初めての週末。

にもかかわらず、何故かしら人通りが少ない。

俺は特に用があった訳で街に出た訳では無いが、こういう用のない

日に限って何かがあるもんだと思う。

現に。

今日珍しく聞いた人の声に誘われて、外れた道を歩いていると、目の前に服が、水色のパーカーが落ちているのを確認した。

そのパーカーには見覚えしかない。

それに俺はすごく悪寒を感じた。

そのあと走り出したのは言うまでもない。

第61話 変化

——遙side——

「くそっ、どこ行った！」

俺は軋む足など等に忘れ、ひたすら走り回り、美海を探していた。数分前。

あの時見たのは無造作に脱ぎ捨てられていた美海の水色のパーカー。

少なくとも美海は、特別な事情でもない限りこんなことはしない。まさか人が少ないと言う時に予感していたものが、こうも当たるとは……。

くそっ、マジで見つからねえ。

絶対にまずい状況になってるんだ、そうに違いない。……なら。

もし、本当にまずい状況の時に、人は無意識で動くなら。

美海はどこへ向かう？

考えろ……場所、時間、状況。

そして、美海に思い入れがある場所、無意識に足がむく場所。ずっと見てきたんだ。分からなくてどうする……！

考える。考えつめて……

……分かった！

と思ったのと同時に俺は再び走り出した。

今度は当てのないものではなく、ちゃんとした目標がある場所へ。

漁港跡。

雪がつもり、もう昔の面影は見えないこの場所は、俺と、美海にとって重要な場所なはずだ。

そう、あの日、美海と一緒に海に飛び込んだ場所だ。

もし、あの日のことが俺の自惚れじゃなければ、美海の思い入れのある場所というのは間違いない。あれだけのことがあったのだから。

なんて、何があったかなんて振り返る必要は無い。
俺は一旦荒れた息を戻し、落ち着いて美海を探す…
はずだった。

探し始めて1分足らずのうちに美海を見つけた。

しかしそこには危なげな男も見えた。誘拐でもしそうな、危なげな男が。

… どうにかして止めに行くか。

そう思った矢先のことだった。

ギイツ… ドオオオオオオン!!

!?

俺は即座に音の鳴るほうへ振り向く。どうやら使い古され、錆び付いていたクレーンが落ちたようだ。

… いや、何が落ちたかはまだいいでしょう。

問題は、そこにさっきまで美海がいた事だった。

みつ…

「美海あ!!!」

——美海 side——

逃げる。ただ逃げる。

最初は開いていた差も、少しずつ迫ってきている。気を抜いたら… と思うと苦しいけど走り続ける。

そうしていつの間にか、私は漁港跡へと追い詰められていた。

距離を詰められ、ギリギリまで下がる。一二歩後ろはもう海だっ

た。

「さつきはよくもしでかしてくれたなあ？嬢ちゃんよお？」

噛み付かれた腕を赤くしながら一人の男が迫ってくる。その表情は怒りではなく、さつきと同じような表情だった。

「… 一体、何のつもりなんですか。あなた達は。」

私は恐怖で少し震える声で尋ねる。もつとも、まともな返答なんて帰ったこないが。

「特に何もねえよ？ただ遊ぼうってだけの話だよお。」

この遊ぶという言葉が、私は1番怖かった。ろくな事にはならない、それだけは分かっていたから。

助けが… ほしい。

私は自分の非力さを恨む。こんな時、誰かに頼るしかできない。でも。

分かっている。私がいつも頼るのは、頼ってしまうのは…。

とても不器用で、優しい。私の好きな人。私のヒーローみたいな人。

その人は、私の視界の端にいた。見えた。

「はるk」

その名を呼ぼうとした時、私の頭上を影がおおった。

えっ

ギィ… と音を立て、少しずつその影は大きくなる。

私は頭上を見上げる。

そして、1歩、足を後ろに引く。ただし。

そこには足場などなかった。

「あっ…」

小さな言葉を残して、私は深い海へと沈んでいく。

轟音は、遠くからすこしきこえてくるだけだった。

沈む。

深く深く、沈んでいく。

苦しい。痛い。

どうにかできないかと足掻いて、無力さを知ってやがて諦める。

ああ…冷たいなあ…。

私は一人、目をつぶった。5年前助けてくれた遙は、すぐ近くにはいない。ヒーローなんて、そうそう来るわけないと諦めていた。

ああ、でも…。

好きって言った方が、よかったのかなあ…。

私はいつの間にか、生きることすら諦めようとし、思考を放棄した。目を閉じる。

…ピキピキ。

静かな海の中、耳を済ますと何処からか音が聞こえた。

(…なんの音だろう?)

目を開ける。次の瞬間、あるはずのないことが、私に起こった。

(…息が、できる…)

理由なんてどうでもよく、私はすいすいと海の中を泳いだ。

こうやって見る海は初めてで…怖すぎるほどに、綺麗だった。

「美海!!」

遠くから叫び声が聞こえる。いつかのヒーローは、遅れてやってきた。

「美海…っってお前、泳げるのか…?」

近くによった遙が、改めて確認する。そのあと、私の肌から見慣れた光を見て、1人で納得していた。

「うん…。理由はわからないけど、全然苦しくないし、陸と同じように動ける。ねえ遙、これってやっぱり…。」

「ああ。エナ…。だろうな。間違いなく。」

私はそれを聞くと安心した。…。これでやっと、同じ土俵に立てた気がしたからだろうか。

「んまあ、とりあえず上がって話をするか。あれらも片付けた事だし。」

あれ…？

大事なこと…。忘れてた？

——遙 side——

ありえなく、ありえる話。

海に沈んだ美海は、いつしかエナを持っていた。

しかしまあとりあえずだな。

…。陸のごたつきをとりあえず終わらせるか。

俺は美海の手を引いて陸へと上がる。

陸ではチンピラ3人が未だに伸びていた。

く過去く

「ああん？なんだあてめえは？」

美海が海に落ちたというのを確認した後、俺は飛び込もうとしたが、その前に手前3人のチンピラをどうにかしなければいけないと気づいた。

「そんなんでもいいだろ…。それよりてめえら、美海に手え出したってことは、死ぬ覚悟あるってことだよなあ？」

俺は精一杯拳を握る。ギリギリと音を立てる拳には多分、いつもの3倍は力が入っていたと思う。

「んだあ？ガキがしゃしゃってんじやねえぞ!!」

1人が殴りかかってくる。

俺はすかさず手でそれを受け止める。

「おっと。手を出したな、反撃させてもらうぞ。」

俺は空いてる手で精一杯のパンチを腹へ叩き込む。その男はそのまま倒れ込んだ。

実は誰にも言っていないけど…空手を習ってたから、これくらいなら倒せる。本当は振るうべきじゃないけど。

「この野郎!!」

残り2人も、似たようなもんだ。なにか武術ができるわけでもなさそうだったので、同じように片付ける。

所要時間は3分程度。

無駄足を踏んだ俺はすぐさま海へと飛び込んだ。

く現在く

「…生きてる?」

美海が倒れてる連中を見て心配そうに尋ねる。

「流石に人を殺す勇氣はねえよ…。まあ、警察は呼んだから、数分で来ると思うぞ…。やれやれ、せつかくの休日だったのに、こんなことになるなんてな。」

「…ごめん。」

「美海は悪かないよ…。つと、一人起きた見たいだな、お話でもしてくるか。」

チンピラの1人が起きたのでとりあえず動機やらなんやらを確認する。

「おい、お前。首謀者が誰かとか言つといた方が、楽になるぞ。」

俺はしやがみこんで威圧的に言う。

「うっ…。確か、上背のない、中学生のガキだった気がする…。です。」

「…中学生か。よし、分かった。寝てていいぞ。迎え呼んでおいたから。」

その数分後、サイレンとともにパトカーがやってき、瞬く間に3人は連行されてった。さて、とりあえず一件落着かな。

美海の方歩こうとする。

しかし、その1歩はしっかりと踏み出せなかった。

・・・あれ？

ぐにやつとするような感覚。俺はその場に倒れ込んだ。突発的な胸の痛みに苦しむ。

「遥!？」

倒れた音を聞いてか美海が駆けつけてくる。

「あー・・・ごめん、救急車・・・よろしく。」

そうとだけ言い残して目を伏せる。

俺は、海に飛び込んではいけないことをすっかり忘れていたのだっ
た。

その後、搬送された先で大悟先生に激怒されたのは言うまでもな
い。

第62話 新たな始まり

——side——

「…。」

もう訪れなれた病院。目覚めた場所はいつもと同じ病室だった。

「… 起きたか。さて、説教の時間だな。」

少し遠くで雑誌を読んでいた大悟先生はよいしょと椅子から腰を上げ俺のベッドの近くの椅子に腰かける。

「待ってください！これには事情が…。」

「やかましい！お前そうでなくてもいつか絶対やらかすだろ！」

弁解の余地もない。というか足のこと2日くらいで忘れてたから結局先生の言うことはその通りだ。

「… まあ、理由だけは聞いてやるよ。説教はそのあとでみっちりできるしな。」

しかし、先生は優しい。素っ気ない態度ばつかつてるような気がして、実は全然思ってくれてるのだろう。

とりあえずそれに甘えて美海の1件を話した。

「… なるほどな。緊急を要する自体だから飛び込んだけど実は飛び込む必要は無かったって話か。これで必要があつたらまだかつこよかつたんだがな、お前。」

「骨折り損のくたびれもうけてやつですね。」

ハハツつと乾いた笑いを飛ばす。いや、このあとのこと考えたら笑えないしね？

「さてと… 事情を聞いた上で説教するつもりだったが、めんどいから端的に済みますか。」

そう言つて先生は手元に置いていた雑誌を持ち、立ち上がる。

助かった…？まあ、いいか。

「まずお前1週間入院な。投薬も1からやり直し。期間は… 2週間でもいいか。んで、何があろうとも1週間病院から出さねえからな。大人しく寝てろ。」

「ええー……。まあ、そうですね。」

「医師の忠告守れねえやつを完全じゃねえ状態で外に出せるわけねえだろ。例外だとしてもな……。俺も医者だからよ、人の命には厳しくいくしかねえんだ。」

そんな先生から発せられた言葉だったが、最後の一言は少し弱かった。

「じゃ、俺そろそろ戻るわ。暇になりそうなら何か持ってきてもらいな。くれぐれも安静に。」

そうしてドアが閉まる。先生が出て行ったあとの病室で俺ははあ……。とため息をついた。

やれやれ、また入院か。

まあ、今回に関しては自業自得であるので特に何も言えないが。

「ねえ。」

「!?」

なんて思っていると別の場所から小さな女の子の声が聞こえる。

一瞬驚いた後に今いる病室は個室ではないということを知った。

とはいえ姿までは視認できず、辺りを見回す。

「あ、ごめんごめん！カーテン開けるね。」

と言うと右のカーテンが開けられ、そこに一人の少女が横たわっていた。

「はじめまして、おにーちゃん。」

「……。ええ？はじめまして……。」

圧倒的に不意をつかれたため、戸惑いながらの返事だった。もちろんくすくすと笑われている。

「面白い人なんだね、おにーちゃんって。さっきから聞いてたけど。」

「うるさいよ……。っと、そうだ、名前。俺は島波遥な。」

するとその少女はすごく喜んだ表情をした。

「おにーちゃんも「はるか」なんだ！あたしは日野陽香、おにーちゃん

と同じ名前!!」

「そつか。じゃあはるかちゃんって呼ぶのすごい引つかかるな…。どう呼ぼうか?」

「あたしもちよつと変に感じるから…。じゃあ、はーちゃんです!」

はーちゃん…。どこか感覚がまなかに似てるな。

「…分かった。ちよつと変になるけど陽香、でいいか?」

「うん!」

そう言っつて元気よく陽香は返事をした。

それ以降は特に何も無く1週間、大人しく病院ですごした。

とはいえ、陽香がいたぶん、暇はしなかった。

どんなものが好きか、どんなところから来たか。

そんな話を、色々聞いた。

そうして迎えた退院の日。

何かが、動き出した。

「…よし、じゃあひとまず退院つてことでいいかな。薬忘れんじやねえぞ。」

問題行動は特に起こさなかったので、今日でめでたく退院である。

少し名残惜しいが、陽香ともここでお別れになるのだろう。

どうやら名家の人らしく、なら、そう易々と関わりは持てないからな。

「はい…。じゃあね、陽香。」

「…。」

そう言ったが、返事が返ってこない。寝てるのだろうか。

とはいえ、今は朝の10時。起きてるはずなんだが…。

「…先生、ちよつと待ってください。なにか、嫌な予感がします。」
「奇遇だな…。俺もだよ。」

俺と先生は多分、こういう所が似通っている。

そう、【第六感】が非常に強いということである。

俺は立ち上がると隣のベッドのカーテンを開けた。

そこには、心臓を抑え、苦しそうにしている陽香がいた。

「先生!!」

「分かってる! とりあえず人を呼べ!」

俺はとりあえず急いでそのベッドのナースコールを押す。

幸い、人はすぐに集まり、早めのうちに陽香は運ばれていった。

↳ 数時間後↳

流石にあの状況で帰ることも出来ず、陽香の治療を待ってた俺は、それを終えたであろう大悟先生に呼び出され、そのままついてった。

ついてった先は屋上、先生は手すりにもたれかかると遠くを見下ろしながら話し出す。

「とりあえず治療は終わったよ。死んじやいない。。。そこは安心しな。」

「そうですか。。。よかった。」

俺は心からそう思う。

大切だと思ってる人を、もう失いたくはない。

短い付き合いだが、陽香は俺にとって、もう特別な存在なのだから。だから、心から安心する。

しかし、現実はそう甘くはなかった。

「良くねえんだよ、これが。。。むしろここからが重要だ。」

先生は苦虫を噛み潰したような顔で続けた。

「あの子、このままだと死んじまうぞ。確実に。」

第63話 白から黒、その先

——side——

このままだと、死ぬ。

それはあまりに簡単で、残酷な答えだった。

先生は続ける。

「まあ、前々からやばいと思ってたんだが、向こうの親御さんが手術させるかって所で渋ってな…、とりあえず手は尽くしてたんだが、流石にそれも限界らしい。これからの延命には手術は必須だ。」

「なんで… 親が娘の命を助けるのに手術を渋るんですか。」

親と、小さい子の命の話。

俺は幼き日の自分に陽香を照らし合わせた。

もし、親からの愛情が陽香に届いてないとすれば…、きっと俺は、今すぐにその親を殴り倒しに行くかもしれない。

… ああいう終わりを迎えたけど、俺の親も、俺への愛があったのかもしれないのだから。

そんな表情の俺から何かを汲み取ったのか、先生はそれは違うと否定した。

「ああ、お前が考えてる理由とはちげえよ。もつと根本的な話。手術の難易度が高く、失敗する可能性も十分あるという事だ。まだどう転ぶかわからない状態で、リスクの大きい手術をさせるかって話だ。それに…。」

そう言いかけて先生は俯く。

「それに、どうしたんですか?」

「… いや、なんでもねえよ。とにかくだ。とりあえずここからは医者と患者との話だ。お前がどうこうできる話じゃない…。話はこれだけだ。」

最後の方は早口に、先生は言い残して直ぐに仕事の方へと戻って行くこうとする。その白衣背中中、あまり関わるなと言うような忠告をしてるような、そんな気がしていた。

俺に出来ることは… ないのか?

悔しさから歯ぎしりをする。

あれから、少し大人になっただけで、何も変わってない。

無力のまままだ。

結局俺は……。

それでも。

俺は拳を握る。強く。さらに強く。

それでも、そこから足搔いてきたのが、島波遙だろ……！

「先生！」

俺は叫ぶ。大声で叫んでも、ここなら迷惑になることも無いだろう。

「……なんだ？これ以上話すことは無いぞ？」

「あの、電話番号だけ、貰っていいですか？」

俺に出来ることが今はなくても、信じることは出来る。

噂なんか当てにならない。信用のあるものは当事者の言葉だ。

ならこれが、俺の精一杯の足搔きだ。

「……しゃーねえ。ほらよ。」

先生はしゃしゃつと番号をメモし、俺に手渡し、そのまま中へ入っていった。

今はここまで。後は……信じよう。

俺はまだ見ぬ希望に全てを賭け、ただ願い続けることにした。もつとも。

そんな淡い希望は、数日後、一通の電話で打ち消されたが。

↳数日後↳

あれからずっと、陽香の身を案じていた気がする。

少しの間しか一緒にいなかったのに、何故こんなに気になるんだろうか？何故こんなに心配してるのだろうか。

ここまでの数日間、先生に電話をかけようとしたが、信じると言っ

た自分に反するんじゃないか、とずっと手を止めていた。

あれから3日、いや、4日過ぎた。

流石に結果くらいは、聞いてもいいんじゃないだろうか。

そう思っただけは電話を手にする。

二三回コールの後、先生に繋がった。

「……もしもし。」

その第一声は、どこか暗い。

少し嫌な予感がするが、あえて気にしないと決めて続ける。

「もしもし、先生。俺です。」

「知ってるよ……んで、何の用だ。」

話がないなら切れと言わんばかりの語気。いつもよりどこか刺々

しく、余裕が無い。

「結果、教えてくれませんか？」

あえて深い言い方はしなかった。自分の気まで重たくなるのはご

めんだ。

「……。」

電話の向こうからの返事はない。

「先生？」

「……チツ、今から病院、来れるか？」

先生は軽い舌打ちと共に、言葉を吐き捨てる。

時刻は4時。この時間なら迷惑になることは無いだろう。

夏帆さんも保さんも今日は仕事なので、書き置きだけしておけば問

題は無いはずだ。

「行けます。じゃあ、切ります。」

「……ああ。」

そして電話が切れると共に俺は4日ぶりの病院へと足早に向かった。

病院へ着くと、受付の方に先生に呼ばれてる場所を伝えてもらった。

「どうやら、また屋上のようだ。」

「俺はそれを聞きとどけると、迷わずエレベーターに飛び乗った。」

「…来たか。」

「屋上。一人の男性と、風で揺れる白衣が目に入る。」

「…単刀直入に教えてください。どうなったのか。」

「俺は会話の流れをぶった斬つてでも結果を聞く。」

「先生は苛立ちをどこかに吐き出そうとして、出来ていなかった。」

「やがて、何かを決心したか前を向き直した。」

「お前、ここまで来たらもう引き返せねえぞ。」

「引き返すつもりなんて、ハナからないです。」

「そうかよ…お前だけは、巻き込みたくなかったんだがな。」

「先生はもたれかかっている姿勢を少し変え、本題を始める。」

「手術は失敗でも、成功でもない。そもそも始まってすらねえんだ。」

「??？」

「どういうことだ？」

「…いや、少し違うな。」

「何故だ？」

「そんな、手術がまだ始まってないって…、一体どこがストップをかけてるんですか？」

「そこだよ。そこが一番の問題。」

「先生はガンツと手すりを叩きつけ、持っていたケータイを投げつけた。」

「つとと。」

「慌てて取ったが間に合った。」

「先生はそれを指さしながら言う。」

「聞いてみるよ。それ。それが、今回の原因だ。」

第64話 島波遙という男

——遙side——

「これは…?」

俺は投げ渡された携帯の音源を確認する。

起動すると、数秒のノイズの後に機械合成音のような音声が聞こえてきた。

語られた文はこうだった。

『1度しか言わないからよく聞け。私は貴様らの病院に爆弾を仕掛けた。起爆のするしないの権限はこっちにある。嘘だと思って探さなくても構わないが、以下の条件が守られない場合は問答無用で爆破させる。まず1つ、警察への連絡だ。こちらに情報が来た瞬間、即刻押させてもらう。そしてもう1つの条件。こちらが本題だ。』

その次の言葉に俺は戦慄した。

『日野陽香の手術を失敗させろ。』

「!!」

ボイスレターはそこで途切れた。

俺が少し震える手で先生に携帯を返す。

「…そういうことだ。そりゃ動けるわけねえだろ。」

「そうですね…手がかりとかあるんですか?」

「ない…。強いて言うなら、日野家そのものを恨んでいる奴の犯行ってことは、考えれなくもないが…。あそこはかなり大きい名家だ。憎まれなんて多方向からの可能性が高いだろう。」

目の前には、絶望しか無かった。

陽香を助けたら、他の方の命まで危なくなり

かといって、失敗させる訳にもいかない。

そして、犯人は未だ不明。

ちようど、四方八方塞がれてる状況である。

俺は…どうすればいい。

俺に何が出来る。

一つ俺が分かっているのは、全て危ない橋を渡ることにいるという事だった。

ただ、それが分かっていたからこそ、答えには早くたどり着いた。簡単な話だ。どれをとつても危ない橋なら、全てを助ける道を選ぶことが一番だ。

だから俺は……

「……先生、決めました。俺、やります。」

俺は真っ直ぐな視線を先生にぶつける。返ってきた視線は、奥底が燃えていた。

それは俺が見てきた、一途で、熱さの絶えない、いつもの先生だった。

「ああ、お前ならそう言うと思った。どうせ犯人を探しに行くんだろ？ だったらもう俺は止めねえ。ただ、俺はお前を信じて、手術を成功させる。だから……約束しろ。」

先生が少し恥ずかしそうに右拳を突き出す。

俺はそれに合うよう、左拳を差し出し、拳を合わせて約束した。

「じゃあ俺はそろそろ戻る。仕事もあるしな。お前は……街へ戻るのか？！」

「ええ。日野家があるのも街なんですよね？ なら、犯人の居場所も街の可能性が高いと考えて。」

「そうか。じゃあしばらくお別れになるな。」

「大丈夫ですって。逐次電話も入れますんで。」

「ああ、そうしてくれると助かる……つとそろそろか。じゃあな。うまくやれよ！」

先生はそういうと足早に病院に戻って行った。

さして。

ここからが、俺の戦いだ。

俺は1度深呼吸をすると、家の方へと急いで戻った。

出来れば今日中に街の方の借家に帰っておきたいしね？

しかし、家に帰った時間には、もう電車がなかったので、今日はま

だこつちの家に残ることにした。

「夏帆さん、保さん。」

夕食が終わった頃、俺はこの件を伝えるために2人を呼び止めた。「なんだ？」

「明日から数日、街の方へ帰らせていただきます。急に帰ってきてまた急に戻って、すいません。」

「…またなにか大きなことが、あるんでしょう？」

あれから5年間一緒にいた夏帆さんには、もう大分筒抜けになっていた。

内容は話せないが、できるだけ伝えようと努力する。

「…はい。内容は詳しくはいませんが、見過ごす訳には行かない話なんです。人の命が、かかってるんです。」

「ふむ…。」

保さんはそれつきり腕を組んで黙り込む。変わって話し出したのは夏帆さんだった。

「別に戻るのには構わないよ、遥君。ただね、忘れちゃいけないことだけは、忘れないでね。私たちがずっと、遥君のそばにいてること。困ったらいつでも頼って欲しいし、もつと甘えて欲しい…分かった？」

「大丈夫です。」

「うん、じゃあいつかな！怪我だけには気をつけるようにね。じゃあ、行ってらっしゃい！」

「だから行くの今日じゃないですけどね!？」

夜更け。

俺は部屋で、1人荷物の整理と気持ちの整理をしていた。

この先の事を考えると、正直不安だ。

全てが上手くいかない世の中だったことはあの日、痛いほど分から

された。

それでも抗い続けるのはきつと、いい結果になってくれると信じてるからだろうか。

全く、淡い期待だ。

でも今は、こうやって期待を寄せないとやってけないんだろうな。

荷物のまとめが終わると、俺は思い立ったように外に出た。

帰る前、どうしても寄りたい場所があった。あの堤防だ。

堤防に座る。

水瀬のことが思い出されるこの場所で俺は何を探してるんだろうか？

…いや、いい。やめよう。

考えたって変わらない。待って決めてるんだ。

それ以上考える必要なんてないからな。

そうして俺は数分の後家へと再び歩き出した。

時間は進む。

それでも俺は明日へと歩く。

もう何も、大切なものを失わないために。

第65話 燃える瞳

——side——

始発電車に揺られ、俺は街へと一旦戻った。

陽香のことについて動くには、申し訳ないがこっちの方がやりやすいわけで、一旦帰らさせて貰った。

一応、俺の部屋について紹介しておく。

部屋の大きさは至さんの昔のアパートの3分の1くらい。

1人で暮らすには十分なサイズだが……

まあ、俺は結構うるちよろしてしまう人間で、そこまで家にいないというのが現状だ。

今回も、荷物だけまとめておくと、直ぐに外に出た。

そういえば俺のエナは、性質上少し特殊だということが、いつしかの検査でわかった。

曰く、乾くペースが人より遅いそうだ。

それこそ、幼少期から陸に行くことが多かった分、自然とそうなったのだろう。

これが今の性格を作ったなんて自覚まである。

さて、そんな話は置いといて、本題に戻ろう。

俺が最初に向かったのは、俺の義足を作ってくれた技師、日野鈴夏さんの元だった。

先生が言うに、陽香は、鈴夏さんの妹さんの娘と聞いていたが、俺は詳しい話を知らない。

というわけで、今回の事件のこと、鈴夏さんと妹さんの関係を知るために、話をしに来たわけだ。

「すいませーん！」

「あいよー……ってなんだこの前のガキじゃねえか。なんだやらかしたのか？」

奥の方から白いタオルを頭に巻き、ランチを片手に女の人が出てく

る。この圧倒的技師っぽいスタイルなのが、日野鈴夏さんだ。

「いや、足の方はおかげさまで…。それより、もつと別な、大切な話があつて来ました。」

「お、おう…。まあ、なんだ。ちよつと待ってる。」

鈴夏さんはそう言うと一旦店の外へ出て、すぐに入ってきた。

「何してきたんですか？」

「閉めた。どうせ今日は気乗りしてなかったし。さ、話聞こうじゃない？」

「出鱈目だこの人…。」

「いいのいいの、自営業なんだし。」

まあ、本人が言ってるので大丈夫なんだろう。

というか、むしろこっちの方がやりやすかったので正直助かる。

とりあえず場を持ち直し、俺と鈴夏さんはパイプ椅子に座った。

「んで、話って何よ？」

鈴夏さんは近くのテーブルに肘をつき、頬を当てる。

「単刀直入に伺います。あなたは、妹のことをどう思ってますか？」

鈴夏さんは「はあ？」と言わんばかりに口を開けていた。まあ、無理もないか。

「どうって…。まあ、気にかけてはいるわ。真冬のこと。それこそ、連絡なんて容易く出来ないから私の一方的な心配だけどね？」

少し気恥しそうに髪をいじりながら鈴夏さんが言う。この様子だと、建前ということはなさそうだ。

「ちよつと今から失礼なことを聞きますが、鈴夏さんと妹さんの関係について、教えて貰えませんか？」

「なんでそんなこと…。分かったわよ。言わなきゃいけない流れのようだし。」

最初は拒もうとしていた鈴夏さんだったが、俺の視線で折れてくれた。

「まず私が妹と疎遠になってる事、からね？」

「そうですね。」

「そうね…。私ってほら、こういう性格じゃん？こう…。やんちゃっ

て言うかオラオラっていうか。でも、真冬は違った。ううん、違ってたつてもんじやない。私とほとんど真反対の性格。それで、私は日野家の本家のほうにいたんだけど、こんな性格だからよく悪さして、拳句の果てに驚大師の親戚の家に預けられたって感じ。ああ、あいつに出会ったのもこの頃ね。んで、今までずっと疎遠になつてるところ。まあ、あんな姉の姿見て、いいようには思つてなかつたでしょうけどね。…はい、お話終わりー！」

「そういう事だったんですね。」

俺は話を聞いて何を感じただろうか。

悲しい話ではなかつた。もちろん、喜ばしい事でもない。

ただ知りたいなと思つたことはある。

それは妹の目から、姉はどう映つていたかということ。

もつとも、そんな悠長な話をしにここに来た訳では無いので、本題に戻る。

「では、本題に入ります。いいですか？」

「覚悟がいるもんなのかい？…まあ、出来てるけどよ。」

本人ができているといふことなので、俺は間髪入れずに話した。

「真冬さんの娘、陽香ちゃんが命の危機に瀕しています。きつと、真冬さんのほうも良くない状況だと思われまます。」

「…どうということだ？…続きを話してくれ。」

少し笑つていた顔に、もう笑みはなかつた。

ただひたすら瞳の奥が燃えているのだけは確認できる。

「まず1つ、陽香は命に関わる病気にかかつていて、手術をせざるを得ない状況です。」

「まず1つ、ということとは、もう1つあるんだな？」

「ええ。実は、病院に爆破予告の電話が入っており、その代価が陽香の手術の失敗つて事なんです。」

「…はあ？…なんだそりや。そんな理不尽が、あつていいはずねえだろ！」

鈴夏さんは怒っていた。

本来、この件は他言すべきものでは無いのだが、俺は鈴夏さんを信

じて、このことを伝えた。

そして、それはやってよかったと気づいた。鈴夏さんは確かに、妹思いのいい人だ。今ならそうわかる。

「ついでに言う警察はダメです。爆破予告の対象になってるので。」
「じゃあ、解決したいなら自分たちでどうにかするしかねえってことか。…私も協力する。手伝えることあればなんでも言ってくれ。」
「そうですね。そうさせてもらいます。」

こうしてまたひとつ、状況が動く。

また少し、時間が動く。

そんな自分たちの瞳には、なにかが燃えているのが分かった。

第66話 運命はまた人を結ぶ

——side——

鈴夏さんから協力すると約束を受け取った後、俺は直ぐに街の中へと戻った。

正直、ここまで無茶な話だと本来はやりたくない。なにせ状況が漠然としすぎて、犯人のしつぽすら掴めてない。

でも、やり通さなければいけない理由がある。今の俺はそれだけで頑張れる気がしてた。

さて、どうしたものかな…。

とりあえず一通りの多いところに戻って見たものの、どこから手をつければいいのかわからず、俺は外れにあるベンチに座り俺は頭を抱えていた。

考えてるのは2つ。怪しげな場所の散策と、真冬さんのほうに伺うこと、この二択だ。

ただ、両方メリット、デメリットがあるからこそ悩んでいるのだ。

怪しげな場所の散策。確かに犯人の行動区域とかは詰めれば絞れそうだが、第一さつきも言ったが漠然としすぎて、現段階ではほぼ無駄足に近い。

では、訪問の方だろうか。これがあれば、少しは情報がしつかりとしてきて、漠然としたものが絞られてくるが、名家であるがゆえ、取り合ってもらえない可能性が高い。結局取り合ってもらえなければ元も子もないのである。

… 厳しい。

しかし、今回の事件で一つだけ幸いだったことがある。それは、時間を設けられていないことだ。

もつとも、こっちの都合は関係ないが、不自然に時間を設ければ警察に嗅ぎつけられそうと思ったのだろう。しかし、理由はともあれその事実には有難かった。

とはいえ、流石にのんびりとはしてられない。いつ、また陽香の容態が急変するか分からない限り、安全な状態で手術を受けさせた方がいいのだろう。

だから、できれば今日のうちに行動を起こしておきたいのだが。そう思つて座つていたベンチから立ち上がる。

とりあえず、昼食の時間が近づいてきてるので、一旦近くの店にでもと思つて歩きだそうとした時だった。

ドンッ！

「つとと、すみませんね。」

俺は人混みの中で誰かに当たつてしまったと気づき、咄嗟に謝罪をした。が、当たった本人が見当たらない。

「？」

不思議に思つてよく周りを見ると、俺の足元に力なく座り込んでる人がいた。

「大丈夫ですか？」

すかさず俺は声をかける。しかし、帰つてきた声は聞き取りづらいほど弱々しかった。

「大丈夫……です……。すみません……。」

いや、絶対に大丈夫じゃないやつだなこれ。

「お詫びと言つては何ですが、昼食、まだだったら奢りますよ？」

別に機嫌を取りに行つてる訳じゃないが、元気の無い人を放つておけない性格上、自然と言葉を発していた。

「……ついて行つても？」

「ええ。持ちかけたのは自分なんで……。どこがいいです？」

「じゃあ……。あそこで。」

そう言つて指さされたのは街のオムライスの人気店だった。

小さい時に1度行ったことがあり、大学生になってからもよく行つてるので、ここの味は美味いとわかつてる。

というわけで俺は二つ返事でokをだし、そこへ向かった。

俺は中で適当に昼食を注文した後、改めて名前を聞くことにした。「すいませんが、名前聞いてもよろしいでしょうか？」

ついでにこの人の容姿について話しておこう。

身長は俺より10cmほど低いが、その綺麗でロングな黒髪と、美しい顔から、30代弱くらいの女性といったところだ。

もつとも、その顔が作り出している表情は、曇り、陰りしかなかったが。

「日野… 真冬です。その…」

「えっ？」

その女性から出てきた名前に俺は思わず声を上げてしまった。

これは運命かなんかなのだろうか？あまりの事態に俺は数秒硬直した。

「その… すいません…。」

「いやいやいや！謝らないでください！俺謝ってもらうことなんてされてないですよ… それよりちょうど良かったです。真冬さんに会えて。」

「そ、そうですか…。」

と言ったところで注文したものが来たので先に食べることにした。

内容的に食べながら話せるほど軽いものではないしね？

かといって急いで、味わって食べないのは俺の料理の美に反するので、これはこれ、あれはあれと一旦区切ることにした。

「… ところで、私に用って、何ですか？まさかあなたが…。いえ、なんでもないです…。」

互いに手が止まったところで、改めて今回の件について確認された。

ところで今、1部分気になるフレーズがあった。

「まさかあなたが…」というところだ。

これを聞く限り、病院側からか、もしくは犯人からか連絡が言ったのではと考えれる。

ここで、さつき塞ぎ込んでいたことと繋がる。

ということは、真冬さんは、無理やり家を抜け出してきた可能性もあるのでは？

もし、さつきの場面、逆の立場だったとすると、俺は拒否してその場を去る行動を取ったと思う。

そんな中店に入るという行動とったということはまさかそういうことなんだろうか？

だとしたら、見つかるのも時間の問題だな。伝えたいことは話しておかないと……。

「あの……？」

「あ、はい！……待ってくださいね。」

とりあえず言いたいことは……ええと……。

やめた！行き当たりばったりでいいや！

「単刀直入に伝えます。陽香ちゃんの1件、手伝わせてもらっていいですか？」

「……!!」

場が凍る。真冬さんと言うと下を向いて何かを考えているようだった。

やがて、弱々しく口を開く。

「あなたは……陽香のこと、知ってるんですね……。」

その表情は安堵してたのだろうか。少しだけ柔らかかった。

「ええ、なにせずと隣にいましたからね、入院中。それで仲良くしてもらって……、だから今、助けたいんです。」

と、そんな状況で先程懸念した通り、数名の執事のような人が入ってくる。間違いなく真冬さんのところだろう。

だって「ここにおられましたか」なんて言っちゃってるし……。

「真冬さん……。」

「……ええ、分かっています。ありがとうございます、少し落ち着きました……よろしければ次は家の方へおいでください。」

立ち上がって遠ざかっていくその真冬さんの姿は綺麗な大人の女

性、そのものだった。

俺はその背を見送りながら最後に伝えるべきことを伝える。

「分かりました。あ、最後に名前だけ。島波遥と言います。」

返事はなかったが、聞いたことがあったのか一瞬だけ驚いた仕草をみせ、手を小さく振って店を出ていった。

さてと…。

いつの間にか執事のような方にお会計まで済まされたようだ。レジで先程の方が、と言われた時はさすがに驚いた。

俺は外の空気を大きく吸う。

手がかりはいまだ掴めないが、確かに大事な一手を打てた。

さて、こうなったらもう引き返せないな。

俺は覚悟を決めると、向かうべき場所へと一歩を踏み出した。

第67話 過去と未来と

——遙side——

空気がより一層冷たくなる。気づけばもう夜だ。

今日一日歩き回り、色々と情報を得たが、確信に至るには全然先の話だ。

これから何をすべきか、という道筋自体は立っている。しかし今は、分かったことを先生に伝えとくべきと感じ、電話を手にした。

今回は長引くことも無く、コールが直ぐに繋がる。

「もしもし、なんか用か?」

いつも無愛想な返事だが、特に機嫌が悪い様子でもなさそうだ。

「とりあえず今日の報告を、とだけ。」

「そうか、よろしく頼む。」

そして俺は今日わかったことを話した。鈴夏さんの真の過去、当事者の状況、雰囲気。今のところこれだけだが、真冬さんと接触できたのは大きいと思っている。

「なるほど。あいつから過去の話をすることは無かったけど、そういう事だったんだな。まあ確かに、あの性格なら跡取りとしては不安だろうけどな。」

聴き終わった先生は少し笑いながら鈴夏さんの過去を語る。

「あいつの言った通り、俺とあいつがあつたのは小学校すぐだ。家の近くでやんちやしてるあいつと会って、いつしか一緒にやんちやしてたつてのが俺達だからな。ああ、俺はあいつほどやばい事やってねえよ?」

「分かっていますよ。先生ここぞって時にチキンですからね。」

「あ?」

「なんでもないっす。」

そんな中、先程一瞬だけ威圧的な態度をとった先生だったが、口調穏やかに語りだした。

「…いいんだよ。人はここぞって時に臆病で。臆病だからこそ周りがよく見えるし、本当に立ち止まらなきや行けない場面で立ち止まれ

る。臆病なのとビビって逃げるのは、また違うだろう？」

俺は一応専攻してるのが心理学なので、言ってることが分からんでもない。

臆病ってのは立ち止まるけど、前に進む意思はある。ただ踏み出せていないだけという状態だろう。でも、ビビって逃げてしまうというのはそれすらも諦めてる。

闇雲に突っ込んで失敗するよりは確かに、臆病であるほうがいいと思う。ただ……

チキンって、どっちなんだろうな？

「そうですね……これくらいですかね、じゃあ、今日はこの辺で。」

そう言っただけで電話を切ろうとした瞬間、先生に呼び止められた。

「ああ、いや、待て。ちょっと聞いて欲しいことがある。」

慌てて切ろうとした手を止め、俺は聞き返す。

「いいですけど……なんですか？」

それは、先生の過去の話だった。

——大悟side——

それは遠い昔の話。

それは、俺が中学生になる前頃の話だ。

俺の母親は生まれつき体が弱かったそうだが、俺を産んでからは何事もないように過ごしていた。

だから当時の俺は、何も考えないままであいつと、すーちゃんと一緒にやんちゃして、バカして、そんな楽しい日々を送っていたけど。

そんなのは全部表面上の世界だった。

ある日突然俺の母親が倒れたと、学校で俺は聞いた。どうもステージが進んでいたようで、手術をしなければいけない状況だと、聞かされた。

シヨックだった。あれだけ元気そうだった母がって。

そう、俺は母親が無理して生きてるのを全く知らずに、呑気に過ごしていた。

その時、いつの間にか俺は泣いていた。

理由は、体を覆う罪悪感ただ一つだった。

俺は自分の母親が苦しんでる中で、1人だけ自由に生きていたんだって、迷惑かけていたんだって。

それが悔しかった。情けなかった。

ただ、そんな俺は前を向こうとはしなかった。

向き合えばそこには、ただずっと苦しんでいる母がいたからだ。

それを見るのが辛くて俺は、ずっと逃げていた。

そんなある日、数日後に母が手術を受けるという中で、俺は父に呼び出され、思い切り一発殴り飛ばされた。

これまでもやんちゃして叱られた時に叩かれたことはあったが、今回はそのどれよりも重たく、熱い一撃だった。

頬を抑える俺に、父は言った。

「逃げ出すんじゃないやねえ！前を向け！本当に苦しい人間がわかるなら、自分の保身に走るな！」と。

俺はすぐに悟った。母の事だと。

そう言われて俺はハツとした。

俺はいつの間にか、苦しんでいる母親を見ている自分が一番苦しいと思ひ込んでいたのだ。

だから、本当に苦しんでいる母のことを思えていなかったと。

臆病というのは、そこでようやく理解した。

その日から、俺はずっと考え続けた。

母に何が出来るか。もし退院したら何をしてあげれるか。

しかし、母親は帰ってくることは無かった。

【手術失敗】

この4文字だけで、俺の母の死は片付けられたのだ。

俺は数日間閉じこもった。そこでひたすら泣き、手術を失敗した医師を、病院という機関を憎んだ。

でも、やがて思い出したのは父の言葉だった。

また俺は逃げようとしていた。今度は自分でそれに気づいた。今辛いのは、悲しいのは父と、俺だ。

でも、逃げてただ失敗を恨む人間には、もうなりたくない。

だから俺は道を選んだ。

医師になる。せめて俺の知り得る範囲では、俺と同じように悲しい思いをして欲しくないからと。

そうして出来上がったのが、今の俺だ。

そして今、目の前で苦しんでいる、手術を待ってる人がいる。

それを助けるという想いは、何があっても変わらないつもりだ。

第68話 後悔の瞳に映るもの

——side——

「…珍しいっすね。先生が自分のことを語るなんて。」

全てを聞き終えて、俺の最初の感想がそれだった。

そして次に、ああなるほど、と理解が行く。

この人もまた、苦しんだ。辛い思いをした。

それでも、もがいて前へ進むことを選び、ここまで来たんだ。

臆病だのなんだの、この人がそうだったからこそ語れるんだ。

なるほど。やっぱりこの人には…叶わないな。

「まあ、言ってるで恥ずかしいけどよ、ホント。まあ、スッキリしたぜ。職場じゃ、こうやって話を聞いてくれる人、いなかったからな。あいつに伝えるのもまあ…何か癪だし?」

「先生、一匹狼は良くないですよ?」

「わかってるよんなこと…。でも、何か合わないっていうか…俺が求められるものって高すぎんのかな?」

「さあ?そう言われましたも…。ただまあ、少しは柔らかい人になった方がいいっすよ。先生の頑固っぷりは鈴夏さんとよく似てますし。いっそ付き合ったらどうです?」

俺は半分冗談、半分本気でそんなことを言ってみる。だって…

「おいおいやめろ、縁起でもねえ…。それに、今の俺じゃ、あいつには届かねえよ。あいつはきつと、俺なんかより苦労して生きてんだ。いくら奇跡を起こしても足んねえよ。」

先生は、これだけ鈴夏さんのことを思ってるのだから。

「そうですか…。ああ、そうだ先生。せつかくだから俺の過去の話もしましょうか?」

軽口で言ってみるが言ってることは本気だ。

特に言う理由なんてないのだろうけど、この人には何故か伝えた、そう思った。

ひよっとして、俺は先生に相談したかったのだろうか?

過去の未練を断ち切るためにどうすればいいか、という事を。

「いや、時間が無いから今日はいいや。また時間ある時に頼むわ。」

「さつき時間はある素振り見せてませんでした？」

「はは…、冗談だ、時間が無いのは。まあ、今回の一件が終わってゴタゴタが片付いたらまた聞いてやるよ。」

「それって死亡フラグってやつですか？」

「それで死ぬんならそれが運命、なんだろう？」

「いつしか俺が言った戯言が今になって武器にされた。」

そうだな。ここで死んだらそれが運命なんだろうし、だからこそ生きてやろうと燃える。

「そうですね。じゃあまた今度お話しします。陽香にも、よろしく言っ
といてください。あの子は強いと思いますが、きつとどこか弱い部分
があるはずですから。」

「ああ、分かったよ。じゃあな。」

「はい、失礼します。」

そうして長い長い電話は終わった。

翌日。

俺は改めて真冬さんの元へ訪れた。

詳しい家の場所までは教えて貰ってなかったが流石名家、街でどこ
ら辺にあるかということを知ったところ、直ぐに教えて貰えた。

というわけで、その場所に来てみたんだが…。

そこは想像以上に広く、流石に驚くしかなかった。

綺麗な洋館風の建物。人10人で住んでも問題くらいの大きさだ。

ちようどここは少し外れたところの丘の上にあり、ここからだと程
よく街を見渡せる。夜になるとより一層綺麗に見えるだろう。

鷺大師じゃ、こんな家は見る機会すらないだろうと思う。

俺はインターホンに手を当てる。とはいえ、門から家まで距離が空

いてるので、届くのか分からないが……。

と、鳴らしたところで執事の一人が出てきた。

「お客様、いかがなさいましたか？」

「あ、いえ……。昨日の島波遥と言うものです。真冬さんにお話があった、伺わせて頂きました。」

執事はふむ、と数秒考えて快く入れてくれた。

多分あの後で真冬さんから話か何かあったのだろう。

家の中へ入ると、客間の方へ案内され、そこでは真冬さんが待っていた。真冬さんは俺が入ると執事に下がるように指示を出し、そして執事の方はそれに従い部屋から離れていった。

「まず、昨日はありがとうございます。ちょうど娘の1件で取り乱してしまつてあのような……。」

「それは仕方の無いことです。きっと自分が同じ立場でも、正気を保っている方が難しいでしょうし。」

「ありがとうございます。……ただ、元はと言えば私が、娘に早めに手術を受けさせるべきだったんでしようね。」

真冬さんは後悔の念を一回の溜め息に込める。

「それなんですけど、どうして踏み込めなかつたんですか？」

「そうですね……。何といえばいいか……。」

真冬さんは何やら難しげな顔をして、伝える内容を考え、やがてまとまつたところで言った。

「私も、元々体が弱くて、昔小さい時に手術した時、向こう型の不手際で麻酔の時間内に手術が終わらなくて……。」

「そうですか……。」

なるほど、簡単に言うると自分の幼少期の時のトラウマという所か。でもこれって……。

俺はあることに気づいたが、失礼があつてはいけないのでこの場では言わないことにした。

それに、自分が実際同じ場面にいた訳では無い。偉そうな口を聞くのは失礼極まりないことだろう。

「なんて、逃げていたつてのは自分でもわかつてるんですけどね……。」

それより、病院での陽香の様子を聞かせてもらってもいいでしょうか？

きつと、陽香のそばに1番居たのは貴方だと思っんです。」

「様子、ですか……。そうですね、自分のことを悲観はしていませんでした。常に明るく振舞って、いつも元気そうに。だからこそ、あの時倒れたことが不思議だったんです。その後、先生からどんな状態だったかも聞きました……。あの子はきつと、とても強いです。」

「そうなんですね。」

俺の言ったことを聞いて真冬さんは何を思っただらうか？その真意は今の俺には分からなかった。

「ところで、こちらにもいくつか聞きたいことがあっただんです。」

犯罪者の身に覚え、最近憎まれるような出来事、ただ、そんな中で一番聞きたかったのは……

真冬さんの目に映る、鈴夏さんの事だった。

第69話 決意の一步

——真冬side——

私は、姉が、日野鈴夏が好きだ。

姉さんは私より3つ上。でも、私からすれば私と姉さんの差なんてそれ以上にあると分かってる。

いつだって姉さんは、私の中の憧れだった。

私は小さい時から、姉さんが両親に怒られてる姿しか見なかった。聞くところによると、色々いたずらだの悪さだのをしていたらしい。

「お前は跡取りになるかもしれん人間なんだぞ！」とか、そんな台詞をよく聞いていた。

そして、その度に私は「貴方はあの子にならないようにね。」と言われ続けた。

私は、そんな姉さんに憧れていた。

私が「籠の中の鳥」だとするなら、姉さんは「羽ばたこうとしてる鳥」そのものだった。

私はそこに「自由」というものを、きつと見ていた。

そうして私はいつからか姉さんの背中を追っていた。

そんな私を姉さんはこつちに來るべきじゃないみたいなお目で見ていたが、それでも姉さんは優しくかった。

しかし、現実には優しくなかった。

私が姉さんの背中を追ってることがいよいよまずいと両親は思い、姉さんを驚大師の親戚へ預ける、つまるところ追放すると告げた。

この時私は4歳。姉さんは7歳だった。

姉さんが家を出る時、最後に私に告げたセリフはこうだった。

「自由になれ。きつと真冬も、自分の道が選べる。」

ただ、そんな姉さんの言葉とは裏腹に、私は決めつけられた道を歩んでいった。

今現在、私は結婚して子供が1人。私の両親は既に亡くなってお

り、執事と夫と、娘との暮らしだ。

確かに幸せを感じることが無い訳では無い。でもこれだけは言える。

これが、私の求めていた道だったんだろうか？

私は、自分が望んだ自分になれたのだろうか？

その答えは……きつとNOだ。

それでも、今は夫も、娘もいる。

過去は帰ることが出来ないけど、これからの未来幸せを掴めるなら、私はそれでいい。

そんな姿の私を、姉さんがどう見るかは分からないけど。

——遙side——

真冬さんの口から語られる本心。そこには嘘も偽りもなかった。

こうしていろんな人の口から想いを聞くと、人生の重く深いことが分かる。きつと自分の道もこうなるのだろう。

だからこそ、今回この話が聞けてよかったと思う。

「ありがとうございます。こんな自己満足のような話に付き合ってもらって。」

「いえ。それより、私からも教えて欲しいんです。姉さんが、私のことをどう思ってるか。」

「そうですね。すごく心配してたっていうところですかね……。そしてその上で、真冬さんのことを好きと言っていました。」

「そうなんですね。」

真冬さんは軽く目を伏せる。直接なすれ違いは無かったがいつの間にか大きなねじれを生んでいた2人。そんな相手の思ってることが分かるとなにか思うところはあるのだろう。

「つと、最後にもうひとつ聞きたいことがあるんです。最近、どこからか恨まれる様な事がありましたか？」

本題である。もつとも、旦那さんの方に聞くのが理想なのだが、若くして上の人間として働いており、そう簡単に時間が割けないらしい。

仕方の無いことだとは分かってるが、もう少し家族と、陽香といて欲しいと思う。

まあ、後に聞いたところ、数少ない休みは家に帰ってしつかり家族といると聞いたので、このモヤモヤはただの杞憂だったか。

「そうですね…。夫は基本、仕事の話を家でしないようにしてるんですが、この前ポロッと零してて…。確か、「新部署のリーダーになるのはいいが、この業界だと自営の方に影響が出そうだな…。どうしたものか…。」と、言っていたような…。」

…。まじか。

ここまで一気に答えに近づけるとは思ってもいなかったな。

「ありがとうございます。充分参考になります。出来れば会社だけ、教えてくれませんかね？」

「あ、大丈夫ですよ。えっと…。」

そうして俺は会社を聞いた。確かに街ではよく聞く名前だ。

後はここを調べれば何とかなるか…。

「分かりました。後はこちらの方に任せてください。絶対になんとかしてみせます。」

「ありがとうございます…。私にも、何かできませんかね？」

真冬さんは少し俯いた。自分の力のなさを恨んでるんだろうか？

でも、この人しかできないことがある。何せこの人は陽香の「母親」だ。だからこそやるべき事、それは…。

「そうですね。母親として、ずっと陽香の隣にいてくれませんか？強いと言っても、誰だつて1人は辛いんです。愛情が届かないのも。俺だって、そうでしたから…。」

「分かりました…。今日はありがとうございます。」

「いえいえ、こつちの言葉です。」

そうして俺は真冬さん宅から離れる。最後に見た真冬さんの姿からは、どこか決意のようなものを感じた。

一方の俺の決意の方はどうだろうか。

何度も言うがもう立ち止まれないところまで来た。

犯人が凶悪過ぎる場合、自分の命すら危ういだろう。しかし、俺は遂に解決の道筋まで見つけてしまった。ならば、俺の覚悟で全てが動くのだ。

その場を立ち去ると、もう後ろは振り向かなかつた。

第70話 太陽と陽の香り

——陽香 side——

私の命って何だろう？

私が生まれつき身体が弱いことを聞いたのは四歳のときだった。

お母さんはそれを言った後私を抱いてごめんねって謝った。

… 私は、泣かなかった。

それから空元気を続けて過ごす毎日。お母さんを悲しませたくは無かったから。

どこからか聞こえる。

「あの子の性格は真冬さんの姉さんにそっくりだな。」

聞いたところ、よくやんちゃをやつて、元気いっぱい幼少期を送つてみたい。

私は… そんなのじゃない。

無理にでも元気に過ごさなきゃ、いつか私の心は壊れる。

小さな私でも、それはもう分かっていた。

だからいつからか、私は泣くことを忘れ、上っ面の元気を貼り付けて生きていた。

身体が弱いまま、入院して、色々と治療して、そんなある日。

偶然、私は聞いてしまった。

私の命に、この病院の全ての人の命が懸かっているということ。

それを聞いた私は… 笑った。

なぜだろう？自分でも分からない感情だった。

悲しい？嬉しい？それとも別の何か？

理解できない。

行き着いた答えはもつと別のものだった。

ああそうか、私、壊れちゃったんだ。もう、とつくの昔に。

いつの間にか、自分のことさえ、分からなくなっちゃったんだ。

——心はもう、死んじやってるんだ。

そんなある日、私は先生に診察室へ呼ばれた。

特に検査の予定とか聞かされて無かったけど、なんだろう？

「陽香ちゃん、今からきつい事聞くかもしれないけど、いいかな？」

私は、直ぐに何を言っているのか分かった。

今回の事件の事だ。きつとそう。

私は、そうわかると同時に言葉を紡いだ。

「いいよ、殺して。」

「…何？」

先生は固まっていた。そんな中私は続ける。

「私知ってるよ、私の命に、この病院のみんなの命がかかっていること。

病院は、多くの人の命を助ける場所だよね？こんな心の死んだ一人の

人間なんてほつといてさ、もっと多くの人を助けて。」

「…。」

先生は沈黙したまま数秒間動かなかったが、やがて右手を握りしめ

ながら呟く。

「…言いたいのは、それだけか？」

「？」

私が首をかしげた瞬間、先生はガンツ!!とデスクを力いっぱい殴りつけた。

「舐めてんじやねえぞクソガキ!!自分は犠牲になってもいいだあ？ふざけたこと抜かすんじやねえ！心が死んでる？心臓動いてるうちは人間生きてんだよ！それを助けるのが医者役目だろうが!!」

急な大声で私は身体が固まった。そしてそのまま何も言い返せない。

先生は少し口調を落として続ける。

「…自分を犠牲にして他人を助けようとするバカはよく見てきたけどよ、それに命を捨てるってのも違うだろ。それにそんな事したって、全て上手くいくわけじゃないの、分かるだろ…。お前が死ぬだけ

じゃない、俺達が人殺しになるんだ。それで全ての人間が、幸せですって言えるか？違うだろ？」

「でもっ… 私が死ななきゃ、この病院は…。」

私の思考はぐちゃぐちゃになっていた。今、こうやって考え直すと、死ぬという2文字が怖くなってくる。

そんな言葉の止まり止まりな私を見て、先生はふーっと息をつき。私の頭をぼんと叩いた。

「死ぬって、怖いだろ？」

「うん…。」

「死にたくなんて、ないだろ？」

「…うん。」

「そんなお前を、病院をどうにかしようとしている馬鹿がいるんだよ。そいつは筋金入りの馬鹿でな、他人を助けることに夢中になりすぎて、1番根本的なことを見落とす。けど、今回は命だけは手放さない、そういう約束したんだ。みんなが助かる、そういう傲慢な約束を。」

「遥お兄ちゃん…？」

「そ、遥お兄ちゃん。」

私にとってあの人は、太陽みたいなものだった。

あの人がいたから、私は楽しいと思えた。

元気に過ごせた。

太陽がいなければ、陽の香りはしない。

あの人は陽の当たる場所を作ってくれようとしているのに、私はそれに気づかないままだったんだ。

ふと、簡単に単純な4文字が私の脳裏をよぎる。

… 生きたい。

もつと生きたい。世界を見たい。

許されるのなら、私は生きたい…！

気づけば、涙の雨が頬を叩いていた。

先生は私に向き直って言う。

「人間誰だって、生きたいって気持ちがある。大丈夫だ、お前の心はまだ死んじやないよ。生きたいと心から願うこと、それはきつと、美しい花みたいなものだな。」

言葉はいらなかった。

私はただ泣き続けた。いつからか忘れていた涙が心の奥底から溢れてくる。ただ今は、止めるつもりなんてなかった。

やがて泣き止んだ私は、改めて先生にお願いをした。

「先生、手術を、成功させてください。」

「おう、まかせとけ。」

その言葉は今まで聞いた言葉で一番力強かった。

私のお母さんのお姉さんとは違う。

でもいつか、同じ元気を持って、同じ土俵に立ちたい。

忘れてしまった感情を、失ってしまった心を取り返すまでどれだけ時間がかかるかはわからない。

だから今は、精一杯生きたいって願うんだ。

第71話 Don't measure

——遙side——

それから数日間、陽香の容態が急変しないことを願いつつ犯人を追い、やつとの思いで足元を掴んだ頃、登録していない番号から電話がかかってきた。

「ちよつと来てくれるかな?」

この一言に導かれて俺が向かったのは、鈴夏さんの作業場だった。

「悪いね、こんな中で呼んじゃって…。いや、こんな状況だから、呼んだんだっけ。」

「どうしたんですか?」

いつもの鈴夏さんほどトゲトゲしてなく、元気の無い態度に俺は違和感を感じた。

「ほら、私ってさ、ずっと馬鹿一辺倒でさ、こういう事しか脳のない人間じゃない?…。それでさ、思うのよ。今になって、自分がどれほど無力かって。あの子のこと、助けてあげたいのに、私に何ができるのか…。分かんないんだよ。」

それは明らかかな焦りだった。

自分に出来ることはないか、焦って探して探して、そして自分の欠点にぶつかったりしたのだろう。

「無力だなんて…。」

「お世辞はいいから。」

鈴夏さんは俺を鋭く睨みつける。その鋭さから本気で思い悩んでいるというのが分かる。

でも…。

「お世辞なんかじゃないです。」

だからこそ、俺は曲がる訳には行かない。

お世辞を言った覚えなんてない。鈴夏さんに出来ることは確かにある。それは変わらない。

「じゃあ、私に何が出来るって?私に学なんて無いよ?」

「まず、何で学にこだわってるんですか?」

「それは…何でだろう？」

鈴夏さんはうーんと悩む。

自分の見解を述べると、鈴夏さんが学を引き合いに出すのは、きつと自分に無いものだから、と羨んでいるからだろうと思う。

自分にはこれが無いから無力だ、そういう考え方なんだ。

でも、そうじゃない。

人間を決めるのは学があるか無いかじゃない。そこで人間を判断されては、世界は回ってない。

つまるところ、他人より優れ、役に立つ部分があるかどうか、そういう事だと思う。

そういう点に関していえば、鈴夏さんは手先が器用な事をさせれば超一流だ。少なくとも身近でこれに及ぶ人はそう居ないだろう。

く過去く

5年前、おじよしさまを完成させた頃の話だ。

完成したおじよしさまを眺めて、大人達が口を揃えて言った。

「いやー、今年のやつはなかなかすごいんじゃないか？」

「ああ、今までののを見てレベルつてのがちげえな！ああ、でも…。」

「うん、あれだな…。」

「10数年前のあれにはさすがに叶わねえなあ。」

く現在く

俺達作りあげたおじよしさまは確かにいい出来だった。

しかし、これはあくまでみんなで作上げたもの。

その10数年前のおじよしさまを作り上げたのは、当時の鈴夏さん一人だったらしい。

作った本人ならわかる。本気で作ろうと思えば思うほど上手いかなしいし、どこか壁に当たる。

それを軽くやってのける鈴夏さんはそれほどまでに、すごい力を

持っている。

それなのに、鈴夏さんはきつと、自分しか持っていない能力に自信を持っていないんだ。

俺は、それに気づいて欲しい。

「人間の無力さを決めるのは学があるか無いかじゃないですよ。学があっても使えない人間は使えない。力っていうのは、他人より優れてる部分があるかないか、そういうことじゃないんですか？そういうことだったらほら、鈴夏さんはとづくにもう得てるじゃないですか。」

「あたしの…手？」

「そう、あなたの手です。」

鈴夏さんはそう言われて、少し嬉しげに微笑んだ。

「… そうだよな、私にはこの手があるんだ。請け負った作業は100%でこなす、それが私つてもんだ。今はまだできることが無くても、いつかきつと…！」

「そうですね。これから状況次第でバンバン頼らせて貰います。」

鈴夏さんは、だんだん自信を取り戻してきたのか、少しずつ元気づうに動き始める。

やれやれ、この人も結構単純だなあ…。

そんなことを思ってみる。

しかし、鈴夏さんは手先とは裏腹に、内面が不器用だ。

こうやって、伝えないと分からない。不器用とはそういうものだ。

だからもうひとつ。

妹から預かったメッセージも、言わなきや届かない。

「そういえばですね。」

「なんだよ？」

「妹さんから伝言を預かってるんですが。」

「お前つ…！… たあ、仕事早いなく… んで、真冬は私の事、なんて言ってたよ？」

何を思ってるのかは知らないが、鈴夏さんはとづくに頬を赤らめていた。

実際、告げたらもつと赤面したが。

「… 参ったねえ。こんな姉貴、いつでも捨てちまっぺいいのにさ。ずっと追いかけて…でも、ちよつと嬉しいかな。私の背中にちよこちよこことついてきたあの頃と同じように、私を見てくれたなら、ね。」

「1度、会つたらどうですか?」

「今更かい?… まあ、向こうが嫌じゃないって言うならそうしたいけどさ…。まっ、今は今。あの子が今、1番向き合つてあげなきゃいけない相手は私じゃない。また今度、全て片付いたら、あの子に会つてみようと思う。」

なんて話していて、俺は考えていた。

鈴夏さんにはこれがある。誰にも負けない鈴夏さんだけの武器が。

じゃあ、俺はどうだ?

ちよつと優れた学を持つているだけで、誰かの役に立てているだろうか?

自分で見た自分ほど、小さいものはないと、今ならわかる。

俺の取り柄ってなんだ?

結局、俺が言い聞かせたのは、俺自身だったのかもしれないな。

第72話 陰

——遙side——

さてと、どうしたものかな…。

あれからまた数日、犯人がいるであろう拠点をつきとめていた俺は、どのように事を運ぶか考えていた。

自然に振舞って近づくことがベストだけど、勘づかれたら終わりというデメリットもある。そこは重々承知している。

それでも、強行突破も危ない、警察は頼りにならないとなると、現状これが最善手になる。

… まあ、元々が危ない橋なのは分かっているから、どれをとつても変わらないと思うけど。

裏路地に入口のある、だいぶ寂れたビル。どうやらここが拠点で間違いなさそうだ。

あとは人数。大多数でいられたらまた考えなければいけないが…。

複雑な念を抱きつつ、俺はコンコンと2回ドアをノックした。

今から俺が演じるのは失うもののない犯罪者。

ここからは人格を入れ替えるように…。

俺はそう意識して表情を作る。

ドアから出てきたのは1人の男性だった。

「何だお前…？こんな場所に。」

雰囲気は暗い。その目には殺気すら籠っていた。

「… 日野陽香。で通じるか？」
「!？」

男は自分がターゲットにしている人物の名を出され焦りだす。そのまま少し震える手でポケットに手を当てた。何かあるのだろうか？

「… てめえ、何もんだ？」

「何者でもない。焦るな、俺は味方だ。それにほら、外見でみる。警察なんていないだろ。」

「… そうか。一旦上がれ。話くらいは聞いてやる。」

「男はそのまま俺を施設内へと入れていった。」

「やれやれ… 潜入捜査なんて楽じゃねえな…。」

「いいか、今から色々質問をする。返答次第ではその命もなくなるかもしれないな?」

「安心しろ、問題ねえよ。」

「悪党っぽく悪党っぽく…!」

「なんて自分の中で呟いていたが気にしないでおう。」

「まず1つ、なんで日野陽香とここが分かった?」

「日野陽香の方は、親に恨みがあつたから、と。ここが分かった理由か…、風の噂ってやつだな。特に裏路地ではそういうのが時々聞かれる。」

「後者、これは嘘ではない。」

「実際、この情報を得たのも、時々こそつと聞こえる単語から絞り出したためだ。」

「2つ、どういう恨みがあるんだ?」

「ああ、あの男の部署に配属されたばかりだったが、仕事上の事故に巻き込まれた際、直ぐに首を切られた。退職金もなしに、な。その治療費もままならないまま、こうなった。」

「ちよつと待て、それなら俺がデータを知ってるハズなんだが…。」

「探してもないと思うぞ。俺が事故にあつたのも、クビにされたのも全て秘密裏にされてるからな。」

「… あぶねえ。」

「多分今のは理由間違えると死ぬところだったくないか?」

「背筋に冷や汗が走る。そして油断してはいけないということを確認させられた。」

「… ふん、まあいい。動機としては十分だろう。んで、最後だ。お前は何が出来る?ここに入り浸るだけの価値はあるか?」

「ああ、諜報活動とかどうだ?外の様子を俺が担当すればお前がそつちに集中出来る。悪い話じゃないだろ?」

「見ず知らずのお前に急に話を持ちかけられて直ぐにはいつて言えるかよ… しかし、確かに困つてた部分だな。まあいい、それでいいだ」

ろう。」

男は以外にもすんなり俺を受け入れ、付け入る隙を生んでくれた。とはいえ、油断はしないように話を続ける。

「それで？お前は どうするんだ？残りの決行の日まで、どこに住まうんだ？」

「そうだな…、ここにいてもいいけど、俺が常日頃いる場所、開けておくと奪われるからな。そちらに居たい。」

「…そうか。じゃあこれもってけ。」

そう言つて手渡されたのは無線機だった。

電話じゃない理由を聞こうとしたがなんとなく予想は着いたので聞かないでおいた。

「ああ。ありがとう…、ところで、手術決行はいつ頃だったか？」

「そこは詰めてないのか…、決行は明明後日、俺らのもだ。俺がやろうとしてる事、知ってるだろ？」

「…まあ、一応は。」

そういうと男の方はその場を移動して、後ろに控える大きなものを俺の目に入るようにした。

そして、俺の目に入ってきたものに、俺は目を疑った。

なんだ…、これ…。

そこには、大きな画面いくつもと、複雑そうな機械が多く並べられていた。

おいおい、漫画で見るとようなこんな機械、どっから…。

「随分と用意周到だな。」

「まあな。俺が捕まっても意味ねえんだ。大体のことは遠隔でできるようにしてある。」

そう、男は豪語する。

犯人の計画が浅はか出ないことを俺はこの時認識した。

またこれは家に戻ってどうするか考える必要がありそうだな…。
とりあえず今ここから出る口実を…。

「… そうだ、早速外に出てつてくんねえか？こっちの機会弄りたいのもあるし、あまり見られたくはないんだ。」

「… 分かった。じゃあ行つてくる。」

俺はそのまま外へ出る。その時の男の表情は知らない。

「… ふう。疲れた…。」

家に帰った俺はとりあえず一息付き、無線機の裏のネジを外した。理由は簡単だ。俺はまだ信用されてない。当たり前だ。

そして、あれだけの機会を備える男の事だ。

『発信機位はあるだろう』

との考えで開けたのだが… ビンゴ。やっぱり監視されていた。

とりあえず今は動く予定は無いのでここに置いておく。

とはいえ、長時間この状態は気づかれるだろう。

しかし、こっちもタダではやられるつもりは無い。

俺は、発信機をどうにかするための奇策を思いつき、街へと向かった。

第73話 揺れる影ふたつ

——美海 side——

まるでそれは嵐のようだった。

大学に出て数ヶ月、久しぶりに帰ってきた遥は、また何かあったのか街へと引き返して行った。

とはいえ、大体の荷物は置いて行ってる、と千夏ちゃんの両親が言ってたそうだから、またすぐ帰ってくるとは思うけど…。

何だろうか、このもやもやした気持ちは。

あれから5年経って、遥は背も高くなって、よりかっこよくなった。私も、自分では自覚はないけどよく美しくなったなんて言われるようになった。

狭山さんが言うのは信じないけど。

中学生にもなると考えることも変わる。

遥が好きだということは変わらないが、そう思い続けて生きてきた結果、もう千夏ちゃんと同じ年になってしまった。

…千夏ちゃんがそのままだという確証はないけど、光が変わってなかったから、多分そういうことだと思う。

でも私はまだ、そんな思いを秘めたまま、過ごしている。

あの日の約束が裏切れないまま、私はどんどん遥を好きになっていった。

…好きの気持ちを我慢することは、いつまで経っても慣れないまままだ。

午後4時頃だろうか、私はちよつと散歩を、と思つて玄関で靴を履いていた。

光がちやうど晁と遊んでくれているので、ちやうどいいだろうと思う。

「美海ー、どこ行くのー?」

「散歩、5時くらいには戻るから。」

遠くから聞こえるあかちゃんの声に淡白に答え、私は外へと出た。

私は特に何もすることもなく黙々と海を目指して歩いていた。

なぜだか今日は、1人になりたかった。

なんでだろう? 詳しい理由までは分からないけど。

あかちゃんとパパが結婚するまで、パパがいない時は私はずっと1人きりだった。

さゆも居てくれたけど... それでも、多すぎる空白は埋めれなかった。

私はそれが寂しかった。1人は嫌だって、心の底で思ってた。

でも何故だろう、今は、その1人の時間が... 少し愛おしかった。

私の周りにはあかちゃんがいて、パパがいて、晁も遙も光もいて、もう決して1人じゃないってことは分かっている。

その事実があるというだけで、もう幸せなんだと思う。

でも、中学生になって、色々考えることが増えた。

誰にも打ち明けられないような悩みだっっていくつかある。

だから今こうして散歩してるのはきつと、1人で考える時間が欲しかったんだ。

私は、埠頭付近に着くと、その場に座り込んで、氷の浮かぶ海をただぼんやりと眺めていた。

あの日から変わってしまった海。

最後に見た美しい海は、もう戻らないのだろうか?
...

「おい。」

突然、後ろから男の声がした。少し大人びた、でも、確かに遙じゃない声。

振り向いた先にいたのは紡さんだった。

「あ、紡さん。」

「どうしたんだ？こんな所で。」

「…色々考え事、ですね。」

もつとも、もう一人の時間も終わってしまったが。

「奇遇だな。俺も、そのつもりでここに来た。」

「紡さんもですか？」

「…ここに来ると、心が落ち着くんだよ。だから、昔からこうやってずっと、海を見てきた。」

それは、ずっと海と一緒に生きてきた人の言葉だった。

遥や光らとは違う、海との距離で過ごしてきた人の言葉。

私なんかより、ずっと海を見てきたんだ、紡さんは。

「…なあ、ちよつと相談したいことがあるんだが、いいか？」

「？いいですけど…。」

紡さんが相談…？珍しいな。

しかし特に断る理由もなく、私は話を聞くことにした。

「美海は、好きになる…って、どういうことか分かるか？」

「それは…。」

私は言葉に詰まる。

私は、人を好きになったことがあるし、その気持ちは今も変わっていない。だから、好きの気持ちがあんなものなのか、私は知っている。

でも、私に人がとやかく言っているのだろうか？

5年前。私は、遥を、好きでありながら、その気持ちから逃げてしまっていた。今も、その後悔に縛られている。

約束なんて破ってしまえ、なんて考えたことがないなんて言わない。

けど、それを破つたらもつと逃げてるような、そんな気もしていた。だから、私に人が言えるとしたら、逃げないという事だけだ。

自分の失敗は、せめて誰かに続けて欲しくないから。

「好きの気持ちは、最初はよくわからないんです。その人のことを思うと胸がチクツとして、気になって、それが好きになるって、ことなんじゃないですか？」

「…なるほど。」

「きつと、そう聞かして事は、心当たりがあるってことですよ。だつたらせめて、その気持ちからは逃げないことです。…好きなら好きで、いつかちゃんと伝えないと…」

そう言うが、自分で言つてて辛くなるのがわかつた。

後悔を割り切れるほど、私はまだ強くないんだ。

「… 遙か？」

「言わないでください…。」

「そっか。悪い。」

それ以上会話はなかつた。

特に聞かれることもないし言うことも無い。

「お前のおかげで、少し気持ちの整理が着いた。ありがとう。」

そう言つて紡さんは家へ戻つていった。

再び1人になつた私はまたぼんやりと海を眺めていた。

自分と向き合うというのは、怖く、辛いものだ。

ましてやそれを誰かに伝えるなんて、恥ずかしかったりするものだ。

ただ、少し気分が楽になつたのは、きつと勘違いだろう。

第74話 結末へと

——side——

それから4日は早かった。

大悟先生は手術の成功のためにあれやこれやで大忙し、真冬さんはこの間ずっと陽香の傍に寄り添い、鈴夏さんは仕事の合間にこっちの仕事を手伝い、俺はと言うと、止める方法を必死に探し続けていた。

前日。

一通の電話がかかってくる。もう見慣れた番号だ。

「もしもし、先生。」

「おう、悪いな。明日だつてのに。」

「それは言わない約束ですよ。誰だつて緊張している状態なのは違いありませんから。．．． 仕事が残ってるのは俺と先生だけです。明日は頑張らないと。」

真冬さんは現在進行形でやるべき事をなし、鈴夏さんにはもうやつてもらった。残る当日班に全てかかっているのだ。

先生が手術を成功させ、俺が男を止める。

言ってみれば簡潔だが、内情はすごく複雑だ。

ふと思う。いつから俺は日常がズレていたんだろうと。

が、そんな雑念は、振り払おう。

「．．． そういうえばよ、俺は今回の件で、色々と自分を見つめ直すことができたと思うんだ。」

「え、ええ．．．。 どうしたんですか？急に。らしくないですよ。」

俺は茶化してみるが、先生の意思は固かった。

「だからよ、ちよつと今回の件が終わったら、もう一度あいつと向き合ってみようと思うんだ。一人で生きていくのも悪くない。けど、もつと違う生き方が俺にもできるんじゃないかって思うんだ。」

先生は、変わろうとしていた。

変わる、ということに俺は少し敏感になってしまう。

5年前のあの日から、俺は無作為に変わってしまった。

もう、あいつらと同じ場所にはいない。

だから、変わるといふ言葉は、少し苦手だった。けれど、先生は自ら変えようとしている。

なら俺が言えることは何もない。せめて、それを応援するくらいしかないだろう。だから…

「…いいと思いますよ。だからそうするために、明日は頑張りましょう。」

これが死亡フラグというやつだと脳内で考えたが口に出してはいけないと思い、口を閉じた。

「じゃあな、明日はしくじるなよ!」

「あ、失礼しま」

俺が最後まで言い切る前に先生は電話を切ってしまった。

… 1番緊張してても、無理はないよな。

ただ、俺は先生を信じることをやめなかった。

そして、当日。

最初の方は、かなり疑われていたが今ではすんなり通るようになった男の手により、俺は中の奥の方へと誘導された。

いくつものモニターがある場所だ。

映し出されているのは… 病院だろうか?

映像をよく確認したが、どうやらそのようだ。

「すごいな、これ。いつの間にかここまでしたんだ?」

「まあ、そこは色々な。執念に勝るものは無い。」

俺はいくつものモニターの中のひとつに目を向けた。

手術室だろうか? それと思われる道具がいくつも置いてあった。

「あと30分か…。ちよつと席を外す。ここで様子を見ておいてくれ。」

そう言つて男はどこかへ離れていった。

その間に俺は…

…

「どうだ？始まったか？」

男が戻ってくる頃には手術室は人で埋め尽くされていた。

男はニヤニヤしながらただモニターを眺める。

ああ… 実に不快だ。

こんなやつのために、多くの人が影で危険にさらされてるのか。

早く…。

早く終わらせたい…！

俺は男とは違う思想で、早く早くと願っていた。

それから2時間後。

手術は終了した。

結果だけ言うと、手術は上手くいった。

外で待っていた真冬さんが泣きながら頭を下げていたのを見る限り、成功と見て間違いなさそうだ。

「… ふん。いいのかよ。病院が吹っ飛んじまっても。」

男は少し不快そうに、「手元にあるスイッチ」を手に取った。

「じゃあな、無能な医者共。ざまあみろ、日野の御大将！」

男は勢いよくそれを押す。

しかし、カチツと言う音がなるだけで何も起こっていない。

「あ？なんだこれ… どうなってやがる…！」

男は焦りだして何度も何度も押す。しかし結果は変わらない。それもそのはずだ。

【そのスイッチ】は、俺が先程工作していたのである。

く過去く

「正気かい？あんだ。」

「これが最善手なんです。」

鈴夏さんは作戦を伝えた俺に開口一番呆れていた。それもそのはずだ。俺がやろうとしていることは、あまりにも無謀で、俺個人が危険にさらされることだ。

「でもあんた、もし先に工作がバレたら…。」

「本物を押されて終わりですね、病院も俺も。でも、可能性があるのがこれしかないんです。」

「…ほんとにいいんだな？」

そうして俺は無理を押し通し、鈴夏さんに偽のスイッチを作ってもらっていた。

く現在く

「ちくしょう… まさか…！」

男が振り返ろうとした瞬間。俺が先に後ろから男の腕を締め付けた。

「野郎っ…！ やっぱりてめえか!!」

「動くな！ もつと痛い目見たくないならな！」

俺は必死に男の腕を抑え続ける。が、男の方の抵抗もなかなかで、拳句の果てに抜け出されてしまった。

「てめえよくも!!」

男はなりふり構わずナイフを取り出し突っ込んでくる。

… 流石に空手でも対刃物なんてやったことないよな。

なんて一瞬考えれるほど、俺は落ち着いていた。

殺気の籠ったナイフ… 刺されればまず死ぬだろう。

… 生身なら。

俺は、男が突き出したナイフを持っている方の腕を、軽く下に払った。

そのままナイフは俺のズボンを切り裂く。

「なっ… お前…！」

「まさか足が義足だなんて知らなかった、なんていっても、ここから先は正当防衛だからな。」

軽くステップを踏む。足に問題は無い。

俺は全てを込めた一撃を、男の腹にぶち込んだ。

「ガハッ……」

男は殴られた腹を抱えながら倒れる。しかしまだ意識はあるようだった。

このまま怒りに任せて気絶するまで殴ってもよかったが、そんなこと意味がないと分かっていた俺は殴ることはしなかった。

俺は男の前にしゃがみこむ。

「すまん。人を騙すのは好きじゃないが、今回ばかりはスッキリした。罪悪感だつてないな。」

「なんで邪魔をしゃがるんだ……！ほっとけばいいじゃねかよ……！」

「ほっとく、か。無理だな。今回危険にさらされた人の中に俺の大切な人だっているんだ……それにお前、邪魔と言ったな。ああ、俺からすればお前が邪魔だ。俺の大切な人達は今、変わろうとしているんだ。それを邪魔されてなんて、たまるかよ。」

俺は少し願望を込めつつ男に語った。

男の言いたいこともわかる。自分の人生を狂わせた男に復讐したい。その気持ちを持つことは確かにあるだろう。けれど、だからと言つて関係ない人間は巻き込んでいいはずがない。

きっと無関係でも、俺は知れば止めていたんじゃないかな。

そうしているうちに外からサイレンの音がした。

あらかじめ、警察に匂わせる事を仄めかしていたからね。

男は音が聞こえるのがつくし項垂れて、そのまま入ってきた警察に連れられて行った。

まあ、一方の俺も一応パトカーに乗せられてどこか連れていかれてしまったが。

第75話 プロローグ

——大悟side——

「っふー、終わった!」

俺は一瞬自分の仕事を終えた達成感に浸り、また気を引き締めた。こちらからは、向こうの様子は分からない。

とはいえ、今は祈るだけ。俺に出来ることは今はない。

ただ、あるとすれば…。

prrrr…!

電話が鳴る。あいつからの報告だろうか。

なら、それに越したことはないが…。

「よお、久しぶりだな大ちゃん!」

「は…!?お、お前かよ!!」

驚いた。うん、仕方がない。

ただ、俺がすーちゃんに電話番号を渡した覚えはない。じゃあどこから入手したか、というと…。

…まさかあの野郎、こうなること読んで…。

っはあ…。やっぱあいつには叶わねえよ。

「…んで、何の用だ?こっちは終わったからあと結果待ちなんだが。」

「ああ、そうそう、結果、預かってるよ。ま、こうやってほのぼの喋れるってことは、分かるよな?」

そうだ。もし失敗なんかしてたらここも飛んでるし、電話だってもっと臨場感のあるものだ。

「…そうか。これで全部終わり、か。いやあ大変だったなほんど…。今回は協力、ありがとなすーちゃん。」

「全然、お礼を言うべきなのは私のほうかもね…。もっとも、お互い、お礼を言うべき相手が違うか。」

「そうだな。」

そこはもちろん、分かっている。

あいつはトラブルメーカーで、絡んでしまったりとろくなことがない奴だけど、それでもあいつには感謝しなければいけないことが多数ある。

こうやってまた、あいつと縁を持たせてくれたのも、感謝しないのだな。

なあ、島波遥。

「ところで、今度どこか遊びに行かないか？仕事の都合が合えば、の話だけど…。」

「それってデートってやつのお誘い？…いいよ。お互い話だってあるだろうしさ、それにまた、子供心に帰って街で色々やってみたりする？」

「ははっ、それは遠慮しとく。仕事でバリバリ体を使うすーちゃんのと違って俺はもうそんな動かねーしな。それじゃあ…。」

…

今回の事件、危険だったけど、沢山のことを教えられた。

そしてまた、自分を見つめ直し、変わろうと1歩を踏み出せた。

ああ、分かっている。一言じゃすまないって。

それでも言わなきゃいけない事があるだろう。

ありがとう。

——陽香side——

目が覚めた。

そこには、私がちやんと居た。私は生きていた。

どうやら、手術は上手くいってくれたみたい。
まだ頭がぼーつとして、体は動かせそうにない。
けれど、私の手を握ってくれている人の温もりは、ちゃんと伝わっている。

「おはよう、お母さん。」

く過去く

手術を受ける2日くらい前だったかな。

私の部屋に入ってきたのはお母さんだった。

すこし後ろめたい表情で、それでも優しい目で。

お母さんはそこに立っていた。

「あれ？お母さん……」

「陽香、ごめんね……今までずっとそばにいてあげられなくて。」

お母さんは俯き、後悔を隠せないように呟く。

ごめんね……か。

確かに私は寂しかった。

起きても誰もいないベッドの上。時々会いに来てくれるのは使いの人だけ。

そんな、一人でいることに慣れていた私を変えてくれたのは、遥お兄ちゃんだった。

それから私は、誰かといることの喜びを、ちゃんと自分の体をもつて知った。

けど、一人でいることも嫌じやないまま。

ああ……、でもやっぱり。

私はベッドのそばまで来たお母さんの手を握る。

「お母さんの手、暖かい。」

やっぱり、誰かという、1人じゃない空間の方が、私は好きかな。

く現在く

それから今日まで、お母さんはずっとそばに居てくれた。

家のこともあるはずだけど、多分それも投げ出して。

あの日私が握ったことでもう一度繋がった手。
それは今も、繋がれたまんま。

私を助けてくれたこと。

本当の気持ちに気づかせてくれたこと。

もう一度、お母さんと手を繋げたこと。

ここに遥お兄ちゃんはいないけど、それでも私は遠くに一人呟く。

「ありがとう、遥お兄ちゃん。」

——遥 s i d e ——

「はあ…、疲れた…。」

思わずため息をこぼし、1人歩く帰り道。

無理もない。今は朝の五時。日の出までまだ1時間はありそうだ。

なんでこんな時間かって？

そりゃあ色々原因はあるけど…。

昨日、パトカーに連れてかれた俺は、ずっと警察の方とのお話、質問、真意を聞かれたりと、休ませてくれない状況にあった。

本当はのんびりやってもよかったらしいけど、「今のうちに済ませましようか。」なんてこっちが言ったもんだから、ぶっ通しで行われた訳だ。警察の方、ごめんなさい。

急いだ理由、それこそ特にないが、鷲大師から離れてた時間が長いぶん、そろそろ美海に何か勘づかれそうだったので、早いところ終わらせて帰りたいかったのだ。

まあ、その分今日休んだ後で帰るだけの時間はあるが。

数分歩くと家に着いた。

とりあえず荷物をもとと思って奥の方へ入ろうとした瞬間、元気よく電話の音が鳴った。

おいおい勘弁してくれよ…。こんな朝っぱらから。

なんて鬱な気分になりながら受話器を取る。

「もしもし…。」

「遥!?今そこにいるの!?!」

電話相手は美海だった。それにしてもえらく焦っているよう
な…。

「どうした美海、一旦落ち着けよ…。」

「落ち着けない!いいから聞いて!」

何かが最高潮のまま美海は俺へ言った。

「兎に角、急いで鷺大師に帰ってきて!そのまま海まで来て!!」

第76話 白い闇の中へ

——遥side——

「どういうことだ？急いで帰ってこいって。分かったからせめて理由だけは教えてくれ。」

美海の願いとだけあつて聞き入れるつもりだが、それなりの理由は欲しい。

「あつ、うん、まだどうなるかは分からないけど…」

帰ってきたの、千夏ちゃんが！」

——美海side——

今日は一段と早く目が覚めた。

休日だからもう少し休みたかったけど、いつもよりどこか冷たい寝起きに、完全に目が覚めてしまったみたいだ。

リビングに向かうと、パパが新聞を読んでいた。あかちゃんはまだ起きていないようだ。

「あれ？おはよう美海。えらく早いね。」

「なんか目が覚めちゃって…。ねえパパ、ちよつと今日寒い…。とうか冷たくない？」

「んー、どうだろう？いつも通りだと思うけど…。」

パパは何も感じてないようだった。

ただ、これが、エナがあるかないかが理由なら…。どうだろう？私には、エナがある。

だからいた仕方がない気もするけど…。

海が…。気になる。

「ねえパパ、私ちよつと散歩行ってくるね。」

「ん？ああ。朝ごはんまでには戻っておいでね？」

「わかってるよ…。それじゃ。」

外に出ると、やっぱりどこか冷たさを感じた。

それに… 海の様子がちよつとおかしい。
どこか… 巴日の日に感じた時のような…。
私は少し早足で、海の方へと向かった。

「一応ついた… けど…。」

とりあえず着いたが、特に何もおかしいことは無い。私は専門家じゃないから、細かい事がどこで起こっているのかなんてのも知らない。

気のせいかな…。

そう思つて踵を返そうとした瞬間、謎の光が海を覆った。

えっ？

私は咄嗟に目をつぶる。

そして再び目を開けた先に、そこに一人の少女が倒れていた。
絶対に見間違えるはずのない、私の大切な人。

「ちなつ… ちゃん…？」

それは5年前の、あの日と同じで…。

—— 遙 s i d e ——

急ぐ。ただ急ぐ。

始発電車に飛び乗り、俺はただその身を案じていた。

水瀬が、打ち上げられた。

まだ目は覚めてないらしいが、心臓は動いているらしい。
普通なら、どんな顔して会えばいいか分からないだろう。
ただ今は、ただ会いたい、と、その気持ちだけが俺の体を支配して

いた。

鷺大師駅へつくと、俺は荷物を近くのコインロッカーにしまい込み、そのまま走って海へと向かった。

海に来てとしか言われなかったが、美海が大体どこにいるかは想像がつく。

俺はひたすらそこを目指して走った。

海辺に着く。

氷が張っているちようど上、光を見つけたあの日とほぼ変わらない場所くらいだろうか。

美海はだれかを抱えて座っていた。

ということは…

「美海!!」

俺は落ち着くことが出来ず大声をあげる。

しかしその大声が歓喜のものだったかどうかは、俺は知らない。

「あつ、遥…」

美海はこちらを振り向き、そしてまた元の姿勢に戻る。

俺は歩いて近づいていく。すると美海が今何をしているのか、そこに誰がいるのかが見えてくる。

美海の手に乗っていたのは、あの日と変わらない水瀬だった。

「本当に… 帰ってきたんだな。水瀬…。」

俺はそうとしか言えなかった。

心の底の方から湧き出てくる沢山の感情。5年前のあの日のこと。伝えられなかった想い。複雑な全てが、俺の中で蠢いている。

余計なことを言ってしまうば、どこかでそれらが漏れるようで。

だから俺は、それ以上は何も言えなかった。

「まだ目は… 覚めてないのか？」

電話を受けてから1時間ほど経ったが、まだ目を開けていない。

「うん。電話をかけた時と同じ状態。ずっとこのまま。」

美海が首を横に振る。どうやらこればかりはどうしようもないと諦めているようだ。

「そうか…。どうする？これから。なんなら今から大悟先生に連絡するのもありだけど…。」

と言ったところで俺は言葉を濁す。その理由を、美海は汲み取ってくれた。

「まあ、そうだよ。光が検査を受けた時も、特に何もなかったから、多分今回も影響、そんなになんかと思う。」

「ああ、まだ一回しかこのケースがなかったから確定は出来ないな、とは思ってたんだけど、あったとしてが想像出来ないんだよな…。」

とりあえずは様子見だな、ということ、俺と美海はここで待つことにした。

「ところで美海、なんであんな時間に電話かけたんだ？」

「うん…。朝目が覚めた時にね、ちよつと冷たいなって感じたの。今はそうでも無いけど。それで海を見に来たら、この状況。」

「なるほどな…。」

しかし、美海が言ったように冷たさを感じられない。おそらく、今の間で何かあったと思われる。

「んで、その冷たさを感じなくなったのがどれくらいだ？」

「千夏ちゃんを発見した時…。わかるよね、巴日の日のこと。あの日みたいに海が光ったの。それも今回は前より強く。」

つまり、そこが起点だった、と見て間違いなさそうだ。

「ん…。」

「!？」

そうこう話している内に、水瀬の意識が戻った。

「おい水瀬！」

「千夏ちゃん！」

「…んん、おはよう、美海ちゃん。それと…」

「…すみません、そこの人、誰ですか？」

第77話 白い絶望

——side——

一瞬、何を言われたのか分からなかった。きつと連日の疲れだろう。聴き逃しだつてあるかもしれない。今言われたことは、現実なんかじゃない。

そう信じるしかなかった。

「ごめん、もう一度言つてくれるかな？」

「えっと…… 何度も言いますが…… すいません。誰ですか？」

パリン、と、自分の中の何科が音を立てて割れた。

気がした、なんてものじゃない。

この時、俺の大事なものが、確かに壊れた。

「はっ、はは……。そうかよ、これが結末かよ……。」

呆れて笑う。そこには感情なんてないまま。

「遥……。」

「ほっといてくれ……。俺は今、ここに居るべき人間じゃないんだ。」

そして俺はふらふらと歩き出す。

そうだ、俺はこんな所にはいけない。

もう、俺の居場所は…… ここにはないんだ。

「遥！待って！」

少し離れたあたりで美海が追ってくる。

「こつち来るな……。今、水瀬のためにどうこうできるのは、お前しかないんだよ……。」

「そんなこと……。」

「お世辞はやめてくれ……。今は優しい嘘なんていらぬ。結局、答えは変わらないんだから……。」

その場で固まった美海に目をくれることも無く、俺は再び歩き出した、遠く、遠く。誰の目にもうつらないように。

歩く。

歩いて…。

それでも、俺に行き着く場所なんてなかった。

強く雪が降り始める。

ぬくみ雪なんかよりも遥かに冷たい雪が。

そんな雪を頭に被りながら、俺は歩く。

さて。どこへ向かおうか。

乾いた、空の心でそんなことを考える。

無駄だって、分かっているのに。

水瀬の家には、きつと水瀬が帰る。元あるべき場所に帰る、当たり前のことだ。

忘れ去られてしまった俺なんて、水瀬からすれば異分子だ。それに、前のような接点ももうない。

もうあの場所は、俺の居場所じゃない。

至さんの家には、至さんの家族がちゃんとある。あかりさんの弟である光がいるのはまだしも、そこに俺がいていいのだろうか。

海にはもちろん帰れない。果てしなく凍りつき、汐鹿生も閉ざされてしまっている。

…その冷えた海は、今の自分みたいなもんだろうか。

じゃあ街の方へ帰るか？

生憎の大雪で、電車もどうやら止めてしまいうらしい。かといって街の方へ歩いていこうものなら、途中で倒れるのが関の山だ。

…いや、いつそのまま一人で死んだ方がいいのではないのだろうか？

そうしたらもう何も考えなくていい。楽になれる。

そうだな、俺はちよつと疲れすぎたのかもしれない。

もう考えるのは、やめだ。

感情なんて、無くなってしまうばいい。

そして俺は行き着いた先のベンチで深く、深く眠りについた。
何故だろうか、もう雪の冷たさも、何も感じなかった。
街ゆく人の声も。
起こそうと声をかける人の声も。
しんしんと降り積もる雪の音も。
もう、何も聞こえなかった。

俺は、ずっとここで一人、それが答えなんだ。

——美海 side——

遠ざかっていく遥の背中を、私は追えなかった。
5年前のあの日遥かを止めたように諭すことは、今の私にはできな
かった。

千夏ちゃんが帰ってきた。
意識もある。私のことも覚えていてくれた。
ほんとは嬉しいはずなのに……嬉しくなきやいけないのに……。

【千夏ちゃんは、遥の事を全て忘れていた。】

この事実が、私の中で渦巻いていた。

「えーつと千夏ちゃん、とりあえず家、戻る?」

「えっ、ああ、うん…… 美海ちゃん、大きくなったね。」
私は言葉に詰まった。

こういう時、なんて返せばいいか分からなかった。

5年経ったから? 違う。
何を覚えてる? 違う。

「うん、色々あったの。」

結局、曖昧な答えしか私は返せなかった。

数分して、千夏ちゃんの家に着いた。

とりあえず私がインターホンを鳴らす。出てきたのはお母さんの方だった。

「あら？いらつしやい美海ちゃん……!!？」

千夏ちゃんのお母さんは後ろにいた千夏ちゃんに驚き、その場に座り込んだ。自然と頬を涙が伝っている。

「ただいま、お母さん。」

そう言っつて笑顔を見せたのは、5年前のような、いつもの千夏ちゃんだった。

「千夏……。」

奥からお父さんも出てくる。

まあ、こういうこともあって、私は中へと招き入れられた。

「ねえ千夏ちゃん？どこまで覚えてる？」

「ん？昨日の……あ、違うか、5年前のこと？」

「うん。」

とりあえず最低の連絡が終わりひと段落ついたが、遥が忘れ去られたことは言えないでいた。それに、今どこにいるのかも気になる。

「うーん……お船引きはやったよね。確かその時に飛び込んで……」

うーん、ここまでかな？覚えてるのは。」

「じゃあ、大体は問題ないかな？」

嘘だ。問題しかない。

千夏ちゃんはお船引きに至るまで、何度も葛藤して、何度も辛い思いをしている。

それなのに、こんな軽々しく片付けていいわけが無い。

それに……千夏ちゃんは、遥が好きだったんだ。

でも、忘れ去ってしまった今、フェアに戦う、なんて出来ない。

もう、遥のこと、遥にまつわる全てのことを、千夏ちゃんは、忘れてるんだ。

そんなの……悲しすぎる……。

「美海ちゃん？」

「ううん、何も無いよ。」

どうやら顔に出てしまっていたようだ。

とはいえ……このままだと、限界がある。

いつかは私も心のどこかが、決壊してしまうかもしれない。

今は……ここには入れない。

ただ、最後に伝えなきゃいけないことがある。

「千夏ちゃんのお父さん。」

「ん？なんだ？……っと、そういえば遥がいつ帰ってくるか聞いたか？」

なんで、このタイミングで……そんな悲しいことを……

自分が伝えるだけでよかったのに。

「……遥は、当分帰ってきません。それに……」

私は一瞬言葉に詰まり目じりを拭う。

だめだ。ここで泣いちゃいけない。

「千夏ちゃんは……遥のこと……忘れ去ってしまったから……。」

「!?……そうか……。」

お互い、それ以上何も言わなかった。

私は家を出て、当てもなく走る。

流れてくる涙も、もう気にすらしなかった。

私を動かしていたのはひとつの気持ち。

遥に、今すぐ会いたい。

ただそれだけで、私の足は冷たさにも負けず動いていた。

気がつくやうと驚大師から結構離れた場所にいた。

……ちよつと来すぎたかな。

私は戻ろうとする。

しかし、あるものが目に入り、私は声にならない悲鳴をあげた。

それは人だった。そこは間違いない。

けど、その身体には雪が積もり、唇には赤さはなく、寝てるはずだが息すらしてない。

強く吹雪く。

そこにいたのは、死んだように眠っている遙だった。

第78話 夢を見させて

——美海 side——

「遥!?!大丈夫!?!」

私は遥の近くへ駆け寄り、体を揺する。けど、遥の目は開かない。念の為遥のおでこを触ってみる。

…冷たい。

生きているのかどうか不安になるほど、遥の体は冷えていた。ここに来てから長いのか、手足も少し凍傷を起こしかけている。

なんでこんな日に限って…!

空が冷たいの…!

私達を嘲笑うかのごとく、雪はいつそう強さを増した。

遥の、呼吸による体の動きも、次第に弱くなってきている。

…どうしよう?

来た道を一応覚えてるからわかるけど、近くに電話なんてなかった。

だから誰かを呼ぶってことは出来ない。

かといって遥を家まで運ぶのも… おそらく無理だ。

距離も遠いし、体力にも無理がある。

そんな中、ふと、私の目にあるものが入った。

…なるほど。これなら。

それ以外の方法が無かった私は、遥を無理やり背負い、そこへ向かった。

「重っ…、運べるかな…?」

因みに後々考えたが、普通私が遥を持てるはずなんてなかった。けど今は何故だろうか、なんとか持てる、そんな気がした。

見た目は真新しい、ひとつの廃倉庫。

中もそこそこ綺麗で、とりあえず待機するには十分。

しかし、廃倉庫とだけあって中身は殆ど空に近かった。

小さなガスコンロが1つ、まだ綺麗な毛布が1つ。
使えそうなものはこれだけだった。

「これって遭難、ってやつなのかな…。」

もう一度外に行って遠くを見てみる。汐鹿生とはもう3〜4 km
ほど離れていた。

私一人なら歩いて帰れない距離じゃない。けど今は…。

千夏ちゃんのそばに入れるのは私だけ、遥はそう言った。

でも今、遥のそばに入れるのは、私だけなんだ。

だから、5年前のあの日決めたこと。

遥を傍でずっと支える。それができるのは、今なんじゃないかっ
て。

私の頭に引き返すなんて言葉はなかった。

それから時間が経った。

1時間。

2時間。

それでも遥の目は覚めない。

私も疲れからか次第にうとうとし始める。

あれ…、今、何時だっけ…。

まあいいや、少し、眠ろう…。

…

「う…ん…。」

また数時間後、目が覚める。

外の様子を見る。辺りはだいぶ暗くなっており、おそらく夜だとい
うのは推測できる。

ここからまた、冷えてくるだろうな…。

それに、今日は家に帰れそうにない。

まあ、事情が事情って割り切ろうか。パパ、ごめんね？

「さてと…ここでも心中、つても考えられるかも…。」

なんて冗談か本当かわからない独り言をつぶやく。でも、不思議と怖くはなかった。

「んん…。」

その時、ちょうど遥が目を覚ました。が、いい顔はしていない。

「遥…。」

「あ？ああ、ああああ…。」

「!?どうしたの、遥!？」

すごく苦しそうな顔で、遥が呻き声をあげる。それは、何かに魘されるような感じで。

「もう、もうやめてくれ…。苦しい思いは、もう嫌だ…!」

遥は魘されながら、涙を流す。

ダメだ。今の遥は、正気を保っていない。

このままだと、精神まで壊れちゃう。

そんなこと、させたくない…!

だから。

「ごめんね、千夏ちゃん。」

私は、咄嗟に遥の唇に唇を重ねた。

この、私の最愛の人へのキスは、私にとって、遥にとってもきつとだろう、初めてのキスだった。

少しではなく、やや長い時間。

遥の息が落ち着くまでのその時間、私はずっと遥に深く、濃いキス

をした。

ごめんね、千夏ちゃん。約束、守れなくて。でも、今だけは、遥を楽にさせてあげて……。

「……美海は、そこにいてくれるのか？」

正気に戻ったであろう遥は、目を閉じたままそう呟く。

「うん、ちゃんと、遥のそばにいるよ。」

私は小さな声で、でも力強く返す。

すると同時に、遥は私に抱きついてきた。

中途半端な体制だった私は、それに引っ張られるように倒れた。

「きやつ!?!……は、遥……?」

「お願いだから……どこへも行かないでくれ……。」

遥はまだ目をつぶったまま、私を抱きしめている腕を離さないでいた。けど私は、その腕からいかくぐることはしなかった。

少なくとも今日だけは、その傍から離れないと決めたから。

例え遥が獣となって襲ってきても、私は受け入れる。

だって、私は遥が好きなんだから。

夜は冷えた。

外気が倉庫を構成している鉄をすり抜けて入ってくる。

だから体温が下がってしまわぬよう、私と遥は同じ毛布で一緒に寝ることにした。

言い方を変えれば温め合う、そういうことだろうか？

私と遥は、そんな毛布の中でお互い抱き合っていた。

今は邪魔するものは何も無い。お互いの心くらいだった。

「悪いな美海。こんなのにつき合わせちゃって。」

「ううん、いいの……ただね、お願いがあるの。」

そう、約束を破ったからと言って、破ったままではいけない。だから……

「今日のごとは、ずっと忘れて欲しいな。私のキスも、体温も全て。」

「…いいのか？それが美海の願いなら、俺はそうするけど…。」
「うん、いいの。だからね…せめて今日だけは。」

夢を見させて。

私は聞こえないように、そう呟いた。

第79話 歪んだ愛の入口へ

——side——

夢を見た。

遙か遠く、昔のこと。

俺は、海の中にいた。そこは青く、青く、綺麗な海。

そして、いつかの汐鹿生にそっくりだった。

ただ、そこは俺の知らない汐鹿生だった。

(ここは…?)

見たちちがあるはずなのに、見慣れない海。きっと、かなり昔の話なんだろう。

1人の男性がいた。

広い海で、どこか窮屈そうな暮らしをしている。そんな人。

その人は、どこかで見たことあるような人だった。

(ウロコ様…?)

やがて、そのウロコ様に似た人の側に、一人の女性が来た。

…おかしいな。どうやって来たんだろう?

夢の中では、さすがに分からなかった。

さて、またしばらくしてそのウロコ様に似た人と、その女性の間、

二人の子供ができた。

俺が見せられたのは、そんな4人が幸せそうに暮らしている様子。

…そのはずだった。

パリンツ。

また、いつか聞いたような音がした。それは、現実で。

その女性は、海から上がろうとしていたのだ。

理由は知らない。けれど、どこか大切なものを、陸に忘れたような、そんな様子だった。

ウロコ様に似た人はずっと悩んでいた。きっと、今の生活は楽しい、ということそのものだったのだろう。だからずっと悩んで…その果てに、その男の人は女の人を陸へ返した。

ただ一つ、好きになる気持ちを奪い取って。

(…)

何も言えなかった。

ただ一つ、言うことはあった。

こんな結末…悲しすぎる。

きっとそれは、女の人にとって大切なものだった。

大切な…もの…。

あれ？俺は今、なんで夢を見ているんだっけ…？

…

意識は醒めないまま、また新しい夢を見た。

今度はよく見た事のある景色。

俺の知っている汐鹿生だ。

まだぬくみ雪もなく、暖かい汐鹿生。

(この温かさ…どこかで…)

ふと、俺の目に写った景色。

あれは…

(父さん、母さん、そして…俺か。)

ならおそらく、次見せられるのは、家を出ていく2人の姿だ。

(…が…始まりなんだな。)

そう、全てを失ったことから始まった今の俺の、始まりの地点。

(ああ…、この光景を、止めれたらな…。あっ?)
そんな願いはもちろん届かず、俺は急に夢の中で大波に攫われた。
だが最後に、少しだけ親の顔を見た気がした。

…

それから見せられた光景は、全て俺だった。

みをりさんと出会い

中学生になり

水瀬に出会い

大切なものに包まれ…

全部奪われた。

みをりさんも無くなり

光らと同じ道を歩むことも出来ず

1度は好きと言おうとした相手の記憶にも、もう自分はいなくなっ
てた。

悲しい。

寂しい。

また一人になるのか…。

ああ、分かっていたのに。強くなった気がしてたのに。

結局未来は変わらない。

俺の大切なものは、全部奪われていくんだ。

きっと、今1番近くに来てくれている美海だって、いつかは…。

… 苦しい。苦しくて、苦しくて、もう狂ってしまいうさだ。

俺を1人にしないでくれ…。誰かそばに来てくれよ…。

(やめてくれ…。もう、苦しい思いはしたくない…。)

その時、意識の向こうから声が聞こえた。

何度も何度も俺を呼ぶ声。

そして脳が溶けるような、熱くて濃い唇の感触。

ああ、この声は、この感触は、暖かさは…。

不意に涙がこぼれた。きつと、悪いものでも見せられていたからだろうか？

もう、そんなことどうでもいい。

【愛すべきものは、失わないように愛し抜こう】

俺の脳裏には、もうそれしか残っていなかった。

それが歪んだ愛だとも知らず。

目を開けると、そこには美海が慈しむような目で俺を見ていた。

少し肌寒い。俺はそんな中でずっと外にいたようだ。

意識が戻って初めてわかったが、手足が少しやられているようだった。

けれど。

そんなこともお構い無しに、俺は美海の手を引いた。そのまま自分の方へ倒れ込んでくるように。

美海は軽く悲鳴をあげたが、俺の行動を止めはしなかった。

さて、手を出してしまうのか、と言ったところで、俺の頭に、美海がまだ中学生であることが残っているのを確認した。

そうだ。俺達はカップルなんかじゃない。もっとうこう、別の何かだ。

けど今は、その温かさに甘えさせてもらおうと、俺はそのまま美海を抱きしめ、もう一度眠りについた。

——美海 side——

目が覚めた。朝は6時くらい、雪は止んだが、まだ結構冷たさが伝わる。

隣の遥を見やる。まだ眠っていたが、さっきまでのような苦しそうな形相ではなく、安らかな顔をしているので、きっと今は大丈夫なのだろう。

ふと、昨日のことを思い出す。

遥にファーストキスをして、抱き合って、襲われはしなかったけど、そんな大人な時間を過ごした。

恥ずかしいと思う……。本来なら。

けれど今は、何故かそんな恥じらいは一切感じなかった。

といっても、夢はここまで。

これからは今まで通りの関係に戻ってくれるだろう。

……まあ、ここまで来たら遥の面倒、最後まで見なきゃいけないだろうし、そこはやり遂げようか。

数分後遥が目覚める。とても良さそうな寝起きだ。

「おはよう。遥……。早速だけど、今から帰れる？」

「おはよう……。でも、俺に帰る場所なんてあるのか？」

その目には迷いがあつた。

当然だ。今遥の心はダメージを負っているはずだ。そんな中で千夏ちゃんとは向き合えさせれない。

でも、もう一つだけ、遥のことを家族のように思ってくれている人

がいる。だから…

「うん、あるよ。だから、一緒に帰ろう？」

「…いいのか？」

「うん。きっとそこが、今の遥の帰るべき場所だから。」

第80話 これまでこれから

——美海side——

手を繋ぐ。

それはとても簡単で、とても難しい行動。

ましてや好きな人の手なんて、簡単には握れない。

けど今はこうして、大好きな人の隣で、手を繋いで歩いている。

すぐくすぐく冷たい手だけど、確かに好きな人の手の温もり。

理由がねじ曲がっていたとしても、私はその結果だけでよかった。

私達は家に着いた。私としては千夏ちゃんの家を出たあと一瞬だけ戻ったので、一日ぶりになる。

「ただいま。」

「美海!どこ行ってたの!...って。」

出迎えたあかちゃんは私を怒るのを途中でやめ、隣の遥を見る。遥はどこかもどかしそうな顔をしていた。

「どうも...。」

遥はそういった後、咄嗟に調子のおかしい手を後ろに隠そうとした。しかし、動いたのは手だけじゃなく、身体全体だった。

「あれ...?ちよつと足に力入んないや...。」

「!?美海、遥君に肩貸して、そのまま中へ入れてくれる!?!」

その様子を見たあかちゃんは必死な表情だった。

余程危ない状態なのだろう。場に緊張が走る。

「行くよ、遥...。よいしょつと。」

重たい。

昨日無理やり背負った時には感じなかったのに、何故か肩を貸すだけですごく重みを感じた。

昨日がおかしいのか今日がおかしいのか。それを知る由もなかったが、今は考えないでおいた。

…

数分後。

場も落ち着き、遙の状態もひとまず落ち着いたので、空いてる部屋に寝かせた後、私はあかちゃんに呼ばれた。

まあ、間違いなく昨日のことなんだけど。

「それで、千夏ちゃんに忘れ去られたショックで失踪していた遙君の元に、一日中居たってこと？」

「うん…。昨日はそれしか判断できなかった。」

私が迷いなく否定すると、あかちゃんは怖い表情をやめた。

「… そうしてもらえる遙君は、きつと幸せ者だね。」

「どういう事？」

するとあかちゃんはすこし目を伏せた。

「私もね、分かるの。美海がやったことの大切さ。一番苦しい時に、好きな人に寄り添って欲しいのは、きつと誰だっ一緒だから。私も、至さんにそうしてもらったようにね。」

「でも、遙が本当に好きな人は…。」

そう、きつと遙は千夏ちゃんのことを好きなんだ。

あの日の告白の返事を、私はまだ知らない。

けれど、遙の目は、ちゃんと私に向いていてくれるんだろうか？

「美海。諦めちゃだめ。たとえ実らなくてもね、好きの気持ちは間違いないなんかじゃない。それに、チャンスはあるでしょ？」

「… いいのかな、こんな形でチャンスなんて言っつて。」

約束のこと。

確かに、遙との距離がまた一気に近づいたのは嬉しかった。

けど、ずっと心にこのままでいいのか、なんて気持ちが残っていた。

私は…。どうすればいいんだろう？

「ねえ、美海。話は変わるんだけどさ、遙君の症状、あれお風呂入れば

治るやつなんだけど…。」

あかちゃんはいくどい表情を浮かべる。

まさか…

——遙side——

急に身体が固まったのは驚いた。

理由はわかつている。身体の冷えすぎだ。

からっからに晴れている場合だとエナが乾いて動けなくなるが、周りが冷えている状態でどどん体温を下げていくのもまずいみたいだ。

美海と温めあったといえど、さすがに限度もある。自業自得だが、なるべくしてなったものだろう。

さて、これからどうしようかな…。

一瞬だけそんなことを思い浮かび、直ぐにやめた。

思い出すのは痛い記憶。

それに今は、美海がいる。

それだけで十分だろ。

そんな俺は、天井を仰ぎながら、ふと寝かされる前、あかりさんに言われたことを思い出した。

「ずっと寝ててもいいけど、体がある程度動かせるようになったら、風呂でしっかりと身体を温めて。そうしたら、そこから30分くらいで治るから。」

おそらく、この症状についてはあかりさんしか知らないだろう。

海では、こんなに冷えることはまずない。

陸へ上がって5年、ずっと住んでいるあかりさんだからこそ分かるものだ。

「さてと…そろそろ動けるかな？」

よつと声を上げ、立ち上がる。立ちくらみのような感じが一瞬したが、立てないことは無い。

「すいません、風呂借ります。」

聞こえたかどうかは知らないが、俺はそう言っただけで風呂へと向かう。

しっかしさすがに新築なだけあって、風呂場も綺麗なんだよな…。

風呂場には塩が置いてあった。なるほど、入る毎に入れろってことか。

陸でそれなりの時間を過ごした分、ここら辺の分量はわかってる。とりあえずそれだけの分量を入れ、俺は風呂に入った。

…

これからのことを考えるのはやめた。

踏み出す足元は見えず、1歩踏み出した先が奈落の先である、今ならそんな気だつてする。

ならば、と、ふと過去のことを考えた。

それこそ、夢で見せられたようなこと。

人を好きになる気持ちを、考えようとしなかったあの頃。

人を好きになる気持ちに向き合おうとして、ずっと苦しんでいる今。

分かってる。

後者が正しいってことは分かってるのに。

後一步はきつとまだ…。

ガラッ！

瞬間、何が起こったのかわからなかった。
聞こえたのは扉の開く音。そこにいたのは……。

「ちよ、美海!!?」

第81話 もう一度前へ

——美海side——

「一緒にお風呂、どう?」

一瞬、耳を疑った。あかちゃん、何言ってるの...?

「は、はあ!?! なananでそんなこと出来るわけ!?! 無理無理無理、絶対無理だから!!」

私は赤面しながら叫ぶ。遥に聞こえてるかなんて心配は頭になかった。

「んー? 私は至さんにやってもらったけどなー?」

「それとこれとは違うでしょ! パパとあかちゃんは...、夫婦なんだし...。」

「あはは、冗談冗談... いや、少し冗談じゃないけどね。」

「どういう事?」

するとあかちゃんは症状について語りだした。

「あれは一見、ただ陸で身体が冷えただけかと思われがちだけど、実はもうひとつ、自分の中に引き起こす原因があるの。私も初めて聞いた時は馬鹿じゃないの? って思っちゃった。」

「それって...?」

「うん、それは、本人の心の問題。専門家が言うには、外部的影響で自分の心に欠落が生まれてしまった人で、エナを持つてる人間にのみ起こる病気らしいの。つまり遥君が抱えてる心身的ダメージは、美海が思ってるより大きいはず... だから、今そんな遥君のそばにいれるのは、美海だけってこと。」

嘘だ。こんな理不尽な病気があってほしくない。

だってこれは、あまりにもズルすぎる。

...でも、面倒を見るって、最後までそばにいるって決めたのは私だ。

約束もそうだけど、自分の核である、決意だけは嘘をつきたくない。

結局私は風呂場に向かう。

一步一步、踏み出す足は次第に重くなってゆく。

最後に遥とお風呂に入ったのはいつだっけ？

確か、まだ私は、小学生にもなっていないかな…。

そして私はドアを開ける。

「み、美海!!」

浴槽に浸かっていた遥がガバツと音を立てて驚く。

「ちっ、違うのーこれにはちゃんと理由が!!」

なんて言っても、そう信じてはもらえないだろうな。

一応ちゃんと大事な部分は隠す配慮はしてるけど、それでもやっぱりこの歳だと恥ずかしい。

でも今更戻るなんて訳いかないし…。

ああもう!あかちゃんのバカ!私のバカ!

まあ、突っ立ってても何も始まらないし、とりあえずシャワーでも浴びようかな…。

「… お、おう。まあ、落ち着いたからいいや…。」

私が固まってる時間が短かったからか、遥は少し戸惑ったが、何故かしら落ち着いてしまったようだ。

私に対して、何も思うところがないのかな…。

なんて思ってた遥の視線は、完全に私の身体を捉えていた。

「何?」

「… いや、大きくなったなって。」

「… 変態。」

「何が!」

遥はほんとに、こういう所に鈍感だ。

男ってみんなこうなのかな？なんて思ってしまう。
パパだったら……。
……。

もつとひどい結果になりそうだな。

「…… いや、あれだよ。こうやって一緒にお風呂入るのって久しぶりじゃん。それで、改めて美海を見ると、あれから成長したんだなって、綺麗になったんだなって、思うところがあるんだよ。」

「…… やっぱり、変態じゃん。」

そう呟いたが、別段悪い気分でもなかった。

遥は、ちゃんと私を見てくれている。

遥の眼中に私がいる、それだけで少し嬉しかった。

「それで？改めて聞くけどなんでこのタイミングで？」

「…… あかちゃんに嵌められたの。」

「それはまた……。」

実際、あれは嵌められたようなものだ。

とはいえ、最終的な決定は私の意思だから、そこはなんとも言えない。
い。

そこからはお互い行き過ぎた干渉なく、ただ時間が過ぎていった。
目を合わせれば恥ずかしいだけだし、声を聞けば詰まりそうになる。

とりあえず、やましい話は一旦なしにした。

「そういえば美海も、風呂に海水と同じぶんぐらいの塩を入れてるのか？」

「…… うん、そうだね。エナが分かってそれからはずっとこうしてる。確かに、時々忘れたりすると少し苦しくなることもあるよ。5年前、寝る前に光が自分のエナを濡らしてた事があったけど、今ならその気持ちがよくわかる。」

「そうか。」

そして遥はさらに深く浴槽に浸かる。

遥が何を考えてたかは知らないけど、こういう時の遥は、だいたい難しいことを考えてるから、私にはきつと無理だ。

「なあ、美海。」

「何？」

「本当に俺、これからどうすればいいのかな？」

どうすればいいか。

聞く側としてはすごく気分が楽で、答える側はすごく重苦しい言葉だ。

ましてや、どうして欲しいか、私自身が分からない。

こんなに近くに遥がいる生活は考えてなかった。

だから今こうしていることに、すごく戸惑っている。

もちろん、嫌なわけじゃない。私は遥が好きで、だから一緒にいられるということは嬉しいに決まってる。

けど、これが正しい選択かなんて、決めれるはずもない。

だからせめて、今は時間が欲しい。ちゃんと答えを出すために。

「私にもわからない。遥のことは結局遥自身の問題だから。…もう、5年前のあの日みたいに何も考えず言えることは無いよ。ただ、ただね？」

「……. ちゃんと答えが出るまでは、ここにいて欲しいな。」

「そうか……。そうだよな……。分かった。とりあえず今は、それに甘えさせてもらおうかな。」

遥もいろんなものを抱えてる。

私もいろんなものを抱えてる。

もちろん、お互いきれいさっぱりそれが無くなるなんてそれは遠い未来だ。

だから今は、せめて前だけを向きたい。

第82話 繋いだ手の向こう

——遙side——

あれから数日間、俺はずっと潮留家でお世話になっていた。分かってる、ちゃんと前を向かなきゃいけないことくらい。少なからず、夏帆さんと保さんは、俺の帰りを待つてくれているはずだ。

そういう人のことを、俺は考えてなかったのかもな。

しかし結局、どこまで行っても1人にはなれなかった。

ただ、それが100悪いかと言われたら、違う。

多分俺は、自分の気づかないうちに美海への好意を膨らませていた。

あの日水瀬に好きだと伝えようとした人間が、だ。

この感情はなんだろうか。

昔は、得体の知れなかった好きという感情。

今となっては近くにありすぎてよく分からない。

少しずつ、美海との距離が近くなっていった。

そして、少しずつ輪郭が見えてくる、今後のあるべき自分。

ああ、きつと、今の俺は間違いだ。

ただ単に自分の心の中にあつた欲、意志を全てぶつけようとしていたんだ。俺は。

これ以上こんなままで生きるわけにはいかない。もう、大切なものは傷つけないから。

だから俺は、今日、答えを出す。

夜。

まだ、寝静まるくらいの時間ではないが、外はもうもう随分と暗くなっていた。

一応客間は貸してもらってるが、それももう終わりを迎えなきゃいけない。

大丈夫、決心はしている。これからどうしたいかも、決まった。だから俺が最後にしなきゃいけないのは、それを伝えることだ。それが誰かって？そんなもの決まっている。

ずっと寄り添って、励まして、歩幅を合わせて、立ち直らせてくれた人。

俺の、大切な、大切な人。

俺はその人の部屋をノックする。

ドアは直ぐにガチャと空いた。

「何？どうしたの？」

「あー、ちょっと外出てくれるか？庭のどこ。」

「なんで・・・？まあ、いいけど。ちょっと待ってて。」

美海は特に気にする様子もなく、上着を羽織った。

「それじゃ、行こっか。」

美海はドアを出て、俺の横を通り過ぎる。

先程使用したのかシャンプーの匂いが、俺の鼻腔をついた。

変な言い方になるけど、いい匂いだった。

ただ、それ以上に思えたのは、美海が・・・

「？どうしたの？」

いや、何でもない。

「・・・ ああ、行こっか。」

「それで、何で急に？」

縁側に座って話を始める。大事なことを話したい時、こうしたほう

がいいと教えてくれたのは保さんだった。

「ちよつと、話をね。」

「ふーん……。いいよ、どんな話？」

ああ、もう単刀直入に言ってしまったらどうか。

どうせ隠しても何も残らない。むしろ失ってしまうこともある。

大事なことは真つ直ぐに全部伝える。

「俺さ……。明日から水瀬家に戻るよ。」

美海は一瞬驚いた顔をして、それは直ぐに慈しむ顔へと変わった。

「……。そう。」

その一言だけだった。

悲しかったのだろうか、嬉しかったのだろうか。表情から、声質からそれは読み切れなかった。

ただ、伝えたいことはこれだけじゃない。

言つたはずだ。「全部」だって。

「あの日から数日間、ずっとこの家にお世話になって分かった。俺はきつと、欲をただぶつけていただけだった。なんかこう、自分が自分じゃないような、ずっとそんな生活だった。けど、美海とだんだん近づいて、やつと分かった……。俺は、もう一步を何度でも踏み出さなきゃいけないんだって。だから、選んだ。もう一度、水瀬と向き合うって。」

ただ、自分が自分じゃないような生活の中で、確かな自分の感情もあった。

「美海の事が好き」

そう芽生えた思いは、決して嘘偽りじゃない。

でも、欲をぶつけないというのなら、今はまだ、その答えを出せない。

ちゃんと、もう一度あの日の水瀬の気持ちに向き合って、美海の気持ちに向き合って、それで答えを出そう。

だから今は、最後のお願いを。

「だからさ、美海。今は最後のお願い、聞いてくれるか。」

「… いいよ。そうやって、何度も振り回されたしね。」

クスツと笑って美海はOKをだす。俺はそんな美海の手を握った。強く、強く、決して離れることのないように。

「それがお願いでいいの?」

「ああ。これで、これがいいんだ。せめて今だけは、こうやって二人でいさせてくれ。」

「うん。」

それから会話はなかった。

ただ、2つの手が強く繋がれたまま時間が過ぎていく。

これでいい。このままでいい。

繋がれた手は、覚悟だ。

もう、大切なものを失わないために、俺は大切なものの温もりを自分に刻みつける。

最後に俺はどことなく呟いた。

「ありがとう。美海。」

第83話 オワリハジマリ

——遥side——

翌日、俺は改めて水瀬家へと戻った。

ただし、立ち振る舞いは少し変わった。

俺はあくまで遠い親戚だと、水瀬とは少しあっただけと。

そうしてくれた方がメンタル的には有難かった。

かつて水瀬千夏という人間が告白した島波遥という人間は、ここにはいない。

そう割り切ってしまう方が、淡い期待をするより心が楽だった。

「ということ、今日からうちでお世話になる島波遥君だ。」

あえて保さんは俺の紹介をする。ただ、あれから5年間、息子のようにお世話になったわけだ。保さんの心境も楽なものでは無いだろう。

「はじめまして…、かな？一回だけあった事があると思うけど。」

「ああ、なんかどこかで…、えっと、よろしくお願いします。」

やはり水瀬は他人行儀だった。

まあ、無理もない。実際今の水瀬にとって俺は他人だ。

それに…、もう同級生ではない。

俺の方はすっかり大きくなり、変わってしまった。

そういえば水瀬の病気のことが少し気がかりだけど…、まあ、それは追追考えていこう。

都合よくなる、なんてことがあってくれたらいいのだが。

いや、やめよう。

それより、1つ気になったことがある。

歳が離れてしまった、という事は、気軽に呼びにくくなるだろう。だから俺は、出来れば水瀬には遠慮しがちに話して欲しくない。

あの日、堤防で話した時の事の逆。俺の望みはそれだった。

「えと、せっかくだし、敬語なんてなくていいよ。だからその…、千夏って、呼んでいいか？」

「うーん、いいです…。いいよっ。」

なんだろう？と千夏は首を振るが、とりあえずは了承してくれた。少し変な視線を後ろから感じるが、気にしなかった。というか気にしたら負けだ。

だっておそらく、夏帆さんがすごいにやにやしてるんだから…。

かくして、1度リセットされた俺と千夏の関係がリスタートした。

そして、その日の夜。

仕事から帰ってきた保さんに、俺は呼び出された。

いつもの場所、こういう時はだいたい大切な話だ。

ふと、空を見上げた。

街は変わってしまったが、見上げた夜空は変わらない。

そうか…。もう5年経ったんだな。

初めてこうやって保さんと話した時から、千夏に出会ったことからも、もう5年。

たった…？

違うだろ。

長すぎるだろ…。

気がつけば俺はツーッと涙を流していた。ずっと考えないようになってきたのに、思い出すだけ辛いからって封じ込めていたのに。千夏が戻ってきて思い出してしまっ。5年前の日々。

まだみんな、帰ってきてないんだ。

それに、もう返らないものもある。

前を向くと決めても、辛いものは辛いままだった。

けど、進むしかないのはわかってる。

俺は、すぐに拭きあげ、上げた顔を下ろした。

「…大丈夫か？」

「ええ、大丈夫です。それで、今日は何の話をしましょうか？」

「ああ、そのな…。お前、本当に大丈夫か？帰ってきてくれたのはありがたいが、その、お前に無理があるのは一番ダメだ。」

「大丈夫ですよ。本当に。辛くないって言ったらそれは嘘になります。俺、分かったんです。記憶が無くなってしまっても、また思い出を作れるのなら、それもいいんじゃないかって。過去だけ振り返っても、戻るものはないんですよ。」

「それが、お前が潮留家でお世話になってる間に分かったことか？」

「そうですね…。最初は、忘れられてしまった自分なんてもう必要が無い、そう思っただ距離を取ってました。本当に不甲斐ない話ですけどね。でも、向こうで美海と距離が詰まって、思い出になるような事もいくつかあって、それで、分かったんです。過去は戻せない。未来は書き足せる、って。」

「そうか…。お前は、千夏は今のままでいいと思うか？」

「ええ。千夏が幸せと思ってるなら、今が一番いいです。俺としては。」

言ったことは嘘ではない。

俺は自分の幸せの価値観を他人に押し付けるような人間にはなりたくない。幸せかどうかの判断は結局個人に委ねられるのだから。

本音を言えば、記憶を取り戻せるようならそうあってほしい。

けど、やっぱり決めるのは千夏だから。

…美海がどう思うかは、わからないけど…。

保さんは特にリアクションをすることも無くただ頷いた。

自分の意見は見せないまま、相手の言うことを受け入れる。

ちゃんとした大人が、こういうことを容易くできるようになるというのなら、俺はきつと、まだまだ甘いな。

数秒の後、保さんが立ち上がる。

「そうか……。さて、こんなもんかな。そろそろ入るか。確か今日の晩は千夏だったな？」

「ええ、なかなか張り切っていましたよ？」

なんか俺がきたからという分が影響したらしいが……。まあ、最初もこんなもんだったし、慣れてるっただらそうか。

俺は帰ろうとしたが、立ち止まった。

また、少しおかしな風を感じたからだ。

「保さん。先行つててください。もうちよつと夜風に当たつてくので。」

「ああ。5分くらいで戻れよ？」

そう言い残して先に保さんは中へ入っていく。

俺が感じた風は、冷たさの中に、少し強く潮の香りを含んでいた。

汐鹿生に何かあったのだろうか？誰か打ち上げられたのだろうか？

ここからだとはよく見えないが、どこかそんな気配を感じる。

また、事態は動いていく。そんな予感に俺は支配されていった。

第84話 動き出す時、かの約束

——side——

ところで、今は夏休みとかそういうものではない。今日はドがつくほど平日。学校も仕事もフル稼働である。つまりまあ、美海も千夏も現在学校なわけであって、保さんも夏帆さんも仕事に行ってるのである。

俺はと言うと、こうして鷺大師に帰ってるわけなのだが、大学がな
い訳では無い。

前半、極限までコマを詰めたおかげで余裕が出来ているが、実の所
もうほとんど使い果たしてしまっている。

そろそろ戻らなければいけないという状況だが、俺はまだ鷺大師で
やらなければいけないことがある。

というわけで俺は自分のゼミの先生に電話をする。

俺の居る大学は少々特殊で、大体の委任はゼミの先生にある。

それこそ紡なんて、ゼミの先生同伴でこっちに来てるわけだから、
なんの躊躇いもなく入れるわけだ。もちろん、調査尽くしの日々だ
が。

じゃあ俺はどうするか、と言ったところの電話だ。

「もしもし先生ですか？」

「あん？ああ、お前か。単位ならまだ安全圏内だぞ。けどまあ、そろそ
ろ帰ってくるべきなんじゃないか？」

「まあ、そうなんですけどね...。」

瞬間、先生は俺の反応に食らいつく。

流石は心理学の先生だけあって、俺の感情はすっかり読まれてい
た。

「ふむ、まだ居たい、ということかな。しかしこればかりはずっと休ま
れるとこっちも単位出せないぞ？」

「分かってます。けど、あと1ヶ月ほど何とかありませんかね...？」

数秒の沈黙の後、先生は答える。

「そうだな。じゃあ、帰ってこなくていいから2つの課題を与える。その出来で単位に影響させる、それでいいか？」

「お願いします。」

「1つ目。論文書いてこい。とびきり長いやつ、ああ、もちろん心理にまつわるものでな。そうだな。お前の専攻したい部分を見つけないいい機会だし、色々と考えてみる。提出は1ヶ月後、いいな？」

「それで、もうひとつは？」

「ああ、ちよつとお前、あいつの研究手伝ってこい。ほら、お前の同級がいるゼミ、結構遊びに行つてんだろ？ついでだから何かしてこい。アポは取っておくから。それに、お前が残りた理由、そこかなり関係があるはずだろ？」

全く持つてその通りだ。

むしろ、後ろからGOサインを出されている方が楽になれる。

この言葉は普通に有難かった。

「まあ、お前さんも海村出身つて言つてたしな？気になるよな、地元のこと。というわけで2つ目の課題だ。いいか？普通の生徒だったら許されない事だからな？」

「はい、ありがとうございます。」

「うん、よろしい。じゃあ、存分にやつてきたまえ。」

電話はそこで切れた。

さて、電話であつた通り、俺は海を見に来ていた。

実際のところ、昨日保さんと話してた時に、少しいつもとは違う風を感じていた。だいたい、こういう時は海に何かあつたと相場が決まっている。

しかし、特に海に変化は見られない。当然のことかもしれないが。

それに、調査組は今現在には来てないみたいだ。その場に放置されている調査器具のいくつかからそれは判断できる。

さてと……。

とはいえモニター等は回収が簡単ではないので、テントの中にしまつてあつた。なるほど、これを見れば潮の流れとかが分かるわけだ。

俺でも起動できるかと思ひ、失礼ながらあちこと触ると、運のよいことに電源がついた。

数秒して、モニターにいくつもの色、矢印が映し出される。

その中に、「?」の文字で記された箇所がいくつかあつた。

「ふむ…、これはつまり…?」

「何してるの?不法侵入は犯罪だよ?」

「!？」

はつと振り返る。とはいえ、だいたい予想はついていた。声は聞き覚えしかないからな。

なあ、そうだろう?

…要。

「おはよう。遥。」

「おう、目が覚めたか。」

そうとしか返せない。

毎度のことだが、どこから話せばいいかわからないからな。

「…なるほど、けっこう時間、経つたんだね。あれから何年過ぎた?」

しかし、要は例外。

頭はちゃんと切れるし、理解も早い。

光みたいにいちいちな説明をしなくて済むのは正直助かる。

「5年。あれから5年、ずっとお前らは眠ってた。」

「…そう。そしてやっぱり、遥は眠ってないんだね。」

これもまた答えにくい言葉だ。

一緒に過ごしていた仲間だ。自分が抜けがけしていたのを、はいそうです。で済ませていいものなのか?

でも、真実は真実だ。ねじ曲げることは出来ない。

オマケに仕方が無さすぎる。俺は病院で眠ってた訳だし。

「ああ、色々あったが、俺はここに残った。眠れる状況でもなかったしな……。それと……。ちさきも。」

「そつか。ちさき、飛び込んでこなかったんだね。」

「ああ、そうだ。お前のいた船は、どうなったんだ？俺、あの時病院で寝てたからさっぱりだな。」

「分かった。色々話す前に一旦……。服、貸してもらっていいかな？」

「ああ、ちよつと待つとけ。」

流石に服は手元に持ち合わせていなかったもので、とりあえず着ていた上着を渡し、俺は全速力で取りに行った。

10分後。

「はあ……。はあ……。これでいいか？」

「うん、サイズも問題なさそうだし。」

「ったく……。家に中学ん時くらいの服が残っててよかったよほんと。」

「んで、これからお前どうするんだ？別に驚大師見てもいいとは思うけど……。」

「……。」

要は下を向いていた。その表情は何えない。

「……。要？」

「ねえ、遥。約束、覚えてる？」

「約束って……。」

顔を上げた要は笑ってなかった。

「お船引の前に、遥に伝えた約束。」

ちさきには、ちやんと答えを出した？」

第85話 それぞれの世界

——side——

答えを出したのか、俺はそう問われた。

それを聞く要の目はいつになく真剣だ。

当然だ。誰だって好きな子のことについては真剣になる。

きつと俺が要の立場でも、同じような態度をとるのではないだろうか？

さて、それはともかく、結論から言うと。

答えは出している。

お船引が終わってから答えを出す。そういう約束だったが、終わって直後にそんなことを言えるはずはなかった。

俺も心に傷を負っていたが、多分ちさきも俺と同じくらい、…いや、あいつの性格だからもつとか。傷を負ってただろう。

そんな中で、追い打ちをかけるように言えるはずはなく、ずっとタイミングを待っていた。

結局、伝えたのは高校入学の時くらいだった。

ちようどこの頃から、ちさきの目が俺に向かなくなってきた。理由はおそらく紡だ。

俺はもともと水瀬家にいたが、ちさきはお船引の1件後、木原家に住まわしてもらっていた。

同じ家に男女二人、当然何も起きないはずはなく、…、みたいなセリフがあるが、まさしくそれだ。

実際、心が不安定な時に支えてくれた人がいたら、そっちに傾くのは普通だろう。

そのタイミングで言ったのは、結果からいえば成功だった。

ちさきは1年の後、だいぶ吹っ切れていたのだろう。少し寂しげな表情はしたが、引きずることはなかった。

その後は特に関係に変化なく、同じ陸に残ったものとして、海村のものとして、これまで通りの関係を保った。

そして今日に至る訳だ。

という大まかな事を要に伝える。

「そう、それならいいんだ。」

少しの安堵と、喜び。感じたのはそれだった。

けれど…。

要が辛いのはきつとここからだろう。なにせ、ちさきの目が俺から紡に向いただけであって、要を取り巻く環境は、何一つ変わっていないのだから。

しかし、そんなことを言う勇氣は俺にはなかった。

夕方頃。

要を連れて俺は漁協へ向かった。調査班の方が、何やら色々聞きたいことがあつたらしい。

途中、ちさきと紡が同じタイミングで入った時、要が若干眉を動かしたが、気にしないほうが賢明だった。

「さて、確認だけど、要君は陸に上がってきた時の感じを覚えてる?」「はい。そうですね…。気がつけば上がっていた、といえればそれまでなんですけど、何かこう…。特殊な流れみたいなものを感じました。多分、入るのにはヒントになるかと思うんですが…。」

そういうものの、どこか不機嫌そうな要。自分たちの住んでいた場所を荒らされるのが嫌なのだろうか?

まあ、愚痴は後で聞いてやるとして、とりあえず本題だ。まだ不可解な点はあるが、少しずつ糸口は見えてきてる。そのことはこの場にいた海村の人全員分かっていた。

特に光は、今か今かと待ち続けていた。

現状、海に残っているのはまなかだけだ。どうにかしたいのは分かってる。

とりあえず、もう数日調査して結果が出る、との事だったので、今はそれに従うことにした。

さあ帰ろう、としたかったところだが、要に呼び止められる。

仕方が無いので一緒に来ていた水瀬に先に帰ってもらうことにする。

「それで、どうして俺を呼び止めたんだ？」

「遥なら分かるよね。僕の思ってること。」

「さあな。完全にはわからん。」

なんて言ってるが、大体は把握済みだ。

実際、おおよそ2つの事だ。

ちさきと紡の距離。あんなもの見せられては気に食わないのは当然だろう。ましてや、要も木原家にお世話になるという事だから、これは結構重要な問題だろう。

もうひとつはさっきのこと。全く接点のない陸の人間に自分の街を踏み荒らされるのが気に食わないのだろう。

正解は、後者だった。

「あんなに堂々と汐鹿生を踏み荒らされるのは、さすがに頭にくるね。なんにも接点のない陸の人間が、僕達の言ってることまで道具にして調査してる。そうして汐鹿生に帰るのって、僕は嫌だな。」

「確かに、自分の家が知らない人に入られるのと近いな。…でも、こればかりはケースバイケースだ。俺達は汐鹿生に帰りたい。あの人たちは汐鹿生について知りたい。利害関係が一致してる以上、協力する以外はないんじゃないか？」

要はさらに不機嫌になる。

「へえ？自分だけ陸に残って丸くなった？少なくとも、そんなあつさり人のことを信じて、意見に飲まれる、そんな人間じゃなかったよね？遥は。…少なくとも、僕はこんな結果、認めたくないね。」

ああ、そうか。

こいつはまだ、陸と海のつながりを、完全に肯定してないんだ。
5年前、ずっと見てきたのに気づかなかった。

あいつは、とりあえず遠くから見るだけで、このことについて自分の思いを口にしなかった。

周りが仲良くなったから自分も、みたいな流れだっただけで、完全にそれは自分の意思じゃない。

今、変わりつつある状況だからこそ、要もまた少し変わってるんだ。
「そうか?」：：ならしやうがないな。お前にどうしろなんて言わない。自分の好きなようにやったらいい。結果はあとからついてくるからな。もちろん、恋もな。」

最後の方が聞こえてないことを願つつ、俺はその場をお開きにした。

「：：：そんなの、無理だよ。」

要は誰にも聞こえないように弱音を吐いた。

夜前。

あたりはだいぶ暗く、もう街灯の近くでないとなが見えない。

そんな中、俺はと言うといつもの堤防で海を見ていた。

特に理由はない。ただぼんやりと、ほのかに揺れる風いだ海を見続ける。

そのうち、トントンと背中を叩かれた。

「ん、誰だ?」

振り向く先には見慣れた顔。

「えっと、こんばんは？私なんですけど。。。」

第86話 欠落

——千夏side——

目が覚めた。

随分と長く眠っていた、そんな気がする。辺りを見渡す。それは、私の知り得る海ではなかった。起きたすぐそこに人がいる。

1人は美海ちゃん、それともう1人は…

…

誰だろう？

なんで私の全く知らない人がここに…？

それに、美海ちゃんと分かったけど私が知ってる美海ちゃんより少し大きい。私と同じくらい。

… どういうことだろう？

私は思うままに誰ですか、と呟いた。

その男の人はどこか放心した顔で、どこかヘフラフラと歩いていてしまう。

… 何か悪いことしちゃったかな。

でも、確かにしらない。《覚えてない。》

あれ…？

私、何があつたんだっけ？

…数日後…

それから私は色々と聞いた。

お船引の最中、汐鹿生の冬眠に巻き込まれ、5年間眠っていたこと。そこからふつつつと5年前のことを思い出してきた。

ただ、私にとってのそれは、昨日だった。

私としては、少し長く眠ったかなって、そんな感じ。

正直、ただ眠ってただけなのに5年間もたつてるとなると気分が悪い。

そういえば、色々思い出しているのに、何か足りない気がする。私、なんでお船引やったんだっけ？

もともと、海村の人が転校してくると知った時から、仲良くはしなかった。だからできるだけ距離も縮まるようにと色々話したりもした。

けど、それだけ？

そんな理由で、私は動いてたんだっけ…？

まあ、いつか。

とりあえず今を生きるのに支障はないし、大事なものはさほど変わってない。なら、問題は無いよね。

また数日後。

あの人が家にやってきた。どうやら遠い親戚だったようで、訳あってうちに来てるらしい。色々あったけどとりあえずは同じ屋根の下で暮らす身。仲良くと思いつつ毎日を過ごすと決めた。

足がどうやら片方義足みたいだけど、何があったかはさすがに聞かなかった。

それからなんだかんだ一緒に住んでみて分かった。

この人は、遥さんはすごく親しみやすい。

話はちゃんと聞いてくれるし、それによって相談も受けてくれるし、とても懐が深い。

意外だったのが、料理が上手なこと。

私だって料理には結構自信がある。お母さんがいない時は私が担当だったから。

でも、そんな私より全然上手い料理を毎回作ってくれる。それから私も教えてもらうようになった。

そうして、私が目覚めて結構日にちが経った。

どうやら今海を研究してる人達が言うには、もうそろそろで汐鹿生へ行く糸口が掴める、そうだ。

汐鹿生……。それは、私にとってあこがれの場所。

遠く遠く、ずっと見てきた海の底。

私自身、行きたい、ということ以外の気持ちはなかった。

そういえば、私は小さい頃からずっと散歩をしている。

少しハズレの方にある堤防、そこが私のお気に入り場所だ。

何かを待つてるわけでもなく、ただ、ぼんやりと遠くを眺める。

それこそが私の楽しみだった。

そうしていつものように堤防に向かうと、先客がいた。

あれは……。遙さん、かな。

「えっと、こんばんは？私なんですけど……。」

私はトントんと背中を叩いて声をかけた。

——遙side——

千夏が来る、というのは全然想像できる話だ。

記憶が欠落している今でも、ここに来るといふ習慣は残ってるみた

いで、且つ、今回俺が来ている方が珍しいので向こうからすればあれ？みたいな状況だ。

「あなたもここ、来るんですね。」

千夏は俺の隣にちよこんと座る。

「ああ、…ここに来ると色々嫌なこと忘れさせてくれるからな。分かるだろ？ここが落ち着く場所だつてこと。」

「そりゃ、私のお気に入りですし？好きな物は好きな人が1番知ってるんですよ？」

「はっ、ちげえねえ…。」

俺は沈黙のまま遠くを見つめる。その視線が、ただ無心である訳では無いと千夏は気づいたようだ。

「誰か、待つてる人がいるんですか？この海の中に。」

「ん？… そうだな。いる。2人な。」

すると千夏は首を傾げた。

「あれ、でも残ってるのはまなかだけって…。」

「まあ、こつちの事情もあるのさ。今はまだ、語るべきときではない、ってね。」

「なにそれ。まあ、話したくないならいいんですけどね。」

その場はどうかやり過ぎず。

俺が待つてるのは、間違いなく2人だ。

まなかのことについては勿論。

では、あと一人は誰なのか。

簡単だ。それは俺の隣にいる、千夏本人だ。

俺の中では、千夏はまだ帰ってきてない。

分かっている、もう戻らないかもしれないって。

けれど、あの日好きだと伝えようとした千夏じゃなきゃ、ダメなんだと、俺の中で何かが叫んでいた。

何かを忘れさせてくれる場所、なんて言ったが、逆だ。

忘れないように、刻みつけている。

まだ俺は、心のどこかであの日を欲しがっていた。

翌日、鷲大師の街の方へと向かう途中、走ってこつちに向かっていた紡と合流した。

「おっ? どうしたんだ。こつちの方来るってことは、俺に用でも?」

「理解早くて助かる。ちよつと今から漁協ついてきてくれ。」

「ということは?」

「ああ、見つかった。汐鹿生へと入る場所を。」

第87話 片鱗

——遥 side——

俺は紡ぐに導かれ、走って漁協へ向かった。

中には光、要…どうやらもうみんな揃っているようだ。

「おせーぞ遥。」

「悪い。まさかこうなってるとは知らなかった。」

「つたく、昨晚電話来ただろ？」

え？

… あー、それならしょうがないな。

「すまん、電話取ってない。紡も一回しかかけなかっただろ？」

「そうだな。直接合えばいいと思って急がなかったな。」

「なんだ？どういうことだよ。」

「まあ、簡単に言うとう電話された時俺は家にいなかったんだよ。」

「じゃあまあ、しょうがねえな。」

光も仕方なくと納得した様子。やれやれ、結構丸くなってんな。な。

ただ、目をつける部分が相変わらず幼いが。

…

「さて、一通り説明したけど、後は言うてからもう一度言った方がいいかな？」

「そうですね。さすがにコンパスの指す方角忘れてしまおうとまずいで。」

「要、お前なんかある？」

「別に？とりあえずコンパス頼ること優先ってことかな？」

「ああ。ただ、流れがどうなるか分からない部分がある以上は、臨機応変に対応だな。」

各々行き方を頭に叩き込み、海へ行く。

としようとしたのだが、先にドアが開いた。

「あれ、千夏と美海。どうした？」

「えっと……。」

「遙、私達も汐鹿生に行かせて欲しいの。」

歯切れの悪い千夏に変わり、美海がストレートに思いをぶつける。

ははあ…… そういうことね。

実際のところ、問題は無い。

美海のエナの対応力はばっちりで、あれから何度か海に入ったが問題は無さそうだった。

心配なのは千夏のほうだが、もともとエナを持っていた人間なだけあり、扱いの方は問題ないだろう。

問題があるとすれば、また別の話になるな。

一方の俺はというと、足の方が不安要素だが、まあ問題無しだろう。前回やらかしてしまつたぶんがあるので、ちゃんと薬の服薬を行つておいた。

それから数回海に行つて確かめたが異常はなかった。

あとは汐鹿生だからということの影響があるかないかになる。

まあ、NGが出るわけでもなく、それぞれの思惑のままに俺達は海へと飛び込んだ。

……

指針のままに海を進み、

黒い渦のようなものを抜け、

かき分け、少しずつ前へ進む。

もう少しだ。

あと少し。

そこに待ってるんだ。

…!!!

そこは、汐鹿生であり、汐鹿生ではなかった。

見たことある街並み、見たことない光景。

街全体はぬくみ雪に覆われ、生きている感じの欠けらも無い。

そして、異様なまでに寒い。

冷たい。

俺が最後に見た汐鹿生からでさえ、だいぶ変わっていた。

「これが… 汐鹿生？」

「…。」

光が思わずこぼした声に、俺は何も言えなかった。

認めたくはなかった。

これが結末ではない、そう信じるしかなかった。

…。

俺はふらつと明後日の方角へ歩き出す。

「おい、どこ行くんだよ遙。」

「一旦家に帰ってくる。気持ちの整理もつきたいしな。」

「あ、おい待てよー！」

とりあえず自分のことで頭がいっぱいになってた俺には、呼び止める光の声は聞こえなかった。

家の前に着いた俺は、その場にただ突っ立っていた。

ドアを開けることも無く、ただ外からぼやっと眺めるだけ。

「… ったく、かつこ悪いにも程がありすぎだろ。俺もまだまだ成長

しきれてないな。」

状況が落ち着くと冷静に自分を見つめれる。

すると、さっきの態度が嫌で嫌で仕方なくなつた。

しかし、不満を口にしたところで、少し気が楽になつた。

「…よし。」

俺はドアを開け、大きな歩幅で家の中へと入っていった。

…

中はひどい状態だつた。

最後に立ち寄つたとき掃除したにもかかわらず、その倍の量のぬくみ雪がつもり、埃っぽいことこの上なかつた。

まあ、人が住んでない家だ。当然か。

といったところで、俺はもう一度掃除を始めた。

帰ってくることになるか分からない家だが、それでもここは、確かに俺という人間が生きていた家だ。

無かつたことにだけは、したくない。

…あつ。

ふと、写真が目に付いた。俺と、両親とが映つてる、もう随分と色あせた写真だ。

そういえば、いつからだろうな。

俺は両親のことをいつからか忘れていた気がする。

その声も、顔も、もう随分とぼやけてきた。

そうか、もう10年くらい経つもんな…。

父さん、母さん。

俺はあの頃から成長してるのかな？

「あの？」

「うえ!？」

びつくりした。辺りを見ると、どうやら千夏に急に後ろから声がかけられてた訳だ。

「どうか、勝手に入ってきた訳か、千夏は。」

「…どうしたんだよ。それに急に入ってきて。」

「え?何回も呼びましたし近づいてからも4、5回声掛けましたよ?」
つまりぼーっとして気づかなかった訳か。

どうしちまつたんだ?今日やたらと調子悪いな。

「そうか、悪い。ちよっと周りが見えてなくてな。」

「いえ、お取り込み中なら失礼しました。…っと、その写真は?」

「ん?ああ、両親だよ。もう昔の写真だけだな。」

「へー…。ところで、その両親はどこで眠ってるんですか?」

ストレートな質問だった。

別にもつたいぶるつもりもないし、本人も知りたがってるので言うことにした。

「いないよ。この世界のどこにも。」

「えっ…。?それは失礼なことを…。」

「いや、いいんだよ。」

同情はいらない。もう随分前のことだし、見切りはついてる。

人を好きになることから逃げる、なんてこともあつたが、そうじゃなくても大丈夫、というのを美海が、千夏が教えてくれた。

そんな中、千夏は何かうーんと悩んでいた。

「でも、そういえば似たような話を聞いたことがあるんですよ…。幼いうちに両親を亡くして一人暮らしをしていたって話…。どこで聞いたか、誰に聞いたか、覚えてないんですけどね。」

ドキツとした。

そして、確信する。

諦めようとしたこと。でも、それを破る一言。

千夏の中には、まだ記憶が生きている。全て忘れた訳じゃないんだ。

第88話 進むべき道

——遙side——

ところで、千夏がここに来た理由。

あの後、光らは一旦各々の家に帰って、また集合という形にしたらしい。

それでもって美海は何かに導かれるように走っていったため、途中ではぐれてしまい、せつかくだからということ千夏はこつちに来たらしい。

「でも、汐鹿生ってすごいんですね。陸では全然想像できなかった。」
「ああ、海の中で息ができる前提の街だからな、つくりも大体それに合わせてる。」

「でも…、ちよつと冷たいですね。」

それは仕方の無いことだ。

数年前からによるぬくみ雪も強さをまし、いつかの伝承にあった、人が住めないくらい寒くなる、というものにだいぶ近づいてきている。

そういえば紡んとこの教授は他にも海村がいくつか存在すると言ったが、それらはどうなんだろうか？

まあ、地上でぬくみ雪が降るくらいだし、同じような境遇かもしれないが。

「…ん、そういえば。」

「?どうしたんですか?」

1つ大事なことを思い出した。

10年前、まだ小さかった俺たちが行った場所。

あの不思議な穴蔵だ。

そう、俺だけが知っていた真実。

あそこは、おじよし様の墓地だ。

もし、まなかがあかりさんの代わりに生贄になったら。

まなかがおじよし様になったら。

長い時を経て、全てが繋がる。

これを一番に伝えに行く相手は今どこだ…？

いや、簡単か。分かれようって言った張本人だ。

… なら、やることはひとつだな。

「千夏、行くぞ。」

「といっても、まだ集合時間にはなってないですよ？」

千夏が時計を確認して呟く。

そりゃ聞いてなきゃ分かんねえわな。

… うーん、あいつらも時間が欲しいだろうし、待つとするか。

ただ、俺も色々と回ってみたいところはある。

時間は有効に使う。

「OK、分かった。じゃああれだ。俺はちよつと行きたい場所があるから美海と合流しといてくれ。あいつなら…、多分、学校の方にいるんじゃないか？学校は坂を昇って昇って登った方だ。」

「待って、遥さんはどこ行くんですか？」

「ちよつと確かめたいところがあるんだがな、恐らく、俺とかじやないと入るのが許されない場所かもしれない… 何、ただの様子見。すぐ帰ってくるから。」

「しようがないですね。分かりました。」

そう言っただけで俺は家をでると、一目散に穴蔵に向かった。

「さてと、今はどうなってる… かつと。」

ギリギリまで寄って確かめる。どうやら塞がれた様子は無いようだ。

… ただ、そもそもここ学校に割と近いんだよな。思えば。

ここにいて悟られないように、どうにかやり過ごして…？

「久しぶりじゃのう、遥。見ないうちにちと大きくなったか？」

なんでこの人はいつも都合よく…！

「お久しぶりですね。ウロコ様。5年ぶりですね。」

「うむ、元気のよい返事じゃの…。さて、早速じゃが、いつかの質問の答えを聞こうかの？」

質問？なんのことだ？

「お主の選んだ道は、どうなったかの？成功か、失敗か。」

… ああ、いつか地上で言われたことだ。

そんなもん、決まっている。

く 答えなんて、まだ出てない。く

「そんなの、まだ答えすら出てないです。何も終わっちゃいないんですよ、まだ。」

「ほう、自分と友人の間に時間の差を作った割には、えらく言い切るのう？」

「… そうですね、時間は取り戻せないし、過去は変えられない。けど、全てを失ってないなら、終わりじゃないんですよ。」

「… 小僧だったお主もだいぶ言うようになったのう。何がそこまでして、お主を変えた？」

何が変えた？

… そうだな。1つじゃないのは確かだ。

両親が居なくなったこと。

みをりさんと出会って、そしてまた居なくなったこと。

それから時が経って

陸のヤツらと出会い、

千夏に出会い、美海ともう一度出会い、

1度全てを失ったと諦めて

それでもと足掻いて今がある。

だから、答えはひとつだ。

「そんなの、決まってるじゃないですか。これまで俺に起こったこと全てですよ。辛くても、悲しくても、前に進んだからこそ、今ここにいるんです。」

「そうか…。ならば、今のお主に心配はないかの。それじゃ、儂は一旦消えんとするか。お主らが儂を必要とすれば、ひよつとしたら出てくるかも。」

そう言つてウロコ様はすー…。とどこかへ消えていった。

ついでに後ろの方から光の声が聞こえる。どうやら集合の時間か。

光はこちらに気づき、声を上げる。

「おーい、遙、お前もういいのーか?」

「ああ。それよりこっちこい。見せたいものがある。」

その場にいた4人がよってくる。

やはり光と要はこっつて…。な反応をした。

「で、見せたいものつてなんだよ。これだけか?」

「いや…。そういえばお前ら、この中入ったこと無かったよな…。」

今なら入れる。見せたいものは、その中だ。」

「つち、何だよ。勿体ぶらず言えよな。」

光が苛立ちを見せ始めたようなので、率直に申すことにした。

「ここだよ、光。ここにまなかが眠ってる。」

第89話 離脱

——side——

「まなか!!」

俺がそう言うときさきず光がその中へと飛び込んでいった。あとを追うように、俺と要が入っていく。

「おい…。なんでそんなところで眠ってるんだよ、お前…。」

追いついた頃、光は少し上を見上げて呟いた。

俺もそちらへ目をやる。

そこには、確かにまなかがいた。

けれど、服も来ていないし、謎の膜のようなもので覆われている。

…。どうなっているんだ？

「おい！まなかを離せよ！」

光が膜に飛びつく…。が、

「うあつ!」

何やら衝撃が光に伝わったらしく、虚しく跳ね返された。

しかし、光は諦めない。何度も何度も挑んでは、跳ね返される。

「…。野郎!!」

「はあ…。落ち着け！」

あまりにも見境がなくなっていた光をチョップで牽制する。

我に返ったのか光はこちらを睨んできた。

「つてー!何すんだよ！」

「あのな…。まなかを助けたい気持ちはわかるが、闇雲に突っ込むだけじゃデメリットもあるかもしれないって、考えたことはないのか、お前は。」

感情任せな行動は帰って危険を呼ぶ、よくある話だ。

「…。んじゃあ、お前は、遠目から見てもなんか分かったのかよ?」

「少しはな…。そうだな、今まなかを覆ってる膜、あるだろ。これが事実だったら嬉しくない事態だが…。あの膜は恐らく、エナだ。」

「えっ…。はあ!」

ここまで来ると光も理解する。無理やり引っぺがすともっと事態が悪くなるかもしれないと。

「じゃあ無理に動かそうとするとまなかは……。」

「ああ、陸に上がってもエナがない、ってことはあるだろうな。」

こればかりは、剥がしてでしか助けることが出来ないのなら……、まなかは確実にエナを失うだろう。

……そうすれば、二度と海には……。

「くそっ、どうすればいいんだよ！」

光が地団駄を踏む。

確かに、後先考えずに剥がすのはまずいと言った。

でも、実際のところそれ以外の方法はない。

だったら、いかに効率的にするか、これが鍵だ。

「……光、今からこの膜を破るぞ。出来るだけ弱く、小さい力だな。」

「弱くって……、そんなんじゃ弾かれちゃうぞ。」

「それでもだ。まなかをできるだけ傷つけないようにするならこれしかない。」

「……分かった。」

そうして俺は膜に手を入れる。

すると同時に無数の鋭い痛みが体を襲った。

「っ……！でも、これなら！」

そこからさらに一步踏み出す。

ついに膜は破れるのであった。

「光！今のうちにまなかをそこから出してやれ！」

「んなもんわかってらあ!!」

光はまなかを抱き上げると素早くその場から退散した。

さて、俺も行くか。

まだ痺れの残るからだをどうにか動かし、俺もみなの方へ合流した。

「それで？これからどうするの？」

「ああ、光はまなかを連れて先に上がれ。ついでに医者も呼んできてもらえるか？」

「了解。行ってくる。」

まなかを連れて光だけ先に上がらせる。とは言ってもこの海だ。俺達ももう長居はできない。

「俺達も行くぞ。要、それと2人も。問題ないか？」

「僕は。」

「無いよ。」

「うん、無いよ。」

「よし、じゃあ上がるか。」

かくして、5年ぶりの汐鹿生との再会は終わった。

みんなの話が聞けてない以上、それぞれがどう思ったかは知らない。

でも、何も思わなかったなんてことは無いはずだ。

…

………？

「どうした、千夏？」

ある程度進んだ時、少し遠くの方で千夏が止まっていることに気づいた。

何やら頭を抑えて痛がってるようだ。

「…。」

向こうからの返事はない。こちらが見えてないのか、反応する余裕がないのか。

いずれにせよ、余裕はなさそうだ。

「要、美海、先上がっててくれ。ちよつと千夏の様子がおかしそうだ。」

「それなら私も！」

「いや、上がっててくれ…。ただでさえこんな海だ。恐らく美海的身

体にももうだいぶ負担がかかっているはずだ…。俺もそんなに長居できないくらいだしな。だから…。頼む。」

「…分かった。頼んだよ、遥。」

美海はしぶしぶ受け入れ、入ってきたポイントへと登っていく。

それを確認して俺は千夏の方へとUターンをする。

「おい、おい、聞こえてるか?」

俺は千夏に近づくと身体を二三度揺する。すると千夏はゆっくりとこちらを振り向いた。

「え…。あ、聞こえて…。ます。」

向けられた顔には、生気がなかった。

顔から血の色は引き、唇も真っ青だ。とてもいい様子には思えない。

そういえば、千夏は病気持ちだったよな…。

でも、あれは確か胸の方。頭痛とはそんなに関係がなさそうな様子だった。

これが新手なのか、はたまたただの身体が冷えただけなのか…。

いずれにせよ、さっさと家に帰って寝かせるのが1番だろう。

だから…。

「千夏、お前はもう泳がなくていいから、とりあえず俺の背中に乗っつけ。その様子だともう自分で泳ぐのもキツイだろ…。とりあえずゆっくり寝とけ。」

「あはは…。すいませんほんと。」

最後の空元気で力尽きたのか、俺の背中に乗ると全くと言っていいほど動かなくなった。

さて…。急ぐか。

俺は後ろで寝息を立てる千夏の邪魔にならないよう、そつと素早く冷たい海を抜け出した。

第90話 呼び名

——遥side——

陸へ上がる。

他のみなはまなかの方へ付き添って行ったが、俺は現在千夏を背負っているので、流星にそちらの方を優先することにした。

「それで、この状態は？」

「ああ、これまでの病気とは違うだろう。ただ、発熱もないようだから、すごく危機な状況・・・でもないだろう。こっちは寝かせておけば問題ない・・・遥の方は、大丈夫か？」

「ええ、ちよつとだけ身体が冷えましたけど、大事に至ることは無いです。身体もあつたまってますし。けど今日は、ゆっくり休んでおきます。」

「ああ、そうしたほうがいいかもな。」

病気の事を知ってるであろう保さんから言質を取れたので、俺は自室で少し眠ることにした。

ああは言ったが、流星に身体にも割と負担がかかっているのは間違いない。

床に転がり、天井を見上げる。

手で空間を裂き、その感触を確かめる。

・・・
そういうえば、海の中で呼吸したのって、結構久しぶりだったな。陸で長いこと過ごしてたから若干感覚が薄れていたとは思う。

なるほど、俺はだいたい陸の人になったってことか。

それこそ、5年前の光が見たらなんと言われるんだろうかなんて思う。

ふう・・・。

今でも海は好きだ。

それは間違いない。何せ生まれ、育った街を好きにならないわけはない。

けれど、今思うのはそれ以上に陸が好きだという事。

もう長いこと陸で過ごしてきた。となれば、愛着も湧く。

それに出会いもあった。沢山の思い出も作った。

きっと、時間よりも濃いものを、陸で得ている。

俺もそろそろ先の未来を選ばなければならない。

大学生活も長いわけじゃない。いずれ、何か仕事につくことになるのは当たり前のことだ。

…。

もし、汐鹿生が元に戻っても、そこに俺の居場所はあるんだろうか？

【嫌われ者の烙印】だけではない。

数年前から、仕事を求めて海から出ていく人が増えている。俺の両親も実際そうだった。

おかしな話だ。

人には出て行って欲しくなくせに。出ていった人が戻る場所はない。

あの場所に、俺の求める仕事があれば、俺は陸に残るだろう。

5年前にも同じようなことを考えたが、今はあんなに浅はかではない。

大事な人がいるし、大好きな人がいる。

それはいつだって変わらない。が、好きの定義は変わった。

そろそろ、そっちの気持ちにも向き合う時が来たな…。

さて、眠くなったしそろそろ…。

…。

目が覚めた。

ちようど夜時、晩御飯までもう少しくらいなところだろう。身体には寝起きの倦怠感が残っているが、まあ、これくらいは起き上がる。

さて…、色々気になることがあるが。

まずは千夏の様子を見に行こうか。

コンコン、とノックを2回。

「入るぞー。」

「…。」

返事はないが、否定はされてないとの事で、俺は中へと入る。

千夏は起きていた。

ベットの上で、上半身を起こして窓から外を見ている。

「どうしたんだ、千夏。起きてるなら…。」

「話があるの【島波君】。」

えっ…？

耳を疑った。

でも、現実だ。確かに今千夏は、島波君と呼んだ。

それは5年前のいつものように。

俺は名前を呼ばれた。

「千夏…、お前…、記憶が？」

「…うん、全部思い出したわけじゃないと思う。多分、10%にも満たない。でも、私があなただの事を島波君と、そう呼んでいたことは思い出した…、なんでだろう、汐鹿生に行ったからかな？」

俺は胸がおかしくなりそうだった。

正直、もう記憶が戻らなくても、と割り切っていた部分もある。

けれど、目の前の千夏は記憶を取り戻しつつある。

どこまで戻るのかは知らない。多分、このまま1部だけつてのもあるかもしれない。

もしそうだとすると、千夏は苦しむかもしれない。
どうすればいいんだ…？

「…その話、詳しく。」

「うん、そのために呼び止めたんだから…確かね、何度か音が聞こえたの。そして、出る間際に頭痛がきた。最初は冷えすぎかなって思ったんだけど、どうやら違うみたい。何かこう…揺れるような感じっていうか。」

「なるほど…。」

仮説を立ててみる。

千夏が昔持っていた病気、その片鱗はなくなった。しかし、それと同時に、俺に関する記憶も欠落している。

この現象が、海で繋がってるのか…？

…もし、このふたつが海で繋がってるのなら。

海が元通りになると、全て元通りになるのだろうか。

でも、病気が戻ってくるのなら、マイナスだ。

もし、このまま海が戻らないのなら。

最悪記憶治療に頼る…、つてのもありになるのだろうか。

でも、それは千夏が決めることだ。

俺はただ見守り続けよう。

ただ、これだけははっきりさせたい。

「なあ、千夏。」

「なに？」

「お前は、記憶を取り戻したいか？」

「…うん、分からないけど、私は多分、真実を知りたい。もし、記憶の中に、私の生きた証があるのなら、知っておきたいから。」

「そうか。」

それ以上は会話はなかった。

今度大悟先生に連絡してみるか…、なんて思いながら食卓へ向かう。

これだけは言える。

今確かに、世界の歯車は動き始めた。

第91話 後悔と希望とこれからの事

——遥side——

翌日、俺は1つのアドレスに電話をかけた。
どうしても知りたいことがあったからである。

prrrr...

「おう、なんだ？久しぶりだな。」

「お久しぶりです、大悟先生。」

大悟先生に電話をかけた理由は1つ。

記憶治療についてだ。

数年前からその手の話題はちらほら聞いていたが、実際に行われて
いるかは分からない。

せめて医者の中から、ちゃんとした情報を聞いておきたかったの
だ。

「どうよう？あれから元気やってるか？」

「いくらか問題がありますが、まあ、ぼちぼちです。そういえば、あれ
から陽香は？」

「ああ、もうすっかり良くなって当分前に退院してるぞ。なんだ？連
絡いかなかったのか？まあ、忙しいってんなら無理もないけどな。」

「忙しかったんですよそれが...。それに、新しい件についてはまだ解
決してないですし。」

「ふーん？また俺、何か厄介事に絡まれそうな雰囲気があるんだが、ま
あいい。聞いてやるよ。んで、医者の側面から出来ることがあれば手
伝ってやるよ。」

正直ありがたかった。

こればかりは精神論ではなく、物理的な話だ。

医者から見ても可能かどうか、というのは、今回重要な基盤になる。

「先生、記憶治療って、知ってますか？」

「ああ。さすがに俺も医者だからな...。なるほど、分かった。電話越
しは面倒だから後で病院来てくれ。」

「そうですね、立ち話の方が楽ですし。」

「じゃあ一旦切るぞ。」

俺は一旦電話を終え、数分の後に病院へ向かった。

…

道中。

たまたまこの日は早めのバスに乗っていたが、同タイミングでちさきが乗り合わせていた。

実は、ココ最近ちさきとの会話はほとんどなかった。

別に関係がギクシャクしてるとかそういうのではない。ただ単に、お互いのことで忙しかったり、などが重なっていたのである。

「よう、ちさき。」

「遥…。」

ちさきは少しこちらに驚き、またいつもの調子に戻った。

「遥がこの時間でバスに乗ってるのって、少し意外。病院にでも用があるの?」

「まあな。今日も学校か?」

「ううん、今日は休み。ただ、ちよつと…。」

そう言っってちさきは言葉を濁す。

「…まなかのことか?」

「うん。」

聞くところによると、今朝になってもまなかが起きる様子は無かったようだ。どうやら光の時のようにすんなりとはいってないらしい。

…当然か。

誰にも口外はしていないが、俺なりに推論は立っている。

まなかがおじよしさまになったというのはまあ間違いないことだ。

そして生贄として、海にずっと眠らされ続け…。

…。

… 待てよ？

そもそもなんで、昔のお船引は生贄を必要としたんだ？

陸の人が海神様に何かを求めたというのは考えれる。

けれど、海神様は、何を思っていたんだ？

ウロコ様なら… 知ってるのか？

くそっ、ダメだ。

今はここが限界だろう。これ以上は見通しが立たない。

まなかの目覚めを待つこと、これが、現状できることだ。

「今日、先生に詳しい検査をお願いしてみようと思うの。おそらく、あの様子じゃまなか、まだ起きなさそうだから…。」

「そうだな。それが一番だと思う…。なあちさき、もしまなかが目覚めて、何も異常がなかったとしたら、そこから先はどうするんだ？」

「その話は、ちよつとしたくないかな…。」

トーンは暗かった。

どうやら触れてはいけない部分に触れてしまったようだ。

ただ、ちさきも俺と同じ状況だ。

皆より先に、人生を進んでいる。ちさきはおそらくそのことを一生気にするだろう。

あの日、病院で死んだように眠っていた俺とは違い、ちさきは、皆が海へ引つ張られていくのをただ1人見ていたのだ。

そして、ちさきは人一倍責任感が強い。

自分だけ陸に残ってしまったって、おめおめと未来を掴んでいいのか悩んでいる。

俺みたいに、元から陸に残ると決めてたわけじゃないからな…。

確かに簡単に聞いていいような質問でもないな。

そこを反省し、話題を変えようとする。

が、ちようど病院へついたみたいだ。

「じゃあな。」

「うん、またね。」

俺はバスから降りると、以降後ろを振り向かなかった。

...

「で、話の続きだな。」

「ええ。」

俺は、病院へ入ると顔パスで先生の診察室に案内された。そして今に至る。

「記憶治療、確かにうちの病院でもできないことは無いが、ちゃんと症状の確認、一定期間の入院、高難易度の手術……。まあ、少なくとも簡単な話じゃない。まずは、どういう状況か聞こうか。」

「えつとですね……」

それから俺は千夏の事について、洗いざらい話した。

もうこの際、この人に隠すことなんて何も無い。

ただ、海と関係がある以上、手術で治るのかどうかは謎だが……。

「なるほどな。その場合なら、多分手術で治せないこともない。強力な外部ロツクのようなものがかかっているのなら別だが、お前単体のことくらいなら、恐らくそれもかかってないだろう……。ただ、さつきも言った通り、この手術は結構危険だ。もう一度本人の口からどうした
いか聞いてから来るんだな。」

「先生……。」

「なんだ？」

「最近彼女でもできました?」

「な!?!? はあ!?!」

大悟先生は赤面して一気に熱くなる。

ああ、やっぱこの人ウブだなあ。

「... あれから上手くいつてます?」

「ああ、おかげさまでな、ちくしょう...」

どうやら、あれから鈴夏さんと上手くいつてるらしい。

当然な話だと思うけどなあ...

結局2人とも両思いで、ずっとそれこじらせてたんだから。

...

俺もこう、いつか素直に人を愛せるんだろうか?

その答えは、これから見つけなきゃだな。

恋愛と、幸せと、海と...

なるほど、少しずつ見えてきた。

いつか書いてこいと言われた論文、その内容が浮かんでくる。

簡単な話だ。俺の人生はこんなに色濃い。

なら、俺が生きてきた証を、目一杯記そう。

第92話 親心

——遙side——

現在地、水瀬家。

夜7時の事である。

テーブルを囲んで4人、いつもの光景ではあるが笑顔はない。

長く続く沈黙。それぞれが、それぞれの複雑な心境を迎えている。

しかし、その原点は1つ。

千夏の記憶について、ただそれだけであつた。

「確認するぞ、千夏。お前は、少しずつ記憶を取り戻してるんだな？」

長い沈黙の後、保さんが口を開いた。

「うん。ほんの一部だけど、島波君のことを思い出した。…けど、なんだろう、今はもうこれ以上は思い出せない気がする。その記憶治療？に頼れば思い出せないことはないらしいけど…。」

「二応、手術のことは詳しく聞いたんですけど、100%成功はないらしいです。それでも治る可能性の方が高い、とは言っていました。ただ、やっぱり危険なぶん、本人の意思を聞いてこいと言われて現在つて感じですが…。ああ、それと、もし手術を行う場合、費用は向こうが全額負担するらしいです。（これに至っては向こうの院長がそう言ったらしいから驚いた。）」

「なるほど…。結局、千夏がどうしたいかで全部決まるわけか。」

保さんはあくまで千夏の意見を優先するそうだ。夏帆さんに至っても同じ。

もう少し、親としてこうして欲しい、とか意見を言ってもいいとは思うんだけど…。

それこそ、実の娘の安全を優先するのであれば、受けさせるべきでは無いと思うだろう。

でも、こうして悩んでくれているということは、自意識過剰みたいなことを言うが、俺のことも気にかけてくれているのだろうか？

もしそうだとしたら、俺は一生、この2人の息子でいたい。

「ね、千夏はどうしたいの？これはかりは私たちが決めることじゃない。だからちゃんと、千夏の口からどうしたいか聞かせて？」

夏帆さんが優しく諭す。

やはり親心だろうか、その態度には不安が全面にでていた。

「分かってるよ、お母さん。…やっぱり私は、記憶を取り戻したい。この気持ちに間違いはないよ。確かに無くしちゃったらどうしよう、なんて思ってる。けど、それ以上に、私は大切な何かを失ってるの。それが一生私の中に残るのは、嫌だから。…」

それは千夏の決心。

揺るぎない覚悟。

こうなれば誰も止めることは出来ない。

ただその結果を待つことが、俺たちにできることだ。

…

結局、千夏はもう翌日には入院を開始、すぐに手術を受ける日程になったようだ。

ということとは、しばらくこの家ともお別れ。少し寂しいのだろう、先程から下を向いている。

だから俺に出来ることは。

「なあ千夏、散歩行かねえか？」

…

「なんで、急に？」

俺は千夏を連れていつもの堤防へ向かった。

俺と千夏は、ただ遠くを懐かしさの眼差しで見ている。

「ん？ああ、元気なさそうだったからな。ほっとけなかつたんだよ。」
「そんなことないし……。」

なんて言ってるが、元気はない。

しかし、今話してる中でタメ口に戻ってるのも、少しは嬉しかったりする。

「やっぱり、後悔、してるのか？手術受ける選択をしたこと。」

「……ううん、それは絶対じゃない。私、知りたいからさ。何がここまで私を動かしてるのかわかって。記憶をなくす前の私は、島波君に何を思ってたのかわかって。だから、お父さんたちには悪いけど、後悔はしてないよ。」

そう言って千夏はもっと遠くを見る。こちらに目を合わせる様子はない。

「じゃあなんでお前は……。」

「……お父さんたち、ほんとに辛そうな目をしてたの。多分、私なんかよりずっと複雑な心境なんだと思う…… 思えばずっとそうだったなあ。私、小さい頃から心配させてばかりで…… でも、なんで心配させてたのか、思い出せない…… だから、こんな複雑な心境を抱いてしまうなら、もう最後にしなきゃって。お父さんたち、もう心配させたくないの。」
「そうか。」

思えば俺もずっと心配させてきたな。

でも、何も言わず、あの人たちは受け入れてくれた。

メンタルももうかなりボロボロなのかもしれない。

それでも、信じてくれている。

なるほど……。

これが、【親】ってものなんだな。

それは芯から暖かく、

大きくなって初めてわかる。

「そうだな、ならせめて俺も、あの人達に何か最大の孝行をしたい。それはこれから考えていこう。」

「しつかり生きて、しつかり悩んで、一生のうちに答えを出そう。とりあえず今は、千夏に付き添おう。」

「そうすることで、あの人達が安心するのなら。」

「そういうえば、お前に渡しておくものがあつたな。」

「え、どしたの急に。」

「俺はポケットから1つの小さな箱を出す。」

「それはいつかのネックレス。」

「受け取った千夏は首を傾げた。」

「これは？」

「気にすんな、ただのプレゼントだ。」

「理由は言わないでおこう。」

「ただ、これが思い出すきっかけになってくれるなら。」

「そんな淡い願いを埋め込んで俺はネックレスを手渡した。」

「さて。」

「この夜空が明るくなれば千夏は自分との戦いが始まる。」

「頭上の流れ星に俺は小さく願い事。」

「せめてこの行く末がよくなりますように、と。」

第93話 君の在り方

——遥side——

入院が始まってからというものの、俺は流石に心が落ち着かないでいた。

そういえば俺が入院した時ってだいたい緊急を擁していた場合なわけであって、こうして任意なことって実は体験したことがない。

だから心境というものは分からないものだ。

一応、顔を出しに行こうとは思ったけど、出る前に

「今は私のこと気にしなくていいから。」

なんて言われてしまったら、行こうものも行けない。余計に気にさせてしまうのは避けたい訳だし。

というわけで、現在。落ち着かない心で街をぶらぶら歩いているのである。

どうせあつという間に手術の日は来る。そう言い聞かせること何回かはもう忘れた。

「あつ。」

ふと足を止めた。

人が見える。

それは、俺みたいに落ち着きなく歩き回ってる少年。

なんて回りくどい言い方しなくてもいいか。

「おい光。」

「あん？ 遙か。どうしたんだよ、こんな所まで。珍しいな。」

「まっ、ちよつと身体動かしたくてな。どうせお前もだろ？」

「… まあな。」

少し不機嫌そうに、大人しめに返事を返す光。

やっぱり、相当まなかのことが気がかりなのだろう。

「それで、やっぱりまなかの様子は変わりないのか？」

「ああ、先生が来て、問題は無いって言ってたけど、どうも安心できねえんだよ…。それこそお前、なんで来なかったんだ？」

「ごつちもごつちで用があつてな……。まあ、まなかのことについて同様落ち着かねえわけだ。」

「水瀬のことか?」

「まあな。」

流石にちさきから伝達がいつてるみたいだ。そこは助かった。

何も言われてないと俺が距離を置いてるだけに見えて仕方がない。

こいつらのことが嫌いになったわけじゃないからな。

「……全く、まなかのやつ。なんで目覚めねえんだよ。」

「……さあな、こればかりは分からん……。あれしかなかったとはいえ、無理にひつpegがすのは流石にまずかつたんだろうか?とこだ。」

「あれしかなかったんだろ?じゃあしようがねえよ。」

以外にも、光は感情を主立って見せない。

少し成長……。したのか?まあ、環境が変われば人も変わると言うからな。光もなにか思うところがあるのだろう。

それでも俺は……。

それでも俺は、ただ真っ直ぐに自分の気持ちで動けるあの頃の光に、少し憧れてたのかもしれない。

「ところでお前、至さん家で迷惑掛けてないか?あの人、何人も受け入れてくれるけど、それでも負担はかかっているからな?」

「何言ってるんだ?迷惑かけてるわけないだろ。それにあれだ。晃の面倒見るの俺が多いから、そこは感謝して欲しいくらいだけだな!」

光は腕を組んでふんと鼻を鳴らす。

あ……。確かに晃と光、どこか似てるもんな。特にやんちゃ坊主って辺りが。

「ならいいけどな。晃を変な方向へと進ませるなよ?」

「分かってるよんなこと。」

かといつて至さんみたいにおドおドされるのも宜しくはないの
で……。晃には遜色無い程度に光からいい影響を受けて欲しいわけだ。

……。一応おじさんになるんだよな、晃からすれば光は。

中学生でおじさんか…、たまつたもんじゃねえな。

「ところでさ、遙。」

「ん？」

「いつかお前、言ったよな。お前から見て俺は変わったか？って。あの時、お前がなんでそう言ったか、今なら少しわかる気がするんだ…、それでさ、逆に聞いてえんだ。お前から見て俺は5年前と変わったか？」

光の口からは考えられない言葉だった。

光はきつと、誰より自分らしさに自信を持って行動する奴だ。

でも、きつと分かってきたのだろう、感じてきたのだろう。

時間が流れ、環境が変わって、その自分らしさが揺らいでないかと。

でもまあ、こいつはきつと大丈夫だ。

光は今人生の過程の中でぶつかるべき壁にぶつかってるだけだ。

お前はお前のままだ。変わるわけねえよ、光。

「…いいや？お前はちつとも変わってねえ。感情むき出しで、バカ一辺倒で張り切ってドジ踏んで、ほんつと何にも変わってねえよ。」
「なっ!?!そこまで言う必要ねえだろ！」

「まあまあ、落ち着けよ…、俺はお前の、そういうところ気に入ってるんだぜ？」

「お、おう…、そうか。」

光は照れくさそうに下を向く。そういうところも変わってないつつくづく思う。

「まあな、結局、変わる変わらないなんて中学生で気にすることでもねえよ。答えなんていつか勝手に分かるもんだ。俺もまだ分かってないくらいだしな。だから今は気にせず生きろよ。」

「そんなもんなのか？大人になるって。」

「そんなもんだ。」

人によつて違うけど、結局のところ多方向から影響を受けて自分という形が完成する。

俺という形は、どうなってるんだろうな？

… 論文を書くなら、終着点はそこだ。

「おっと、そろそろ時間だな。俺は帰るぞ、光。」

「おう、そうか。じゃあな。」

俺はまっすぐ家へと向かう。

お互いの心境を晒しあげたからか、心には幾ばくかの落ち着きがあつた。

そうしてまた一日。一日と。

そして時間は、当日を迎えた。

第94話 真実と絶望

——千夏side——

手術の日を迎えた。

不思議と恐怖は湧かない。驚くほど心は穏やかだった。

今日で全てが決まるって言うのに、まるで事の重大さが分かってないというか……。

いや、分かってる。

分かった上でこんなに落ち着いているんだ。

「じゃあ手術に向かいますよ。」

何人かの先生が私の元へ来る。いよいよだ。

覚悟は出来ている。

これからどっちの未来に転ぶかは分からない。

全て失うか、全て取り戻すか。

一度近くにおいてあつたネックレスを握る。

何故だろうか、誰も触れていないのに、心の底から温まる何かがあつた。

私はその温もりが消えないうちに、手術室へ向かった。

そして手術が始まった。

麻酔をかけられ、意識が次第に遠のく。

体は重く、瞼は次第に落ちていく。

私はそれに逆らうことなく、瞼を閉じた。

…

…
…
…
…

気がつけば私は宙を浮いていた。

宙を浮いていた、ということもあって、これが夢だと自覚していた。

私は、白い天井の建物の中にいた。

窓際のベッドには、1人の少女がいた。

ただ遠く見える海を、ずっと見渡している。

その瞳には憧れの眼差しが。

そうか、ここは病院なんだ。

私も確か、小さい時同じように海を見た記憶がある。

その時は、なんで入院したんだっけ…？

…

答えは出てこなかった。

そして、少しの後に私の司会がぐにやりと歪み、私は思わず目を閉じた。

そして、再び目を開けた時、場面はまた別なものだった。

ただ変わらない点もある。映し出されているのは先程の少女。

ただ、少しばかり背丈も伸びている。

なるほど。

この時、私はその少女の過程の夢を見てるんだとはつきり分かった。

そこからの少女。

壁ができていた友人関係を破ろうと色々回って。

海の中で運命の出会いをして。
病氣と戦いながら、次第に周りの中も深まって。
運命の出会いをした男の子と同じ家に住むことになって。
喧嘩して、仲直りして、ネックレスを預かって。

(…ネックレス?)

それから、告白して…

… 答えは… 出ずに…

男の子は…

少女を庇って事故にあって…

意識は… ないまま… 答えは得れずに…

少女は海に飲まれた…

…

この少女が、起きたとき、何を思うんだろう?

男の子… 【島波君】への後悔しかないのかな?

… あれ?

私は、今、この男の子の事を、島波君って…

じゃあ、この少女は…

そうだ。きつとこの少女は…！

その時私の意識は光を通り越し、私の中の、全てがこと切れた。

——遙side——

赤い看板、手術中のランプがついている。

俺は病院内の椅子に座っていた。そして、ドア1枚の向こうに千夏がいる。

あの中で千夏は今、自分自身と戦っているんだ。

〈過去〉

実際に手術が行われる前日、俺は大悟先生に詳しい話を聞きにいった。具体的にどうするのか、だとかは俺は知らなかったからな。

「記憶治療ははつきりいって、医者がそんなに手を加えることはないんだ。まず、全身に麻酔をかける。これは基本だな。今後の作業には痛みが伴うからな…」んで、ちゃんとかかったとわかった状態で脳の記憶を操作させる部分に強い刺激を与える。医者の仕事はここで終了だ。あとは、本人が夢を見る。その夢が夢のままであれば、記憶

は二度と帰ってこない。逆に言うところ…」

「そこでその夢が自分だと気づけば、記憶を取り戻す。と。」

「そうだ。100%成功と言えないのはその記憶の内容の濃さに個人差があるからだな。今回の患者がどんな人生を送ってきたかは知らねえけど、お前と関わってるなら色濃いんじゃないか?」

「俺をなんだと思ってるんですか…。」

なんて言ってみたが実際はどうなんだろうな?

告白されたし…、とか思うと色濃さは十分だと思う。

〈現在〉

手術室のランプが消えた。

医者達がそろそろと出た後に、ベッドで眠っている千夏が運ばれている。

あとは起きるのを待つだけ…、か。

その時、俺は背後から近づくような恐怖に支配された。

もし起きて、自分の名前すら忘れてたら?

悲しむのが俺だけじゃすまなくなるのはごめんなんだよ…!

千夏は病室へと戻っている途中くらいだろうか。

俺もそろそろ帰ら…

「ぎゃあああああああああ!!!」

!?

俺の耳に、聞き覚えのある声の悲鳴が入った。

全部、全部思い出した。

私の名前は水瀬千夏、そして私の隣にいてくれたのは島波遥。

私は彼のが好きだった。

好きだったのに、私の手で何度も彼を傷つけた。

私のせいで片足を失い

私のせいで5年の時を寂しく過ごし

そうだ。島波君の人生に、私なんかがいちやいけなかったんだ。

島波君の隣に私がいたら、島波君はきつと、取り返しがつかないほどに傷ついてしまう。

… ああ、そうなんだ。

私はもう、居場所なんてなかったんだ。

だから、こんなところには行けない。

みんな。今までごめんなさい。

じゃあね。

一瞬戻った意識は、身体を動かしながら消えていった。

「おう、なんだ！今忙しいから後に…。」

「千夏、何があつたんですか？…どこ行つたか分かりますか！！？」

ベッドに千夏がいないことを確認し、先生に状況説明を求めらる。

「あ、ああ。意識を取り戻したと同時に、起き上がって絶叫しながら走って逃げていつてしまった。どこに向かうかは俺も知らないが…。」

「分かりました！！ありがとうございます！」

俺はそれを聞くと全力で千夏を探しに行く。

俺は走る。

当てもなく、ただ無我夢中で千夏を探すために走る。

走る、走る。

だんだんと息が上がり、体力が衰えているのがしみじみと伝わる。

それでも、信念だけは変わらない。

失えないものを失うのは、もうやめだつて決めただよ…！！

第95話 本音と唇は海の味

——千夏side——

私がつどり着いたのは、いつもの堤防だった。

まだ外は明るいままだが、私の、先の視界は既に黒く染まり、もう希望を見出す余裕もなかった。

「そっか。全部、ここから始まったんだよね。」

そう、あの日、この場所で島波君と出会ったことで、「私」の物語が始まった。

けれど。

私はもう、この物語に終止符を打つ時が来たんだ。

全てと別れて1人、惨めに消えよう。

…辛い？

そんなもの…、考えたくもない…！

私は躊躇わず海へと飛び込んだ。きっと、時間が全てを解決してくれるだろうと信じて。

——遥side——

「どこだ！千夏！」

大声で街中で叫び回るが返事は帰ってこない。

ここまで来るともうあての無い捜査は無駄になる。

手がかり…か。

少々焦りすぎて急いでいた脳を落ち着かせて考える。

もし、俺が千夏の境遇だとしたら、どうするか。

思い出のある場所、そこには絶対寄るな。

離別、決別を決めるにはその時間がたしかに重要だ。
そして、どこへと向かうか……

…

なるほど。

答えはひとつしかないな。

そういえばいつか美海とこんなことが……、
ってそれはどうでもいい！

急ぐぞ!!

「さて、一応……!?!」

いつもの堤防付近。俺は立ち止まろうとしたが、ちやうど身を投げ出すように海へ飛び込んだ千夏が目に入り、止まることは出来なかった。

でも、見つけるべきものは見つけた。

俺は何も考えることなく、ただ千夏を追い海へと飛び込んだ。

——千夏side——

泳ぐ。

ただ当てもなく泳ぐ。

先日感じた違和感なんて感じないほど、今の私に感覚はなく、無心の果てに着いたのは汐鹿生だった。

この前はコンパスに頼らないと行けないほどだったのに……なん
で?

ピキキ……

音が聞こえる。そういえば、いつかもこんなことがあった…。

なるほど…、私はここに導かれたってことなのかな？

そんな事すらもう、どうでもいい些事なことのように思える。

1人になるのに場所を選ぶ必要なんてない。

結局、誰かが迎えに来るはずなんてないのだから…。

ないはず…なのに…。

「なんで…？」

私の目の前には島波君が立っていた。

——遙side——

飛び込んだが、海は広い。

俺はいつの間にか千夏を見失っていた。

「くそっ、罅があかねえっての…！」

思わず苛立ち任せに弱音を吐く。けど、このままではいけない。

ピキキ…

???

音が聞こえる。

左耳の方が強い…、そっちに呼ばれているのか？

俺はとりあえず音の鳴るほうへただ泳いでいく。

次第に周りの流れが強くなるが、俺が泳いでいるまっすぐだけ本当に何も無く。

導かれてるのか…？しかもここって…。

そう、俺はいつの間にか再び汐鹿生へと帰っていた。

…こんなこともあるのか。

ただ、導かれたのは俺だけではなかった。

驚いているのはその本人だ。

「なんで…？」

「なんで、って言われてもなあ…、千夏を追ってたら先に着いちまったみたいだな。」

「そういうことじゃない！なんで私のこと気にするの！私はあなたの… あなたの人生をめちゃくちやにして…、もつと憎んでよ！恨んでよ!!もう今の私は… 気にされるだけ辛いんだよ…。」

千夏は泣き叫ぶ。

記憶を取り戻した時になだれ込んだ感情が消化しきれないのだろうか、今の言葉はそれを全て吐き出したような感じだ。

いや、違うか。

こんなもんじゃないか。千夏の抱えてた思いは。

「もう… 私に居場所なんてないんだよ。だからせめて、最後まで1人にさせてよ…。」

やれやれ。

俺は前にもこんな光景を見たな。

…いや、あの時は俺自身がそうだったんだな。

自分の居場所なんて無いと、1人死のうとした事がある。けど、美海が気づかせてくれたホントの気持ち。

それがあるから、今俺はここに立ってる。

「だからさ、千夏。」

ツカツカ、と俺はまっすぐ千夏に向かって歩き出す。

もう、ここから先は言葉はいらない。それよりもっと効果的なものがある。

本人の中に、好きという気持ちが残ってるなら…

刹那、俺は千夏の唇を奪った。

——千夏 side——

「ん!?!:ん」

一瞬、何が起こったか分からなかった。

ただ唇から伝わる暖かい感触。

そうか、これは…キスだ。

ほのかに海を感じる、いや、このしよっぱさは涙？

分からない。けど、確かにキスだ。

ようやく私の脳の理解が追いついた時には、私はもう動けなかった。

ただ、唇から伝わる感触に全てを任せ、何も考えずに…。

分かってるよ…。

自分の気持ちに嘘ついてもダメなんだって。

…私は今だって、島波君のことが好きなんだって…。

でも、伝えれない。

もう、その言葉を口にする資格は私には…。

くいいんだよ。く

声がした。誰も口を開いてないのに、声がした。
この声はきつと……。

そして、キスが終わる。

お互いの顔に羞恥は無かった。

「あのな、千夏。お前がどれだけ苦しいものを背負ってるのかは、俺は正直分らない。軽々しく他人が口にしていいものでもない、そう思ってる……けど、けどさ。それでも俺は千夏を恨むことも、憎むこともできないよ。」

「なんで……なんでそんな……。」

私は何も言い返せない。言う言葉なんてまとまってもいないからである。

「……あの日、俺が渡したネックレスのこと、覚えてるか？」

「……うん。」

ギクシヤクした関係をつなぎとめたひとつのネックレス。

うん、ちゃんと思い出せる……けど？

「あのネックレスに託した思い、自分を大切にするって。そう言ったのは俺なんだよ……それなのに結局お前のことしか考えずに、俺は自分を壊してしまった。それが今こうやって千夏を傷つけてる……だから悪いのは俺だし、お前は何も気にすることはねえんだ。」

「でも、そんな事……！」

「はあ……。いい加減気づけよ。自分の気持ち。それにな、お前の帰りを待ってるのは俺だけじゃねえんだ。保さんも夏帆さんも、美海もみんな、お前を待ってる。帰る場所はちゃんとあるじゃねえか。」

1人じゃ……ない。

けど、本当に……本当にこれでいいのかな。

いや、もう答えなんて得ている。

「……過去は戻らない。私も罪を背負ったまま……それでも、私は前

へ進めるかな？」

島波君はふつと笑った。まるで、何か待ちわびていたかのように。

「ああ、もちろん。大丈夫に決まってる。なんたって、みんないるからな。」

そっか。そうだよな。

私の罪は消えないだろう。ずっと引きずったまま生きてくんだ。

それでも許されるのなら、前を向いて生きよう。

そしてもう一度、ちゃんと好きという言葉を伝えよう。

今度は逃げないように。ちゃんと受け止められるように。

だから今は言っておかなければいけないことがある。

「ねえ、島波君… いや、遥君。」

「おう…？なんだ？」

「あの日の告白、忘れてくれないかな？私は、ちゃんともう一度自分の気持ちに向き合って、そしていつか、答えが出た時、それを伝えたいの。」

「そっか。いいよ、俺もちゃんと向き合う時が来たみたいだからな。」

向き合う時…？

そっか、美海ちゃんも、少しずつ動いてたんだね。

今は私と同級生。いよいよフェアと言える環境になってしまった。

もちろん、負けない。

だって私は誰よりも遥君が好きだから。

「…じゃあ、そろそろ戻るか。先生達言いくるめないとまずそうだな…。」

「あの、遥君。」

「ん？今度はなんだ？」

「…ただいま。」

私がそういうと遥君は満面の笑顔で答えた。

「ああ、おかえり。千夏。」

第96話 残された時間

——side——

あの後、どうにか先生らを説得、千夏を病院に送ったことで事態は収束した。

全てが、上手くいった。

今回はその一言に尽きるだろう。

千夏は記憶と、自分を取り戻した。

これは、俺が、美海が、みんなが望んでいた結末だ。これ以上はな
いくらいの。

流石に俺も中学生に戻ることは出来ないが、それでもこれで今まで
の日々が戻ってくるはずだ。

… いや、まだだな。

まだ、まなかの事が残ってる。

恐らくそれが、俺が驚大師にいる中で、最後にやるべき事だろう。
それが終われば、本当に俺はこの街と距離を置くことになる。

だからせめて、俺はここでその最後を見届けたい。

…

あれから数日経った。

千夏の体調に異変はなく、これまで抱えていた病気も完全に消え
去ったみたいで、今日が退院の日となった。

俺が病院に行かない理由は特にない。

しかし、俺は現在潮留家にいた。

全ては1本の電話からだった。

く過去く

数十分前。

2人は仕事に出て、俺は1人論文とにらめっこしていた。

何を書けばいいかなんてのは考えれたが、いまいち何を伝えたいのかがまとまらないまま、時間は過ぎていた。

「ふーん……？困ったもんだなこれは……。」

さすがに詰まりすぎて投げ出したくなるが、いつ時間が取れるか分からない。今のうちにやっておくしかないのだ。

p r r r r

ほら、こうやって電話かかってくるわけだし……。

「もしもし、水瀬ですが。」

家電にかかってきたのでそちらで対処をする。

「おい遙！今すぐこっちきてくれ！」

「はあ？……まあ、行かんでもないから簡潔に内容教えろ。」

「ああ、分かっている。その……あれだ、まなが目を覚ましたんだよ！」

だろうと思った。

声がすぐく上がり調子だからな。

「だろうな……。んで、俺の力はどこに必要だ？急ぎで行くくらいの理由は？」

「そんなのお前……。なんだよ、目が覚めたつてのに興味はないのかよ？」

「そういう訳でもないがな……。いやまて、わかった。すぐ行く。」

俺は言ってる途中であることを考えた。だから行くことを選んだ。

この前の推察。

まながが生贄で、おじよしさまなら、というのをベースとした考察。正常な状態で目が覚めない、というのは千夏で経験済みだ。

その場合だとまなかのほうがデメリットがでかいはず。

どのような状態か分からない以上、この目で確かめる必要がありそうだ。

自惚れではなく、俺たちの中で1番観察眼があるのはきつと俺だからな。

く現在く

そんな訳で来てみたが、どうやら会話レベルも正常、記憶の欠落も確認できない……。との事で。一旦落ち着いた。

やれやれ、無駄足だったんだな。

なんて思ったが、その状態が1番いい。

その後はまなかを連れてあちこち驚大師を回った。

その無邪気な仕草、幼い心……。

ああ、どうやら何も変わっていない。

よかった、変わってないのか。

なら、あとはなるようになるだけだ。

最初は不慣れかもしれないがこのまま時間が経って抱えていた重たいもの全部なくなって……。

……。それで、終わり？

俺がここにいる理由も、それで終わりなのだろうか？

まあ、いいか。

俺は理由を押さえ込み、結果だけを得た。

ただ、そうはいかないのが現実だ。この時俺は知らなかった。

夜。

俺はこの日、夕食で潮留家に呼ばれていたのに、まだ家には帰っていない。

なんでもカニをふるうとか。

海があの状態だ。物価もちろん高騰しているわけで……。

まあ、結論から言うともちやくちや高級なはずだ。

そんなものをいただけるのなら…… と思いい現在だ。

(まあ、まだまなかの様子を見たいってのもあったけど)

と、その時だった。

ピッ

一瞬、何が起きたのかわからなかったが、次に聞こえた晁の声で何が起こったかを理解した。

どうやら鍋の熱い汁が、晁に当たったみたいだ。

周りが心配する中、急いであかりさんがやけどを冷やしに行く。

机を囲んでいる人の視線はそっちに向いている。

俺は、一瞬だけまなかの方を向こうとした。

しかし、その視線は一瞬とどまるだけではなかった。

俺の目に写ったまなか。

その瞳には、光が写っていないかった。

やけどを冷やしているあかりさんを、何をしているんだろう、と言わんばかりの目で見ている。

…… 何かが、おかしい。

そこから至った結論は簡単だった。

まなかに何かが起こっている。けれどそれは、まだ誰にも分からな

い、と。

とりあえずこれは… 考察が必要だな。

結局そのまま食事を頂いた俺は、まっすぐ家へ戻り、自室へ籠った。

…

あれから推察を立てて数分。

少しずつではあるがポツポツと分かり始めた。

「まなかは何かを忘れてる。」

というのは、先程確認した通りだ。

何を忘れたのか、というのは分からないが、あかりさんらを見ていた時のことを考えると、記憶と言うより感情なのではないだろうか？

「まなかは生贄になったのか？」

というのは、恐らくそのままだろう。

同じように記憶をなくしていた千夏とは、また少し違うタイプの忘れ方であろう。

あの日、海で何があったかは知らないけど、あかりさんを助けようとして代わりに海へと引つ張られた、というあたり、こっちが生贄という目線で間違いはない。

じゃあ千夏は何故？と思ったが、こっちは考えるのが難しいし、何より最高の終わり方を迎えたという結果がある。

どんな推察であろうと、結局は結果が全てなのだから。

あとは、このことをどうするか、というところだ。

もちろん、異変があれば光は知りたがるだろう。けれど、知ったところでどうにもならないかもしれない。

そういうのは、あいつがいちばん嫌いなはずだ。

やれやれ…。

どうやら俺は、まだこの街に必要ならしいな。

第97話 光無き瞳

— s i d e —

翌朝。

まだ肌寒い中、俺は少し早めに服に袖を通し、外へ出た。

今日は休日。家にいる人の行動パターンは大体バラバラなので、おそらく文句は言われないうらう。

さて、こうして外に出た理由だが、至って簡単なことだ。

昨日、推論を大まかに立ててみた。

それがあつてるかどうかなんて判断は、誰にもできない。

本来なら。

もし、その推論がごく一部のものにしかわからないもので、その人が全ての心理を知る神様なら、答えを知っているはずだ。

そう、ウロコ様だ。

まなかの様子がおかしいのを感じたのは、俺と光が最初だった。

正確には光が気づいていたかどうかは分からないが、あの後家の外から覗いた光とまなかの様子はどうもおかしかった。

光の顔が何か言いたげだったのが1番の証拠だ。

おそらく、光はウロコ様を探すだろう。多分、光だけでなく他のみんなも。

だから、俺がやるべきことはちゃんと真実を知ることだ。

今まで兄貴分だのリーダーだの言われてきて、あいつらを引っ張ってきたんだ。今回も、俺が前に出なきやいけない。きつとそうだ。

それに、ウロコ様が何処にいるか、それは俺だけが知っている。

だから誰にも知られないよう、この時間に出たわけだ。

…

浜辺の近くの林の中、ひとつの小さな祠がある。

影から海を見守る、と言わんばかりの位置にあるこの祠が、ウロコ様のもうひとつの居場所だ。

5年前から、俺だけが知っている。

そして、俺はぶっきらぼうに呼びかけた。

「おいウロコ様、いるならちよつと出てきてくれ。」

こんなもの出るのかと思われるが、ここが出るのがウロコ様だ。

「なんじゃ、こんな朝早くから。これから漁師のこの坊主に呪いでもかけようかと思っておったんじゃがの。」

漁師のこの坊主… ってことは紡かな？

… いいんじゃねえの？あいつ海好きだし。

「あ、それはどうぞお好きに…、ってそうじゃないそうじゃない。あんたに話があるんだ。」

「ふん、そんなの見れば分かるわ… 少し待っておれ。」

屋根の上に座っているウロコ様は何やら呪いを使ったような仕草を見せ、こちらを向き直した。

「で、話はなんじゃ？もうお前は大丈夫かと思っておったんじゃがの。」

「そう思われてんならありがたいけど今回ばかりは少し訳が違う。俺自身の事じゃなく、まなかの事だからな。」

「ほう、向井戸のこのな。あれがどうしたんじゃ？」

「そんな態度しなくてもわかっていることくらい知ってますよ…。」

「まあ、さすがにバレるじゃろうな… で、向井戸の娘について、何を聞きたいんじゃ？… いや、聞き方を変えるかの。遙、お主今どこまで知ってるんじゃ？」

「推論ですが深くまで。とりあえず聞いて貰えますか？」

「言うてみる。」

「まなかはお船引の時、名目上生贄だったあかりさんを庇い海へと

引つ張られた。そして発見した時の場所、あそこは、おじよし様の墓場、と言ったようなところだった。つまり、まなかはおじよし様になった。」

ウロコ様はまだ顔色ひとつ変えない。

「ほう、それで？」

「そして、帰ってきたまなか、少し様子がおかしいのは知ってますね？」

千夏も俺に対する記憶を失っていたがまなかはそれとは違う。失ってるものは記憶じゃなく、もつと感情的な側面のもものでは？」

ピクリとウロコ様の眉が動いた。

「…なぜ、感情的なものと考えたんじゃ？」

「昨日ですね、あかりさん家行つたんですよ。そこでカニ鍋をこぼして火傷した晁の手当をしていたあかりさんを、見ていたまなかの目には、光がなかった。それはまるで、何をしているんだろう、と言わんばかりの目で。」

ウロコ様ははあと溜息を1度ついた。

「お主みたいな切れ者、海村において置くのももつたいない気がしてきたの… そうさな、お主の言ったことは概ねその通りじゃ。じやが、まなかがなんの感情を失ったか、というのは推測がついておるのか？」

「…考えさせてくださいいね。」

そう言つて俺は黙り込む。

練る。何が抜けてるのか。

…違うな。

あの瞳はなんでああしてるのかわからないという目だ。

では、あの行動にはなんの感情が働いていたのか。

親子…。

なるほど、そういうことか。

「おそろく、愛情、ですか？」

ウロコ様はおおと感嘆の声を上げる。

「そこまで分かるのかお主は…。詳しく言うと、人を好きになる気持ち、これがまなかの失ったものじゃ。」

「人を、好きなる気持ち…。」

俺は絶句した。

仕方の無い。人を好きになること、それは言わば人生の生きがいの1つだ。人を好きになるために生き、そのために死ぬ。

その気持ちを失ったってことは…

人間として、半ば死んでるようなものじゃないか。

「まず、おじよし様の話じゃな…。おじよし様は、海から陸へ戻る時に、海神様によって人を好きになる気持ちを奪われたのじゃ。陸の想い人への想いを経つために。」

「そしてそれが、新しくおじよし様になったまなかに継がれた…。」

「そういうことじゃ。」

… まいっただなこりゃ。

はつきり言っただ俺に実害はない。

けれど、まなかを好きな人間がいるんだ。

もし、その思いが届かないって言うならそれは…。

くそっ、どうにかするしかないか。

「それで、質問は以上か?」

「以上ですね。とりあえず、知りたいことは知れたんで、時間の許す限り今はそれを。」

「そうか…。そうじゃ、わしからもお主に聞きたいことがあるんじゃないか。」

「はあ、いいですけど。」

しかし、ここでyesを言ったのは間違いだった。

理由は簡単、答えられるはずがないからだ。

「お主は、2人のうちの、どっちを選ぶんじや？」

第98話 心

——遙side——

「…驚いた。ウロコ様もそんな質問するんですね。」

「わしとて、1度は誰かを愛したことのある記憶を持つてるものじゃ。他人の恋愛事情に興味が無い訳では無いぞ…。もつとも、お前のようなタイプは尚更じゃな。」

やれやれ、やつかいなところに目をつけられたな。

とはいえ、実際俺自身これは向き合わなければいけないものだ。けれど。

一概に今答えは出ない。

「そうですか…。まあ、聞いても無駄でしょう。俺自身が一番分かかってないんですから。」

「ほう？」

「ああ、分からないって言っても、どっちが好きなのか、ってことですよ。好きになることについて、つてのは自分でちゃんと答えを見つけたので。」

「お主も女好きよな。」

「あんたに言われたくはないんですがね…。」

なんて苦笑いをうかべるが、心から笑えなかった。

本当に、俺は美海と千夏、どちらを選ぶべきなんだ？

「じゃあ、俺はこれで。光達には俺がよくここに來ること、内緒にしといてくださいいね。どうせ、あいつはあんたに真実を聞きたがるだろうから。」

「ほう、そんなことも分かるのか？」

「いやあんた、さつき紡に呪いかけたじゃないすか。だとするとあいつ、今から急いであかりさん家にでも行くんじゃないですかね。そうしたら光らは全力で探し始めるでしょう。」

「ふーん？まあ、そうかもしれないの…。ところで、少し気が変わった。」

もう少し話をしていかなんか？」

ウロコ様は珍しく俺を呼び止めた。

どうやら俺にしておきたい大事な話がある様子だ。

しかし、その目はいつになく冷たかった。

今までのことを含め、俺を諫めようとしてるのだろうか。

「いいですけど… なんのことですか？」

「そうさな…、単刀直入に言うがお主、海と距離を置いておらぬか？」

「距離、ですか？」

「そうじゃ…、こういうのもなんじゃがの、正確には、先島の小僧らと距離を置いていないか、ということじゃ。」

光らとの距離、か。

確かに言われてみればそんな気がする。

もちろん、それは故意ではないのだが。

「あやつは海じゃ。紛れもなく。透き通った目をし、一つ一つの出来事に、なにかの感情が揺れる、その姿は正しく元あった海のようなものじゃ。一方でお主は、今の海のようにやな。何かに動じることなく、ただ穏やかなまま生きる。凧いでおるな、心が。」

「はあ、そうですか…。」

自分のことは自分が一番分らない。

ただ、それは誰かからの視点で見たものが正しいのだろうか。

ウロコ様はそんな俺に近づき、顔を凝視した後、何かに確信を持って言った。

「…濁っておるな。瞳が。さてはお主…。」

「なんですか、今日はやけにグイグイと。俺なら大丈夫ですよ。それにあいつらが嫌いなんてわけないじゃないですか…、いくら時間が経っても、年の差に壁ができようと、俺たちは親友です。そこだけは変わりません。」

確かな決意を持って俺はそう言った。

ウロコ様は頭をかいて、これ以上は何も言うまいと言わんばかりに

消えていった。

…

帰り道。

重苦しい会話のせいで一步一步踏み出す足が重たい。

さつき言われたひとつの言葉が、俺の頭にずっと残っていた。

『濁っておるな。瞳が。さてはお主…』

まさかああ言われるとは思ってもいなかった。

が、実際俺も得体の知れない違和感を感じていた。

もちろん、瞳が濁っているのかどうかは知らない。

けれど、一概に違いますと否定できなかったのはおそらく…。

いや、考えるのはよそうか。

悪いことを考えたらその未来しか見えなくなってきたそうさ。

それよりもさつきの事だ。

俺は足を止める。

その場から海を見ながらぼんやり考える。

俺はどちらを選ぶべきなのか。

俺は、言うまでもなく2人とも好きだ。

ずっとまっすぐに生き、俺の進むべき道を確認させてくれた千夏。

1度関係が終わってしまったあの日から時間が経って、それでも俺の傍にいつもいてくれ、俺を立ち直らせてくれた美海。

こんな回りくどく内面だけ言ってもキリがない。

2人とも素直で、可愛い。

両方好きでいたい。けれど、1人に決めなければいけない。
ならば俺は……。

そこから先の言葉はなかった。

と言うよりかは、考えることをやめた。

理由は至って簡単。

俺の目の前に、息を切らした美海が現れたからだ。

「どうしたんだ、美海。息なんか切らして。」

「は、遥を探してたに決まってるじゃん……。ってそれより！話さなきゃいけないことがあるの！」

美海は疲れの中に喜びを見せ、続ける。

「いるかもしれないの！ウロコ様が！というか、絶対にいる！」

「……だろうな。あの人がおめおめと海で待ってるわけないしな。」

俺は悟られないように嘘をつく。

ただ、それと同時に美海はリアクションをやめて、ただ俺の顔を驚いた顔で眺めていた。

「どしたんだ、なんかついてるか？」

俺の声で美海はハツつとなつて、それでもってワナワナしながら答えた。

「遥……。その……。目が……。」

瞬間、俺の瞳から光が消えているのを、俺ははっきり理解した。

第99話 崩壊

——美海 side——

朝、うちの家にウロコ様が近くにいることの証明を見せに紡さんが来た。

もちろん、遙に真っ先に報告しなきゃと思って電話をかけた。が、電話に出てくることは無かった。

どうせまたフラフラしてるんだろうと思いい私は外へ駆け出す。

朝の空はまだ寒かったが、特に気になりはしなかった。

遙とのかくれんぼはいつも早々に終わる。

それは私が見つける側であつても、見つけられる側であつても。

「どうしたんだ、美海。息なんか切らして。」

呑気に遙が話しかけてくる。

私は答えようとしたが言葉が出ないまま下を向いていた。

ただの体力不足……だけだ。

というか……ちょっと、疲れすぎ……！

「は、遙を探してたに決まってるじゃん……。ってそれより！話さなきゃいけないことがあるの！」

そう言つて顔を思い切りあげる。

私はどんな顔をしていただろうか。

少なくとも悪いニュースではないので悪い顔はしてなかったとは思うけど。

「いるかもしれないの！ウロコ様が！というか、絶対にいる！」

「……だろうな。あの人がおめおめと海で待ってるわけないしな。」

遙は分かりきつたような感じだった。本当は会ってるのでは？と一瞬思ったがそれを言うことは無かった。

寧ろ、言えなかった。

何せ顔を上げた先の遙の目に私の目は奪われたからだ。

そしてその瞳を見た瞬間、私の体から力が抜けた。

先日、一瞬だけ見たまなかさんの瞳のように。

遥の瞳は色あせていた。

…

それから数時間後、私は病院にいた。

遥は大丈夫だなんだと言ってるけど、絶対そんなはずはない。そんな訳で検査。

その結果遥は別室待機、私と空き時間で電話をかけていた千夏ちゃんとして先生からの説明を受けることになった。

どうやらその先生、遥とかなり仲が良さそうだった。

まあ、そこはいいや。

「んで、あいつの目についてだな。」

双方が椅子に座り、説明が始まる。

「この前海から帰ってきた女の子、の方も似たように目の光が消えることがあった、なんてあいつが言ってたが、それは本当か？」

海から帰ってきた女の子… ってことはまなかさんの事だろう。

「はい、見たのは一瞬だったんですけど、確かに瞳に光がなかった瞬間が。でも、理由がわからないんです。その時の分も、今回の分も。」

「なるほどな… で、今聞いてわかった。おそらく、あいつとその子の状況は別だ。ただ似たような事案が起こってるだけ。」

「は、はあ…。それで、結局何が起こってるんです？」

「ああ、簡単に言うとあいつはストレスで心をやっちまってるみたいだ。」

えっ…？

私と、千夏ちゃんは凍りついた。
だってストレスって言うことは…。

身近にいる私たちが、1番の加害者なんじゃないのかな…？

「そんな、ストレスって…原因はやっぱり私たちなんですか!？」

思わず千夏ちゃんが声を挙げる。無理もない、私だってそうした
かった。

「さあな、理由までは知らねえよ。というか落ち着いて聞けな。ほん
と…あいつの状態だな、自分はストレスと感じてないが、身体だ
けがそのストレスに反応しているって状態だ。おそらく、つい昨日今
日で出来たストレスじゃねえだろう。あいつが出会ってきた全て、そ
れはあまりにも一人の人間が覆うにはデカすぎた、ってことだ。」

「…そう、ですか…。」

それっきり千夏ちゃんは黙ってしまふ。

私もいくつか聞きたいことがある。

「それで、あの状態だととにかく生活に影響とかあるんですか？」

「影響、か…。取り急ぎの話じゃないし関連性もあるのかどうか分
からないが…、ひとつだけ言えるのが、あいつのエナが最近弱くなつて
るという事だな。今はまだ問題ないが、あれだとあと3ヶ月もしない
うちに…。」

そこから先は聞きたくなかった。

あと3ヶ月もしないうちにエナを失う。

それは、あまりにも大きすぎる話だった。

「とりあえず、あいつは当面こつちで面倒みるようにするわ。ただま
あ、自由に会ってもらっても大丈夫だし、話してもらっても問題ない。

まあ、過度なストレスを与える行動だけしなければそれでいいから。」
「・・・はい。」

空返事を返す。それしかできない。
「なに、心配すんな。あいつは俺がなんとかするからよ。とりあえず今日は帰んな。」

「では、失礼します。」

「私たちは無駄な言葉なく、その場を立ち去った。」

——大悟side——

正直、あいつがこうなるとは思ってたなかった。

実際、メンタルは強いやつだったし、芯も通ってた。

・・・いや、そう思ってる時点でもう問題なんだな。

あいつが辿ってきた人生の疲れもある。

ただそれ以上に、ストレスというだけあり、一番の原因は俺らが遥に期待しすぎていたんだ。

あいつは強い。だが無敵じゃない。

人間だ。そして、人間である以上どこかで壊れる。

あいつの場合、足なんかより、恋愛面なんかより、今回が一番壊れてしまったのかもしれない。

しかし、そうしてしまったのが俺なら、責任を取るのも俺だ。

だから、向き合おう。

俺はあいつのいる部屋のドアを思い切り開け、大きな声で言った。

「よう、話しようぜ。」

第100話 全てが繋がる時

——side——

「先生…。」

診察が終わり、結果を聞いたところで俺の気力は無くなっていた。本当に心はからっぽで、何かを考える最後の力すら残っていないかった。

「さて、大変な状況になっちまったな、お前。」

「…そうですね。でも、俺もよくわからないんです。」

言われるところによると、俺の心はストレスで壊れ、それが直に身体に反映されているらしい。

そうして結果を聞いて、俺はまた今までの人生を思い出した。

もう何度も思い返して、

何度も何度も割り切って、

それでいいと思ってたのに…。

ズキツと頭が痛んだ。

「…！」

声にならない悲鳴と共に、一瞬下を向く。

「…痛むのか、頭が。」

「ええ、ちよつとですけどね。」

そういつて黙り込む。

そうだ。なんで俺はこんなところにいるんだ。

そうだ、俺が今行かなきゃいけないのはここじゃない、

早く、どこかへ、ここじゃない、俺の居るべき場所は、やらなきや

いけないコトは、みんなは、俺は!!

「はあっ、はあっ、はあ、…はあ。」

止まらなくなった呼吸を無理やり押さえつける。

先程同様に頭が痛むがもう気にはしなかった。

そんな俺を気にかけてか先生が言う。

「…なあ、さつきも言ったけどよ、話をしねえか？最近はずいぶん忙しくて満足に時間取れなかったろ。でも今は患者と医者との関係。時間ならいくらでもあるんだ。…それにお前に話したかったこと、いっぱいあるしよ。」

「そうですね。…それで、どこから話しますか？」

「そうだな。…俺さ、こういう性格だから、人の気持ちを理解するのはあんまり得意じゃねえんだ。でもよ、お前の過去を聞いて、どんな道を生きてきたのかを聞いて、分かったんだ。…ずっと1人だったんだな、お前。あの日からずっと。」

「先生、いくら先生でもそんなこと言うのは少し許さないですよ。」

正直腹が立った。

俺には美海や千夏やみんながいるのに、

1人だったなんて。…。

「そうか、癪に障ったなら悪い。けどな、お前がそう思っただけでも、もうお前の身体が勝手にそうしてるんだ。何かを背負っても、未来が暗かろうと、お前は1人でそれをやって、全部終わらせた。…結局それが、お前のストレスの全てだったんだよ。」

「でもそれって…結局俺の生きてきた道の否定じゃないですか。…」

自然と涙がこぼれる。

誰のせいでもなく、運命の2文字によって、俺の心は壊されたのだ。悔しいとか悲しいとか。

そんな感情は湧くことはなく、

ただ何故、と繰り返すのみだった。

「…なあ、遥。少し休まねえか。お前は頑張り過ぎたんだ。少しくらい休んだって神様は怒ったりしねえよ。」

「…神様なんて、いるんですか？」

神様は、いる。

分かっている俺はそんな判断が出来なかった。

「さあな、俺も知らねえ。けど、お前が休んでもいいってのは、俺が保証する。そんなら文句ねえだろ。」

「…そうですね。」

少しくらい、休んでも…いいか。

一旦やめてしまおう。

考えることも、誰かのためにがんばることも。

答えが見えない以上、俺はきつとそうするしかないんだから。

… そうだな。

頑張りすぎだったんだな。

たまには何も考えずにすごしても…。

その日から、俺は必要以上の事を考えずに生きることにした。

廃人、ほどではないけど、自分の周りの人のことはあくまで忘れない程度に思うだけの、そんな生活を送っていた。

ああ、たしか何度か美海や千夏が会いに来てくれたっけ。

でも、それまで。

深く立ち入った話は、お互いしなかった。

向こうも遠慮したのだろう。変に俺に気を使わせないように。

… 情けない話だよな、ほんと。

それでも今の俺はそうしてくれる方がありがたいくらい弱い人間になっただけ。

… いや、違うか。

もともと俺は弱かったんだ。

それを無理に無理に強く生きようと、そうしてきたんだ。何度か弱いことに気がついた気でいて、本当は何も変わっていなかったんだ。

だから今こうやって、本当に弱さに直面してるんだ。

それでも答えが、まだ見つからない。

そうか、これが本当の弱さなんだな。

また日にちが過ぎてゆく。

1日。

また1日。

そうして1週間は過ぎ去った。

今の生活はなんの不自由もない。

けど、心がだんだんと空っぽになっていくようで。

先生もいるし会いに来る人もいる。けれど、やっぱり寂しい。

みんな今頃、何してるんだろうな……。

フツ。

ん、今窓の外になにかいたような……。

そう思っ窓の方をむく。

「よお、元気やつとるかの、遥。」

窓の外に座っていたのはウロコ様だった。

「……はい?」

「なんじゃ、せつかくわしが重い腰を上げてお見舞いに来てやったと言うのに……。まあ、なんじゃ、少し場所を変えるところかの。」

そういったきりウロコ様はどこかへ消えてった。

仕方ない。動こうか。

……

「それで、改めて聞くが…… どうじゃ、調子は。」

いつになく優しくウロコ様が言う。

「身体の、って言うなら悪くは無いですよ。ただ…。」

「ああ、分かっている。あの時おかしかったが、ここまでやられてるとは正直思ってたぞ…。やっぱりしんどいか？」

「いや、こうして何も考えずに過ごしてればまだ楽です…。けど、ずっとこうしてれるほど、優しくはないですよ。現状は。」

考えないようにしても、片隅には責任感が残っている。

それに、大学とかのことも考えるとそう長い時間ここにはいられない。

それに対するウロコ様の答えはこうだった。

「そうじゃの…。じゃが、今のお前はそうした方がいいかもしれないの。」

…なあ遥、お主いつそ、海と縁を切らぬか？」

「… ついに追放ですか？」

「いや、これは提案のつもりなんじゃがの…。全ての因果が、お主の両親から始まった。それが海から生まれたものなら、断ち切ればまだ楽になれるかもしれないと思うの…。儂はな、遥。お主に幸せになつて欲しいんじゃ。」

驚きだった。

この人は、誰かに肩入れするような人ではない、そう思っていた。

何せ神様だ。公平さは必要だろう。

それでも、俺に幸せになつて欲しいと言ってくれた。

ただ、それは逆に、俺をまた困らせるだけのものだ。

「勘弁してくださいよ…。答えを得ていないのに、そんな事言われても、また苦しくなるだけじゃないですか。」

「… そうか。すまんかったの、忘れてくれ…。そうじゃ遥。今先島の息子らが率先してもう一度お船引をしようとしておるんじゃが、せめて見ていくか？」

「… いつ頃になりますか？」

「あと1週間とちよつとじやの。」

「そうですか。分かりました。」

そうしてウロコ様はまたどこかへ消えていった。

残された俺は1人、佇んでいた。

それでも、少しだけ、心の底に火がついた気がした。

きつとそれが、答えを見つげるときの合図だ。

第101話 最後の答え

——side——

ウロコ様と話して数日。

少しずつだが、俺に元気が戻ってきた、と先生は言った。

正直自覚はない。

けれど、これだけ長く休んで、やっと気づいたことがいくつもある。

俺はこれまで一人で何事も終わらせてきた、と先生は言った。

まさにその通りだった。

俺はいつの間にか、全部自分で片付けようとしてきた。

何人かには手伝ってもらった。けれどそれは、決して仲間、とか協力、とかそう呼べるものの類ではなかった。

結局、意識しないうちに俺は他人を駒のように見ていたのかもしれない。

そうとわかった今は、過去の自分がとても恥ずかしく思える。

だから、今から、なんて遅いけど。

あいつらが作っていた輪の中のピースとして、俺は生きたい。

リーダーだなんて、司令塔だなんてどうでもいい。

本当の親友なら。あいつらと共に生きたいなら。

それくらいの覚悟があるんだって、そう気付かされた。

それが、答えなんだろうか。

いや、この際だから洗いざらい、包み隠さず全部の自分と向き合おう。

まず、俺はどうしたい？

これは何度も考えてきた。

けれど、一つ一つ考える時の状況で出る答えは違う。

そして、きつと今回出る答えがきつと最後だ。

もう、分かってる。答えはすぐそこにある。
俺は、どうする。

考えるのをやめた時からもう1週間と少し。
もういいだろう。
逃げてるだけじゃ何も始まらないから。

これまで生きてきて、たしかに苦しいことばかりだった。

美海にも、千夏にも、本気で向き合ったつもりでいて、全然届いて
なんかいなかった。

好きの気持ちはもう、分かってる。

全部教えられた。ひとりじゃ辿り着けなかった。

俺は弱くて、誰かが隣にいてくれてやっと前へ進める。

支えてくれる、んじゃない。隣で歩いてくれるんだ。

だから

答えは得てる。

これまでであったこと全て受け入れて、それでもって生まれ変わろ
う。

誰かを導く力なんかより、誰かの隣を歩く覚悟を持って生きる。

そうか、これが答えだったんだな。

…

夕方。

俺は病院の屋上に先生を呼び出した。

「ここももう随分と馴染んだ。」

「どうしたよ、急に呼び出して…。答えが、見つかったのか？」

「はい、揺るぎない答えを、やっと見つけました。これから俺はどうしたいか、どうありたいか。1人になって、皆が教えてくれました。」
「教えてくれ。」

「俺はずっと1人で全部を終わらせてきた、先生はそう言いましたね。」

本当にその通りですよ。俺は弱いままで、それでも1人で強くあり続けたい、そういう生き方をしたんです。だから、答えは簡単。甘えます。俺の隣に立ってくれる人がいるなら、俺はもう先に進みません。誰かと隣り合わせで歩く。弱い人間らしく、最後まで誰かに頼って、頼って、一緒に悩んで答えを出します。もう生き急ぐのはいやなので。」

先生はフツと笑った。

これまででない、最高に優しい顔で。

「お前がその結論に至ってくれてよかったよ。俺もお前に出会えて変わったさ…。散々振り回されたけどな！…。んでそれで、俺がお前の力になれたかなんてのは分かんねえ。けど、お前の答えを聞いて納得したよ。これからのお前になら、俺はきつと力になれるってな。」

「そんなこと言わなくても、俺も散々先生に助けられましたよ。これからもお願いします。」

「お前…。なかなか可愛いキャラしてんじゃねえか。」

なんて言う大悟先生は本当に嬉しそうだ。

そうだ。これも、1つの愛の形だ。

もちろん異性的な好意とかそういうのではない。親しい人への愛、つまるところ親愛と言ったところのものだ。

それでも、愛は愛。

それが分かれば、もうあとは怖くない。

この調子なら、俺はもっと前へ進んでいける。

そして、2人にはもつと違った形の愛がある。
誰にそれを伝えようか、ずっと悩んでいた。

けど、決めた。

俺が選ぶ相手。一生をかけて誰の隣を歩くか。

まあ、それはお船引を見届けてから伝えよう。

こんなこと言うとフラグだなんて言われるけど、大丈夫。もう怖くなんてない。

「さて、お前の健康状態もだいぶ戻ってきたしな。…エナの方はやっぱり止まってないが。だがまあ、もう退院はできるだろう。ただ、今日は無理だな。なんせこんな時間だ。退院は明日になるな。」

「エナのことは自分でケリをつけます。…けど、きつと一人じゃダメかもしれません。そしたらまた、1人の医者として助けてくれますか?」

「ああ、いつでも頼れ。」

「ありがとうございます。」

…

そうして俺は部屋に戻り、1人の最後の夜を過ごす。

明日目覚めれば、これまでの俺とはおさらばだ。

簡単に変わるなんて思っちゃいけない。けれど、踏み出す1歩はもう分かってるから。

ああ、明後日はお船引だったな。

遅れた俺が最後何が出来るかわからない。けど、あいつらを精一杯サポートしよう。

そして、5年前千夏に告白されたように、今度は俺が答えを告げる

時だ。

か。あの日ちゃんと返せなかった答えと一緒に、お船引を終わらせよう

第102話 ライバルとして、親友として

——美海side——

「これは、遙が退院する数日間の話」

夕暮れ時。私は家から数歩出て海を眺めていた。

潮風が冷たい。こういう日には嫌な予感しかしなくて辛かったりする。

先日、光がウロコ様に会った。

それでもつて色々聞いたらしい。まなかさんの状態。失ったもの。

もちろん全力で怒っていた。けれど、やっぱり少し変わったのだから

光は、冷静に考え、お船引をやろうと言い出した。

とはいえ大雑把なところは健在。

お船引を機にまなかさんが記憶を取り戻すかもしれない、と、そう考えたらしい。

どこまで現実味があるのかは知らない。

けど、現状そうするしかない以上、誰かからの批判はなかった。

お船引。思い出されるのは5年前だ。

あの日のこと、今でも忘れはしない。

またあんなことになったらどうしようと、今でも思い出すくらいだから。

「…それでも、また千夏ちゃんが飲まれそうになった場合、今度は私が…。」

いや、そんなことを考えるのはやめよう。

何より遥かに悪い、私はそう思った。

だから… そうだな。

このお船引が終わる頃に、遙に好きだって、ちゃんと告白しようか。目的があれば、何がなんでも達成しようって気になれる。

それに、こんなモヤモヤした気分で過ごすのはいい加減飽きてきた。

私は、遥が好きで、好きで、大好き。

初めてであった時からずっと好きだった。

年の差は確かにある。けれど、その壁に押し返される程のやわな気持ちじゃない。

誰にも奪われたくない、私だけの遥であって欲しい。

… 遥の1番が、私であって欲しい。それが私の気持ち。

5年前に決めた。一生遥のそばに居ると。

叶える時はきつと今なんだって、そう思う。

でも、恋敵がいる。

その子は親友で、同年代。

そして、私と同じくらいに遥が好き。

だから、勝負。

もちろん、負けるつもりは無いよ。

千夏ちゃん。

——千夏side——

〜同日くらいの話〜

「はあく、もう1週間か〜。」

自室の机にひれ伏し、私はため息を零す。

遥君が心を壊してしまってもう1週間が経つ。

何度か面会はしたけど、どうもからつきし。

最初は正直ショックだった。

また、私がやってしまったんだって、ずっと思ってた。先生は誰のせいでもないと言ったけど、それでも私は責任を感じてしまう。

遥の人生に影響を与えてる人の中に間違いなく私もいるから。だから、悩んだ。私に何が出来るか。

ろくな答えはでない。でも、確信してることだってある。責任を取っていなくなる、なんてことはもう絶対にやらない。

あの日汐鹿生で約束したいくつものこと、それはちゃんと私の体に刻まれている。

きつと、遥君は帰ってくる。自分自身の答えを見つけて。

…でも、その時にこの恋の答えも出ているかもしれない。

だから、どうしようかな…。

そうだなー…。

きつと今回がもう一度、告白する時かな？

お船引には特別な意味合いがある。

私にとっては、5年前の時の分からそうだ。

あの日、私は答えを聞けずに逃げてしまった。

でも、今も遥君が好きだ。大好きだ。

あの日告白した時よりも全然好きだ。

だから、全力でこの気持ちを伝えるんだ。

…もちろん、ライバルもいる。

ねえ、美海ちゃん。もし、今お互いにフェアと言える状態なら…、

「よしっー」

私は決心して、部屋からとび出た。

夕暮れ時。目的地は美海ちゃんの家だ。

...

「あれ？外に出てたんだね。」

美海ちゃんの家に着いた私だったが、インターホンを鳴らすことは無かった。

もう、美海ちゃんは家の外に立っていたから。

「千夏ちゃん、どうしてここに？」

「や、ほら。ちよつと話したいことがあるって言うか...、そんな感じ！」

「奇遇。私もね、ちよつと話したいことがあったの...じゃあ、行こっか。」

さすがに2人だけで話したかったので人気のない場所へ移動する。多分、2人とも本題は一緒だ。

「ねえ、美海ちゃん。私、今お互いにフェア、って判断していいよね...？」

「うん。というかこれ以上の状態はないくらいだよ。だからね...」

「だよね。だからさ...」

「私、遥（君）に告白しようと思う。」

ズレること無く、被った。

「あっ...」

「やっぱり...ね。」

そうしてお互い吹き出す。

「やっぱり好きなんだよ、遥君のこと。5年前のあの日からずっと。」
「分かってる。だって私も好きなんだから...でも、追っかけるだけの好きは、もうやめるの。ずっと思ってたから。遥の傍で歩きたいって。これが私の決心だよ。千夏ちゃんは、どうっ？」

私の決心…？

… ない、なんてことはない、絶対に、ある…！

「私はね、遥君を一生傍で見たい。その温度に触れたくて、その声を聞きたくて… その姿を支えたいの。これじゃ、ダメかな？」

「ううん、ちゃんと伝わるよ。千夏ちゃんが遥が好きなこと。」

美海ちゃんには、私の覚悟がちゃんと伝わったみたいだ。

こんな本心をさらけだして、恥ずかしくないのかと思う。恥ずかしくはない。

むしろ、ここでお互い恥ずかしがるようじゃ、絶対に勝てない分かってるから。

そうだ。もうひとつ、聞いておきたいことがあったな。

「ねえ、美海ちゃん。もし、どっちが勝ったとしても、これからも友達でいてくれる…？」

「それは…、もちろん。今更着ることの出来ない縁なんだよ、私たちは。」

そっか。そうだよね。

… ホント、ライバルが美海ちゃんによかった。

「じゃあ、お互いお船引が終わって数日後の同じ日に告白しよう？」

「うん、分かった。」

互いの決意は固く、互いの絆は固い。

だからこそ、私は絶対に負けたくない。

第103話 気づかない恋の行方

——遙side——

帰ってからの光景には驚いた。

お船引の準備がだいぶ進んでいるのもそうだが、何より人間関係が大きく変わってるように見えた。

紡とちさきはギクシヤクしながらも確かに友人の一線を越えており、かといって要はというときゆと上手くやっているように。

それぞれがそれぞれの、自分の好くべき相手をちゃんと見つけている、というような、そんな状態だった。

そんなお船引前日。

「よお、遙。元気になったか?」

俺がお船引の準備の様子を見てみると、ぼったり光に出会った。

「ああ、お蔭さまでな。それで、早速だけどなにか手伝うことはあるか?」

「んー、それが結構順調でさ、もう俺たちがすることはないみたいなんだよ。とゆーわけで、来てもらって悪いけど今日やることはなさそうだ…。まあ、せめてお船引当日は船の上から見せてくれないか?」

「そうか。それはいいんだが…。」

やたらと、光の様子が変だ。

何かを抱えているのはわかる。けれど、それに苛立つことも無く。誰かにあたることなく。

自分一人でなにか大切なことを解決しようとしているような、そんな感じだ。

(おおかた、お船引への不安、恋愛への不満かもしれないけど…)。

「?どうしたんだよ?」

「なあ、光、ちよつと場所変えようか。色々聞きたいことあるからな。」

「いいけどさ……。どしたんだ？お前。」

「ま、色々考えたんだよ。」

…

「んで、何の話だよ。」

場所を変えてすぐ、光がぶつきらぼうに答える。

「…まなかと、何かあったのか？」

「なっ!?……。ああ、そうだよ。やっぱお前にはかなわねえわ。この際だから全部話してやるよ。」

「頼む。」

「俺がウロコ様に会った、ってのは知ってるよな？そして、その時にまなか人が人を好きになる気持ちも失ったってのを聞いて、お船引をやるうって結論になったんだ。そこら辺は……。」

「ああ、知ってる。それで？」

「…5年前さ、初めて俺らがこっちの中学校に来た日、まなか紡のこの船に引き上げられたら？…多分、あの時からまなかは紡が運命の人だと思ってたはずなんだ。でも、紡はちさきが好きだと言って、見たろ？あの状況だ……だから、よくわかんねーんだよ。まなか誰が好きなのか、とかさ。」

なるほどな。

言いたいことはわかるんだ。

俺もまなか誰が好きだったのかなんて本当に分からない。

感情を取り戻した時にもし本当に紡が好きだったりしたら、それはどうするんだろうとは思う。

けど、それはないんじゃないかな。

まなかのことを1番知ってて、1番思ってるのは光。お前なんだろう？

だったら、好きな相手のことくらい信じろよ。

「なあ、光。確認するぞ。お前はまなかの事が好きなんだな？」

「はあ!?何言って…」

… 焦らすな!逃げるな!本当の気持ちに向き合いたいなら…!

「誤魔化すな!!俺は好きかどうか聞いてるんだよ!」

「… ああ、もう!好きだよ!あいつの事は!他の誰よりも!」

光が叫ぶ。

周りには誰もいないのでそのまま続ける。

「そうだろ?… お前はさ、好きな人が別な人のことを思ってたら諦めるのか?自分の好きの気持ち。そんなに軽い気持ちで好きなのか?」

「そんなの、違うに決まってんだろ…!」

「… そうだよな。だからさ、誰が何を思っていようと関係ないんだ。お前が好きだと思ったものを信じてみないか?俺もそうしたいからさ。」

そう。

人を好きになるなら、その人を信じるが一番大事だ。

俺も、そうしたいからさ。

「… なんか、気が楽になった気がする。ありがとな、話聞いてくれて。」

「おう。明日は頑張ろうな。」

…

光が帰ったあとも、俺はその場に残った。

明日、また海が動く。それは分かっている。

俺は海で泳ぐことが出来るか?今、この状態で。

ふとそう思い、俺は迷わず海に飛び込んだ。

相変わらず水温が冷たい。

それどころか、やっぱり身体はいつもより気だるさを覚えた。
やっぱり、身体は嘘をつかない。
俺のエナは自然と弱くなっているのがわかる。
それでも明日は何とかなるか……。

ん？

ふと、白い石を発見した。

んー、こんな石は普段から……。

…ウミウシ？

ウミウシに想いを伝えれば、吐き出す石の色によってそれが正しいかどうかを教えてくれる。

でも、最近いつウミウシに触れることが……？

…五年前のものかな？

(まあいいや、とりあえず回収を……。)

と、触れた時だった。

!?

想いが溢れる、と言った表現はよくあるが、今回はそれが具体的に
なったようなものだ。

そして、その白い石に詰まっていた想い。それは……

「ひーくんが好き」

と、シンプルで真っ直ぐな一言だった。

(何だよ。やっぱり相思相愛なんじゃねえか。)

そう思ってたフツと笑う。

けれど、それは一瞬。気づかなきゃいけないのは本人だから。

さて、時間だな。そろそろ上がろうか。

俺はその石を拾い上げ、陸へ上がると真っ直ぐ家へと帰っていた。もう何も振り向かない。真っ直ぐ進む。どんな未来かは誰もまだ知らない。けれど、明日は俺にとって幾年ぶりかのお祭りということになる。ならば、楽しめるだけ楽しもうか。

さあ、明日はお船引だ。

第104話 嵐、再び

——遙side——

お船引当日は晴れていた。

なんの曇りもなく、逆に不安になるくらいの快晴だ。

朝から昼まで街はお祭りモード。

そこら辺の祭りとはやはり少し違うものだが、やはり鷲大師にとってお船引とはかなり価値の高いものなのだろう。

そして、俺を始めエナを持つ子供、それに関わる人らは伝統の衣装に着替えさせてもらっていた。

俺自身、この服を着たことがなかったので正直ワクワクしてるところはある。

まあ、なんだかんだ言ってる俺はやっぱり海が好きなんだな…、と心からそう思う。

でも、それと将来どうなるかは、やはり今は考えられそうになかった。

…

さて、夜になるまでは早かった。

周りの賑わいが冷めない中、1台の車が止まり、中からウロコ様が出てくる。

なにやら文句を言ってるようだが、そんなもの知ったことではない。

とりあえず、色々準備を行ってるので、まもなく始まるだろう。

…
いよいよか。

5年前の真実、これからの答え。

今日で全てわかる。それに…

俺はちゃんと、ここにいるから。

準備が整い、船の行先に青い火が灯り、船が動き出す。

さあ、いよいよだな。

…

歌とともに、船はゆっくりと進んでいく。

青い火に導かれ進んでいく船上、同じ船にいる光にしろ、まなかにしろ、その臨場感故に軽口を聞けるものは誰一人としていない。

それぞれが松明を持ち、ただおじよし様を投下するポイントまで向かう。

揺れる水面から、少しだけ汐鹿生が見える。

5年前から、みんなここで眠ってた。

そして5年後、こうして揃って海の上にいる。

未来がどうなるかは分からない、けれど、祈ることは出来るから…。

俺は、海に沈んでゆくおじよし様にこれからの未来を願った。

… その時だった。

ドオン！

大きく船が揺れたかと思うと、海上のあちこちで竜巻が発生した。

それは想像を絶する荒れ具合で、到底冷静を保って入れるような状態ではなかった。

おいおい、5年前もこんなのが起こってたって言うのかよ…！
それじゃ飲まれるのも無理はないじゃないか！

「おい光！5年前もこんなのが起きてたって言うのかよ!!？」

「いや、今回の方がでかい！5年前はまだ部分的で…おい、来るぞ！
上！」

光に急かされて上を見上げる。

それは、自分たちのいる船を覆うくらいの高波だった。

まずい、これは避けきれっ…！

ザバア！

…

……、つと。

一瞬の衝撃で目をつぶり、開いた時には海の中だった。

他の人は…、どうやら危ない位置にはいなさそうだな。

俺は落ちてるであろう人の確認をしないと…!!?

そう思っただけを確認していると、1人の沈んでいく人の姿が見えた。

あれは…まなかか!?

エナを失ってるまなかは、水中で息が出来ない、もはやカナヅチ状態だった。

だから、誰かが助けなければこのまま沈んでいくかもしれない。いや、おそらくそうなる。

とりあえず、行けるのは俺か…!!?

全速力で足を動かし、まなかに追いつこうとする。しかし、まなかに先に追いついたのは、美海だった。

「まなか!!」

「向井戸!!」

後から光と紡が追いつく。しかし、やはり俺と同じラインで動くのを止めた。

その光景に皆止まらざるを得なかった。

まなかを抱いている美海、その周りを暖かい色の光が包み込んでいた。

——美海 side ——

まなかさんに追いついたのは私が1番早かった。

特に距離が近かった訳でもない。けれどなぜか、誰よりも早く私の体は動いた。

「まなかさん!」

沈みかけているまなかさんの手を取り、体を支える。

その時、いつか聞いたピキキと言った音がいつそう強く鳴り出した。

「これって、確かまなかさんの...」

そう、まなかさんのエナだ。

なんで、まなかさんのエナが...?

思い出す。

思い出してたどり着いたのは初めて汐鹿生に行ったあの日のことだった。

音に導かれるように進んでいくと、そこに汐鹿生があった。

でも、その音の招待はまなかさんのエナで、私とそのエナを受け継いだ、ってことなのかな...?

分からない。けど、いいんだ。

今はまなかさんの気持ちが流れてくる。

「ひーくんが好き、ひーくんが好き」って、ずっと流れてくる。

うん、分かるよ。

誰かに隙を伝えるのつてやっぱり恥ずかしくて、緊張して、伝えられなくて、それでも、伝えたくて。

「私も、好きな人がいるんです。今はまだ、ちゃんと思いは届いてないけど。」

誰に向かって言ったんだろうか、でも確かに誰かに向けて言った言葉。

「それでもいつか、思いを届けたいなあって。」

答えは帰ってきた。

「私も分かるよ、美海ちゃんの気持ち。… ああ、好きの気持ちって、暖かいなあ。…」

辺りを包む光がだんだんとまなかさんへ吸い込まれていき、みるみるうちにエナが輝き出した。

… うん、これで元通り。

元通り、だから。

「まなか！」

遠くからちさきさんと遅れて千夏ちゃんがやってくる。

あとは2人に任せ…

… !!?

危ない!!

その時、私とまなかさんの近くに1つの大きな竜巻がやってきた。このままでは間違いなく2人とも飲まれる。

… でも、助けることだって、できる！

私は全力でまなかさんを遠くへと突き出す。

「キヤアアアアアアアア！」

それからほんの数秒で、私の体は竜巻の中へと飲まれていった。

… 沈んでいく。

足掻いても、力が入らない。

… まあいいや、頑張ったし少しくらい休んでも。

そう思っただけは瞼を閉じる。

「… うな、美海、美海!!」

沈む間際、最後に聞こえた声はやはり彼の声だった。

第105話 好きの気持ちは

——千夏side——

それは、5年前とおなじだった。
無数に上がる竜巻、荒れる海、揺れる船…。
いくつかの船は大波に飲まれてしまった。

… 全く、同じだ。

私はいつかの記憶がフラッシュバックし、足を震わせていた。
これからどうなるんだろう。

また海に飲まれて、それから…。

… もし私が飛び込んでも、また謎の何かで体が動かなくなるかもしれない。

そうして、また海の底に沈んでいくの…？

…。

でも、だめだ。

逃げちやダメだ、例え危なくても。

その時、遠くの方で美海ちゃんが海へと飛び込むのを見た。

… そう、ここで私が行かなかつたら、きつと私は一生後悔する。

今、海の中に遥君はいるし、美海ちゃんもそれを追いかける。

ここで止まってるようで、好きだなんて言う資格なんてないから。

… だから、行くんだ…！

私は迷わず飛び込むと、急ぎ足で深く深くへと進んで行った。

「みんな！大丈夫…」

私は、目の前に写った光景に言葉をなくした。

一瞬暖かな光が目に入ったかと思えば、そこに1本の竜巻が直撃

し、美海ちゃんが飲まれていった。

「美海！」

遥君が叫ぶ声が聞こえる。視界の中にはいないけど、きつと近くにいる。

とりあえず、後を追おう!!

私はそのまま遥君を追いかける。

何故かしら進む足は早く、早くに遥君へと追いついた。

「遥君！これって・・・」

「千夏か!?・・・ とりあえず追いかけるぞ！」

こちらを見ずに言葉だけ帰ってくる。

私はそれがどこか悲しくて、どこか悔しかった。

私はちゃんと見てもらえてるの？

嫉妬でそんな感情が芽ばえる。

分かっているんだ。今はそんなことを言ってもらえる状況じゃない。

それでも、好きな相手に振り向いて欲しいのはいつだって変わらないんだよ。

・・・ お願ひ、だから。

こつちを向いてよ。

「ねえ、私はどうすればいい!?遥君のために、なにかしてあげられる事はある!？」

わざとらしく大きく叫ぶ。もっと小さくても聞こえる距離のはずなのに、感じる距離は少し遠い。

そんな私に、遥君は足を止め、振り向いて言った。

「何って・・・ 決まってるんだろ。俺のそばにいてくれよ。」

「・・・ え？」

今、何て・・・

「聞き直すなよほんと。こういうのって結構照れるんだよ。あれだよ、俺だって1人じゃ不安なんだよ、ここから先。美海を助けることでさえ一人で行くのが怖いくらいだ。だから、そばに居てくれよ。そ

れだけで力になるからさ。」

ちよつと勘違いだった。

私を選んでくれたのかもしれない、そんな淡い期待は海に消える。けれど、そばにいて欲しいと言ってくれるそれだけで私は力を得れる。

だから、私はどんな結末になっても、遥君の隣にいるんだ。

——side——

今までの俺ならなりふり構わず1人で突っ込んだかもしれない。けれど、今は違う。

自分が誰かに頼らなければいけない弱い人間だと分かってるからこそ、千夏には隣にいてほしかった。

さて、美海の方が、今の一悶着の間でだいぶ離れてしまった。しかし、大方予想はついている。

ただ、もしまなかの時のような膜がすぐに展開されていたら、こいつは厄介なことになりそうな気もするが……。

いや、今は行くしかないな。

俺は躊躇うことをやめ、もう何度目かの空洞へ向かった。

…

結論から言おう。

美海はそこにいた。何も変わることなく。

ただ、薄い膜におおわれた状態で。

「そんな…これって…。」

隣で千夏が嘆く。が、俺は悲観はしていなかった。

今、ここには3人しかいないとどこかで思ってるのなら、それは間違いだ。

ここにはもう1人いる。

だから俺は誰もいない空間へ向かって語りだした。

「やっぱり、ここにいますね、海神様。」

「…」

もちろん、返事はかえってこない。それでも俺は続ける。

「今、あなたは美海を新しいおじよし様として迎えようとしていますね？…前から思ってたんです。何故、新しいおじよし様を毎年望んでいたのか…それで分かったんですよ。」

これは今もどこかで聞いているであろうウロコ様も言ってた事だが…。

「あなたは、おじよし様が好きだったんですよ。それも今でも変わらず。あの日海から離れてしまったおじよし様を、その愛する気持ちを奪ったことを後悔してるんですよ…でもですね、俺はこう思うんです。」

なあ、ウロコ様。聞いているのなら考えてくれ。

きっとこれは正解のはずだ。

「おじよし様は、地上の想い人より、あなたを愛していたんですよ。もちろん、それに気づけなかったから、記憶を奪った…と。」

「…！」

ボツと青い炎が揺らぐ。そこから伝わってくる感情は後悔だ。

「…分かってます。こんな事言っても遅い、と。でも、愛は決して消えないんです。好きの気持ちは消えないんです。おじよし様の気持ちはエナとともに海に溶けて、あなたの気持ちは今も残り続けて…だから、きつと結ばれる。その気持ちは…間違いなんかじゃない！」

バキンッ!

その音と同時に美海を囲っていた膜が破れた。

「千夏！美海を頼めるか？」

「うん。でも遥君は？」

「俺はもう少し、話したいことがあるから。」

「…分かった！」

そう言っつて千夏には先に離れてもらう。時期に美海も目を覚ますだろう。

俺はと言っつと、この海神様の気持ちを最後まで見届けたかった。

「…聞こえてきますよね。耳をすませば、おじよし様の声が。これは、捨てるも捨てるきれなかったあなたへの好きの気持ちです…。海は次第に冷えてきた。じきに世界が終わるかもしれない。でも、そんなことはもうないはず。何故なら…。」

さあ、海神様。帰りましょう。全ての始まりの海へ。

「この海は、好きという感情を凍結させてしまったあなた自身だったからです。」

そして、海が光り始め、青い炎は街へと向かっていった。

第106話 凧のその先へ

——ウロコ様 side ——

あれはもういつの話になるじやろうかのう。

海の中を自由奔放に駆け回る、女性と、手を繋いだ子供二人とがいて、それをわしが、いや、厳密に言うとはわしではないが退屈じやのうと言いつつ心のどこかでその光景を許しながら笑う。

生きていた中で何よりも暖かい時間じやつた。

… そう、あの日々は、間違いなんかじやないはずじや。

それに、あの小僧が言った事は間違いはない。

悔しいが、今回は完敗かのう。

「… ははっ、神が聞いて呆れる。好きな人の気持ちを奪っておいて、その気持ちに誰に向けられていたかまでは気づかなかったか！」

今更後悔をしても仕方の無いこと。

ああ、それでも…。

私はずっと、貴方様を愛しております。 おじよし様。

——遥 side ——

街にあかりが灯り、海が暖かさを取り戻していく。

ああ、これでやつと…。

ゴゴゴ…

「!？」

一瞬何があつたか分からなかった。

よく周りを見ると今自分が立っている場所あたりが大きく揺れているのが分かる。それに、これまでのおじよし様も一気に集まって来ている。

そうか。真実の愛に気づけてるのなら、もうこの場所はいらないんだな。

形はなくても、好きの心はずっと海に残り続けている。今度はもうすれ違うことは無いだろう。

とりあえず、ここを出なきやだな！

俺は一目散に穴蔵を抜け出す。それから数分後、地殻変動は収まった。

「遥！」

「おい島波！」

「遥くん！」

「遥!!」

穴蔵から出ると、慌てた形相の美海、紡、千夏、光が待っていた。「お、おう。心配かけたな。悪い。それより、紡。地上はどうなった？」

「…俺のエナはスルーか。まあいいけど…。あれから上がってはなないけど、さっきの光によって、またなにか起こるだろうとは思っけど、多分大丈夫だ。」

「…そうだな。俺も大丈夫だと確信できる…。ん？それよりさ。」
会話の途中に1人の人影が見える。

あれは…確か…

「親父!?目が覚めたのかよ！」

そう、灯さんだ。どうやら冬眠から覚めたらしい。

そりやそうか、急激に暖かくなりだしてるんだから。

「ああ…。大きくなったな、美海。」

「お久しぶりです、おじさん。」

…ん、あれ？いつ会ってたんだ？

思わず俺と千夏は顔を見合わせる。

しかし、考えれば当然の話か。

直接血が繋がってなくても、美海にとって灯さんはおじいさんにな

るわけだから。

さて、感動の再会が始まってるのはいいけど。

俺はまだ、話していない一番大事な人がいる。

そうは言ってもすぐに見つかると思うけど。

「とりあえずさ、先上がったらどうだ？みんなそろそろ目を覚ますだろうからさ。」

「ん？ああ、そうするわ。じゃあ、早く来いよ！」

先にかかる光につられ、他数名も上がっていく。

が、灯さんはまだこの場に残っていた。

「？どうかしたんですか？」

「…いや。君には色々礼を言わなければいけないと思ってな…それと、謝罪も。」

「よしてくださいそんなこと。こうやって海を取り戻せたのもみんなのおかげ、俺なんかほんの微量しか力になってないですよ…それに、謝罪だって、あれ悪いの俺なんですから、お気になさらず。」

「…そうか。それでも、いつでも海に帰れるように、騒動の時の奴には私が説得しておこう。」

うーん、やっぱり頑固だなあ…。

まあ、好意はありがたく受け取っておくに越したことはないか。

「まあ、大丈夫だと思いますけど…。まあ、お願いします。」

そして灯さんも上がっていく。

さて、ここから本題かな。

「出てきたらどうですか？ウロコ様。」

「流石にもうわしの気配が分かるかの？それで、何じゃ？」

「いや、結局今回のこと、何も話せなかったんで…これが、正しい答えですよね？」

「正しいかどうかはわしも知らん。が、海は本来の力を取り戻した。海神様が力を取り戻したのじやろう…。じきにこの凧もあがる。」

「そしたら、俺達が昔過ごしていた、あの汐鹿生に戻る…と。」

「さて、あれ以上かもしれんの。」

どこまで海が戻るかは知らないが、それもまた楽しみだ。

「して、遙よ。答えは出たか？この前に聞いた事。」

「… ええ、出ましたよ。ちゃんと出しました。… 海に残るか残らないか、ですけど、もうそんなこと気にする必要は無いんじゃないですかね？」

「ほう？」

「元々海が封鎖的な態度をとっていたのは、未来が暗い中、これ以上人の流出をしたくなかったから。けれど、今待ち受けている未来はそんなものじゃない。それに、海を出て陸で働いている人も、本当はきつと帰ってきたいはずですよ？… 追放はもういらぬはずです。」

「それは確かにそうかもしれないの。」

「だから、俺も生きたいように生きて、帰りたい時に帰る。そうします。… 結局のところ、俺にはここを捨てるなんて事はできないんですから。」

「そうか。それなら大丈夫そうじゃの。… あと、相手の方じゃな？」
「… それもちろん、決めていきますよ。あとは伝えるだけですから。」

「ならいい。… ほんとにお主は成長したの。」

「いえいえ、そんなことはないですよ。… さて、行きましようか。」

ウロコ様の返事を待たないまま俺は陸へと向かう。

そこから見える景色はきつと、今まで一番綺麗なはずだ。

第107話 ハッピーエンドのその後で

——遥side——

それからの話。

陸に上がった俺を待っていたのはたくさんの人だった。

もちろん、全てが全て俺を待ってた人ではない。

俺の後に上がってきた、全体のほとんどの汐鹿生の人達と再会を喜ぶ人らもいた。というかそっちの方が多し。

光にしろ、まなかにしろ、要にしろ、ちさきにしろ、紡にしろ、美海にしろ、千夏にしろ、…そして、俺にしても。

それぞれが想い人と再開し、誰一人の不満のない状態で。

物語はハッピーエンドで幕を閉じた。

力を取り戻した海はまた5年前、それ以上のような穏やかさを見せ、温度もだんだんと上がっていった。

どうやらこの様子だと世界の崩壊もまた、随分先の話になるじやろう、とウロコ様が言ってるので、当面は心配はなさそうだし。

さて。

ここから先に記すのは。

そんなハッピーエンドの後の、俺のお話。

〈3日後〉

「それで、今週末には向こうへ戻るのか？」

「ええ、ちよつと長いことこつちへ帰ってたので、流石にこれ以上だと単位も影響が出そうらしいので… まあ、休みになればいくらでも戻ってきますよ。」

いつも通りの朝の食卓。今日は珍しく4人そろっている。

「それならありがたいね… ところで、今日も論文？」

俺がコーヒーに手をかけた所で夏帆さんが入る。

「そうですね。書きたいこととかはまとまってるんで、あとはそれだけ。というか、まだ論文書く学年じゃないんですけどね、本来。」

それでも先生に無茶を言ってるので無理はない。

むしろ感謝しなければいけないくらいは無茶だし。

「それじゃ、ご馳走様でした…。さて、海の様子でも見に行こうかな。」

ここからはモチベーションの問題だしな。それにまだこの時間帯だったら紡が船出してらるだろうし。

「あつ、私もついて行っていない?」

同じタイミングくらいで食べ終わった千夏が食いつく。

まあ、今日は平日だし、学校に遅れないならいいけど。

そもそもうちは朝が早いから遅れることは…。まあ、無いだろうな。

「いいけど…。遅刻しない程度にな?」

「流石にそこまで長居するつもりはないよ。じゃあ、用意するからちよつと待つてね。」

「早くしろよ?」

ということであは先に外に出て待つことにした。

その外もやはりぬくみ雪が降ってない分寒い事もなく、常識の範疇の気温となっている。

「ごめん、おまたせ。」

「いや…。じゃあ行くか。」

そうして2人歩き出す。

そこには初めのような緊張感も、いつかのような壁もなく。

ただ…。あるとすれば…。

いや、気にしたらダメだ。向こうも同じことを思ってるだろう。

ああ、それでも。

向こうに帰るまでには、告白した方がいいのかな。

…

やはり海は今までと同じ海だった。

綺麗な青に、穏やかな波。光の屈折によって時々汐鹿生が見える。

もちろん向こうの家に帰ることも出来たが、自分が家族と思ってるあの2人と、俺はやはりいたかった。

そういうところは、やっぱり子供と自覚している。

いや、一生あの人たちの子供だな、俺は。

それはたとえ、どんな未来であつても。

「ん、あれは紡か。」

こちらに気づき船の上から手を振る一人の男性。

あれは紡だな。

「…行くか?」

「いや、私はここで待ってるから行ってきていいよ。」

「悪い。5分くらいで戻る。」

そうして俺は海へ飛び込み、紡の船へと真っ直ぐ向かった。

「よっ、調子はどうだ?」

船上へ上げてもらって会話を始める。

「俺は特に。海の様子もよさそうだし、これまで通りの生活に戻れそうで何よりだ。もう随分と船も出せなかったからな。」

「まあ、あの氷じゃあな。…それで、お前ってやっぱり卒業したら漁師になるのか?」

「分からないな。これはあくまで好きでやってる事だし。…でも、やっぱり海は好きだから海にまつわる仕事はしたいな。」

「やっぱりお前はそうだよな。」

「逆に、お前はどうするんだ?」

自分の将来について聞かれても流石にまだ答えられない。

残念ながら将来何をしたいかっていうのは、海がとか陸がとか関係なく自分自身が勉強していく中で見つけなければならぬわけ。

別に俺じゃなくても、これは誰でも悩む時があるだろう。

「いや、分かんないから勉強してるからな。俺は地道においおいやっ
てくよ。」

「そうか……。ところで、あいつ待たせてるけどいいのか?」

「そうだな。そろそろ戻るわ。それじゃあ、あいつらにもよろしく
な。」

そして俺は待たせている千夏の所に戻る。

時間に遅れはないので大丈夫だろう。

「悪い。ちよいと待たせたか?」

「……。」

返事は返ってこない。怒ってるのだろうか?

「あのー……。千夏さん?」

「ねえ、ちよつといいかな。」

?

少し頭を捻ったが、すぐに次に何が起こるか分かった。

「……分かった。けどここじゃ不味くないか?」

「ううん、いいの。すぐ終わるから。」

そう言ってお互い黙る。それぞれで覚悟を決め、向き合う。

「私、水瀬千夏は、島波遥君が大好きです。5年経とうと、5年前なん
かよりずっと、あなたの事が大好きです。」

第108話 心は海のように

——遥side——

千夏は続ける。

「私ね、ずっと後悔してるの。五年前のあの日のこと。忘れてなんて言っただけね。一番忘れられるわけないのがあたしだけだよね。けどね、今私が知りたいのはあの日のことじゃない。今を生きる遥くんが目に見える私を知りたいの。もう逃げたくない、逃げないって決めたの。だから、ちゃんと答えがほしい。」

どこまでも素直でストレートな好きの言葉。

5年前も受け取ったような気がしたけど、あの日の言葉なんかよりずっと重たくて、価値のある言葉だ。

「ああ。。」

そうは言っても考える時間は欲しいし、何より、千夏自身がまだ何か言いたげな顔をしていた。

「…あのね、出来れば答えは、今じゃない時間で欲しい。それに、遥くんのことを好きなのは、あたしだけじゃないから。…だからね、もし、私の告白にokを出してくれるなら、今日の夕方6時、いつもの堤防に来て欲しい。それじゃだめかな？」

「…いや、助かる。」

「ありがとう、それじゃあ学校行ってくるね！」

そうして元気よく千夏は遠くへとかけていく。学校開始まではまだ当分時間があるはずなのに、その足は早かった。

とはいえ、俺はもう逃げないと決めている。ただ。

もし、美海に俺が好きという気持ちがあるなら、ちゃんと本人の口から聞きたい。

傲慢な願いだが、許してくれるだろうか。

…まあいいか。とりあえずもうちょっと回っていこう。何せも

う向こうへ帰るまで時間がない。こんなゆっくりできるのは今日くらいかもしれないしな。

…

「あれ、遙。どうしたのこんな朝早くから。」

学校付近をうろついていると運良く美海に出会った。

… いや、半ば会いに来たようなものだけど。

「ん、向こうに帰る前に散歩と思っただけ。… そいや光は向こうの家に帰ったんだっけか。」

「そう。やっぱり分かってたけど静かなもんだから少し寂しさはあるかな。… ところで遙。私ね、ここにくれば遙に会えると思っただの。」

「お、おう。」

「… ずっと我慢してた。好きで好きで堪らなかったけど何も言えなかった。… 千夏ちゃんと約束してたの。フェアに戦おうって。… そして、今になってやっと言えるの。」

俺は何も言わない。思いを打ち明けようとしてる人の邪魔だけはしないと決めているから。

そして美海はこれまでの人生で溜め込んだ自分の感情を一言に込めて放った。

「私は、やっぱり遙が？ 大好き。初めて会った時から、海で抱いてもらったあの日のことも、二人で一夜過ごした… 初めてのキスの日のことも、全部含めて全部好き。一生、隣にいたいと思ってるよ。… この気持ちに、私は答えを出して欲しいの。… お願い。」

それは美海のすべて。その中には俺の知らない本心も混じってるだろう。

「あっ！」

しかしそんな中で美海は何かを思い出したように声を挙げた。

「…そう、肝心な事を言い忘れちゃってた。… 答えは今じゃなくていいから。… 私を選んでくれるなら、今日の夕方6時、あの日の倉庫に来て欲しいな。」

その時間は確か、千夏との約束も入ってるはずだ。

…なるほど。

「…つまり、その時間にどっちに行くかで決めてほしいってことか？」

「えへへ、そういうこと。じゃ、学校行ってくるね。」

そう言つて笑みを浮かべ振り返り、美海も去っていく。走つてこそないが歩幅は大きく、顔も前をむいていた。

残された俺は一人、どうするか考えていた。

何度も言ってるが、両方好きだ。両方選べるならそうしたい。

けど、今は決断の時だ。

それは分かっている。でもここに来て誰か一人を選ぶ勇気がここ来て足りない。

将来を考えるなら、それはもう俺だけの問題じゃないからな。

保さんや、夏帆さんの期待。

あかりさんや、至さんの期待。

自分の選択次第で、人間関係も大きく変わるだろう。

でも、自分の未来は結局自分のものだから。

自分の生きたいように生きればいい、そう教えてくれたのは、最初にいなくなった父さん、母さんだったのかな。

なるほど。2人が残したかったのは…。

いなくなつて随分経つて気付かされた。本当は一緒にいて欲しかったが今はこんな結末もありかなと思つてしまう。

そうだ。始まりの場所へ行くか。

俺は論文に手をつけることそっちのけで海へと飛び込んだ。

…

いつもの汐鹿生だ。

人も海も暖かく、それでもって青が綺麗な。

「ん、おお？あんたあ確か島波さんとの…。いやあ、あん時はすまんかったな！」

「はあ、どうも…。」

正直覚えてない人だがあの場にいたのだろう謝罪はあった。

別に謝罪はいらない。けれど、聞きたいことはあった。

「そういえばおやつさん、俺ん家つてちゃんと残ってる？」

「ああ？あの外れにあるやつかい？それももちろんちゃんと残ってる。」

「ありがとうございます。それじゃ。」

そうして早足でかけていく。始まりの場所、懐かしの家へ。

…

「えっ？」

入った瞬間目を疑った。しかし目の前の光景は事実だ。

これまで積まれていたぬくみ雪はなく、部屋一室一室がとてもきれいになっていた。

「これ、誰がやったんだ…？」

そう思っただけあたりをぐるぐると回る。すると色褪せていたはずの家族写真とともに、一通の手紙が置いてあった。

「これはほんの例じゃ。そんなことは気にせずにお前はさっさとお前の道を生きるがよい。」

と書いてあった。

これは…ウロコ様だな。

つたく、あの人も素直じゃねえなあ。

けど、これで決心がついた。
さあ、夕方になる前には上がっておこう。
一歩歩き出す勇気はたくさんの人にもらった。
そうだ。この海は初めから心を映した鏡だった。
だから俺の心も海のように風では荒れての繰り返しで。
だからこの海は、この世界は素晴らしい。
それがわかったんだ。歩いていこう。答えを出そう。

午後5時半。夕焼けに彩られた街を背に俺は歩き出した。
海のような心と共に。

千夏✓

第109話α 二人で紡ぐ明日へ

——千夏side——

あの人は来ないと分かっている。

約束の時間まで後3分、私は負けを確信した。

…当然かな。

傷つけたどうこうもある。けどそれ以上に、きつと美海ちゃんが埋めた5年間の傷は私よりもきつと多いものだ。

美海ちゃんは優しいから、最後までフェアで戦おうとしてくれたんだ。

やれやれ、ここまでしてもらって負けたんじゃ、いよいよ私の立場がないなあ。完敗だよホント。

約束の時間まで後1分を切った。

いまだに足音はしない。今頃遙くんは私の知らないどこかに行ってるんだろうな。

分かっている、相手じゃなかったんだ。美海ちゃんにとって私は。

でも、それでも…

「私はやっぱり、選んで欲しかったなあ…。だって、こんなにも、好きで好きで、苦しい…。のに…」

堪えていた涙だったがもう限界だった。

まだ時間になってないのは分かる。けれど、私はもう自分が勝つ未来が見えなかった。

…いけないいけない。今は泣く時じゃない。

涙をぬぐい、顔を上げる。

ちょうど同じ時間に時計の針が鳴り6時をしめす。

…帰ろう。

そう思って顔を上げる。

私の足は帰宅の道に着くことはなかった。

「うそ…なんで…？どうして!？」

さつき止めようとした涙が止めどなく溢れる。けれどそれは先ほどのような悲しみに濡れた涙じゃなかった。

私の目の前には、たしかに遙くんがいた。

息を切らしながら、こつちを見ている。

「…ごめん、遅れた…!」

「嘘じゃ…ないよね…？今この光景は、嘘なんかじゃないよね…!？」

泣きじやくりながら自分に言い聞かせて確かめる。けれど、嬉しいことに目の前の景色は確かに本物だった。

そんな光景を悟ってか遙くんがちゃんと声に出して証明してくれた。

「嘘なんかじゃない。俺は千夏を選んだんだ…だから、ここにいるんだろ？」

そこがリミットの限界。

私はあふれ出る涙なんか気にせずに、遙くんの胸へと飛び込んだ。

——遙side——

「おっとと…」

千夏に飛びつかれ、俺は一瞬だけグラつく。けれど確かに千夏の体を捕まえた。

そのまま頭を抱え、俺の方の方へよせる。

「あんまり泣くなよな？俺だってどうすればいいか分からなくなっち

まうからな。」

「うん…うん…！」

口ではそう言ってるがどうも泣き止む様子は無さそうだ。

… そりゃそうか、と納得してしまう。

俺のこの答えを千夏は5年前からずっと待っていたんだ。

… 嬉しくないはずなんかないよな。

「… 待たせてごめんな？ 今日のこと、答えのこと。」

「遅すぎるよ… バカ」

とりあえず今は言葉はいらない。

こうやって抱き合って、温度を確かめ合ってるこの瞬間こそが答えだ。

だから今は当分… このままでもいいかな？

…

お互い動かないまま数分後、やっと我に返った千夏が顔を赤らめて俺から少し離れた。

「ごめん、嫌じゃなかった？」

「全然？俺だって好きだって示したんだ。嫌なわけじゃないだろ。」

「そ、そうは言ってもさあ… / / /」

千夏は乙女だ。やっぱり自分のさっきの行動を少し恥ずかしく思ってるのだろう。

けれど、俺はもはやそんなことはどうでもよかった。

まだちゃんと口にはしていないけど、俺も千夏が好きだ。大好きだ。

その気持ちがあるから、俺はここまで来れたんだ。

「なあ、千夏… 長かったよな、ここまで。」

「何？急に… うん、長かったね。初めてであつてもう5年になるのかあ… 私の中じゃ五年も経ってないから、なんか不思議なんだよ

ね。… 言いたいことは山ほどあるよ？でも、やっぱり好きの気持ちが一番上。だからもう後悔を吐き出すこともしないし、自分を責めたりしない。なんたって、最高の結果が今日の前にあるんだから。… ね？」

「そうだな。それは違いない。」

俺も千夏も笑顔を浮かべる。

多分いまこの瞬間が今までの人生が一番報われた瞬間だろう。

ところで、なぜ自分を選んだのかとか千夏が聞いてくると想定してたけど、どうやらそれはなさそうな雰囲気だ。

… きつとそれが今まで、というイメージなら。

これはきつと千夏にとつてのけじめだろう。

進みだすために自分の弱い部分を払拭する。

とても苦しいことだが、その先の未来は悪くない事を俺は知っている。

しかし。

想定していなかったことその2。

千夏がさつきからやたらと顔を赤らめて体をモジモジさせているのだ。

… まさかとは思うけど。

本当にまさかだと思うけど…。

… それって許されるのか？

「あ、あのね、遙くん…、遙くんって、もう少ししたら大学のほうに戻るんだよね？」

「まあな。もうそんな時期だ。」

「だからね、きつと会える回数、時間も減っちゃうかもしれないよね？… だからね、今日くらいしか無いかと思って…。だめ？」

やっぱりかあ…。

薄々予想はしていたが、本当にこれ、大丈夫なのだろうか？

… まあ、恋人になったわけなんだから、スキンシップはまだいいとして…、ちゃんとものがあるのだろうか？

「だめって言われてもなあ…。いいのか？それに道具の方も…」

「私からお願いしてるんだから、だめってことはないよ。それにお母さん、この前ノリノリでそれっぽいもの買ってたからそっちも…」

「…いよいよ断る理由がなくなったな…。とりあえずその話は後。俺の部屋にでも勝手に来てくれ。」

「うん！」

いや… 本当がいいのか？

… ええい！この甲斐性なし！腹くくるしかねえ！

いや。そんなことよりもだ。

ちゃんと言わなきゃいけない言葉、あるだろ？

「なあ千夏。」

「んー？」

「ちゃんと言ってなかったから言うぞ…。俺はお前が、水瀬千夏が好きだ。これからも、傍にいてくれるか？」

「うん!!」

これ以上にないくらいの元気いっぱい返事。

俺は今、人生を選んだ。

もちろん、俺は一生をかけて千夏を守り通したい。

だから、ちゃんと俺をそばで支えて欲しい。

… 分かってくれるよな。千夏なら。

「じゃあ帰るぞ。さすがに暗くなりすぎたからな。」

「うん！… ねえ、手、繋ご？」

そつと千夏が右手を差し出す。長いこと待っていたのだろう。少し赤くなってるのが伺える。

「ああ。」

俺はそんな千夏の右手を暖めるべく、左手を差し出し、大切にぎゅつと握った。

「行くか。」
「行こっか。」

そして二人は歩き出す。

歩いてきた道は暗かったかもしれない。けれど、これからの未来は
きっと明るくなるはずだ。

隣で千夏が信じてくれるなら、俺たちはきつとどこまでも歩ける。

さあ行こうか、ふたりで紡ぐ最高の明日へ。

第110話α 幸せを育む日々

——side——

朝が始まる。

俺は仕事があるので早めのうちから起き、千夏の朝ご飯も作って置き、先にいただく。

そう、もうあれから10年が経った。

当然のことながら俺達は結婚し、今結婚してからは2年目だ。

とはいえ、俺は30前後の働き盛りないい大人。千夏はというと...

「んー... おはよ...」

大きく膨らんだお腹。もう7ヶ月くらいだろうか。

今まさに一児の母となろうとしていた。

そんな感じの千夏が目覚めます。

「おはよ... 体調は？」

俺は食べ終わった食器片手に聞いてみる。

「んー? いいよいいよ、いつも通り。だからまあ、日中の家事くらいは出来るかなあ...?」

「無理のない程度に頼むよ。もう一人だけの体じゃないからな。」

「はいはい分かってる分かってる。もう毎日聞いているよ?」

とはいえ、自分が父親になることを考えると繊細になるものだ。

母親にも子供にも元気であってほしい、それが今の俺の願いなんだから。

「まあ、今日もよろしくな。あと、朝食 作って置いてあるから。」

「はいはい、いつもありがとね。」

朝早く起きるのは普通は苦でしかないことだけど、好きな人のためなら頑張れる、そういうものだ。だから今の俺のこのスタイルのついて俺は全く後悔なんてしてない。

「じゃあ、そろそろ行っていくよ。」

「はい、行ってらっしゃい。」

朝食をさっさと済ませた後、俺は少し浮き足で職場へと向かった。

…

さて、あれから時間が経って俺がなんの仕事をしているか、というところまで。

結果から言うと、俺は進んだ学部とはほとんど関係ない仕事に就いた。

というのも、俺が今住んでいる場所もとい俺の働いてる場所、それは…

汐鹿生だ。

まず、なんでこうなったかの経緯を振り返ろうか。

10年前に海の調子が元通りになって以降、陸で働いていたエナを持つ大人の子供が海に帰れる状態となり、それなら海で授業を受けたい、学校に行きたいという声が増えた。

ということで波中もそうだし、小学校も復活した。

またそれだけでなく、陸と海のつながりが深くなったことで、汐鹿生と直接無縁な、エナを持つ人も汐鹿生に来てもいい状態となった。海が嫌いで出たわけではないので当然人も帰ってくる。

そんな感じだったので、俺は教師になることを選んだ。

親からの自立、というのを考えても、せつかく海に自分の家が残ってるんだからということこちらに住むことにした。

一回、千夏の高校卒業のタイミングでどうしようか悩んだが、千夏が即答でこちらに住みたいというもんだから事なきを得た。

それから一緒に働き、一緒に過ごしている。

流石に二人ともそろって家を出た後の保さんらはやはり寂しそうだった。

でも、俺達は何度もあちらの家にも返っている。

本当の親になった以上、もう何も遠慮することすらなくなった訳だし。

ざっくりとした説明は以上だ。

というわけで。

「おいお前ら、席付けよ。授業始めるぞ。」

「はーい」

今日も今日とて教師の生活が始まる。

初めはこの仕事にも戸惑ったもんだったけどな。

何せずと同じことを言うわけだから退屈で仕方がない。

おまけに中学生は思春期真っ盛りだから扱いが大変だ。

俺自身がそうだったからよく分かる。

特にそんな中でも…

「へっへー！俺の勝ちい！」

やたら元気の良い声が聞こえてくる。まったく、授業中だったのに。

「おい潮留、今授業中だってことわかってんのか？」

潮留晃…、美海の弟にして光の甥だ。

「はいはいすいませーん。」

親は両方しっかり者だったのに、光の影響を一番受けてしまった奴だ。

その姿はほんつつつとうに光そっくりだ。

… さぞ先生も光の相手大変だったんだろうな。

でも、最近様子がおかしいところがある。時々ある女子生徒をちらつと見てはすぐに俯き…の繰り返し。

心理学を専攻していたので分かるが、恐らく恋煩いだろう。

全く、そうやってウブなところも光そっくりだな。

まあ、相談に来たら乗ってやるくらいのこととはするか。

光や美海やあかりさんらによろしく言われてるしな。

そうして俺の1日はすぎて行く。

先生としての仕事がストレスじゃないかと言われれば頭を悩ませるが、それでもだれかの力にはなりたいたいと思ってたし、俺みたいに何か悩むことがある人も多いかもしれない。

それを助けられることを思うと、この仕事で良かったと思っている。

...

午後5時。

「じゃあ、おつかれさまでした。」

「あれ、遙。今日は早いなだね。用事？」

俺より数年ののち入ってきた同期であり後輩の要... もとい伊佐木先生がデスクワーク片手に俺の足を止める。

「まあな。嫁さんのことを考えてもそうだし、今日は普通に用事。そんなじゃ失礼します。」

「はい、おつかれさまでした。」

そうして俺はまた浮足で家へと戻る。

そう、今日は大事な日だ。

ガチャ。

「ただいま。」

「おかえり、今日は早かったね。」

リビングでゆっくりしてる千夏が目に入ってくる。穏やかそうだがどこか苦しそうなところが伺える。

もうそろそろなんだなと実感させられるほかない。

「そりや今日は結婚記念日だからな。」

千夏はあくどく笑みを浮かべる。

「あれ、朝何も言わなかったけど覚えてたんだ。」

「当たり前だろ...。ほら、行くんだろ？あっち。暗くならないうちに早く行くよ。」

「泊まり？」

「かもな。」

明日は休日だし別に仕事に支障はない。

「よし、それじゃ行こっか。」

「ああ。二人とも待つてるだろうしな。」

そうして俺は千夏の手を取り海を上がっていった。

...

この陸から見える海の景色も変わってないものだ。

まあ、変わってしまうよりかはこのままであつて欲しいと思うが。

「ふう、ついたよ。」

「そうだな。じゃあさっさと中に入ってしまおうか。」

そして俺は実家の方の玄関のドアを開ける。俺達が来るための用意だろう、鍵はかかつてなかった。

「おかえり二人とも。ま、さっさと上っちゃって。」

出迎えてくれたのは夏帆さんだった。

そして奥には新聞を無口で読んでいる保さんがいる。

ああ、ほんつと何も変わらない。

「お久しぶりですお義父さん。」

「おお、来たか・・・ じゃあ冷めないうちにいただこうかな。」

どうやら夏帆さんお手製の料理がちゃんと準備されているようだ。こんなふうにいるうちの結婚記念日は行われる。

どこか高い店に行くわけでもない。

けど、目に見える金が全てじゃない。

俺にとっては今こうしている時間が一番価値があるものだと思う。だから俺は、この幸せを守り続けるために生きる。

「それじゃあ改めて。」

「・・・ うん。」

俺は家族に、好きな人に見守られながら好きな人に想いを伝える。

「これまでありがとう千夏。そしてこれからもずっとよろしく。」
誰がなんと言おうと、これが、俺の幸せの答えだ。

美海✓

第109話β 共に進み出す一步

——美海side——

誰かを好きになってしまったから、その人はいなくなってしまうた。

ただひたすらその繰り返しの人生。いつからか私は人を好きになることをやめた。

当然、そうしたくはなかった。人生の中でいくつも好きな人ができるはずだ。でも、好きになってしまえばまたいなくなりそうで…裏切られそうで。

でも、結局私はそんな強さなんか持ち合わせていなかった。

だからしまいには深く悩んで、自暴自棄になって、身を投げ出そうとして…。

でも、それは、遙に出会ったことで終わった。

目をそらすことをやめて、好きでいることが正しいって自分に言い聞かせて、そうやってすごしていた小学生の頃。

次第に、その気持ちが本物になっていくのを自分の中で感じた。

簡単に言うと、私は遙のことがこの世界で一番好きだったこと。

だから、いまこうして一人で待ってるんだ。

時刻まであと5分、まだ人の気配はない。

… 来なかつたらどうしよう？

私は自分に大きな自信があるわけじゃない。一緒にいた時間だつて、千夏ちゃんには敵わないかもしれない。

でも、諦めたくない。

これまで、すごい道の人生を歩いてきたんだ。その前を歩いていた遥の背中はどうすぐそこに見えている。

あとちよつとで届くんだ。それでももって届いたら…

私は、遥の隣で一緒に歩けるのかな。

そんな気持ち私が私を支配する。

残り3分。不安は募る。

けれど、最後の最後まで諦めるつもりのない私には、時間なんてどうでもよかった。

2分。

1分。

物語はいつも不条理な展開を迎え、時には重苦しい展開になる。

けれど、信じて待っていれば、必ず答えは出る。

私も信じる、遥が来る未来を。

…ハッピーエンドつてものを、信じてる。

だってほら、目の前に駆け寄る見慣れた人の姿が見えるから。

遥は、私を選んでくれたから。

これ以上の喜びは、今の私にはなかった。

「はあ…、悪い、待たせたか？」

時刻はどうに過ぎてている。間違いなく遅刻だ。

「遅い。いつまで待たせてるのほんと。」

美海は本当に怒ってるのか曖昧な表情で呟く。

そのあとで俯き、「ずっと待たせられたらどうしようかと思っ
た…」と聞こえたが、気にはいけない気がしたので触れないでお
いた。

「…道の途中で、荷物に困っていたお婆さんを助けてた、って言った
ら怒る？」

「ほんとは怒りたいところなんだけどね…。けど、もう慣れちゃった
からいいや。周りを放っておけないのが遥なんだから。」

「ははっ、悪いな、ほんと…。」

そう言って笑う。

笑って、涙をこぼす。

「あれ、なんでだ…？こんなつもり、ないのにな…？」

何度も何度も拭うが涙が止まらない。

朝、美海に告白してもらった分の涙だろうか？

それともこれまでの辛かった人生に報われた喜びの涙？

いずれにせよ、理由なんてどうでも良かった。

俺の体を理由もなく回っていた美海が好きだと言う気持ち、その理
由は…。

「…もう、泣かないですよ。私だって、どうなっても泣かないって…
決めて… たのに…」

つられたのか、溜め込んだものを全て吐き出したのか、美海も涙を
流し始める。

ああ、そうか…。

俺が美海を好きな理由、それこそがこの涙の理由だ。

俺が何度も折れて、倒れてしまっても、美海が隣にいてくれた。そうして、ここまで歩いてこれた。

美海がいなければ、俺の心なんて壊れたままだっただろう。

全て全て、大事なことを思い出させてくれたのは美海だった。

だから、好きなんだ。好きになって当然なんだ。

…一度は答えを出そうとした恋。けれど、今日この日まで答えが出なくてよかったと思う。

今こうして、一番大好きな美海に好きを伝えられるのだから。

「…ごめん、取り乱した。」

「ううん、それは私の方も一緒だから…でも、ほんとに私で良かったの？千夏ちゃんみたいに料理もうまくなければ面倒見も…。」

少し弱気になる美海。でもそれはただの杞憂だ。

好きになった相手はどの部分も好きになれる、今の俺ならきつとそうだ。

…どんな道を進むことになろうと、隣に美海がいる。それだけで俺は生きていける。

だから…

「今更そんな事気にするわけないだろ。俺は美海を選んだんだ。そこにそんな理由はない。ただ、世界で一番好きだって気持ちだけだ…それだけじゃだめなのか？」

「ううん、それが聞けて良かった。」

美海は胸に手を当て目を閉じる。

きつと心の整理とかそういうのだろうか。

「…私ね、ずっと遥のそばにいたいと思ってた。支えたかった。隣を歩きたかった…私と同じで、人を好きになろうとする心を一度は諦めようとした遥だったからだよ？…そして、これからは胸を張って隣を歩ける。それだけで、うれしいんだよ。」

「そうだな。何たって、似たもの同士だからな。」

俺もここまで歩いてきた道で多くのものを失った。

愛することからも逃げようとした。けど、捕まえてくれたのは同じ

痛みを持つ美海だった。

・・・だから好きになれた。愛することを諦めなかったから。

いつかの約束を思い出す。

生前最後をお願いされたみをりさんの言葉。

ええ、約束を叶えますよ、みをりさん。

あなたが教えてくれた優しさ、それはいまも二人の中に生き続けているはずです。

だからどうか、最後まで行く末を見守ってください。

・・・

「遙?」

「ん、ああ。何だ?」

「・・・何考えたの?」

美海がジト目でこちらを見ている。何やらあらぬ疑いをかけられる気がするけど・・・。

「みをりさんのことだよ。」

「ママのこと?」

「ああ・・・あの人がいなければこうしていま好きになつてはなかつたんだ・・・だから、ありがとうって。」

「そうだね。」

俺も美海もそつと微笑む。あの人も笑顔でいてくれるだろう。

・・・そうだ、やっぱり伝えなきゃだめだよな。

「なあ美海?」

「何?」

だから伝えよう。これまでの人生で一番素晴らしい愛の告白を。

「俺は美海が好きだ。大好きだ。だから・・・これから、隣を歩いて欲しい。」

「うん、絶対離れないよ。私は遥の隣を歩く。遥と歩く…。そうやって一歩ずつ、幸せを掴んでいこう。約束だよ?」

「ああ。約束だ。」

そうやって軽く唇と唇を重ね、互いの感触、生きてる温度を感じる。

今度は俺の意思で、初めて美海に行くキスだ。

恥ずかしさはなかった。もうそんな関係じゃない。

そうして俺と美海は手を繋ぎ、遠くに光る海を眺める。

凧いだ心の先に映ったのは青く輝く美しい海。

歩いていく術を知った二人なら、きつとどんなことがあっても大丈夫だ。

さあ、行こうか。

二人でこの美しい人生を、美しい世界を歩いて行こう。

第110話β 二人歩く道の果て

——遙side——

白い天井にリノリウムの冷たい床。

辺りを見渡しても特に面白みの一つもない建物。

… そう、ここは病院だ。

しかしまあ、俺がいるのは診察室だが。

というのも…。

く過去く

就職場所には悩んだ。なんせ学びたいことは決まっていたのに、それと仕事をどうやって結びつけるかなんてものは考えてなかった。

そして今考えても特にやりたいと思っただことがなかった。

それに、海か陸かというもある。

兎に角、多くの要因が重なってしまった結果、俺は進路に悩んでいたのだった。

そんなある日、お世話になった方に言われた一言が就職場所を決める一手となった。

「お前、せっかく心理学学んだんなら、うちのカウンセラーやらないか？ちようど人員もないんだよ。」

大悟先生からの、ありがたい言葉だった。

実際、俺の人生もたくさんの人に支えられてここまでできたのだから、今思えばそれに対する恩返しをこういう形で返すというのは間違いではないと思ってる。

く現在く

そんなわけで、俺は某病院のカウンセラーとなった。

これが結構自分と同じような悩みを抱えた人がいるもんだと感心させられる。

それは歩いてきた道で起こった苦悩が間違いじゃないと言われてるようで、俺としても嬉しかった。

そんな仕事も初めてもう6、7年経つ。流石に慣れに慣れてしまった。

かと言って、仕事の手を抜くなんてことはしないけど……。

時計を見やる。時刻は12:00。午前はこれ以上診察が入っていないので休憩の時間だ。

というわけで俺は自分の持ち場を離れて棟内を歩く。

俺は数分歩いて大悟先生のいる場所へと向かう。

そう、俺は大体お昼はこの人と食べているのだ。

だから向かう。

そして道中……。

「あれ、お疲れ様です島波先生。もう診察は入ってないんですか？」

ナースの服がよく似合う、美しい大人の看護師とすれ違う。

けどそれは俺の知る人で、しかも既婚者だ。

「……あのさ、ふざけてんの？ちさき。別に職場だからってやんなくていいって言ったじゃない？そういうの。」

「ふふつ、遥は絶対こういうの嫌がると思うってたからね。やってて楽しいんだよ？毎日。それで、今日の弁当はどっち？」

「ああ、今日のは……」

そう言いかけたところでちさきの後ろに人影が見える。

その人はまだ看護師としても駆け出しみたいな感じで、少し背も小さくて……そして俺の嫁だ。

「おまたせしましたちさきさん……って遥もいたんだ。昼今からでしょ？食べ終わったら感想教えてね？」

「はいよ。今日のは何点くらいかな？」

「ふふん、結構自信あるよ。覚悟しといてね。」

「りよーかい。ってなわけで今日のは美海のだ、ちさき。」

「なるほど……じゃ、行こっか美海ちゃん。」

そして看護師組は去っていき、俺はまた当初の目的に戻る。

そういえば美海のあれからのお話。

俺たちは晴れてカップルになった。そして二人で過ごした期間がもうかれこれ10年くらいか。

結婚自体は美海が学生としての本業を終わらせたときに行った。

急いで籍を入れる必要もなかったが、やはり新婚の気分は早くに味わいたかつたし、恋人か妻かかってところで自分の考えようも違う。

守ろうとする気持ちは決して変わらないけど。

そして、美海が看護師をやってる理由は至って簡単。

自意識過剰ではないが、俺の後追いだ。

本人曰く、俺と同じ職場にいたかった、そうだ。

もちろん、俺自身そのこと自体が嫌なわけじゃない。

寧ろ嬉しいくらいだ。

夫婦揃って同じ道を歩んでる、そう考えると二人の絆が固くなっていくことを感じるからな。

それともう一つ。

子供が欲しいかと聞いたら、すぐにすぐには欲しくないかな、と帰ってきた。

せっかく看護師としての仕事も慣れてきたのに、すぐにすぐに職場を離れちゃうのは何か勿体ないかなって美海は言っている。

とはいえ、夫婦の営みをしてくれないわけではないので、不満なんかも毛頭ない。

そんなわけで1日1日が過ぎていく。

正直、幸せ以外の何でもない。

こうやって大好きな人と共に道を歩いていける、それこそが幸せと知ったから。

…

お昼の時間はお互い男子会と女子会だ。

俺がよく昼を一緒に大悟先生ももうとつくに既婚で子持ちだし、美海先輩でもあるちさきも既婚である。

紡との年齢差はないので俺たちより籍を入れるのは全然早かったが、どうやらまだ子供を作るつもりはないらしい。

ちさきとその話はよくするが、今絶賛漁協に人気の漁師、木原紡さんに今度詳しく話を聞きたいものだ。

ちさきも不満はないのかなってつくづく思うけど、ここまで続けるのならまあ、安心はできる。

「それであいつが可愛くてよく…あ、でももう少しすれば小学校に入ることになるのか。大丈夫かな？」

「まあ、先生の息子なら苦労はしないんじゃないですか？…あー、でも母親が鈴夏さんなら…子供もやんちゃになるかもしれないっすね。そしたら…。」

「先に先生に謝るしかないかあ…。まあ、せめて親バカと言われないくらいには頑張るさ。」

「もうとつくなってますけどね…。」

「ところで、お前のところはどうか？最近なんか進展はある？」

進展、とは夫婦間のことだろうか。

順風満帆だとは思う。仲が悪くなることは決してないし。

ただ、最近思うこととしては…。

「進展はないっすよ。別にそれが悪いってことじゃないんですけど…ただ、欲を言わせてもらえるならば、俺は子供が欲しいと思ってますね。」

ここ最近よく聞かされる先生の話を聞いてると、子供のいる未来を先先想像してしまう。もちろん、美海のことを尊重するつもりだから、向こうが嫌といえば折れるつもりだけど。

「だろ？誰だつてあるんだよ、そういう些細だけど大きな願いが。今度ダメ元で言ってみろよ？」

「少し怖いですけど…。まあ、やってみますよ。じゃあ、俺は午後一の診察がすぐなんで戻りますね。」

「おう、頑張れよ。」

そうして俺は診察室へ戻り、淡々と午後の業務を終わらせる。

ただ、さっきの話で思ってしまったことがどうも頭の中に残ってずっとグルグルしていた。

… やっぱ言ってみるか。

そうしてお互い家に帰った後で、俺はもうダイレクトに打ち明けることにした。

「…なあ美海。もし今ここで俺が、子供が欲しい、って言ったら怒るか？」

夕飯の準備の途中、俺は手を止めて話を切り出した。

美海は一瞬、「えっ？」と驚いた顔をし、すぐにいつもの様子に戻った。

柔らかな微笑みを浮かべながら。

「…いいよ。私もね、最近どうしようかってずっと思ってた。けど今日ちさきさんと話して決心がついたの。自分の心に嘘ついて過ごしちゃダメって言われたからね。あつ、もちろん仕事が嫌になったわけじゃないよ？」

「分かってる。けど、本当にいいのか？結構気にしてただろ？」

「うん、不安はあるよ？けど、遥が一緒なら平気。どこまでだっていけるし、どこまでも頑張れる…。だから、責任取ってよ？」

「ああ、分かってる。」

…

その晩はまたずいぶんと熱い夜になった。

幸い、明日は両方休みなので時間はたっぷりあったわけだ。そして、お互い力尽きてベットに手をつなぎながら寝転ぶ。

「…好きだよ、美海。ずっとずっとこれからも。」

「はいはい、分かっているから…私だって好きだよ?」

そうして互いに体を内側に向けて再び抱き合う。体力がもうないのでこれ以上はできないが、温度を確かめ合うことくらいは容易に出来る。

「…これからも、二人で進んでいこう?」

「ああ…子供ができたなら、三人になるな。」

「ちよつと、夢見すぎだよ?そんなすぐにできるかどうかなんて。」

「分かっている分かっている。それでも、ゆっくり進んでいこう。」

「…うん。」

ちよつと恥ずかしがって俯く美海の頭にそつと手を回す。そうして頭をポンと一回叩いて、また抱き合う。

ここに、確かな愛はある。

お互いに傷ついて、迷って、見つけた確かな答えだ。

それは決して簡単には揺るがない。固く結ばれた俺と美海の愛だ。きっと二人ならどこまでも行ける。

ただ隣にいてくれさえすれば、それは何にも変わることでできない力になる。

だからこれからも幸せを掴み続けるために。

さあ行こうか。きっと二人で歩く人生。その景色は綺麗なはずだ。